福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

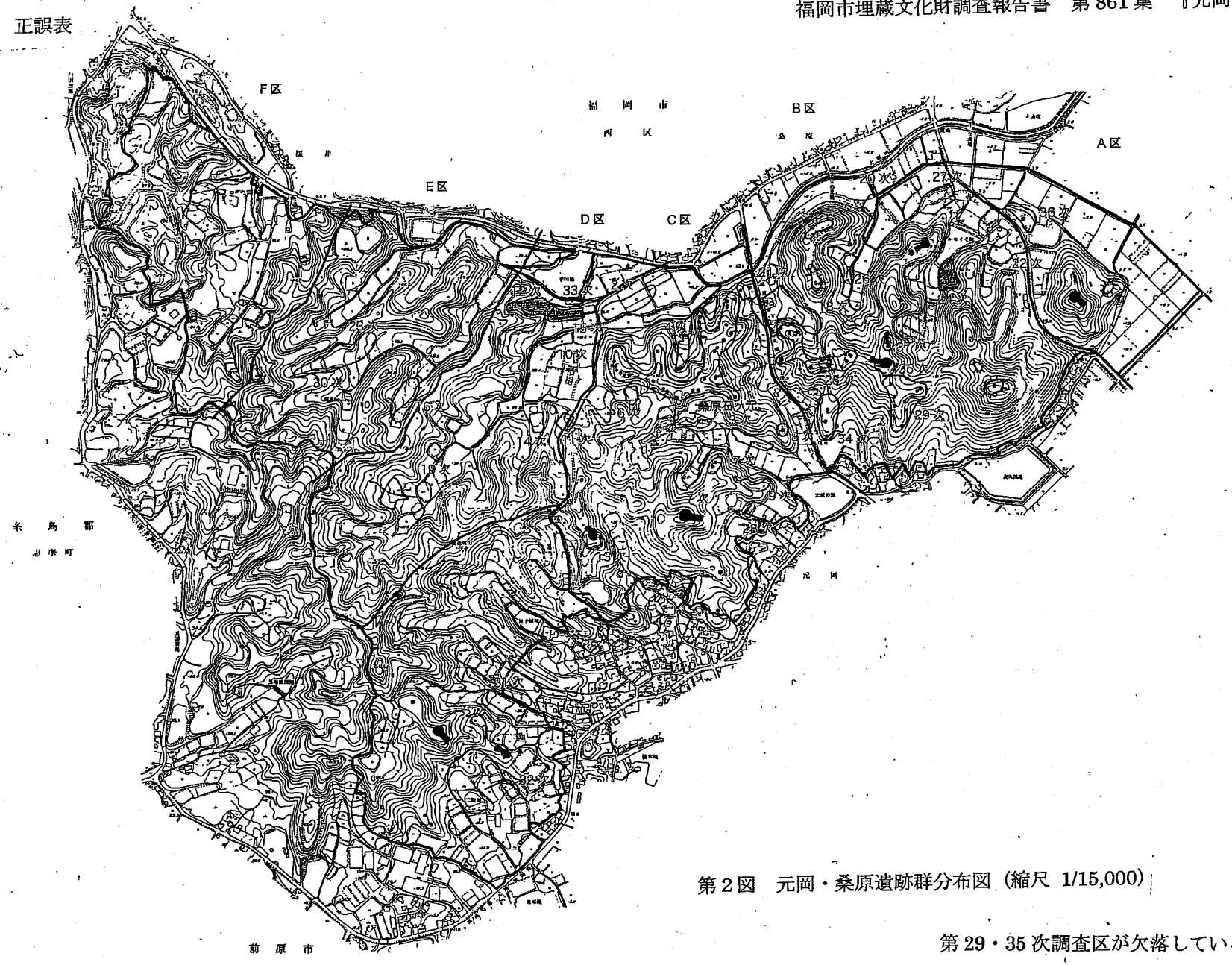
元岡・桑原遺跡群5

－ 第13・17・25・29・37次調査報告 －

2005

福岡市教育委員会

正誤表



第2図　元岡・桑原遺跡群分布図（縮尺 1/15,000）

第29・35次調査区が欠落しているため
本図のとおり訂正するもの。

No.51247

正誤表　　第861集　『元岡・桑原遺跡群5』2005

最終的な収蔵・整理の段階で、一部の遺物の出土位置の記載に誤りがあり、下記のとおり訂正する。

記

① 93頁　第85図　遺物番号31　刀子
2号墳玄室出土と記載したが、3号墳石室床面である。

② 93頁　第85図　遺物番号34　箆被三角形鏃
2号墳羨道出土と記載したが、2号墳玄室である。

③ 98頁　第92図　遺物番号60　三角形鏃
3号墳石室出土と記載したが、2号墳羨道である。

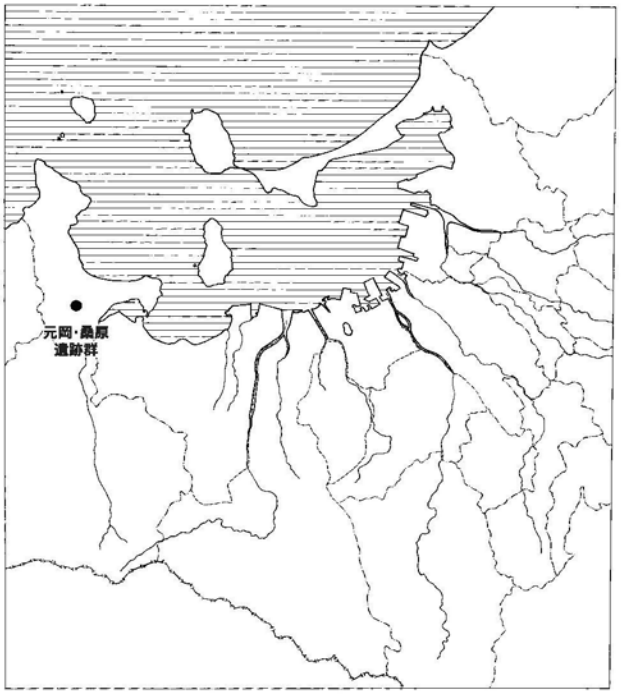
④ 115頁　第114図　遺物番号194　不明鉄器
8号墳玄室出土と記載したが、9号墳墳丘出土である。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群5

－ 第13・17・25・29・37次調査報告 －



調査次数	調査番号	遺跡略号
第13次	9903	MOT－13
第17次	9904	MOT－17
第25次	0052	MOT－25
第29次	0204	MOT－29
第37次	0365	MOT－37

2005

福岡市教育委員会

上

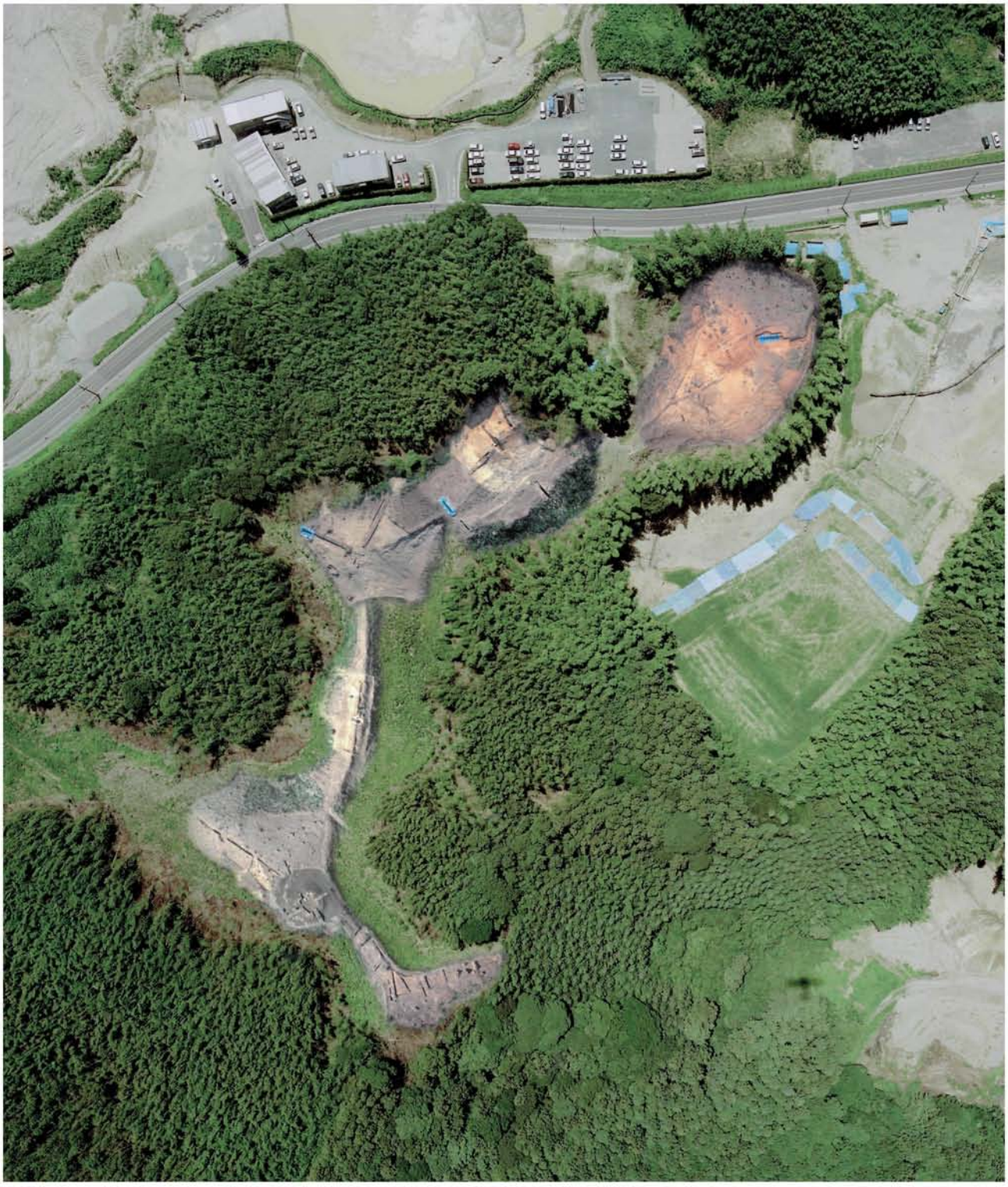
元岡古墳群E群から南の高祖山方面を望む(北から)

元岡古墳群E群の南側には、かつて糸島水道と呼ばれる入り江があり、この古今津湾を干拓してできた小平野の向こうが旧怡土郡である。8世紀には高祖山に怡土城（国指定史跡）が置かれた。この山の北麓には小丘陵が数多く延びており、尾根上や先端部には今宿古墳群と呼ばれる13基の前方後円墳を含めた大小約350基からなる古墳群が展開している。

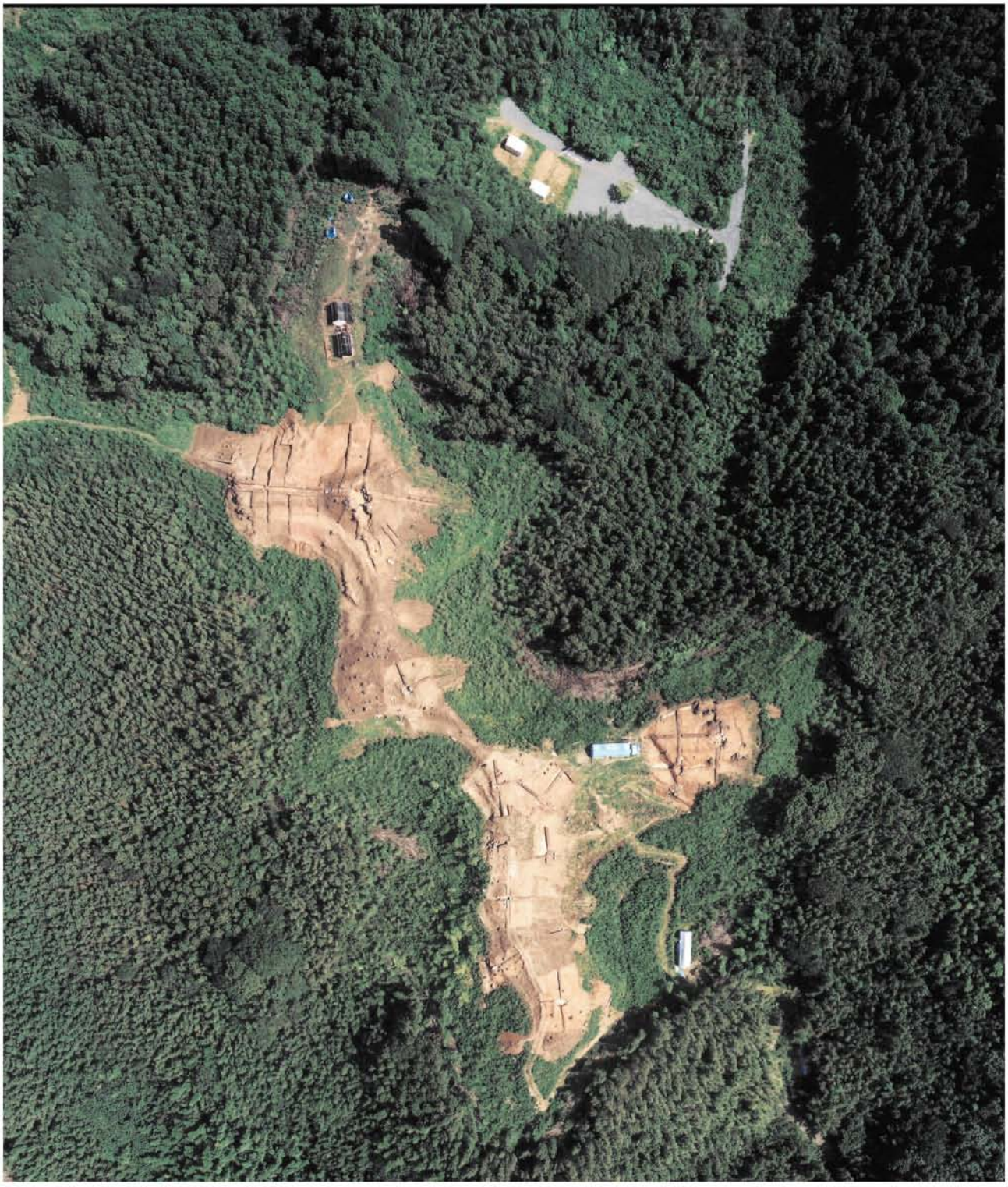
下

元岡古墳群E群から桑原方面を望む(南西から)

巻頭図版 1



元岡・桑原遺跡群第25次　桑原古墳群A群　墳丘遺存状況全景（東から）



元岡・桑原遺跡群第29・37次　元岡古墳群N群墳丘遺存状況・O群現況（南から）

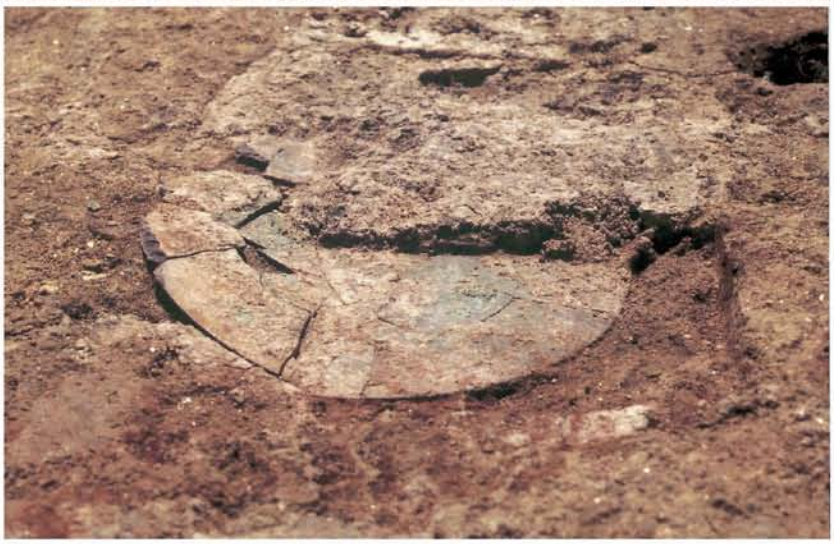
上　元岡E－１号墳出土の方格T字鏡

面径9.2cm　本文13頁参照。

外区は外から素文帯・波長の長い複波文帯突線を巡らせた外行鋸歯文を配する。内区は突線から延びる文様帯を配し、方格の外側には８個の円座乳とＴ文字を配している。方格は二重の突線で構成され、その内側に一重の方格を平行に配置している。方格間には12個の円座乳を配する。鈕は中央に位置するが、鈕孔は方格の対角線よりややずれている。全体に文様は不鮮明である。

中　方格Ｔ字鏡の出土状況（東から俯瞰）

表土層の直下で出土した。鏡の直上及び直下には、黒色炭化物の薄い層が検出され、南北方向（図版では横方向）に木目が観察された。また、上面の炭化物層と鏡との間には赤色顔料が付着していた。南北方向の炭化物は、長さ約18センチを測る。木箱に納めた状態で副葬されていた可能性が考えられる。



下　方格Ｔ字鏡の出土状況（北から断面）

鏡の上面及び下層には、炭化物層が認められる。鏡は僅かに東側に内傾している。

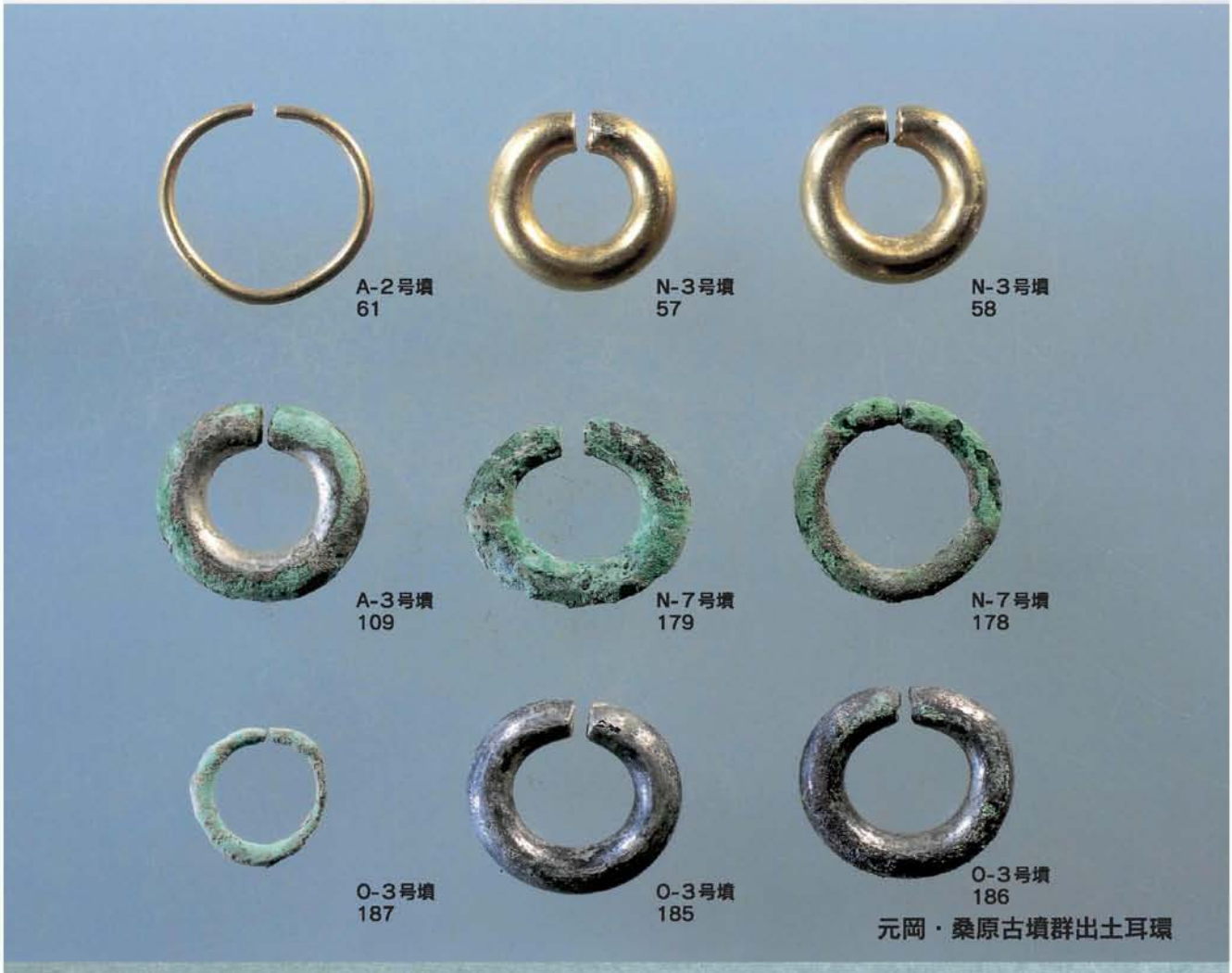
62

63

桑原A－２号墳出土の鉄製鍛冶工具

鉄製鍛冶工具の副葬例は元岡・桑原遺跡群では、桑原石ヶ元12号墳に続き２例目である。

金鉗　全長44.6cm、金槌　全長16.6cm



元岡・桑原古墳群出土耳環

桑原A-5号墳出土碧玉製管玉と切子玉

巻頭図版５

序

福岡市は大陸に近いという地理的条件から、文化の流入拠点、大陸との貿易基地として古くからの歴史を有しています。現在も歴史的・地理的に関係の深いアジアとのつながりを重視し、「アジアの交流拠点都市」を目指し、アジアの様々な地域との学術・文化などの交流を行っています。しかし、近年の著しい都市化により、豊かな自然と先人によって育まれた歴史の一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成11年度から15年度に実施した九州大学統合移転事業に伴い実施した元岡・桑原遺跡群第13・17・25・29・37次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成 17 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会
教育長　植木 とみ子

例　　言

1．本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が1999年～2003年度に行った元岡・桑原遺跡群第13、17、25、29、37次調査の報告書である。

2．本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

調査番号	調査次数	担当者	所在地	調査期間	調査面積
9903	第13次（元岡古墳群E群）	松浦	大字元岡字小坂	1999.4.12～9.28	古墳３基
9904	第17次（元岡古墳群B群）	松浦	大字元岡字池の浦	1999.9.10～12.8	古墳２基
0052	第25次（桑原古墳群A群）	松浦・星野	大字桑原字石ヶ原	2000.12.11～2001.11.30	古墳７基
0204	第29次（元岡古墳群N群）	星野・菅波	大字元岡字石ヶ原	2002.4.5～2003.9.30	古墳９基
0365	第37次（元岡古墳群O群）	濱石	大字元岡字石ヶ原	2003.10.20～2004.2.26	古墳４基

3．本書に掲載した遺構実測図の作成は濱石哲也、菅波正人、松浦一之介、星野惠美、小杉山大輔、水崎るりが行った。

4．本書に掲載した遺物実測図の作成は濱石正子、撫養久美子、山口裕平、水崎、比佐陽一郎、濱石、松浦、星野が行った

5．本書に掲載した遺構写真の撮影は各担当者が行った。

6．本書に掲載した空中写真の撮影は朝日航洋株式会社、写測エンジニアリング（株）、第25次調査のモザイク写真は写測エンジニアリング（株）が行った。

7．本書に掲載した遺物写真の撮影は松村道博、力武卓治、比佐、各担当者が行った。

8．本書に掲載した挿図の製図は撫養、大庭智子、遠藤茜、木下久美子、各担当者が行った。

9．本書に使用した座標は国土座標第Ⅱ系を使用した。

10．本書で用いた方位は磁北で、真北より６°21′西偏する。

11．遺構の呼称は古墳をSO、土壙をSKと略号化した。

12．遺物番号は調査ごとに通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。

13．本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

14．本書の執筆は各担当者と比佐が行った。

15．本書の青銅製品の分析は同市埋蔵文化財センター比佐陽一郎が行い、鉄滓については穴澤氏に御教示頂いた。

16．本書の編集は星野が行った。

本文目次

Ⅰ　序説
1　調査に至る経緯……（星野）　1
2　調査の組織……（星野）　1
3　遺跡の位置と周辺の歴史的環境……（松浦）　2
Ⅱ　第13次調査の記録　－元岡古墳群Ｅ群－
1　調査の概要……（松浦）　7
2　Ｅ－１号墳……（松浦）　8
3　Ｅ－２号墳……（松浦）　14
4　Ｅ－３号墳……（松浦）　22
5　小結……（松浦）　25
Ⅲ　第17次調査の記録　－元岡古墳群Ｂ群－
1　調査の概要……（松浦）　27
2　Ｂ－１号墳……（松浦）　28
3　Ｂ－２号墳……（松浦）　32
4　その他の遺構……（松浦）　34
5　小結……（松浦）　36
Ⅳ　第25次調査の記録　－桑原古墳群Ａ群－
1　調査の概要……（星野）　37
2　Ａ－２号墳……（松浦・星野）　38
3　Ａ－３号墳……（松浦・星野）　47
4　Ａ－４号墳……（星野）　55
5　Ａ－５号墳……（星野）　65
6　Ａ－６号墳……（星野）　73
7　Ａ－７号墳……（星野）　77
8　Ａ－８号墳……（星野）　81
9　小結……（星野）　84
Ⅴ　第29次調査の記録　－元岡古墳群Ｎ群－
1　調査の概要……（星野）　85
2　Ｎ－１号墳……（星野）　85
3　Ｎ－２号墳……（星野）　93
4　Ｎ－３号墳……（菅波）　95
5　Ｎ－４号墳……（星野）　99
6　Ｎ－５号墳……（星野）　101
7　Ｎ－６号墳……（星野）　106
8　Ｎ－７号墳……（菅波）　111
9　Ｎ－８号墳……（星野）　114
10　Ｎ－９号墳……（菅波）　116
11　その他の出土遺物……（星野）　119
12　小結……（星野）　120
Ⅵ　第37次調査の記録　－元岡古墳群Ｏ群－
1　調査に至る経緯……（濱石）　121
2　Ｏ群の位置と環境……（濱石）　121
3　調査の記録……（濱石）　123
1）Ｏ－１号墳……（濱石）　125
2）Ｏ－２号墳……（濱石）　127
3）Ｏ－３号墳……（金属器は比佐、それ以外は濱石）　129
4）Ｏ－４号墳……（濱石）　137
5）土坑……（濱石）　138
6）焼土坑……（濱石）　138
4　小結……　139
1）馬具について……（比佐）　139
2）元岡古墳群Ｏ群について……（濱石）　140

挿図目次

第１図　糸島半島の遺跡群（縮尺1/100,000）……3
第２図　元岡・桑原遺跡群分布図（縮尺1/20,000）……4
第３図　古墳各部の名称……6
第 13 次 調 査
第４図　第13次調査地点周辺の地形図（縮尺1/2,000）……7
第５図　元岡古墳群E群現況測量図（縮尺1/200）……9
第６図　E－1・2号墳墳丘遺存状況図及び青銅鏡出土状況図（縮尺1/200、1/100、1/3）……10
第７図　E－1・3号墳墳丘遺存状況及び3号墳地山整形測量図（縮尺1/200）……11
第８図　E－1号墳トレンチ土層断面図（縮尺1/100）……12
第９図　方格T字鏡実測図（縮尺1/1）……13
第10図　E－2・3号墳墳丘断面図（縮尺1/60）……15
第11図　E－2号墳石室実測図（縮尺1/40）……16
第12図　E－2号墳石室及び墳丘遺物出土状況図（縮尺1/30、1/8）……18
第13図　E－2号墳出土須恵器・装身具実測図（縮尺1/1、1/4、1/6）……20
第14図　E－2号墳出土鉄器実測図（縮尺1/2）……21
第15図　E－3号墳内部主体実測図（縮尺1/20、1/30）……23
第16図　E－3号墳出土土師器実測図（縮尺1/4）……25
第 17 次 調 査
第17図　第17次調査地点周辺の地形図（縮尺1/2,000）……27
第18図　元岡古墳群B群現況測量図（縮尺1/200）……28
第19図　B－1・2号墳墳丘遺存状況図及び地山整形測量図（縮尺1/200）……29
第20図　B－1号墳墳丘断面図（縮尺1/100）……30
第21図　B－1号墳石室・閉塞施設・遺物出土状況・遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4、1/1）……31
第22図　B－2号墳墳丘断面図（縮尺1/100）……33
第23図　B－2号墳石室・閉塞施設・遺物出土状況・遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4）……35
第24図　焼土坑実測図（縮尺1/40）……36
第 25 次 調 査
第25図　桑原古墳群A群古墳分布図（1/1,500）……37
第26図　２・３号墳墳丘遺存状況図（1/200）……38
第27図　２号墳墳丘土層断面図（1/100）……39
第28図　２・３号墳地山整形状況図（1/200）……39
第29図　２号墳石室実測図（1/40）……40
第30図　２号墳玄室第１・２面状況図・閉塞状況図（1/40）……41
第31図　２号墳石室掘方実測図（1/40）……42
第32図　２号墳玄室第３面遺物出土状況実測図（1/30）……42
第33図　２号墳墓道実測図（1/40）……43
第34図　２号墳墳丘出土遺物実測図（1/4・1/6）……45
第35図　２号墳墓道出土遺物・装身具実測図（1/4・1/1）……46
第36図　２号墳出土鉄器・石器実測図（2/3・1/3）……47
第37図　３号墳墳丘土層断面図（1/100）……48
第38図　３号墳石室実測図（1/40）……49
第39図　３号墳石室掘方実測図（1/40）……50
第40図　３号墳閉塞状況図（1/40）……51
第41図　３号墳周溝・墳丘出土遺物実測図（1/4・1/6）……53
第42図　３号墳玄室・墓道出土遺物・装身具・鉄器実測図（1/4・1/6・1/2・1/1）……54
第43図　焼土坑SK101・102・103・104実測図（1/40）……55
第44図　４号墳墳丘遺存状況図（1/200）……56
第45図　４号墳地山整形状況図（1/200）……56
第46図　４号墳墳丘土層断面図（1/100・1/60）……57
第47図　４号墳石室実測図（1/40）……58
第48図　４号墳石室掘方実測図（1/40）……59
第49図　４号墳閉塞状況図（1/40）……60
第50図　４号墳玄室床面遺物出土状況実測図（1/30）……61
第51図　４号墳墳丘・玄室出土遺物実測図（1/4・1/8）……62
第52図　４号墳玄室出土遺物実測図（1/4）……63
第53図　４号墳墓道出土遺物実測図（1/4）……64
第54図　４号墳鉄器実測図（1/2）……65
第55図　４号墳玉実測図（1/1）……66
第56図　５号墳地山整形状況図（1/200）……67
第57図　５号墳墳丘土層断面図（1/100）・閉塞状況図・石室実測図（1/40）……68
第58図　５号墳玄室遺物出土状況実測図（1/30）……69
第59図　５号墳墳丘出土遺物実測図（1/4）……70
第60図　５号墳玄室出土遺物実測図（1/4）……71
第61図　５号墳鉄器・玉実測図（1/2・1/1）……72
第62図　６号墳墳丘遺存状況図（1/200）……74

第63図　6号墳地山整形状況図（1/200）……74
第64図　6号墳墳丘土層断面図（1/100）……74
第65図　6号墳石室実測図（1/40）……75
第66図　6号墳石室掘方・閉塞状況実測図（1/40）……76
第67図　6号墳出土遺物実測図（1/4・1/6）……77
第68図　7号墳墳丘遺存状況図（1/200）……78
第69図　7号墳地山整形状況図（1/200）……78
第70図　7号墳石室・閉塞状況実測図（1/40）・墳丘遺物出土状況図（1/20）・墳丘土層断面図（1/100）……79
第71図　7号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）……80
第72図　8号墳地山整形状況図（1/200）……81
第73図　8号墳墳丘土層断面図（1/100）・遺物出土状況図（1/20）……82
第74図　8号墳出土遺物実測図（1/4・1/6・1/2）……83
第75図　各古墳石室平面図（1/100）……84
第 29 次 調 査
第76図　元岡古墳群N群古墳分布図（1/2,000）……85
第77図　1号墳墳丘遺存状況図（1/200）……86
第78図　1号墳地山整形状況図（1/200）……86
第79図　1号墳墳丘土層断面図（1/100）……87
第80図　1号墳石室・閉塞状況実測図（1/40）……88
第81図　1号墳玄室遺物出土状況図（1/40）……89
第82図　1号墳出土遺物実測図（1/4・1/2・1/1）……90
第83図　2号墳地山整形状況図（1/200）・2号墳墳丘土層断面図（1/100）……91
第84図　2号墳石室・閉塞状況実測図・遺物出土状況図（1/40）……92
第85図　2号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）……93
第86図　3号墳墳丘遺存状況図（1/200）……94
第87図　3号墳地山整形状況図（1/200）……94
第88図　3号墳墳丘土層断面図（1/100）……94
第89図　3号墳石室実測図（1/40）……95
第90図　3号墳玄室遺物出土状況図（1/30）……96
第91図　3号墳出土遺物実測図（1/4・1/6・1/2）……97
第92図　3号墳出土耳環・鉄器実測図（1/2・1/1）……98
第93図　4号墳地山整形状況図（1/200）……99
第94図　4号墳墳丘土層断面図（1/100）……99
第95図　4号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）……100
第96図　5号墳墳丘遺存状況図（1/200）……102
第97図　5号墳地山整形状況図（1/200）……102
第98図　5号墳墳丘土層断面図（1/100）……102
第99図　5号墳石室実測図（1/40）……103
第100図　5号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）……104
第101図　6号墳地山整形状況図（1/200）……105
第102図　6号墳墳丘土層断面図（1/100）……105
第103図　6号墳石室実測図（1/40）……106
第104図　6号墳出土遺物実測図（1/4）……107
第105図　6号墳鉄器実測図（1/2）……108
第106図　7号墳墳丘遺存状況図（1/200）……110
第107図　7号墳地山整形状況図（1/200）……110
第108図　7号墳墳丘土層断面図（1/100）……111
第109図　7号墳石室実測図（1/40）……112
第110図　7号墳出土遺物実測図（1/4・1/6・1/1）……113
第111図　8号墳地山整形状況図（1/200）……114
第112図　8号墳墳丘土層断面図（1/100）……114
第113図　8号墳石室実測図（1/40）……115
第114図　8号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）……115
第115図　9号墳地山整形状況図（1/200）……116
第116図　9号墳墳丘土層断面図（1/100）……116
第117図　9号墳石室・閉塞状況実測図（1/40）……117
第118図　9号墳出土遺物実測図（1/4・1/2・1/1）……118
第119図　その他の遺物実測図（1/3・1/2）……119
第120図　各古墳石室平面図（1/100）……120
第 37 次 調 査
第121図　元岡古墳群O群地形測量図（縮尺1/200）……122
第122図　元岡古墳群O群墳丘遺存測量図（縮尺1/200）……123
第123図　1～4号墳トレンチ土層図（縮尺1/60）……124
第124図　1号墳地山整形測量図（縮尺1/100）……125
第125図　1号墳石室および閉塞実測図（縮尺1/40）……126
第126図　1号墳出土遺物実測図（縮尺1/2）……127
第127図　2～4号墳地山整形測量図（縮尺1/100）……128

第128図　2号墳石室および閉塞実測図（縮尺1/40）……129
第129図　3号墳石室および閉塞実測図（縮尺1/40）……130
第130図　3号墳玄室内遺物出土状況実測図（縮尺1/10）……131
第131図　3号墳出土遺物実測図1（縮尺1/3）……132
第132図　3号墳出土遺物実測図2（縮尺1/2）……133
第133図　3号墳出土遺物実測図3（縮尺1/3）……134
第134図　3号墳出土遺物実測図4（縮尺1/3）……135
第135図　4号墳石室実測図（縮尺1/40）……137
第136図　4号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……137
第137図　1号土坑、1号焼土坑実測図（縮尺1/30）……138
第138図　1号土坑出土遺物実測図（縮尺1/3）……138

図版目次

巻頭図版1　元岡古墳群E群から南の高祖山方面を望む（北から）　元岡古墳群E群から桑原方面を望む（南西から）
巻頭図版2　元岡・桑原遺跡群第25次　桑原古墳群A群　墳丘遺存状況全景（東から）
巻頭図版3　元岡・桑原遺跡群第29・37次　元岡古墳群N群墳丘遺存状況・O群現況（南から）
巻頭図版4　元岡E－1号墳出土の方格T字鏡　方格T字鏡の出土状況（東から俯瞰）　方格T字鏡の出土状況（北から断面）
巻頭図版5　桑原A－2号墳出土の鉄製鍛冶工具　元岡・桑原古墳群出土耳環　桑原A-5号墳出土碧玉製管玉と切子玉

第13次調査

図版1　1　元岡古墳群E群遠景（北から）　2　元岡古墳群E群全景（東から俯瞰）
図版2　1　E－1号墳全景（前方部から）　2　E－1号墳後円部（西から俯瞰）
図版3　1　E－2号墳全景（東から俯瞰）　2　E－2号墳墳丘断面（東から）
3　E－2号墳墳丘遺存状況（西から）　4　E－2号墳墳丘遺存状況（南西から）
5　E－2号墳石室全景（西から）　6　E－2号墳石室第1面（西から）
7　E－2号墳石室第2面（西から）　8　E－2号墳石室基底面と掘方（西から）
図版4　1　E－2号墳石室右側壁（北から）　2　E－2号墳石室鉄製農工具出土状況（北から）
3　E－2号墳石室農工具出土状況（北から）　4　E－2号墳石室鉄鎌出土状況（西から）
5　E－2号墳閉塞石（北から）　6　E－2号墳石室装身具出土状況（西から）
7　E－2号墳石室装身具出土状況（北から）　8　E－2号墳I区周溝遺物出土状況（西から）
図版5　1　E－3号墳墳丘遺存状況（西から）　2　E－3号墳墳丘遺存状況（北東から）
3　E－3号墳墳丘断面（東から）　4　E－3号墳地山整形（北東から）
5　E－3号墳内部主体検出状況（東から）　6　E－3号墳内部主体掘方（南から）
7　E－3号墳内部主体土層（南から）　8　E－3号墳周溝土層（北から）
図版6　1　E－1号墳青銅鏡出土状況（東から）　2　E－1号墳青銅鏡出土状況（西から）
3　E－1号墳青銅鏡出土状況（北から）　4　E－3号墳周溝遺物出土状況（南から）
5　E－3号墳周溝遺物出土状況（西から）　6　E－3号墳周溝内埋葬（東から）
7　E－3号墳周溝内埋葬（北から）　8　E－3号墳周溝内埋葬顔料検出状況（北から）
図版7　1　E－1号墳出土方格T字鏡　2　E－2号墳出土須恵器坏蓋
3　E－2号墳出土須恵器坏身　4　E－2号墳出土須恵器甑
5　E－2号墳出土須恵器平底瓶
図版8　1　E－2号墳出土鉄斧　2　E－2号墳出土鉄斧
図版9　1　E－2号墳出土鉄鎌　2　E－2号墳出土鉄斧
3　E－2号墳出土鉄製鋤先

第17次調査

図版10　1　元岡古墳群B群遠景（西から）　2　元岡古墳群B群と池の浦古墳（東から）
3　元岡古墳群B群調査前現況（北から）
図版11　1　元岡古墳群B群全景（南から）　2　元岡古墳群B群全景（北から）
3　B－1号墳墳丘遺存状況（西から俯瞰）　4　B－1号墳墳丘遺存状況（西から）
5　B－1号墳地山整形（西から）　6　B－1号墳墳丘断面（北から）
7　B－1号墳墳丘断面（西から）
図版12　1　B－1号墳石室全景（北から）　2　B－1号墳石室左側壁（南東から）
3　B－1号墳石室右側壁（北東から）　4　B－1号墳羨門（玄室から）
5　B－1号墳石室遺物出土状況（北から）　6　B－1号墳石室遺物出土状況（北から）
7　B－1号墳閉塞石（南から）　8　B－1号墳閉塞石（玄室から）
図版13　1　B－2号墳墳丘断面（北から）　2　B－2号墳墳丘断面（西から）
3　B－2号墳全景（西から）　4　B－2号墳墳丘遺存状況（北西から）
5　B－2号墳地山整形面焼土（西から）　6　B－2号墳地山整形と石室掘り方（西から）
7　SK－03焼土壙（北から）　8　SK－04焼土壙（北西から）
図版14　1　B－2号墳石室全景（北から）　2　B－2号墳石室第1面敷石（北から）
3　B－2号墳石室右側壁（北から）　4　B－2号墳石室左側壁（南から）
5　B－2号墳石室奥壁（西から）　6　B－2号墳石室基底面（西から）
7　B－2号墳追葬時墓道（西から）　8　B－2号墳閉塞施設土層断面（東から）

第25次調査

図版15　1　2・3号墳墳丘遺存状況（真上から）　2　2・3号墳地山整形（西から）
3　2号墳墳丘遺存状況（真上から）　4　2号墳石室（真上から）

	5	2号墳石室掘方（真上から）	6	2号墳地山整形（西から）
図版16	1	2号墳石室全景（西から）	2	2号墳石室全景（西から）
	3	2号墳石室敷石（南から）	4	2号墳石室掘方（西から）
	5	2号墳石室掘方（北から）	6	2号墳現況（西から）
図版17	1	2号墳石室第1面検出状況（西から）	2	2号墳石室第3面検出状況（南から）
	3	2号墳鉄鉗・鉄金槌出土状況（南から）	4	2号墳墓道第2面検出状況（南から）
	5	2号墳閉塞石検出状況（真上から）	6	2号墳Cトレンチ土層（南から）
図版18	1	3号墳墳丘遺存状況（真上から）	2	3号墳墳丘遺存状況（西から）
	3	3号墳墳丘遺存状況（真上から）	4	3号墳地山整形（西から）
	5	3号墳現況（西から）		
図版19	1	3号墳石室（西から）	2	3号墳石室敷石（南から）
	3	3号墳石室（東から）	4	3号墳仕切石（南から）
	5	3号墳石室掘方（西から）	6	3号墳奥壁掘方（南から）
図版20	1	3号墳周溝遺物出土状況（東から）	2	3号墳石室第1面耳環出土状況（真上から）
	3	3号墳閉塞石検出状況（真上から）	4	3号墳閉塞石検出状況（西から）
	5	3号墳Aトレンチ土層（西から）	6	3号墳Bトレンチ土層（東から）
図版21	1	4号墳墳丘遺存状況（真上から）	2	4号墳墳丘遺存状況（東から）
	3	4号墳墳丘遺存状況（南から）	4	4号墳地山整形（西から）
	5	4号墳地山整形（東から）	6	4号墳墳丘遺物出土状況（東から）
図版22	1	4号墳石室（南から）	2	4号墳石室（西から）
	3	4号墳羨道左側壁（南東から）	4	4号墳右側壁（北から）
	5	4号墳玄室左側壁（南から）	6	4号墳地山整形（西から）
図版23	1	4号墳羨道（東から）	2	4号墳墓道（西から）
	3	4号墳石室掘方（南から）	4	4号墳玄室遺物出土状況（東から）
	5	4号墳Cトレンチ土層（西から）	6	4号墳Cトレンチ周溝土層（西から）
図版24	1	4号墳第1面閉塞石検出状況(真上から)	2	4号墳第1面閉塞石検出状況（西から）
	3	4号墳第2面閉塞石検出状況(西から)	4	4号墳第2面閉塞石検出状況（真上から）
	5	4号墳第3面閉塞石検出状況（西から）	6	4号墳立石検出状況（東から）
図版25	1	4・5号墳墳丘遺存状況（東から）	2	5号墳地山整形（東から）
	3	5号墳地山整形（真上から）	4	5号墳地山整形（西から）
	5	4号墳現況（西から）	6	5号墳現況（西から）
図版26	1	5号墳玄室床面検出状況（真上から）	2	5号墳石室（東から）
	3	5号墳玄室遺物出土状況（南西から）	4	5号墳玄室遺物出土状況（南から）
	5	5号墳石室掘方（西から）	6	5号墳閉塞石検出状況（西から）
図版27	1	6号墳墳丘遺存状況（南から）	2	6号墳地山整形（南から）
	3	6号墳石室掘方（南から）	4	6号墳石室（東から）
	5	6号墳石室（西から）	6	6号墳羨道左側壁（東から）
図版28	1	6号墳袖石（北から）	2	6号墳石室掘方（南から）
	3	6号墳閉塞石検出状況（南から）	4	6号墳西側周溝土層（南から）
	5	6号墳閉塞石検出状況（北から）	6	6号墳現況（南東から）
図版29	1	7号墳墳丘遺存状況（南から）	2	7号墳墳丘遺存状況（真上から）
	3	7号墳地山整形（真上から）	4	7号墳墳丘遺存状況（南から）
	5	7号墳墳丘遺存状況（北から）	6	7号墳Aトレンチ土層（南から）
図版30	1	7号墳石室（北から）	2	7号墳羨道左側壁（東から）
	3	7号墳遺物出土状況（北から）	4	7号墳石室掘方（南から）
	5	7号墳石室掘方（北から）	6	7号墳現況（南から）
図版31	1	7号墳閉塞石検出状況（南から）	2	7号墳墳丘遺物出土状況（南から）
	3	8号墳表土剥ぎ状況（南西から）	4	8号墳遺物出土状況（東から）
	5	8号墳土層A（東から）	6	8号墳土層C（南から）
図版32	1	25次調査遠景（南から）	2	8号墳地山整形（真上から）
	3	6・7・8号墳地山整形（真上から）		
図版33	出土遺物Ⅰ			
図版34	出土遺物Ⅱ			
図版35	出土遺物Ⅲ			
図版36	出土遺物Ⅳ			
図版37	出土遺物Ⅴ			
図版38	出土遺物Ⅵ			

第29次調査

図版39	1	29次調査現況遠景（北から）	2	調査区東側全景（北から）
	3	4～9号墳遠景（北から）	4	4～6号墳遠景（南東から）
	5	石垣①～④検出状況（南から）	6	石垣①検出状況（南から）
図版40	1	1号墳全景（真上から）	2	1号墳現況（南から）
	3	1号墳石室（東から）	4	1号墳石室検出状況（南から）
	5	1号墳仕切石検出状況（東から）	6	1号墳石室床面（南から）
図版41	1	1号墳石室掘方（東から）	2	1号墳石室（南から）
	3	1号墳閉塞石検出状況（東から）	4	1号墳閉塞石検出状況（西から）
	5	1号墳Bトレンチ土層（南から）	6	1号墳Bトレンチ周溝部土層（南から）

図版42　1　1号墳石室遺物出土状況（西から）　2　1号墳刀子出土状況（南から）
3　2号墳全景（真上から）　4　2号墳現況（南から）
5　1・2号墳遠景（南から）　6　2号墳転石状況（西から）
図版43　1　2号墳閉塞石検出状況（南から）　2　2号墳石室（北から）
3　2号墳玄室遺物出土状況（南東から）　4　2号墳玄室遺物出土状況（西から）
5　2号墳羨道部遺物出土状況（南から）　6　2号墳Bトレンチ土層（東から）
図版44　1　3号墳遠景（南から）　2　3号墳現況（南から）
3　3号墳全景（真上から）　4　3号墳墳丘現況（南東から）
5　3号墳玄室遺物出土状況（南から）　6　3号墳玄室奥壁側敷石（南から）
図版45　1　3号墳玄室左側壁（東から）　2　3号墳玄室右側壁（西から）
3　3号墳玄室遺物出土状況（東から）　4　3号墳玄室須恵器出土状況（南から）
5　3号墳玄室人骨出土状況(南から)　6　3号墳耳環出土状況（南から）
図版46　1　4号墳全景（真上から）　2　4号墳現況（東から）
3　4号墳転石状況（北から）　4　4号墳東斜面状況（南から）
5　4号墳須恵器出土状況（東から）　6　4号墳石室掘方（西から）
図版47　1　5号墳全景（真上から）　2　5号墳現況（南東から）
3　5号墳左側壁（東から）　4　5号墳石室（南から）
5　5号墳石室（南から）　6　5号墳奥壁（南東から）
図版48　1　6号墳全景（真上から）　2　6号墳現況（西から）
3　6号墳石室（東から）　4　6号墳玄室右側壁（西から）
5　6号墳玄室敷石検出状況(南から)　6　6号墳玄室奥壁（南から）
図版49　1　6号墳Cトレンチ土層（南から）　2　6号墳落石状況（南から）
3　7号墳遠景（西から）　4　7号墳現況（南から）
5　7号墳全景（真上から）　6　7号墳石室転石状況（西から）
図版50　1　7号墳石室（西から）　2　7号墳玄室奥壁（西から）
3　7号墳玄室左側壁（南から）　4　7号墳玄室右側壁（北から）
5　7号墳羨道左側壁（南から）　6　7号墳羨道右側壁（北から）
図版51　1　7号墳左袖石（南から）　2　7号墳玄室右隅角（北から）
3　7号墳石室掘方（東から）　4　7号墳Cトレンチ土層（東から）
5　7号墳耳環出土状況（北から）　6　7号墳東側銅銭出土状況（東から）
図版52　1　8号墳全景（真上から）　2　8号墳現況（北から）
3　8号墳石室（東から）　4　8号墳石室掘方（東から）
5　8号墳石室（西から）　6　8号墳Cトレンチ土層（南から）
図版53　1　9号墳全景（真上から）　2　9号墳現況（西から）
3　9号墳石室（西から）　4　9号墳石室（西から）
5　9号墳石室（東から）　6　9号墳石室掘方（西から）
図版54　1　9号墳閉塞石転石状況（西から）　2　9号墳閉塞石転石状況（東から）
3　9号墳閉塞石検出状況（西から）　4　9号墳閉塞石検出状況（真上から）
5　9号墳Aトレンチ土層（西から）　6　9号墳Cトレンチ土層（西から）
図版55　出土遺物Ⅰ
図版56　出土遺物Ⅱ
図版57　出土遺物Ⅲ
図版58　出土遺物Ⅳ
第 37 次 調 査
図版59　元岡古墳群O群全景
1　東上空から　2　西上空から
3　北上空から　4　南上空から
図版60　1　1号墳全景（西上空から）　2　2・3・4号墳全景（右から2号、3号、4号墳）
図版61　1号墳
1　検出時状況（西から）　2　閉塞（西から）
3　墳丘遺存状況（西から）　4　石室（西から）
5　石室（東から）　6　石室掘り方（西から）
図版62　1　2号墳検出時状況（東から）　2　2号墳閉塞（東から）
3　2号墳墳丘遺存状況（東から）　4　2号墳石室（東から）
5　2号墳石室掘り方（東から）　6　1号焼土坑（東から）
図版63　3号墳
1　検出時状況（西から）　2　墓道（西から）
3　閉塞（東から）　4　閉塞（西から）
5　墳丘遺存状況（西から）　6　石室（西から）
図版64　3号墳
1　石室（西から）　2　石室内遺物出土状況（西から）
3　石室内遺物出土状況（北から）　4　石室内遺物出土状況（南から）
5　石室掘り方（西から）　6　石室掘り方（南東から）
図版65　4号墳
1　検出時状況（西から）　2　墳丘遺存状況（西から）
3　石室（西から）　4　石室（西から）
5　石室（東から）　6　石室掘り方（西から）
図版66　出土遺物Ⅰ
図版67　出土遺物Ⅱ
図版68　出土遺物Ⅲ

Ⅰ 序　　説

１．調査に至る経緯

平成６年２月、九州大学から福岡市に新キャンパス大学移転用地の取得の依頼があり、同３月、福岡市、九州大学、福岡市土地開発公社（以下公社とする）は用地取得について覚書の締結がなされた。事業用地は公社が福岡市に代わり先行取得し、新キャンパス建設のための造成工事を行うこととなった。造成工事に先立ち、平成７年２月九州大学から福岡市に対して事業用地内埋蔵文化財の事前調査の依頼があったことから、公社と福岡市で委託契約を締結して事業用地内の埋蔵文化財の踏査を実施した。平成７年12月、用地の275haの踏査が終了した。平成８年３月、九州大学、福岡市、公社間で「造成に関する覚書」が締結され、その中で公社は「事業用地の造成に関して埋蔵文化財調査等を行うものとする」との一項が盛り込まれたことから以後、埋蔵文化財の調査に関しては公社と福岡市との間で委託契約を締結して事業を進めることとなった。

２．調査の組織

調査委託　福岡市土地開発公社

調査主体　福岡市教育委員会

教育長	植木とみ子	生田征生　町田英俊　西憲一郎（前任）
文化財部長	山崎純男	堺徹　柳田純孝（前任）

調査庶務　文化財整備課

文化財整備課長	榎本芳治	平原豪　上村忠明（前任）
管理係長	市坪敏郎	井上和光（前任）
管理係	鈴木由喜	中岳圭　岩屋淳美（前任）

調査担当　大規模事業等担当

課長	力武卓治	二宮忠司　山崎純男（前任）
主査	米倉秀紀	池崎譲二　濱石哲也　松村道博（前任）
	池田祐司	屋山洋　上角智希
	小林義彦	吉留秀敏　菅波正人　久住猛雄　松浦一之介　星野惠美（前任）

調査調整　都市整備局大学移転対策部

3　遺跡の位置と周辺の歴史的環境

元岡・桑原遺跡群が所在する糸島（志摩）半島は、律令制度下における筑前国志麻（嶋）郡に相当し、現今の行政区画では、福岡市西区の一部、前原市の一部、糸島郡志摩町全域に分かれる。これまで都市化の影響をあまり受けず、緊急発掘調査例が少なかったこともあり、遺跡の分布やその内容が明確でなかった。しかし近年、福岡市の新西部埋立て場の建設や圃場整備などによって考古学的な知見が得られるようになった。とりわけ平成７年から始まった福岡市教育委員会による九州大学統合移転用地内の考古学的調査は、一つの地域を広域且つ詳細に調査しており、多くの成果を上げている。

本遺跡群は、律令制度下における旧筑前国志麻郡に位置する。同郡は倭名類聚抄によれば、郡内の郷として韓良、久米、登志、明敷、鶏永、河邊、志麻の７つを記載している。これらの郷名比定に関しては、宝永６年（1709年）の「筑前国続風土記」以降、諸説がある。韓良、久米、登志、鶏永の４郷はそれぞれ海岸沿いの韓泊、久米、今津、芥屋の地域に比定されるほぼ一致した見解がある。

韓泊を含めた半島北西部では、数例の発掘調査がある。弥生時代中期から後期にかけての集落遺跡である大原Ａ・Ｂ遺跡では、古墳時代の小規模な集落址も検出された。古墳群では、小田古墳群など数基が点在するのみできわめて少ない。また古代には、海岸付近で産出される良質な砂鉄を利用して製鉄が盛行し、前述の大原Ａ遺跡では８世紀代の製鉄炉が、また大原Ｄ遺跡では９世紀以降の製鉄炉が検出されている。

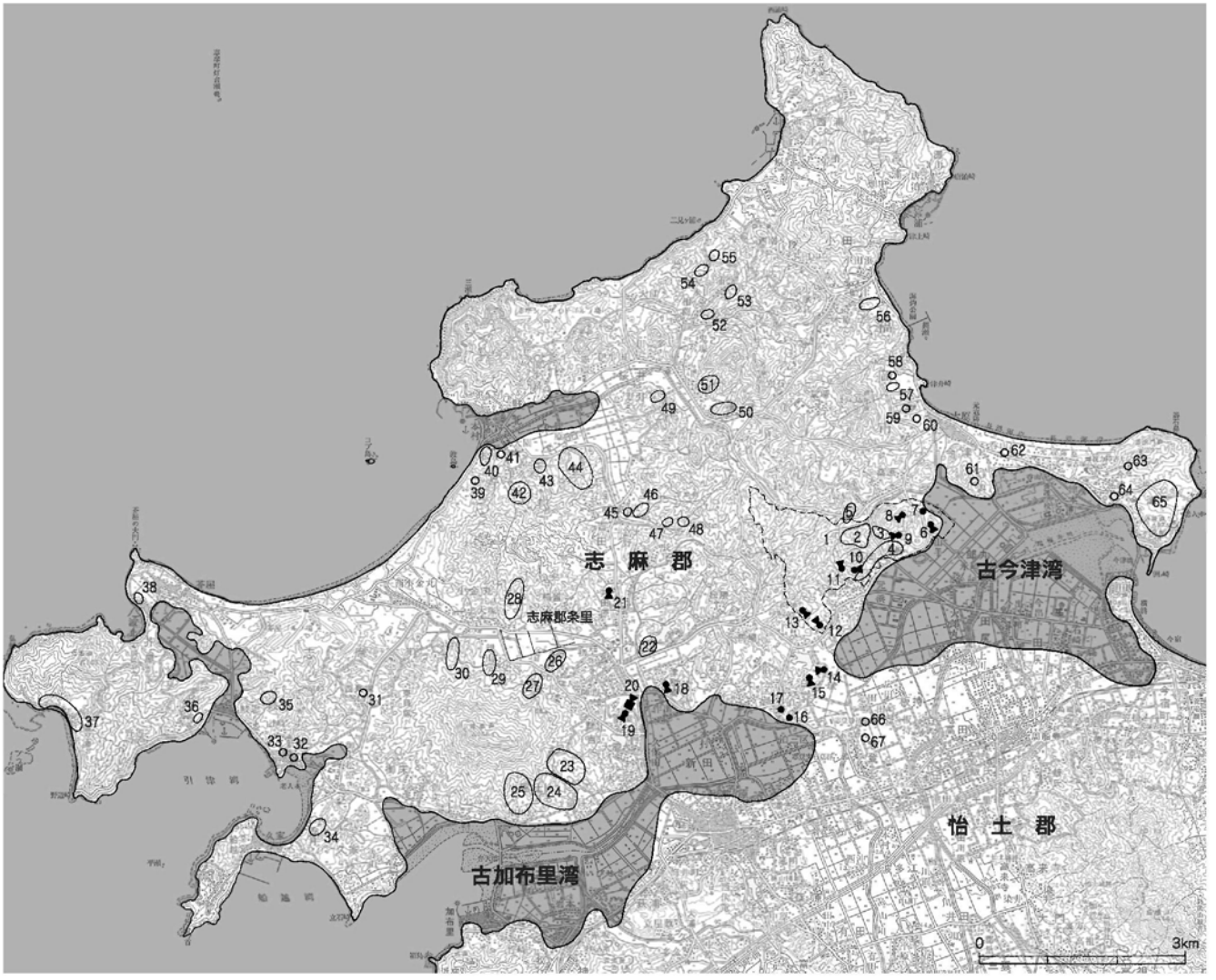
志摩町大字野北に所在する久米遺跡は、弥生時代前期末から中期中頃にかけての墳墓遺跡で、細形銅剣、銅弋などが出土している。久米地区を流れる桜井川下流南岸の丘陵地帯には、矢田古墳群、後田古墳群、田附古墳群、向畑古墳群など、総基数約30基が確認されている。また、近隣には７～８世紀代の製鉄遺跡である吹切遺跡が所在する。桜井川上流の大字桜井には、谷古墳群、壁田古墳群など総基数約20基が知られる。

西区今津周辺では、夜臼期の長浜貝塚、弥生時代前期後半の今津貝塚などが所在する。このほか、呑山遺跡は玄武岩の露頭を利用した前期末の小規模な石斧製作遺跡である。古墳群としては、毘沙門山南麓から浜崎山にかけての今津古墳群、総基数約20基が所在する。今津は平安時代末期から鎌倉時代にかけて、対外交渉の重要な拠点として繁栄し、同地に所在する明庵栄西開山の登志山誓願寺には、「銭弘俶八万四千塔」や「孔雀文沈金経箱」など寺宝が伝世している。

半島西端の地域では、引津湾沿岸に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての拠点集落である御床松原遺跡や、墳墓遺跡である新町遺跡などがあり、漁撈や対外交渉に関する遺物が多く出土している。また、芥屋や岐志の海岸付近には、浜口古墳群、久保地古墳群、古野古墳群などの数基からなる小古墳群が点在し、そのうち久保地古墳群では金製垂飾付耳飾や鉄製釣針などが出土している。沖田川北岸の八熊遺跡では、奈良時代の製鉄遺跡が発掘調査されている。

これら主に志摩半島北部の海岸地域では、まとまった古墳群の形成をみない。これに対し南部では数ヶ所の群集墳が知られ、九州大学統合移転用地内の踏査および発掘調査で更にその数が増加した。

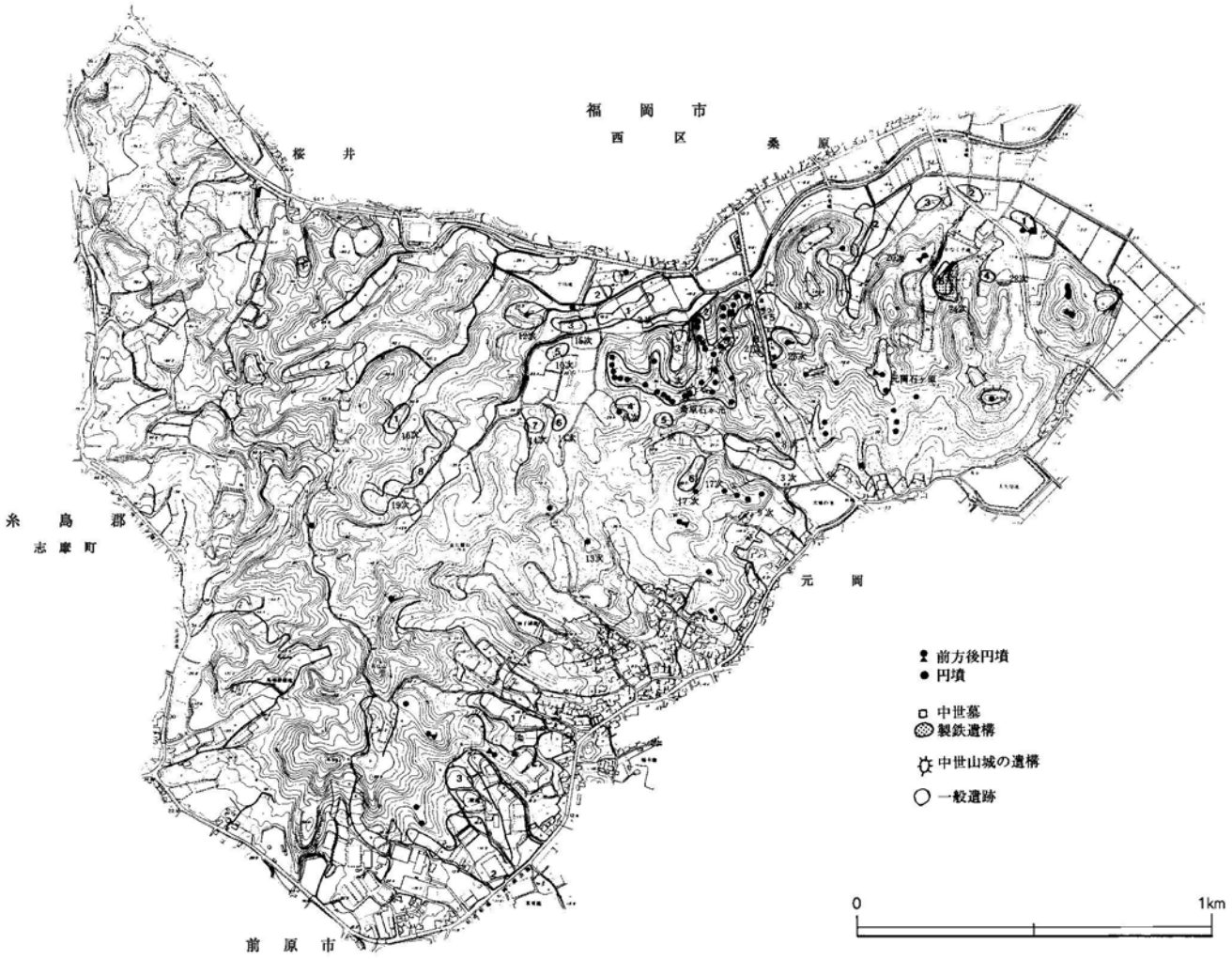
半島最大の可耕地を有する志摩町南部の初川流域では、前期の稲葉1・2号墳、権現古墳、中流域に中期の井田原開古墳（全長90m級）などの前方後円墳が所在する。円墳群としては、大字初、小金丸、師吉といった初川の両岸に、三十六古墳群、畑山古墳群、上大戸古墳群、塊掛古墳群、林古墳群、四反田古墳群など、総基数約60基が分布している。また初川を下った可也山南麓には、鰐口古墳群、荒牟田古墳群、相川古墳群など、総基数約50基が群集している。これらの円墳群はこれまでほとんど発掘調査されておらず、また壊滅したものも多い。



第１図　糸島半島の遺跡群（縮尺 1/100,000）

1	元岡・桑原遺跡群	18	権現古墳	35	古野古墳群	52	柏木古墳群
2	桑原石ヶ元古墳群	19	稲葉１号墳	36	岩野古墳群	53	東浦古墳群
3	桑原古墳群	20	稲葉２号墳	37	浜口古墳群	54	登浦古墳群
4	元岡古墳群	21	開１号墳	38	久保地古墳群	55	中ノ浦古墳群
5	桑原錦田古墳群	22	四反田古墳群	39	吹切遺跡	56	小田古墳群
6	元岡塩除古墳	23	鰐口古墳群	40	向畑古墳群	57	大原古墳群
7	元岡経塚古墳	24	荒牟田古墳群	41	久米遺跡	58	大原Ｄ遺跡
8	桑原金屎古墳	25	相川古墳群	42	後田古墳群	59	大原Ａ遺跡
9	元岡石ヶ原古墳	26	林古墳群	43	田附古墳群	60	大原Ｂ遺跡
10	元岡池ノ浦古墳	27	塊掛古墳群	44	矢田古墳群	61	呑山遺跡
11	元岡Ｅ－１号墳	28	三十六古墳群	45	釣波古墳群	62	長浜貝塚
12	元岡Ｉ－１号墳	29	上大戸古墳群	46	壁田古墳群	63	登志山誓願寺
13	元岡峰古墳	30	畑山古墳群	47	大才山古墳群	64	今津貝塚
14	泊大塚古墳	31	八熊遺跡	48	早稲見ヶ浦古墳群	65	今津古墳群
15	御道具山古墳	32	御床松原遺跡	49	押方古墳群		
16	泊城崎古墳	33	新町遺跡	50	洞古墳群		
17	泊大日古墳	34	北口古墳群	51	谷古墳群		

九州大学統合移転用地内の古墳群は、前方後円墳７基を含み、平成７年度に福岡市教育委員会が実施した踏査によって約70基が発見された。前期に築造されたと考えられる前方後円墳には、元岡塩除古墳（全長約60m）、元岡池ノ浦古墳（全長約62m）、桑原金屎古墳（全長25m）、元岡Ｅ－１号墳（全長35m）がある。確認調査が実施された桑原金屎古墳からは、菱雲紋鏡と芝草紋鏡と呼ばれる２面の青銅鏡が、また元岡Ｅ－１号墳からは方格Ｔ字鏡１面が共に内部主体から出土している。元岡塩除古墳は事業地東端に位置し、これに続く尾根上には元岡古墳群Ｌ群が続いている。また尾根の端部には、中期の築造と考えられる単独円墳の元岡経塚古墳（直径26m）が立地している。元岡石ヶ原古墳（全



第２図　元岡・桑原遺跡群分布図（縮尺 1/20,000）

長54m）は、内部主体に横穴式石室を有する後期の前方後円墳で、これを頂点に元岡古墳群A群、J群、N群、桑原古墳群A群などが群集しており、平成12年から15年に発掘調査が実施された。桑原石ヶ元古墳群は、これらの西側の丘陵上に立地し、大原川を挟んで北側には桑原錦田古墳群がある。これらの総基数は約50基に上り、この周辺で最も高い群集率を示す地区である。このうち平成８年から３ヶ年に亙って発掘調査が行われた桑原石ヶ元古墳群では、鉄製鍛冶工具や単鳳環頭太刀、金銅装馬具などをはじめ、朝鮮半島産の陶質土器などが出土した。南の古今津湾干拓地に面した丘陵上には、元岡池ノ浦古墳をはじめ、元岡古墳群B群、C群、E群、F群、G群、H群、I群などの数基からなる小円墳群が点在する。また、前述の元岡E－１号墳の他、元岡I－１号墳（元岡広瀬古墳）や元岡峰古墳などの前方後円墳と推定される小古墳が現存するが、具体的な調査がなされておらず内容は不明である。南側の事業地外には、御道具山古墳（全長65m）、泊大塚古墳（全長75m）などの前方後円墳、また泊大日古墳、泊城崎古墳などの大型円墳が立地し、糸島水道を見下ろす低丘陵に築造された首長墓群と考えられている。

事業地内で調査された古墳時代以降の集落遺跡としては、7次、12次、18次、20次、24次、26次、27次調査地点などが挙げられる。これらの内、とりわけ7次、12次、18次、20次調査地点では飛鳥時代から奈良時代にかけての製鉄遺構を包蔵し、倉庫群や官衙に特徴的な遺物等が多数出土し、その重要性から九州大学によって保存が決定され、埋め戻されている。

7次調査地点は、桑原石ヶ元古墳群と元岡古墳群B群の立地する丘陵に挟まれた狭い谷部に位置し、古墳時代の集落の他、飛鳥～奈良時代にかけての掘立柱建物群や、製鉄炉6基、地床炉17基などが検出された。また、「壬申年韓鉄・・」銘、「里丁・・政丁・・余部・・嶋里・・」銘木簡や「廣刀自」銘墨書須恵器などが出土している。

12次調査地点は、石ヶ元古墳群から大原川を挟んで北西側の谷部に位置する。製鉄炉27基や砂鉄を充填したピット2基などからなる奈良時代の大規模な製鉄遺跡が検出された。また隣接する15次調査地点では祓に使用する品目を列記した木簡が出土し、製鉄遺跡との関連が注目されている。

18次調査地点は、25次調査地点（桑原古墳群A群）北側の谷部に立地し、古墳時代後期から近世に断続的に至る集落などを検出した。このうち古代の遺構は、谷奥を中心に大規模な造成を伴う倉庫群が造られ、木簡、権、墨書土器や鞍の部材である居木など特殊な木製品が多数出土している。

20次地点は、事業地東側の別所山の東側丘陵部に位置する。遺構群は古墳時代と古代の2面に大別される。古墳時代の集落は、竪穴式住居址が約80件検出され、経営期間は前期から7世紀に至る長期間に及ぶ。また溜池状の遺構からは、子持ち勾玉や滑石製小玉など、水辺の祭祀に関連すると考えられる遺物が出土している。上面の遺構面は8世紀を前後する時期に、それ以前の集落域を整地して池状遺構や倉庫群が造られている。これらの遺構群からは、木簡や円面硯、帯金具などが多数出土しており、何らかの官衙的施設が想定されている。また、畿内を中心に出土する統一新羅時代の緑釉陶器片が出土しており、九州における初例と考えられている。

上述したこれら製鉄に関連する官衙的遺構群は、これまで主に大原川流域の桑原谷で調査されてきたが、近年では南麓の元岡地区でも調査例が増加した。31次調査地点では、鴻臚館に葺かれた瓦を焼成した窯が調査され、また「酒」を記したと考えられる印章なども出土している。

本書で報告する古墳群の内容は、13次調査（元岡古墳群E群：前方後円墳1基、円墳2基）、17次調査（元岡古墳群B群：円墳2基）、25次調査（桑原古墳群A群：円墳7基）、29次調査（元岡古墳群N群：円墳9基）、37次調査（元岡古墳群O群：円墳4基）の5支群、都合25基である。いずれの古墳も果樹園の造成などにより削平が著しく、内容を明確にできない部分が多い。しかしながら25次地点では、石室に副葬された鉄製鍛冶工具が出土するなど、この地域の古墳時代における製鉄を考察する上で貴重な発見もあった。隣接する桑原石ヶ元古墳群でも、鍛冶工具一式を副葬した古墳が発見されるなど、製鉄関連遺物が少なからず出土している。

九州大学統合移転用地内の発掘成果は、当地における古墳時代から古代にかけての鉄生産と、それを掌握したであろう在地有力者層との関連を明らかにする上で、大変貴重な資料を提供しているといえる。志摩半島や隣接する怡土や早良といった地域でも、製鉄関連遺物を出土する集落や古墳が多く調査されており、我が国が朝鮮半島や大陸と緊張関係にあった時代において、当地の負った役割の共通項を認めることができる。また付言するならば、このように被葬者に製鉄への関与が窺える古墳で朝鮮半島産の陶質土器が多く出土することも一つの特色である。具体的な発掘例が乏しかった志摩半島には、移転地と同様の性格を帯びた未発見の製鉄遺跡等が多数埋蔵されていると予想される。

古代の志麻郡に関する史料としては、『日本書紀』推古天皇十年の撃新羅将軍・来目皇子の嶋郡進屯記事を嚆矢に少数の文書が伝えられ、中でも正倉院に残る大寶二年戸籍『筑前國嶋郡川邊里』は、大領肥君猪手の家族をはじめとして、郡あるいは郷内の戸を知る上できわめて貴重である。

今後の課題として、集落遺跡や古墳群の詳細な検討と木簡などの文字資料と併せて、古代における志麻郡内の戸の編成のあり方や社会の実態などを究明していく必要がある。

4　古墳の呼称と各部の名称

本書で報告する古墳群の内容は、以下の５支群、都合25基である。

13次調査・・・・・・・・・・・・元岡古墳群E群：前方後円墳1基、円墳2基

17次調査・・・・・・・・・・・・元岡古墳群B群：円墳2基

25次調査・・・・・・・・・・・・桑原古墳群A群：円墳７基

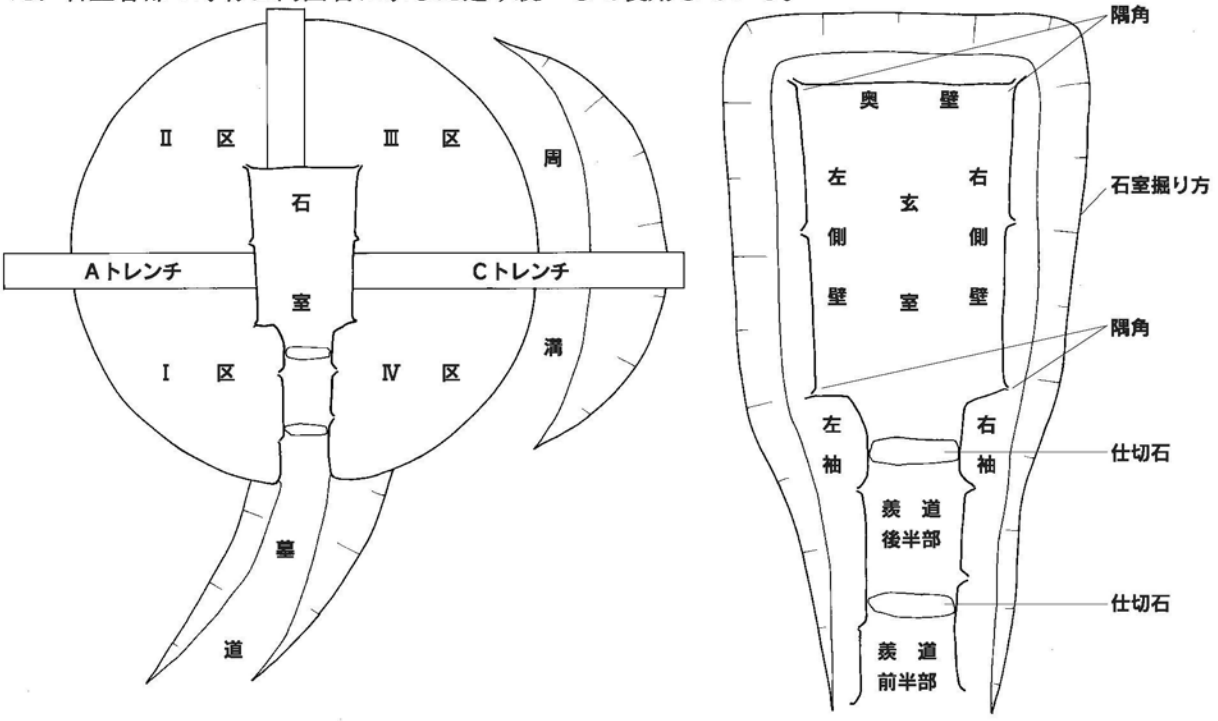
29次調査・・・・・・・・・・・・元岡古墳群N群：円墳9基

37次調査・・・・・・・・・・・・元岡古墳群O群：円墳4基

この他焼土坑などの付属的な遺構がある。いずれの古墳も果樹園の造成などにより削平が著しく、内容を明確にできない部分が多い。また、全古墳で内部主体が破壊されており、墳頂部に陥没坑があるものや、完全に破壊されるものも見られた。石室の破壊に関しては、慶長元年に始まる福岡城築城の際に、石垣構築に必要な石材を近隣の古墳群から搬出したという伝承がある。また、近代の果樹園の造成等によって、地形は大きく改変されており、総じて遺存状況は良好でない。

発掘調査の作業工程は、現況測量図を作成した後、内部主体の陥没坑を掘り下げた。内部主体の精査を行った後、その主軸に沿って３本のトレンチを墳丘に設定し、墳丘の規模と構造を確認した。その後、表土を除去し、墳丘遺存状況と墳丘に供献された遺物の出土状況を調査した。更に墳丘の盛土を除去し、地山整形、石室掘方、石室基底面の状況を調査して破壊した。現況図や墳丘遺存状況図の作成は縮尺1/100の平板測量で行い、石室実測や土層断面図の作成は縮尺1/20、各遺物出土状況図は縮尺1/10を基本として行っている。

墳丘に設定したトレンチの名称とそれにより区画される墳丘各区の番号は下図左の通りである。また、石室各部の呼称は同図右に示した通り統一して使用している。



第３図　古墳各部の名称

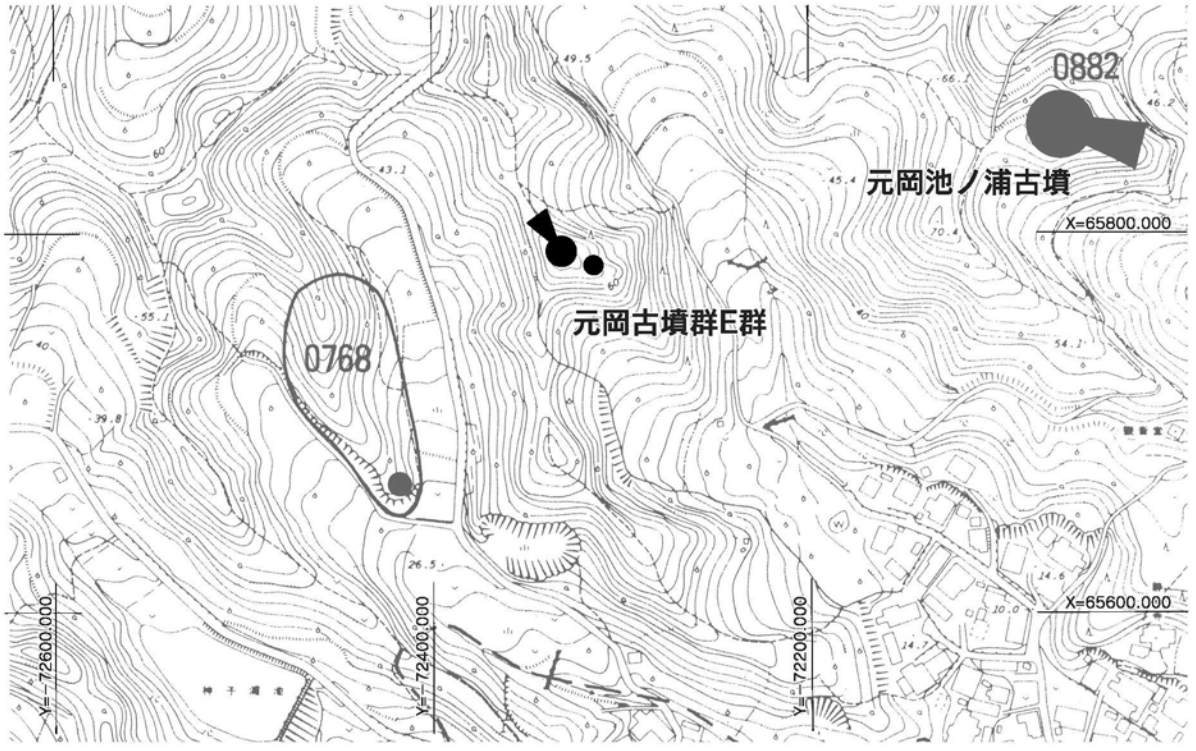
第13次調査の記録

－ 元岡古墳群E群 －

1　調査の概要

第13次調査地点は、西区大字元岡字小坂に所在する元岡古墳群E群である。調査期間は、平成11年4月12日から同年9月28日までである。九州大学統合移転予定地は、南の元岡と北の桑原両地区にまたがり、両集落は志摩町との境界に位置する石仏山から東の水崎山にかけて延びる尾根で分けられる。本古墳群は、この尾根から更に南に派生する舌状丘陵上に立地する。この尾根を下った東側の谷に下の谷集落、西側に坂の谷集落がある。石仏山東麓には元岡古墳群F群が、また本古墳群の東には元岡池ノ浦古墳や元岡古墳群B・D群がある程度で、北側の桑原古墳群ほどの群集を見ない。この状況が古墳時代の状況を示すか否かは不明確である。元岡側の丘陵は南側に面しており、とりわけ戦後盛行した果樹栽培によって大きく地形の改変が行われた可能性が考えられる。また、近世に新田開発を目的とした今津湾干拓が行われ、その際の土砂採取で尾根が削平された可能性も指摘しておきたい。

踏査の段階では調査地点に1基の円墳と、この尾根を北西側に上った地点に1基の円墳の都合2基の古墳群と想定していたが、調査の結果、後者は古墳でないことが判明した。また、本調査地点は1基の前方後円墳（1号墳）と2基の円墳（2・3号墳）から構成されることが判明した。1号墳は標高62m～66mに立地し、尾根の最高所である。墳丘は近世に墓地として、また近代には果樹園として利用されていたため、遺存状況は良好でない。このため墳丘盛土が殆ど残存せず、墳丘規模や主軸方向及び内部主体の状況について不明確な点が多い。2・3号墳は、1号墳から南東側に下った尾根上に隣接する標高61m付近に立地する。2号墳は、1号墳側に馬蹄形溝を掘り、下層の3号墳を取り込んで墳丘を構築している。2・3号墳共に東側の墳丘が大きく削平されており、遺存状況は良好でない。調査の途中、前方後円墳を含む支群であることから現地保存について九州大学と協議を重ねたが、調査地点が主要な構内道路予定地であるため、やむを得ず記録保存となった。



第4図　第13次調査地点周辺の地形図（縮尺 1/2,000）

2　E－1号墳

（1） 古墳の位置と現況（巻頭図版1、第4、5図、図版1－1）

E－1号墳は、先述した東西の尾根から南に派生する舌上丘陵の最高所に位置する前方後円墳である。北側に前方部を向け、尾根の最高所に後円部が位置する。調査前の現況は山林で、標高は前方部で62.0m、墳頂部で66.6mを測った。前方部から後円部にかけての墳丘上は、近世に墓地となっていたほか、丘陵斜面は近代に果樹園として利用されていたため墳丘は殆どが流出しており、遺存状況はきわめて悪い。近世墓は既に改葬が行われていたが、人骨や唐津焼・高取焼の皿など、副葬品が遺存しているものも見られた。

（2） 墳　丘（第5、6、8図、図版1－2、2）

尾根の両側が大きく削られ、特に西側で著しく遺存状況はきわめて悪い。そのために、墳丘の規模や構築状況について不明確な点が非常に多い。

現況測量時に、後円部北半で標高65m付近の僅かな平坦面と、標高64m付近の裾部の名残と考えられる傾斜変換線が確認できた。また後円部の北側ではくびれ部を反映したと考えられる緩傾斜面を、また前方部では端部と考えられる傾斜変換線が看取された。調査は先ず後円部の墳頂付近をトレンチ状に掘り下げ、内部主体の確認に努めた。表土層を除去した直後に地山（黄褐色花崗岩媒乱土）を検出した。またこの面で、SK－001～004の4基の近世墓壙を検出した。いずれも改葬が行われていたが、墓壙底部付近は一次的な状態を留めており、SK－001からは副葬品と考えられる唐津焼の皿1枚と、また墓壙底部から土師器皿が伏せた状態で出土した。同じくSK－002からは高取系の皿が1枚出土した。このSK－001と002の間から、表土直下で青銅鏡が1面出土した。その周辺には灰白色粘質土が地山直上で僅かに検出され、内部主体の痕跡と考えられる。墳頂部の平坦面のほぼ中央から尾根筋に沿った南北に主軸を想定し、前方部に5本、後円部に3本のトレンチを設定し土層観察を行った。墳頂部から北側に延びる尾根には、周溝が確認されなかった。その後、表土の除去作業を行い墳丘遺存状況を調査し、墳丘盛土と内部主体を除去し地山整形を確認した。

地山整形

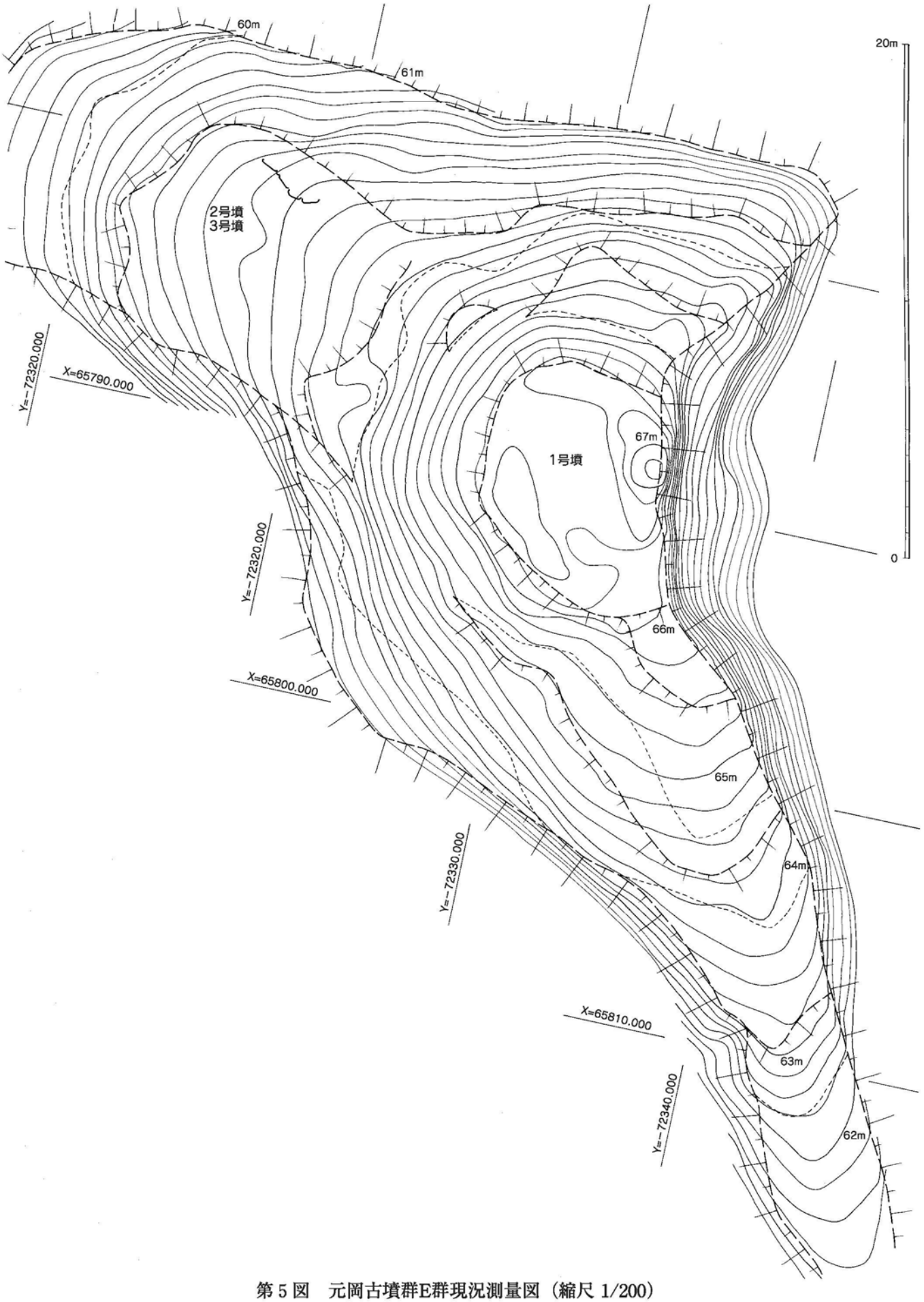
丘陵周辺の開削が著しく、地山整形の状況は不明確である。前方部では、標高62.0m付近で裾部と推定される平坦面が僅かに看取された。またくびれ部では、標高64.5～65.0m付近で1段目段築部と考えられる僅かな平坦面を確認した。この他の前方部地山整形の状況は不明である。この平坦面から北側の後円部にかけては65.5m付近で裾部が巡り、後円部2段目の裾を留めていると推定される。また後円部北半では、標高63.4～63.8m付近で傾斜変換線が半周し、1段目裾部と推定される。後円部墳頂部も近世墓等で著しく破壊されているが、盛土の状況から標高66.2m付近で墳丘基底面を構築したと推定されるが、推察の域を出ない。古墳築造以前の旧表土層は全く確認されなかった。

盛　土

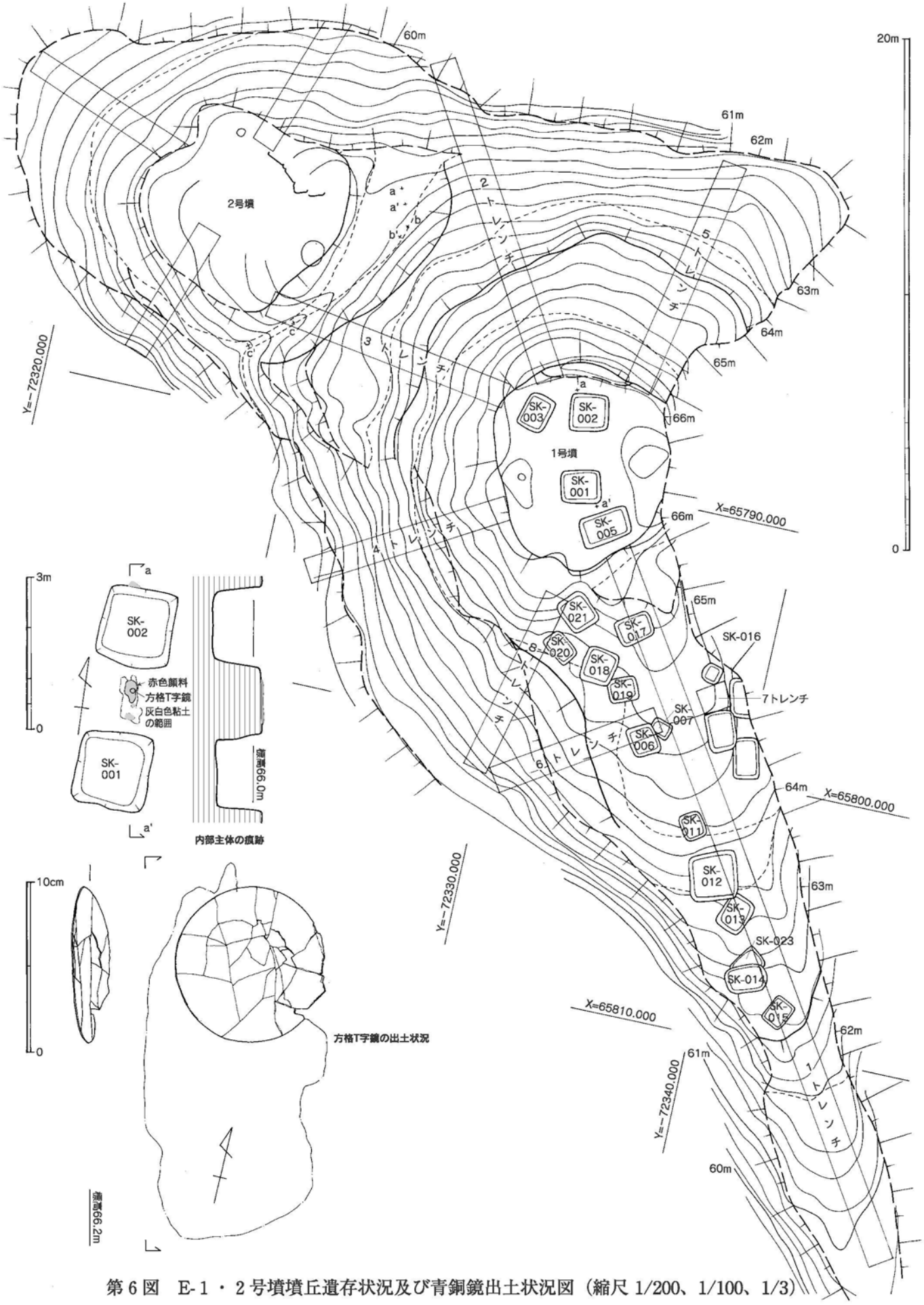
地山削り出しによる整形後、墳頂部に盛土したと考えられる。盛土は近世墓壙が掘削されていない後円部の北側と南側に一部遺存しているのみで、前方部は全く遺存していなかった。最も厚い箇所で30～40cm程度を測る。盛土は粘質の殆どない黄褐色砂質土を用いて版築状に硬く締まっていた。葺石等の外表施設は確認されなかった。

墳形の復元

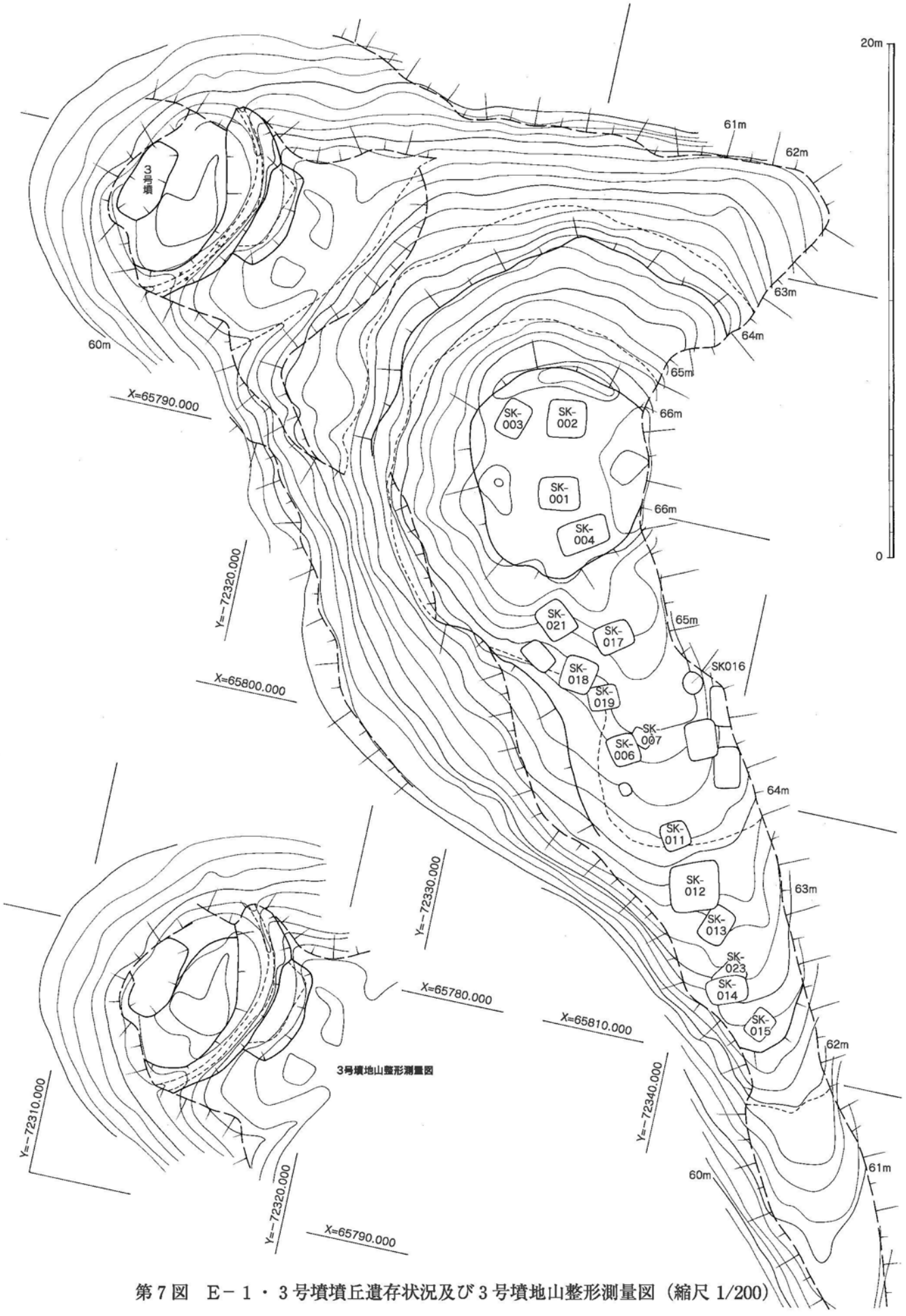
遺存状況がきわめて悪く、墳形の復元は推察の域を出ない。地山整形の状況等から、墳丘規模は全長35m、後円部径22m、前方部長15mと推定される。前方部・後円部共に2段築成と推定される。墳丘の主軸方向は明確にできなかったが、概ねN－28°－W前後と推定される。また、細い屋根上を占地



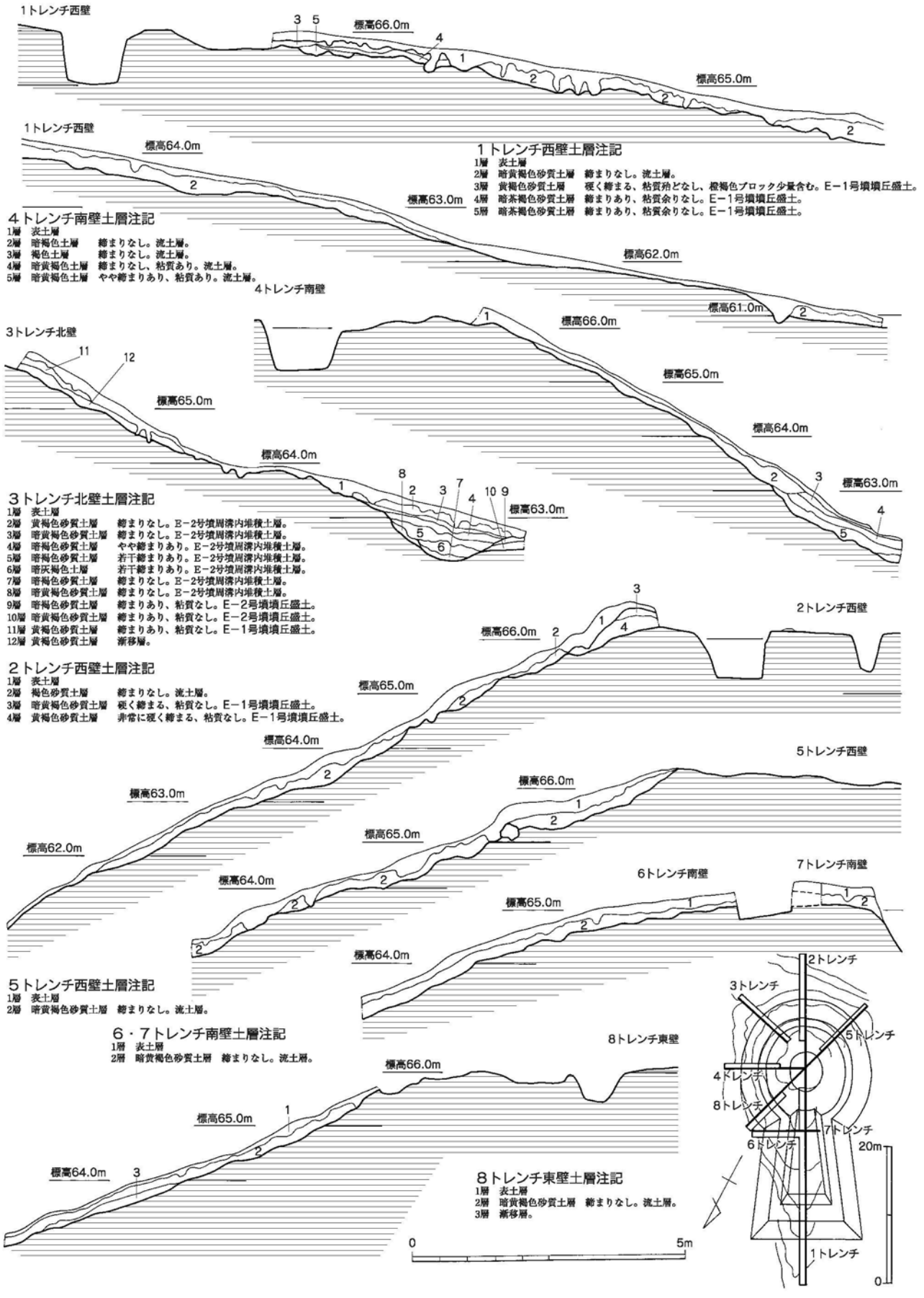
第５図　元岡古墳群E群現況測量図（縮尺 1/200）



第6図　E-1・2号墳墳丘遺存状況及び青銅鏡出土状況図（縮尺 1/200、1/100、1/3）



第7図　E－1・3号墳墳丘遺存状況及び3号墳地山整形測量図（縮尺 1/200）



第8図　E－1号墳トレンチ土層断面図（縮尺 1/100）

する地形状の制約から、墳形に歪みが生じ全体に狭長であったと推定される。前方部端部は標高62m付近、また後円部端部は標高63.5m付近であり、後円部に向かって緩やかに上っていると考えられる。段築平坦面は、土層観察から後円部で65.4m付近と考えられる。

（3） 内部主体（第6図左、図版6－1）

後円部の墳頂部で、内部主体の痕跡を確認した。墳頂部も近世墓壙により大きく破壊され、主体部付近はSK－001・002によって寸断される。両墓壙に挟まれた標高66.15m付近の地山面に灰白色粘土が貼られた状態で僅かに遺存し、またSK－001の北側に赤色顔料が僅かに遺存していた。このことからE－1号墳の内部主体は木棺直葬の粘土槨と推定され、遺存部分での長さは約2.8mを測る。

（4） 出土遺物（第6図下、9、巻頭図版4、図版6－1～3、7－1）

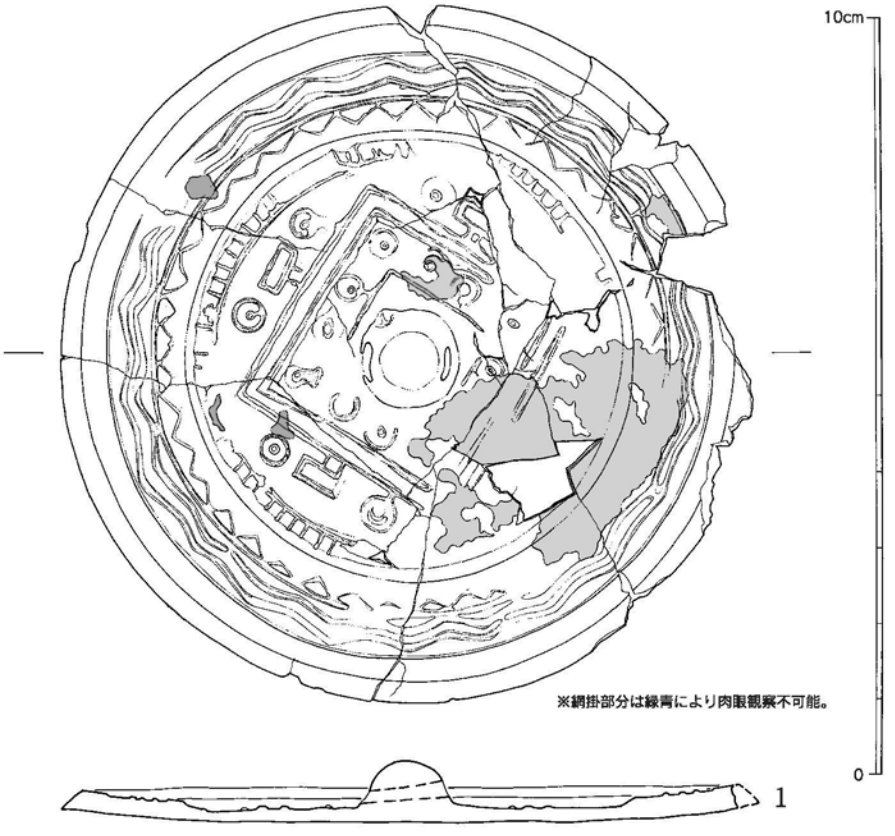
遺物出土状況（第6図左、巻頭図版4下、図版6－1～3）

灰白色粘土上から方格T字鏡が1面出土した。同鏡は東側に向かって僅かに傾斜しており、木棺の主軸はほぼ南北方向であったと推定される。鏡が棺内のどの位置に副葬されたかは不明である。

遺　物（第9図、巻頭図版4上、図版7－1）

方格T字鏡（第9図－1、巻頭図版4、図版7－1）

1は面径9.2cmを測る小型鏡である。外区は外から素文帯・波長の長い複波文帯・突線を巡らせた外行鋸歯文を配する。内区は突線から延びる文様帯を配し、方格の外側には8個の円座乳とT字文を配している。方格と外区との間には小孤線文を配しているようにも見受けられるが、明確でない。方格は二重の突線で構成され、その内側に一重の方格を平行に配置している。方格間には12個の円座乳を配する。鈕は中央に位置するが、鈕孔は方格の対角線よりややずれている。全体に文様は不鮮明であり、踏み返し鏡、もしくは再用された鋳型による鋳造品と推定される。



第9図　方格T字鏡実測図（縮尺 1/1）

3　E－2号墳

（1） 古墳の位置と現況（第4、5図）

E－2号墳は、1号墳から南東に派生する尾根上に立地し、1号墳の主体部から2号墳の中心まで直線距離で約15m離れている。調査前の現況は山林で、標高は約63mを測る。丘陵斜面は、近代に果樹園として利用され、墳丘の流出が著しく遺存状況は良好でなかった。

（2） 墳　丘（第6、10図、図版3－1～4）

墳丘の大部分は流失しており、盛土が遺存しているのはⅠ・Ⅳ区の一部である。2号墳の下層には3号墳が位置しており、これを取り込んで墳丘を構築している。

地山整形（図版3－4）

2号墳築造に伴う地山整形は、北西側（丘陵側）の馬蹄形溝の掘削と、南東側の墳裾の削り出し、及び墳丘基底面の整地からなると考えられる。墳丘の南東側は大きく削平されており、この部分の墳丘基底面の整地や、墳裾の削り出しの状況は不明である。北側の墳裾の削り出しは、標高61.2m付近で行われており、石室の中心から約5.5mを測る。北西側の馬蹄形溝は、長さ約11m、最大幅約4mに亙って遺存している。1号墳の墳裾に近い標高63.7m付近から掘削が行われており、最も深い部分で標高62.7mを測り、断面が逆蒲鉾形を呈する。墳丘基底面の整地は、Ⅱ・Ⅲ区の墳丘が遺存しておらず明確でないが、丘陵側で標高約63.0m、Aトレンチ付近で標高約62.0mを測り、北西側（丘陵側）から南東側にかけて緩やかに傾斜するものと考えられる。

盛　土（図版3－2、3）

盛土は墳丘Ⅰ区で僅かに遺存するのみであった。Aトレンチの土層観察から、2号墳築造時には下層の3号墳周溝は既に埋没していたと考えられ、盛土はその上面から行われる。盛土は、地山由来の砂質土で厚さ約10～20cmの単位で突き固められる。木竹の侵食で締まり具合が悪い。盛土の工程はトレンチの土層観察の限り、大きく2段階に分かれる。第一工程は、3号墳の周溝の立ち上がりから内側の盛土（8～10層）で、第一次墳丘を構築する。第一次墳丘の裾部は石室の中心から約4.5m付近、標高61.7mを測る。第二次墳丘は2号墳の裾部から第一次墳丘までの間に盛土される（6、7層）。墳丘平面形は、馬蹄形溝と墳裾の状況から直径11mの円墳に復元される。

（3） 内部主体（第11図、図版3－5～8、4－1、2）

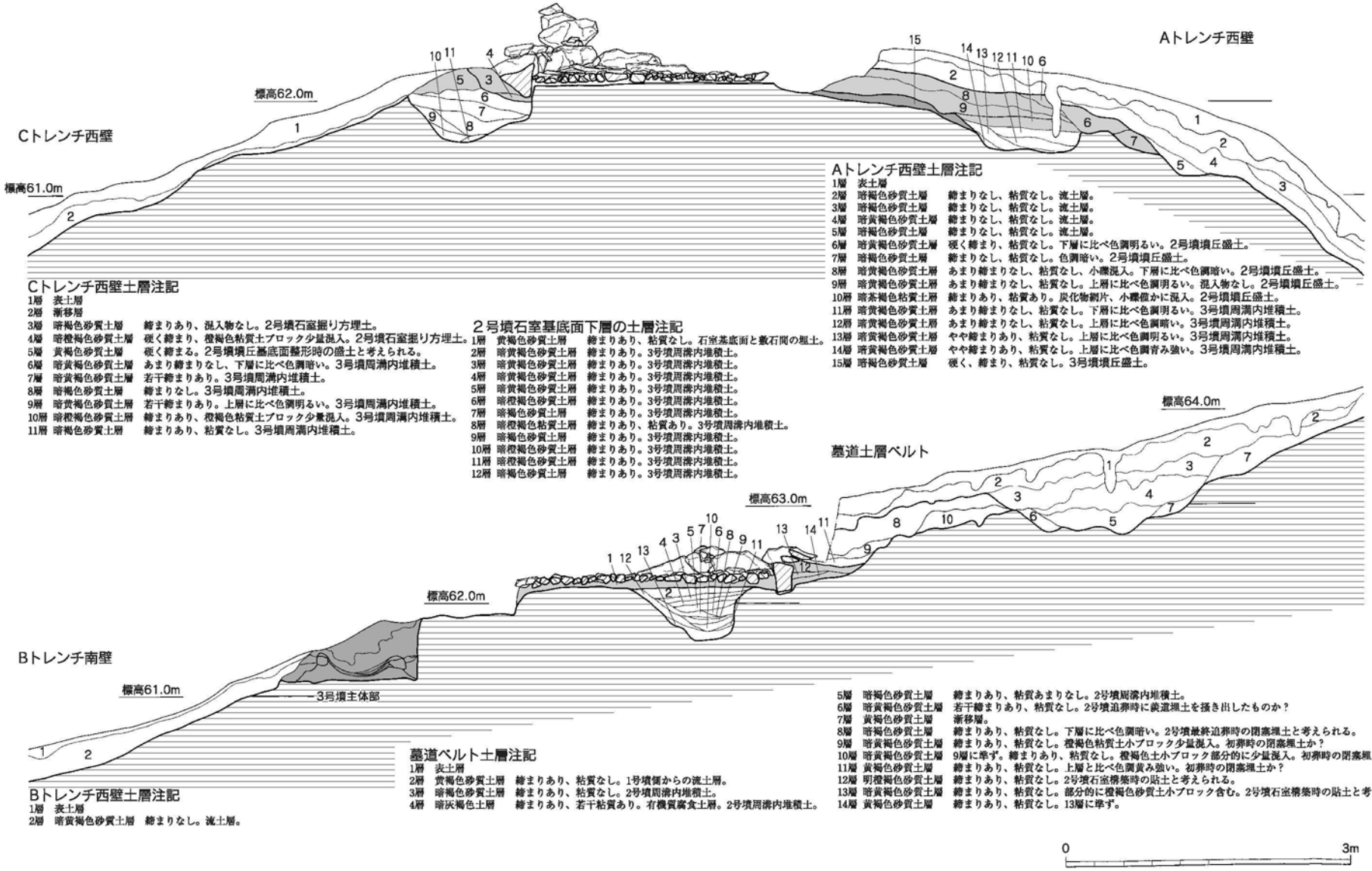
2号墳の内部主体は、西側の丘陵方向に向かって開口する両袖式単室の横穴式石室である。大きく破壊され右側壁腰石の一部を留めるにすぎず、石室規模や玄室主軸など不明な部分が多い。

玄　室

遺存部分の状況から、玄室は奥壁幅が広い台形平面を呈していたと推定される。玄室長は約270cmに復元される。玄室幅は中央で約260cmと推定され、奥壁側ではこれより広く、前壁幅は狭いと推定される。右側壁は腰石2石が遺存する。腰石には長さ70～100cm、高さ50cm程度の花崗岩を横位に据えている。玄門右袖石は仕切り石の上に載せられており、羨道に向かって階梯状に積まれている。また仕切石は羨道部の土層断面観察から、少なくとも3段積まれていたことが確認された。

床面は3面認定し、敷石が敷設される。検出した順に第1・2・3面で、それぞれ標高62.4m、62.35m、62.3mである。床面は壁石周辺が撹乱されているが、各面とも敷設当時の状況を概ね留めていると推定される。使用石材は全て10～30cm程度の花崗岩転石と割石で、平坦面を上に向ける。

第1面敷石は玄室のほぼ中央に、幅約80cm×長さ約180cmの屍床状に敷設される。最終の追葬に伴って敷設された床面と推定される。推定される玄室の主軸よりややずれる。玄門側の敷石部分でガラス製玉類が数点出土しており、埋葬頭位は西側であったと推定される。



Cトレンチ西壁土層注記

1層　表土層
2層　漸移層
3層　暗褐色砂質土層　締まりあり、混入物なし。2号墳石室掘り方埋土。
4層　暗橙褐色砂質土層　硬く締まり、橙褐色粘質土ブロック少量混入。2号墳石室掘り方埋土。
5層　黄褐色砂質土層　硬く締まる。2号墳丘基底面整形時の盛土と考えられる。
6層　暗黄褐色砂質土層　あまり締まりなし、下層に比べ色調暗い。3号墳周溝内堆積土。
7層　暗黄褐色砂質土層　若干締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
8層　暗褐色砂質土層　締まりなし。3号墳周溝内堆積土。
9層　暗黄褐色砂質土層　若干締まりあり。上層に比べ色調明るい。3号墳周溝内堆積土。
10層　暗橙褐色砂質土層　締まりあり、橙褐色粘質土ブロック少量混入。3号墳周溝内堆積土。
11層　暗褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。3号墳周溝内堆積土。

2号墳石室基底面下層の土層注記

1層　黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。石室基底面と敷石間の埋土。
2層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
3層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
4層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
5層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
6層　暗橙褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
7層　暗褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
8層　暗橙褐色粘質土層　締まりあり、粘質あり。3号墳周溝内堆積土。
9層　暗褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
10層　暗橙褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
11層　暗橙褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。
12層　暗褐色砂質土層　締まりあり。3号墳周溝内堆積土。

Aトレンチ西壁土層注記

1層　表土層
2層　暗褐色砂質土層　締まりなし、粘質なし。流土層。
3層　暗褐色砂質土層　締まりなし、粘質なし。流土層。
4層　暗黄褐色砂質土層　締まりなし、粘質なし。流土層。
5層　暗褐色砂質土層　締まりなし、粘質なし。流土層。
6層　暗黄褐色砂質土層　硬く締まり、粘質なし。下層に比べ色調明るい。2号墳墳丘盛土。
7層　暗褐色砂質土層　締まりなし、粘質なし。色調暗い。2号墳墳丘盛土。
8層　暗黄褐色砂質土層　あまり締まりなし、粘質なし、小礫混入。下層に比べ色調暗い。2号墳墳丘盛土。
9層　暗黄褐色砂質土層　あまり締まりなし、粘質なし。上層に比べ色調明るい。混入物なし。2号墳墳丘盛土。
10層　暗茶褐色粘質土層　締まりあり、粘質あり。炭化物網片、小礫微かに混入。2号墳墳丘盛土。
11層　暗黄褐色砂質土層　あまり締まりなし、粘質なし。下層に比べ色調明るい。3号墳周溝内堆積土。
12層　暗黄褐色砂質土層　あまり締まりなし、粘質なし。上層に比べ色調暗い。3号墳周溝内堆積土。
13層　暗黄褐色砂質土層　やや締まりあり、粘質なし。上層に比べ色調明るい。3号墳周溝内堆積土。
14層　暗黄褐色砂質土層　やや締まりあり、粘質なし。上層に比べ色調青み強い。3号墳周溝内堆積土。
15層　暗褐色砂質土層　硬く、締まり、粘質なし。3号墳墳丘盛土。

墓道ベルト土層注記

1層　表土層
2層　黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。1号墳側からの流土層。
3層　暗褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。2号墳周溝内堆積土。
4層　暗灰褐色土層　締まりあり、若干粘質あり。有機質腐食土層。2号墳周溝内堆積土。
5層　暗褐色砂質土層　締まりあり、粘質あまりなし。2号墳周溝内堆積土。
6層　暗黄褐色砂質土層　若干締まりあり、粘質なし。2号墳追葬時に羨道埋土を掻き出したものか？
7層　黄褐色砂質土層　漸移層。
8層　暗褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。下層に比べ色調暗い。2号墳最終追葬時の閉塞埋土と考えられる。
9層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。橙褐色粘質土小ブロック少量混入。初葬時の閉塞埋土か？
10層　暗黄褐色砂質土層　9層に準ず。締まりあり、粘質なし。橙褐色土小ブロック部分的に少量混入。初葬時の閉塞埋土か？
11層　黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。上層と比べ色調黄み強い。初葬時の閉塞埋土か？
12層　明橙褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。2号墳石室構築時の貼土と考えられる。
13層　暗黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。部分的に橙褐色砂質土小ブロック含む。2号墳石室構築時の貼土と考えられる。
14層　黄褐色砂質土層　締まりあり、粘質なし。13層に準ず。

Bトレンチ西壁土層注記

1層　表土層
2層　暗黄褐色砂質土層　締まりなし。流土層。

第10図　E－2・3号墳墳丘断面図（縮尺 1/60）

第11図　E－2号墳石室実測図（縮尺 1/40）

第２面敷石は玄室全体に敷設されるが、疎らで石材が小振りである。面の下に副葬品があること、また上下の面との比高差が明確に看取されたので、面として認定できると考えられる。

第３面敷石は、玄室全面に緊密に敷設される。石室構築時の床面で、石材は第１面と同様である。石室基底面から敷石までの間には、地山由来の黄褐色砂質土が厚さ５～10cm程度盛られていた。

羨　道

右壁の腰石が遺存するのみで、長さは1.2mを測る。長さ約50～70cm、高さ約20～40cmの花崗岩転石を横位に階梯状に据えている。羨道は短く、「ハ」字形に開く。床面１ヶ所に仕切石が敷設される。仕切石は長さ60～70cm程度の不整形な花崗岩転石を並べ、その上に更に扁平な転石を載せている。また、石室掘り方は、仕切石の天場まで地山由来の黄褐色砂質土で埋められる。

閉塞施設

仕切石の上面に、小振りな花崗岩転石を使用した閉塞石が数個遺存していたが、全体の構造は不明である。板石は確認されなかった。

（４）　出土遺物（第12～14図、図版４－３～８）

遺物出土状況（第12図、図版４－３～８）

玄室内からは、石室第３面を中心に副葬品が出土した。第３面の右側壁際からは鉄製鋤先１点、鉄斧２点、鉄鎌２点などの鉄製農工具などのほか、鉄鏃、鉄製刀子片などが出土した。また、玄室の中央よりやや右側壁側では鉄鎌１点の他、ガラス製・碧玉製玉類が出土している。

また墓道側に位置する馬蹄形溝からは、供献された須恵器や土師器が出土した。出土位置からA～C群の３群に分けて調査した。A群は、Ⅳ区周溝底部の標高62.7m付近で出土した須恵器蓋坏である。身・蓋一揃えで正位に置かれたものの横に蓋が仰向けの状態で出土している。B群は、Ⅳ区周溝底部より西（１号墳）側の斜面、標高62.8m付近で出土した須恵器大甕の底部片である。上部片は確認されなかった。底部を据えるための掘方の一部が検出された。C群は、Ⅰ区周溝底部の標高62.1～62.4m付近で出土した。須恵器瑞以外は破砕した状態で出土した。

遺　物（第13、14図、図版７－２～５、８、９）

須恵器（第13図－76～82、図版７－２～５）

本墳から出土した須恵器には、坏蓋、坏身、提瓶、瑞、大甕、平底瓶等の器種がある。

坏　蓋（第13図－78、79、図版７－２）

完形品２点が出土。78は口径15.2cm、器高4.8cm、79は口径15.2cm、器高5.0cm。両者とも口縁部はほぼ直下に下り、端部に明瞭な段を有す。天井部約１／２に回転篦削り、口縁部の境界に、78には浅い沈線、79には退化した稜がある。胎土はやや粗く白色粗砂を含む。焼成良好で色調はオリーブ灰。

坏　身（第13図－80、図版７－３）

80は口径12.7cm、受部径15.8cm、器高5.9cmを測る完形品である。立ち上がりは内傾気味で、端部内側に明瞭な沈線を施す。胎土はやや粗く、白色粗砂を含む。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

提　瓶（第13図－76）

76は復元口径8.6cm、器高26.2cm。肩部に環状の耳が一対付くが欠損する。胴部外器面に同心円状のカキ目を施す。胎土はやや粗く、白色砂粒を含む。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

瑞（第13図－77、図版７－４）

77は口径11.8cm、器高12.8cm、胴部最大径10.1cmを測る。頸部が太く、口縁部は外反気味に立ち上がり、更に段をなして大きく外反する。胴部最大径は中央より上位にある。底部には回転篦削りを施す。穿孔は大きい。胎土はやや粗く、白色砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

大　甕（第13図－82）

82は復元口径22.8cm、器高55.5cm程度。口縁部は短く外反。端部外器面に浅い沈線が巡る。胴部外器面は平行叩きの後、カキ目。内器面に青海波の当て具痕が残る。外器面と内底に自然釉が付着。

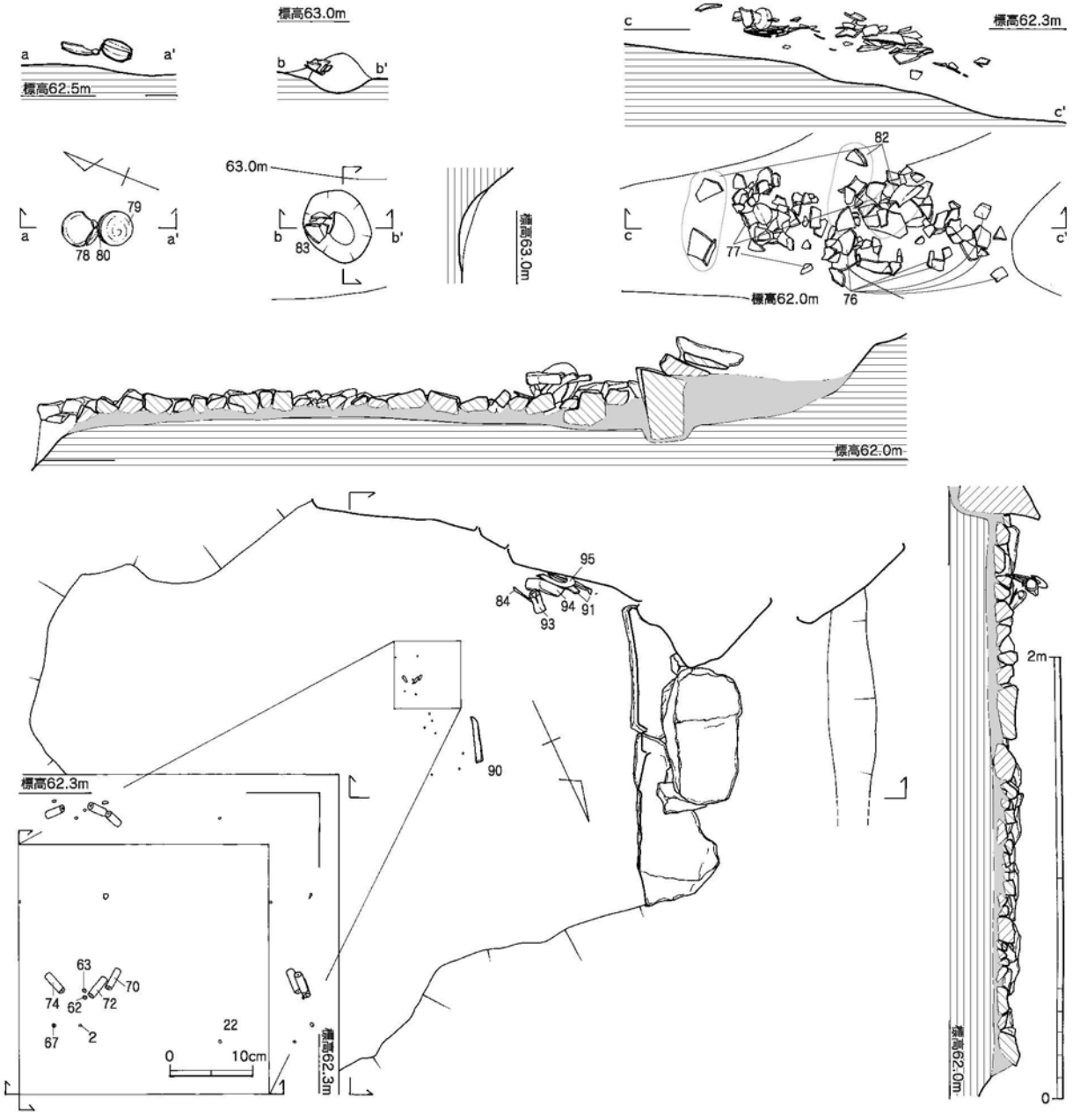
平底壺（第13図－81、図版７－５）

81は残存高16.0cm、底径10.0cm、胴部最大径16.2cm、頸部径6.0cm。底部は平底で胴部への移行部が不明瞭。胴部は幅２～３cm程度の粘土紐を巻き上げて成形され、最大径は中央よりやや下位にある。頸部はやや太い。胴部下方に粗いカキ目の後、横ナデ。内器面無文で横ナデ。胎土はやや粗く、白色砂粒を含む。焼成良好で色調は青灰色。朝鮮半島系陶質土器を模倣した須恵器と考えられる。

土師器（第13図－83）

甕（第13図－83）

83は甕もしくは壺の肩部片である。外器面に縦方向の刷毛目、内器面に横方向の篦削りが施される。



第12図　E－２号墳石室及び墳丘遺物出土状況図（縮尺 1/30、1/8）

鉄　器（第14図）

剣片以外はいずれも石室第３面からの出土で、鏃等の武具類、刀子・鎌・斧・鋤先等の農工具類がまとまって副葬されていた。剣片のみは、Ⅰ区墳丘の表土層から出土している。

武　具（第14図－87～89、91）

鉄　鏃（第14図－87～89）

87は残存長5.1cm、鏃身長4.0cmの片鎬造柳葉形鉄鏃片。鏃身部には逆刺が付く。88は残存長3.2cm、鏃身長2.0cmで、平造の鉄鏃片と考えられる。89は残存長12.2cm、鏃身長4.2cm、頸部長6.6cmの長頸箆被片鎬造柳葉形鉄鏃である。鏃身部に逆刺が付き、関部は台形である。茎部に木質が残る。

鉄　剣（第14図－92）

92は残存長6.6cm、剣身元幅3.8cm、同厚0.6cm、茎口幅1.5cmを測る剣身から茎部にかけての破片である。全体に鞘と考えられる木質が残るが、茎基部のみ横方向、他は縦方向である。

農工具（第14図－84～86、90、91、93～95）

刀　子（第14図－84～86）

84は残存長13.1cm、刀身長9.3cm、同元幅1.6cm、同厚0.5cm、茎厚0.4cmを測る。切先はフクラで両関と考えられる。柄縁金具は断面倒卵形を呈し、長径1.8cm、短径1.3cmを測る。茎部には木目が僅かに残る。85は残存長16.1cm、茎部長5.4cm、刀身元幅2.2cm、同厚0.5cm、茎口幅1.5cm、同尻幅1.0cm、同厚0.5cmを測る。両関で栗尻、茎部には木目が僅かに残る。86は残存長8.5cm、刀身長7.5cm、同元幅1.2cm、同厚0.4cm、茎口幅1.1cm、茎厚0.4cmを測る。切先はフクラで片関である。

鉄　鎌（第14図－90、91、図版９－１、２）

90は残存長14.5＋3.0cm、基部幅2.5cm、同厚0.7cmを測る。端部は全体が曲げられ、着柄角度はほぼ直角である。91は２個体が錆着する。１点はほぼ完形で、全長24.6cm、基部幅3.6cm、同厚0.7cmを測る。端部は上端部が半分曲げられるのみで、着柄角度はほぼ直角である。他方は残存長20.6cm、基部幅3.8cm、同厚0.4cmを測る。端部は全体が曲げられ、着柄角度はやや鋭角気味である。

鉄　斧（第14図－93、94、図版８）

２点出土し、いずれも鍛造品である。93は全長12.0cm、刃部長3.9cm、同幅4.4cm、袋部長径4.2cm、同短径3.3cmを測る。袋部穂は楕円形を呈する。刃部は無関で、断面は長方形を呈する。94は全長17.1cm、刃部長7.4cm、同下幅7.5cm、袋部長径5.4cm、同短径4.9cmを測る。袋部穂は楕円形を呈し、合わせ目に段が付く。刃部に関があり、刃部の断面は長方形を呈する。

鋤　先（第14図－95、図版９－３）

95は完形のU字形鋤先で、高15.1cm、幅29.3cm、刃部幅4.3cmを測る。内側にV字形の溝が入る。

装身具（第13図－2～75）

ガラス製玉類（第13図－２～68）

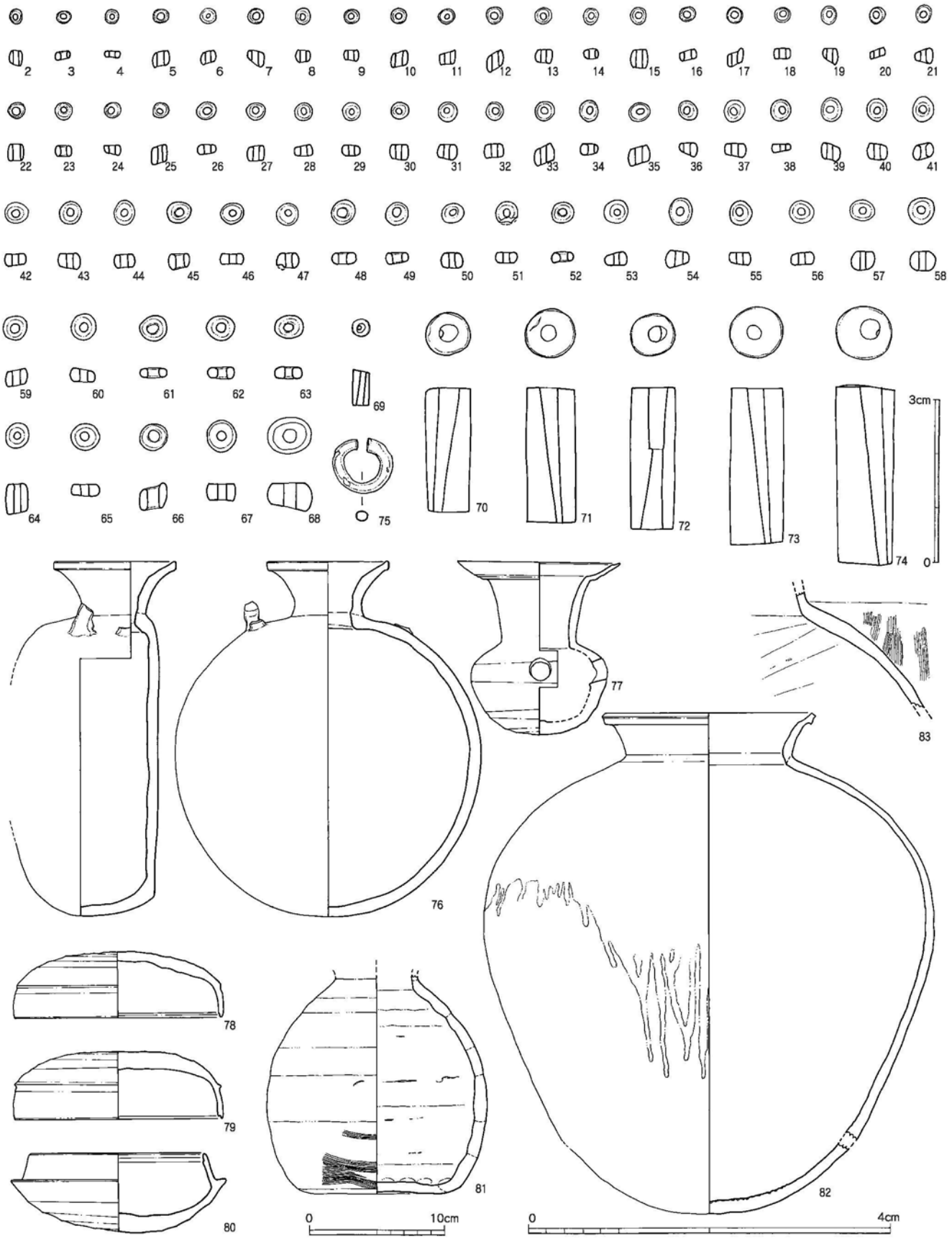
２～16が粟玉、17～68が小玉である。製作技法が確認できないものもあるが、概ね引き伸ばし技法によって製作される。端部の研磨がないものもある。色調は27・32・35・37・40が黄色（浅い黄～黄蘗（はだ）色）、その他は緑みの青～紫みの青（ターコイズ・水色・浅葱（あさぎ）色・紺・紺青など）を呈する。

碧玉製玉類（第13図－68～74）

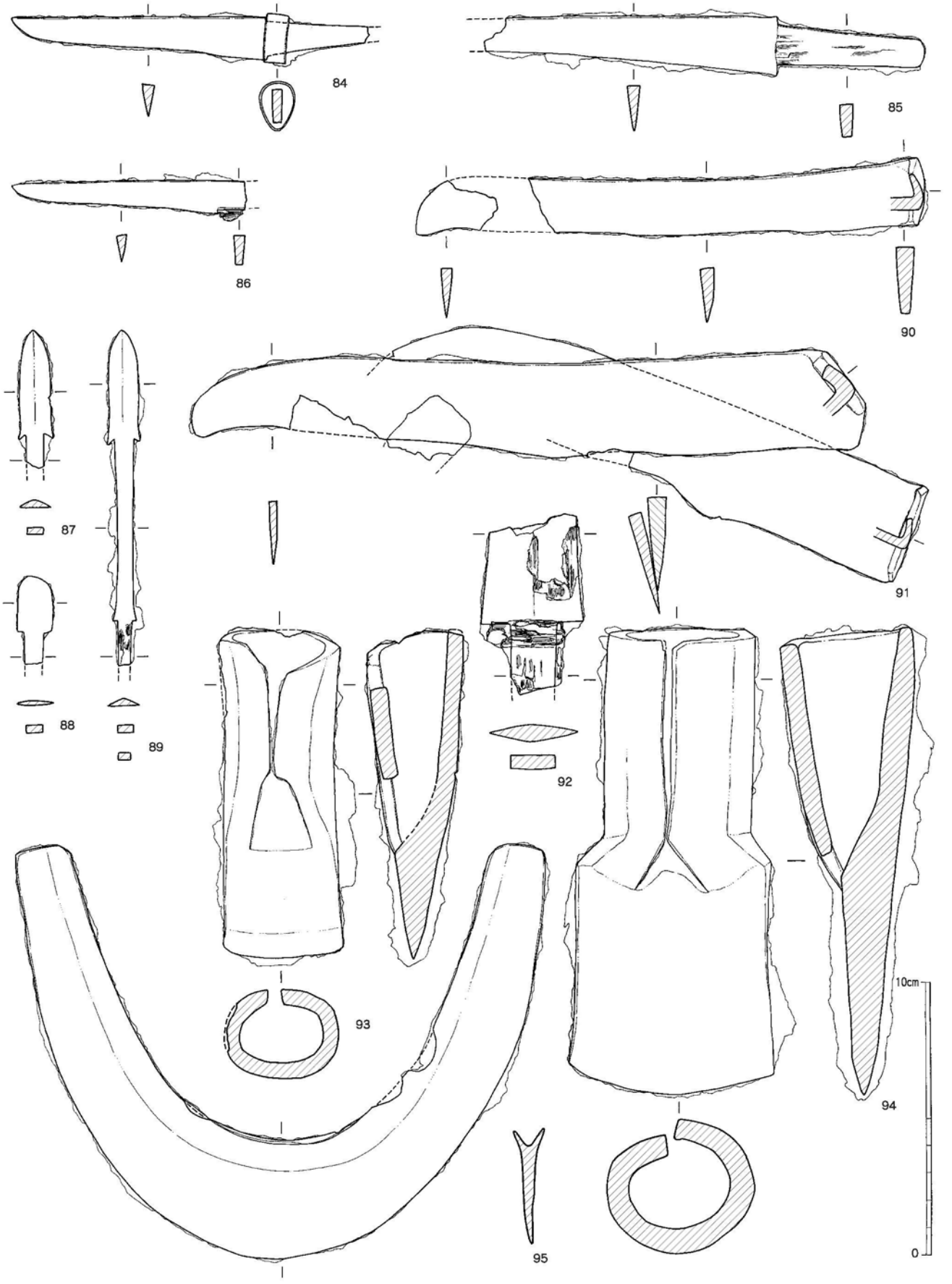
68～74は管玉で、直径0.3～1.0cm、高さ0.65～3.25cmを測る。68のみ小型である。72のみ両側穿孔で、他は片側穿孔である。色調は、69が薄い青緑色、72が薄い黄緑色、他は緑青を呈する。

耳　環（第13図－75）

75は長径2.2cm、短径2.0cm、断面径0.4cmを測る耳環の銅芯である。表面が剥落している。



第13図　E－2号墳出土須恵器・装身具実測図（縮尺 1/1、1/4、1/6）



第14図　E－2号墳出土鉄器実測図（縮尺 1/2）

4　E－3号墳

（1） 古墳の位置と現況（第4、5図）

E－3号墳は、2号墳の下層から検出された。当初古墳を想定していなかったが、2号墳Bトレンチで粘土槨が、またCトレンチで周溝の一部が検出され、下層に前期古墳の存在が予想された。2号墳の築造で墳丘は大きく破壊されており、また近代の果樹園造園等で遺存状況は良好でなかった。

（2） 墳　丘（第7、10図、図版5－1～4）

2号墳の築造によって、墳丘が大きく破壊されている。盛土は南西側でごく一部遺存していた。

地山整形（第7図左下、10図、図版5－4）

3号墳の築造に伴う地山整形は、周溝の掘削と墳丘基底面の整地等からなると推定される。しかし、墳丘東側は大きく流失しており、周溝や墳裾の状況は不明である。西半に遺存する周溝は、最大幅1.3m、深さ0.5m程度で、断面は不整形な台形を呈し、外側は急激に立ち上がる。周溝底は西側で標高61.6m、北側で標高61.5m、南側で61.55mを測り、西の丘陵側が若干高いと考えられる。周溝は黄・橙褐色砂質土で埋没している。墳丘基底面の整地は、北側の一部を除き大きく削平され不明な部分が多いが、北側の基底面は標高61.7～62.0m付近に位置し、墳丘の中心に向かって緩やかに上がっている。

盛　土（第7図上、10図、図版5－1～3）

北側で盛土の一部（Aトレンチ15層）が遺存する。盛土は暗褐色砂質土で、版築状に硬く締まり粘質はない。これより上層も3号墳墳丘盛土の可能性があるが、竹木の侵食が激しく分層できない。

墳丘平面形は、周溝の状況から直径9.6m程度の円墳であると推定される。

（3） 内部主体（第15図、図版5－5、6）

3号墳の内部主体は割竹形木棺で、墳丘のほぼ中央で検出された。この他、西側の周溝内から埋葬施設と考えられる土師器壺棺が1基検出された。

主体部は墳丘のほぼ中央で検出され、主軸をN－17°－Eに取る。2号墳の調査終了後、その地山整形面を精査し主体部及び周溝の検出作業を行った。主体部は東側の立ち上がりが完全に流失していたが、南北及び西側は遺存していた。検出時、墓壙は暗黄褐色砂質土で埋没していた。

墓壙掘方（第15図右下、図版5－6）

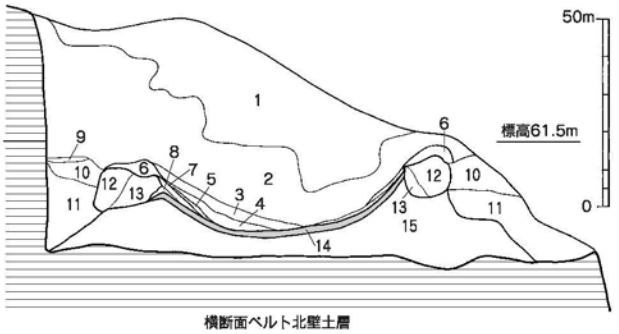
墓壙掘り方は、上場で長さ305cm、残存部最大幅135cmを測り、両端が窄まる長方形平面を呈する。ほぼ垂直に掘削される。深さは良好な部分で約60cm残り、断面形は方形を呈する。下場は、北側に長さ45cm、幅85cm程度の緩やかに傾斜する段を有する。基底面は長さ225cm、幅80～100cmを測る隅丸長方形で、標高61.2mを測り、ほぼ平坦である。

棺台の構築

棺台は、粘質のない暗褐色砂質土を墓壙掘り方の底面に5cm～15cm程度盛って構築される（15層）。横断面は、中央が蒲鉾形に凹んだ台形を呈し、両裾から棺身に向かって立ち上がる。

割竹形木棺の埋置と固定

棺台の上に棺身を置く。棺身断面は勾配が緩く、土層断面観察で幅64cm、深さ15cmを測る（14層）。土圧等で多少の変化があるかもしれないが、棺身の形状を概ね留めると推定される。また、棺身端部は東側がやや上がり、西側が下がっていたと推定される。棺底は標高61.25mを測り、南北でほぼ水平である。これより復元される木棺の規模は幅約64cm、長さ約200cmである。棺身の内面には、赤色顔料が部分的に薄く確認された。棺身固定時に、棺台の四周に粘土を2段階に分け詰める。粘土は暗橙褐色を呈し、白色砂粒を少量含む精製粘土で硬く締まる。第1段階に厚さ約5cm盛り（13層）、上面に赤色顔料を撒いている。顔料撒布後、更に棺身の縁辺を固定する（12層）。棺身固定の粘土は幅・



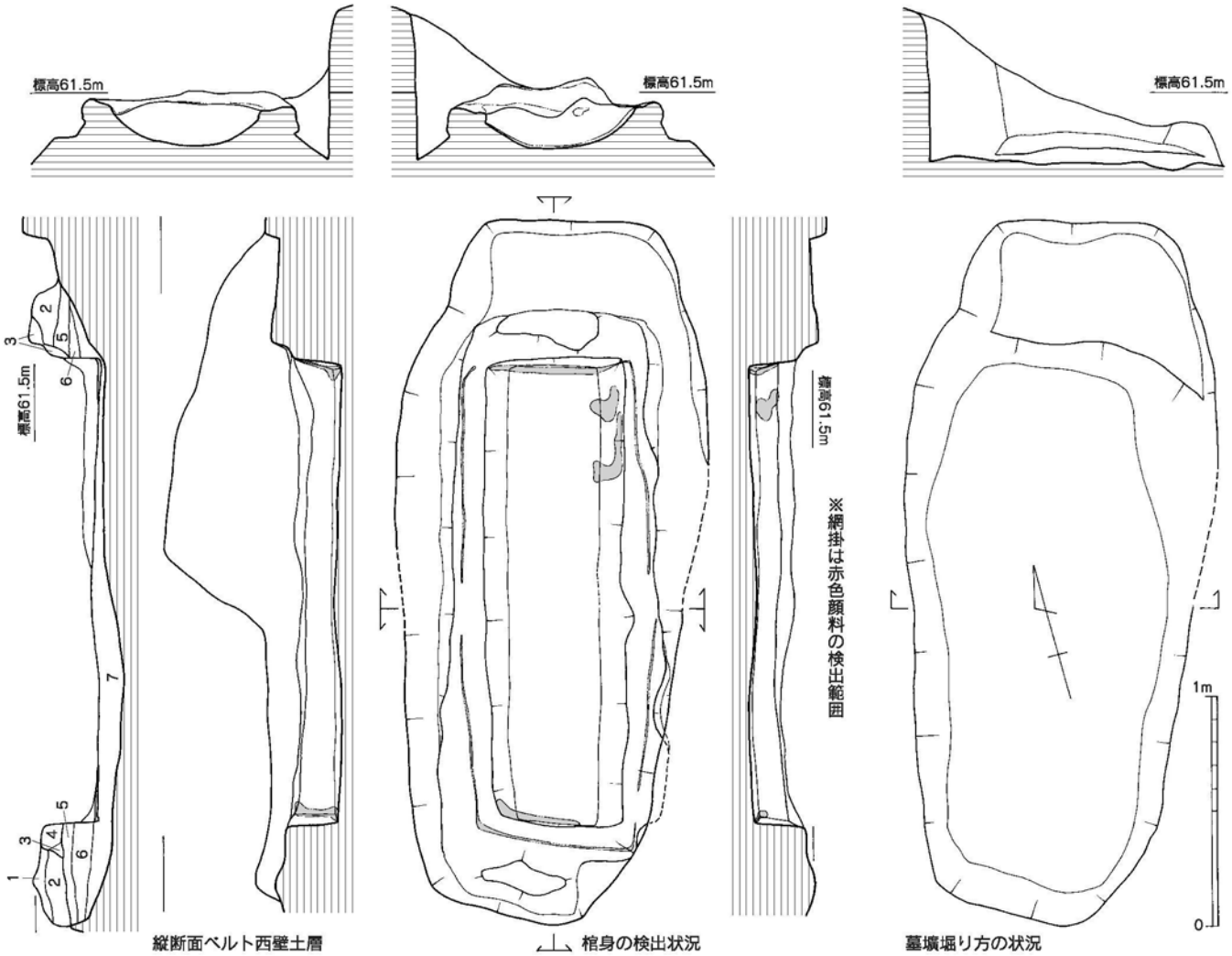
横断面ベルト北壁土層

3号墳主体部縦断面土層注記

1層	灰白色粘質土層	締まりあり、粘質あり。棺蓋固定のための精製灰白色粘土。白色砂粒を少量含む。（横断面土層6層に対応）
2層	暗黄褐色土層	締まりあり、粘質なし。
3層	橙褐色粘土層	固く締まり、粘質あり。棺身固定のための精製橙褐色粘土。白色砂粒を少量含む。（横断面土層12層に対応）
4層	暗橙褐色粘土層	締まりあり、粘質あり。棺身固定のための精製橙褐色粘土。白色砂粒を少量含む。（横断面土層13層に対応）
5層	暗褐色土層	締まりあり、粘質なし。
6層	暗褐色土層	締まりあり、粘質なし。
7層	暗褐色砂質土層	締まりあり、粘質なし。棺台。（横断面土層15層に対応）

3号墳主体部横断面土層注記

1層	暗黄褐色土層	若干締まりあり、粘質なし。棺蓋腐朽後に崩落した墓壙内埋土もしくは墳丘盛土と考えられる。
2層	暗橙褐色土層	締まりあり、粘質なし。棺蓋腐朽後に崩落した墓壙内埋土もしくは墳丘盛土と考えられる。
3層	灰白色砂質土層	若干締まりあり、粘質なし、棺蓋を覆う墓壙内埋土と考えられる。
4層	暗橙褐色砂質土層	若干締まりあり、粘質なし、棺蓋を覆う墓壙内埋土と考えられる。
5層	灰白色砂質土層	締まりなし、粘質なし。
6層	灰白色粘質土層	締まりあり、粘質あり。棺蓋固定のための精製灰白色粘土。白色砂粒を少量含む。
7層	暗橙褐色土層	締まりあり、粘質なし。棺蓋の痕跡と考えられる。
8層	灰白色砂質土層	締まりあり、粘質なし。非常に粒子が細かい。腐朽した棺から内部に入った砂質土と考えられる。
9層	暗黄褐色土層	硬く締まり、粘質なし。棺身固定粘土の四周埋土と考えられる。灰白色粘土が混入する。
10層	暗黄褐色粘土層	硬く締まり、粘質なし。赤色顔料が混入する。棺身に顔料を撒布する前の棺身固定粘土の四周埋土と考えられる。
11層	暗橙褐色土層	硬く締まり、粘質なし。棺身固定粘土の四周埋土と考えられる。
12層	橙褐色粘土層	固く締まり、粘質あり。棺身固定のための精製橙褐色粘土。白色砂粒を少量含む。
13層	暗橙褐色粘土層	固く締まり、粘質あり。棺身固定のための精製橙褐色粘土。白色砂粒を少量含む。
14層	暗赤褐色土層	締まりあり、若干粘質あり。棺身の痕跡。部分的に赤色顔料が面的に検出されるが、多量ではない。
15層	暗褐色砂質土層	締まりあり、粘質なし。棺台。



縦断面ベルト西壁土層　　棺身の検出状況　　墓壙堀り方の状況

第15図　E－3号墳内部主体実測図（縮尺 1/20、1/30）

厚さ共に10～15cm程度である。その後、粘土帯と墓壙掘り方との間を砂質土で埋める（９～11層）。この途中、部分的に赤色顔料が検出される面（10層上面）が観察された。赤色顔料の使用は一連の葬送儀礼に伴うものと考えられるが、この段階以後は検出されていない。粘土帯の天場・標高61.45m付近で一旦棺の四周を整えると考えられる。その後棺蓋（７層）を被せるが、土圧で棺内に落ち込み形状は不明である。その後、棺身の粘土帯と棺蓋との間に、灰白色粘土（６層）で丁寧に目張りしている。

墓壙の被覆

木棺の埋置後、上面を灰白色砂質土と暗橙褐色砂質土の互層（３～５層）で約５cm程度被覆する。1・２層は、棺の埋置後に埋めた墓壙内の覆土と考えられるが、棺蓋崩壊後に内部に崩落している。

木棺内は、後世の撹乱を受けていないと考えられるが、副葬品は確認されなかった。

土器棺墓（第16図左上、図版６－４、６～８）

西側の周溝内で検出された。完形品の土師器壺に土師器甕の胴部片で蓋をしている。周溝覆土の掘削時に検出した。掘り方を検出できていないが、周溝がある程度埋没した段階での埋葬と推定される。壺底部の標高61.45m、主軸はN－27°－E、埋置角度は26.5°を測り、主体部と平行な関係であるといえようか。底部には多量の赤色顔料が埋納されていた。顔料は底部を中心に斜めに堆積しており、埋置以前に内部に顔料を入れていたと推定される。骨片等は検出されなかった。

（４）出土遺物（第16図、図版６－４～８）

遺物出土状況（第16図左、図版６－４～８）

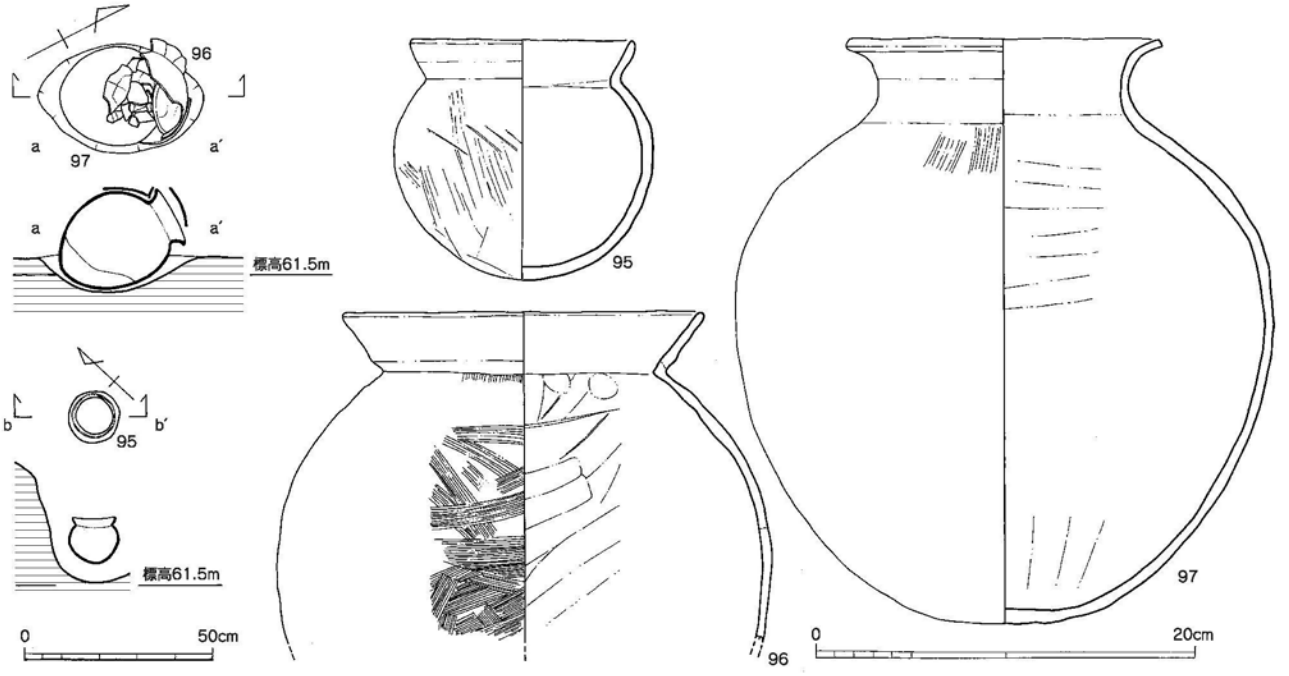
周溝内埋葬の壺、甕片の他、周溝の北西側で精製小型丸底壺が１点出土した。小型丸底壺は標高61.55m付近で出土し、正位に置かれていた。掘り方は検出できなかった。

遺　物（第16図）

土師器（第16図－95～97）

小型丸底壺（第16図－95）

95は口径11.6cm、器高12.8cm、頸部径10.3cm、胴部最大径13.8cmを測る完形品である。口縁部は短く直線的に外反する。胴部は球形に近く、最大径は器高のほぼ中央にある。胴部内器面は上半に斜め方



第16図　E－3号墳出土土師器実測図（縮尺 1/4）

向の篦削り、外器面は最大径以下に篦削りの後、粗い刷毛目を施す。肩部から口縁部にかけて横ナデを施す。内器面に篦削りを施す。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。焼成良好で橙色を呈す。

甕（第16図－96）

96は布留甕を模倣した甕の口縁部から胴部片である。口径19.2cm、胴部最大径26.2cm、頸部径15.0cmに復元される。口縁部は短く直線的に外反する。内器面は肩部以下に斜め方向の粗い篦削りを施すが、器壁が厚い。頸部付近は篦削りされず指頭圧痕が残り器壁が更に厚い。口縁部は横ナデ、胴部外器面には不整方向の刷毛目の後、横方向に断続的な刷毛目を施す。胎土はやや粗く白色砂粒を含む。焼成良好で色調は明橙褐色を呈す。内器面の下壺に接していた部分に赤色顔料が付着する。

壺（第16図－97）

97は口径16.8cm、器高30.9cm、胴部最大径28.6cm、頸部径13.3cmを測る完形品である。口縁部は下半が立ち上がった後、上方が外反する。口縁端部は磨滅が激しいため観察が非常に困難だが、二重口縁を打ち欠いた可能性も考えられる。胴部は、最大径が中央よりやや上位に求められ、底部が丸底を呈する卵形を呈する。胴部内器面には、横及び斜め方向の篦削りが施され、器壁を薄く仕上げている。口縁部には横ナデが施される他、外器面は磨滅が激しく調整を観察できない。胎土はやや粗く、白色砂粒を含む。焼成は甘く、色調は浅い橙褐色を呈する。内器面に赤色顔料が付着する。

5　小　結

元岡古墳群E群は、前方後円墳1基を含む前期古墳2基と後期古墳1基から構成される。古墳群の遺存状況は良好でなく、規模や構造の上で不明確な点が多い。本項では1号墳の主体部で出土した方格T字鏡や古墳の築造時期について述べ、小結に代えたい。

（1）1号墳出土の方格T字鏡について

1号墳出土の青銅鏡は、方格規矩鏡のうち、L及びV字文を欠いたいわゆる方格T字鏡である。日本出土の方格T字鏡を集成・分類した松浦宥一郎氏によれば、本墳出土品はSAa1式に属するものである。本鏡の有する特徴は、以下の６点にまとめられる。

1　面径が９.２cmを測る小型鏡である。
2　縁は平縁である。
3　外区文様帯が縁から素文帯、波長の長い複波文帯、外行鋸歯文帯とで構成される。複波文帯の数は波頂が23個で、外行鋸歯文の数は40個に復元される。
4　内区文様は外帯に櫛歯文帯を巡らせ、方格外側のT字形4個と乳8個で構成される。
5　方格は二重の突線で、内は小円座乳を12個配する。鈕の外側も一重の突線で囲む。
6　鈕孔は方格の対角線上に位置する。

これに最も近似した方格T字鏡は、福岡県前原市所在の立石1号墳から出土した鏡である。同鏡は面径が9.1cm前後であるが、複数波文帯の波頂数が22個、外行鋸歯文数が26個を数え、また鈕孔が方格の辺に平行であるなど、異なる点が多い。現今のところ、本調査出土鏡の同范鏡及び同形鏡は確認されない。この型式に属する鏡は、国内の14例中8例が、筑前地方と肥後地方の一部に分布(1)しており、本鏡もこのうちの１点である。

文様が不鮮明であり、方格外側のT字形と乳間を充填する鳥文の表現が見られないこと、また鋳出

しが不鮮明であるなど、技術的な稚拙さが窺える。また松浦氏は、鈕孔が方格の対角線上に位置するものについて、「日本国内で方格規矩鏡類の?製化、簡略小型化の過程で生まれたものであろう」とされている。本鏡は更に、鈕孔が方格の対角線上からややずれて置かれるなど、基本から外れた点があり、表出の不鮮明さ、図像の無意義化など、?製鏡である可能性が高いと考えられる。

註

(1) 筑前・肥後地方出土のSAa１式方格T字鏡は、福岡県遠賀郡遠賀町城ノ越出土品、福岡市南区老司古墳3号石室出土品、同市西区元岡E－1号墳出土品、前原市荻浦立石1号墳木棺出土品、同市東真方1号墳出土品、宗像郡大島村沖ノ島16号遺跡出土品、熊本県菊池郡泗水町豊水久米若宮古墳出土品、熊本市健軍町陣ノ内箱形石棺出土品である。この内、筑前地方出土品は概ね4世紀後半～5世紀代の所産と考えられている。

（2）古墳群の築造時期について

元岡古墳群E群は、前方後円墳１基、円墳２基の以下に示す3基の古墳から構成される。

１号墳　全長35m、後円部径22m、前方部長15mに復元され、前方部・後円部共に2段築成と推定される前方後円墳。内部主体は木棺直葬の粘土槨と推定される。小型方格T字鏡を1面副葬。

２号墳　直径11mに復元される円墳。１号墳から南東側に延びる尾根上に立地する。内部主体は横穴式石室である。下層の３号墳を取り込んで構築される。鉄製農耕具等を副葬。

３号墳　直径9.6m程度に復元される円墳。2号墳の下層から検出された。内部主体は割竹形木棺直葬の粘土槨。内部主体からの副葬品は出土しなかった。

3号墳は出土遺物の年代観から古墳時代初頭の3世紀後半～4世紀前半の間に築造されたと推定される。1号墳からは土器の出土しておらず、築造年代を明確にできない。松浦氏によれば、方格T字鏡は概ね4世紀後半～5世紀代の所産と推定されている。しかし先述したように、これと近似した鏡が出土した前原市立石1号墳は、出土した土器の年代観から4世紀前半の築造と推定されており、氏の持たれる鏡の年代観を遡るものである。元岡E－1号墳は、その立地から3号墳より前もしくは同時期に築造された可能性が考えられる。いずれにせよ推測の域を超えないので、現今のところその築造年代を決めることは避けたい。

氏はまた、これら鏡が出土する古墳の被葬者について、「被葬者が入手しうる鏡に一定の限度があり、被葬者のクラスに応じた鏡の保有ということを示唆している」と類推されている。元岡古墳群E群が立地する志摩半島南部には、11基の前方後円墳と1基の前方後方墳がある。これらは規模の上で50mを超えるものと20～30m程度のものに二分される。この内、1～4期の古墳は御道具山古墳（65m）、泊大塚古墳（75m）、元岡池ノ浦古墳（61m）、開1号墳（90m）が前者に、後者には権現塚古墳（36m）、稲葉1号墳（後円部径24～26m）、稲葉2号墳（推定20m）が挙げられる。方格T字鏡を副葬したE－1号墳は、規模の上で下位有力者の墳墓であったと考えられる。

参考文献

松浦宥一郎　「日本出土の方格T字鏡」『東京国立博物館紀要第29号』　東京国立博物館　1994
岡部裕俊編　「荻浦－古墳編－」前原市文化財調査報告書第58集　前原市教育委員会　1995
米倉秀紀編　「羽根戸南古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集　福岡市教育委員会　2001
近藤義郎編　「前方後円墳集成」　1992

第17次調査の記録

－ 元岡古墳群B群 －

1　調査の概要

第17次調査地点は、西区大字元岡字池ノ浦に所在する元岡古墳群B群である。調査期間は、平成11年９月10日から同年12月８日までである。本古墳群は、全長61mを測る前方後円墳である元岡池ノ浦古墳から北東側に延びる舌状丘陵上に立地し、２基の円墳から構成される。調査前の現況は、山林であった。２基はほぼ南北方向に並び、付近の標高は約38～42mを測る。踏査の段階で、それぞれの古墳で内部主体の浅い陥没坑があり、尾根筋上には周溝を反映すると考えられる浅い凹みが確認された。古墳群は石材の抜き取りや、近代の果樹園の造成などによって大きく破壊されている。調査区の東西はやや急傾斜となり、とりわけ東側は削平が著しく遺存状況が良好でない。また、調査地点から池ノ浦古墳にかけての尾根上には、数本の試掘トレンチを設定・掘削して古墳の有無を確認したが、新たな古墳は発見されなかった。

本調査地点から谷を隔てて北側の丘陵上には、円墳32基から構成される桑原石ヶ元古墳群が立地する。また、北西側の谷部には、第７次調査地点が位置している。第７次調査区は古墳時代後期、及び奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居址、掘立柱建物跡、製鉄遺構などを検出しており、「壬申年韓鐵」、「里長」、「嶋里」などと記された木簡を始め、墨書土器や中空円面硯・権・瓦などが出土しており、一般集落とは異なる官衙的な様相を帯びている。

調査の結果、本古墳群は６世紀代に築造された円墳群であることが判明した。内部主体は竪穴系横口式石室である。このほか古墳群の縁辺で、焼土坑が２基検出された。

第17図　第17次調査地点周辺の地形図（縮尺 1/2,000）

2　B－１号墳

（1）　古墳の位置と現況（第17、18図、図版10）

B－１号墳は、標高38～40m程度の丘陵上に立地し、調査前の現況は山林であった。内部主体付近と、これより５m程度南側の周溝が巡る辺りは、浅く凹んでいた。東側は果樹園の造成によって大きく削平されていた。南の丘陵側約10mの地点には２号墳が立地する。

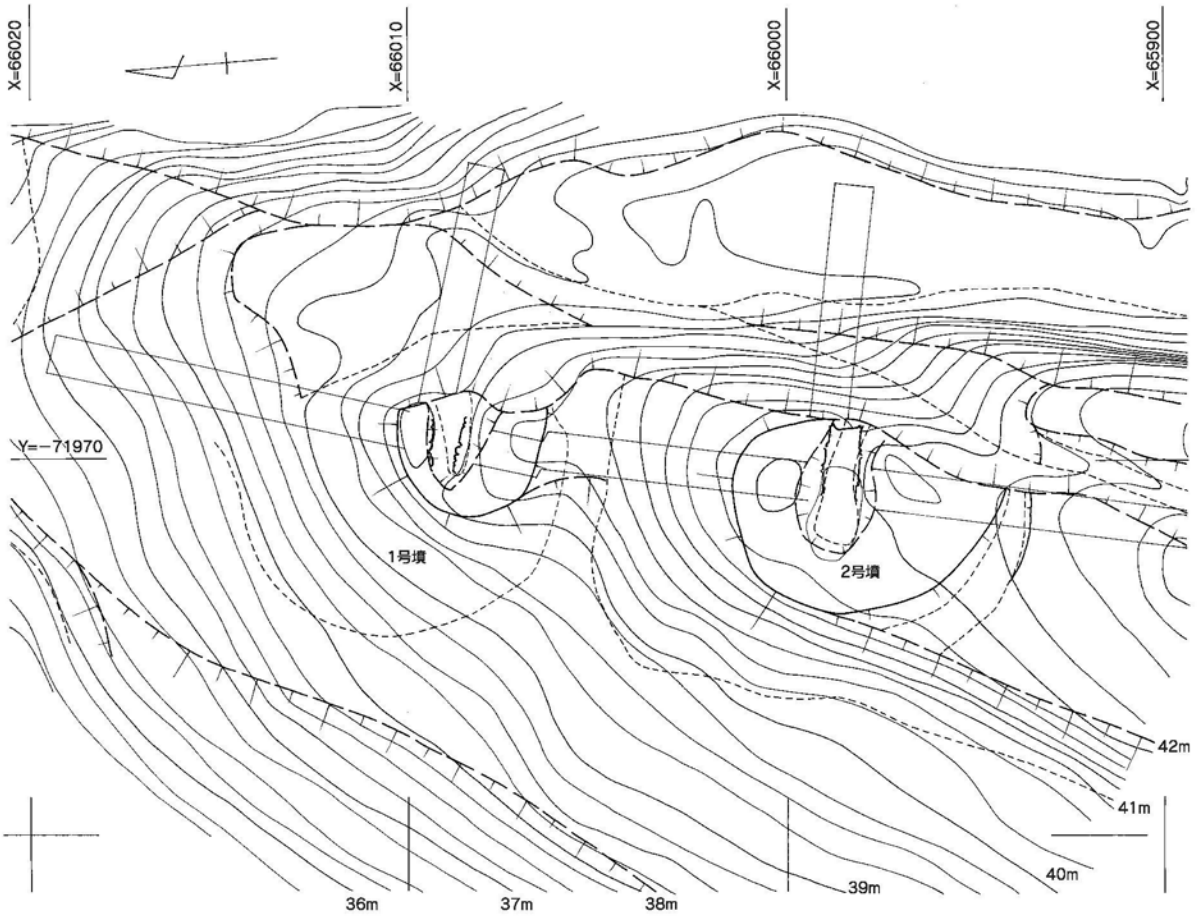
調査は先ず、主体部を掘り下げて石室を確認し、その主軸に沿って３本のトレンチを設定して、墳丘の規模と構造を確認した。その後、墳丘遺存状況、地山整形面の状況、石室掘り方及びその基底面まで記録した後に破壊して調査を終了した。

（2）　墳　丘（第19、20図、図版11）

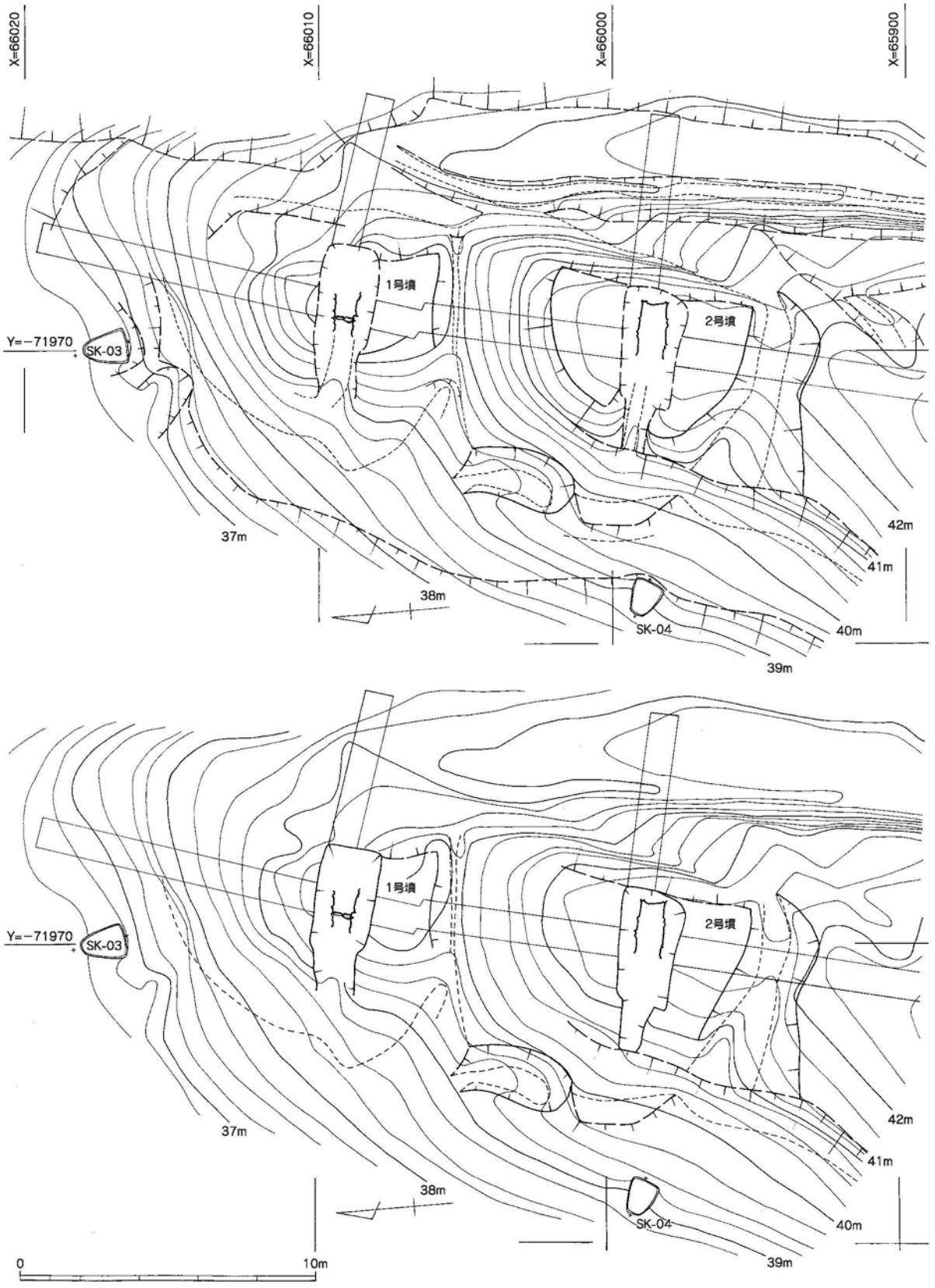
地山整形（第19図下、図版11－５）

１号墳築造に伴う地山整形は、南側（丘陵側）の馬蹄形溝の掘削と、東西及び北側の墳裾の削り出し、及び墳丘基底面の整地からなるものと考えられる。墳丘の東側は大きく削平されており、この部分における墳丘基底面の整地や、東端部分の墳裾の削り出しの状況は全く不明である。南側に掘削されたと推定される馬蹄形溝は、２号墳築造時の地山整形（２号墳北側の周溝掘削）によって削平されており、遺存していない。

西側から北側にかけての墳裾は、Ⅳ区からⅠ区・Ⅱ区の尾根地形に沿って下っており、南側の最も高い所で標高が約39.5m、北側の最も低い所で標高が約37.75mであり、その比高差1.75mを測る。墳



第18図　元岡古墳群Ｂ群現況測量図（縮尺 1/200）



第19図　B－1・2号墳墳丘遺存状況図及び地山整形測量図（縮尺 1/200）

裾は石室の中心から約6.0m付近を巡っている。墳丘築造以前の旧表土層（Aトレンチ14層、Cトレンチ16層）は、南側で標高40.2m付近、北側で40.1～40.6m付近に遺存しており、このことから墳丘基底面も丘陵地形に沿って緩やかに傾斜していたと考えられる。

盛　土（第19図上、図版11－３、４）

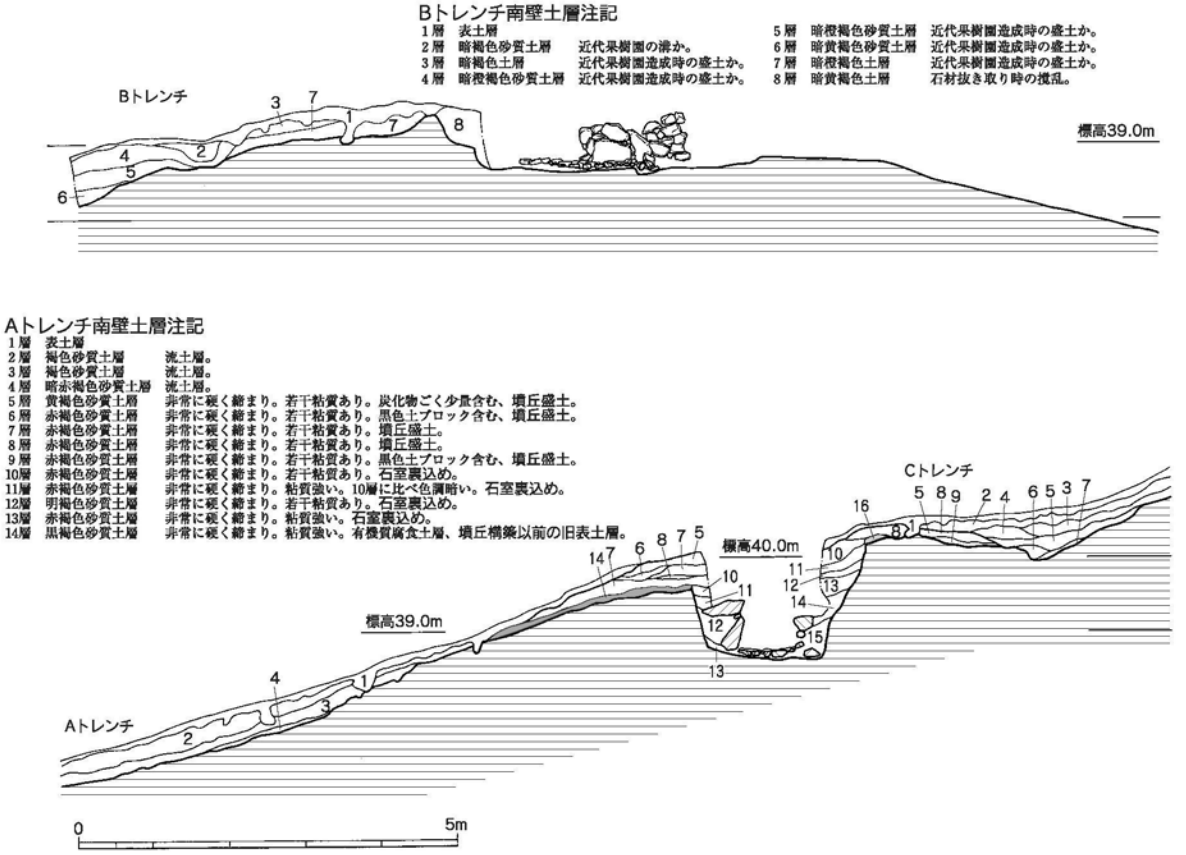
盛土の遺存状況は良好でない。トレンチの土層観察から、地山由来の黄・赤褐色砂質土を用い、厚さ5～20cmの単位で版築状に硬く締める。遺存状況の良好な部分で、地山整形面から高さ約40cmを残す。墳丘平面形は、石室の中心と墳裾間の距離から反転して直径約12mの円墳に復元される。

（３）内部主体（第21図、図版17）

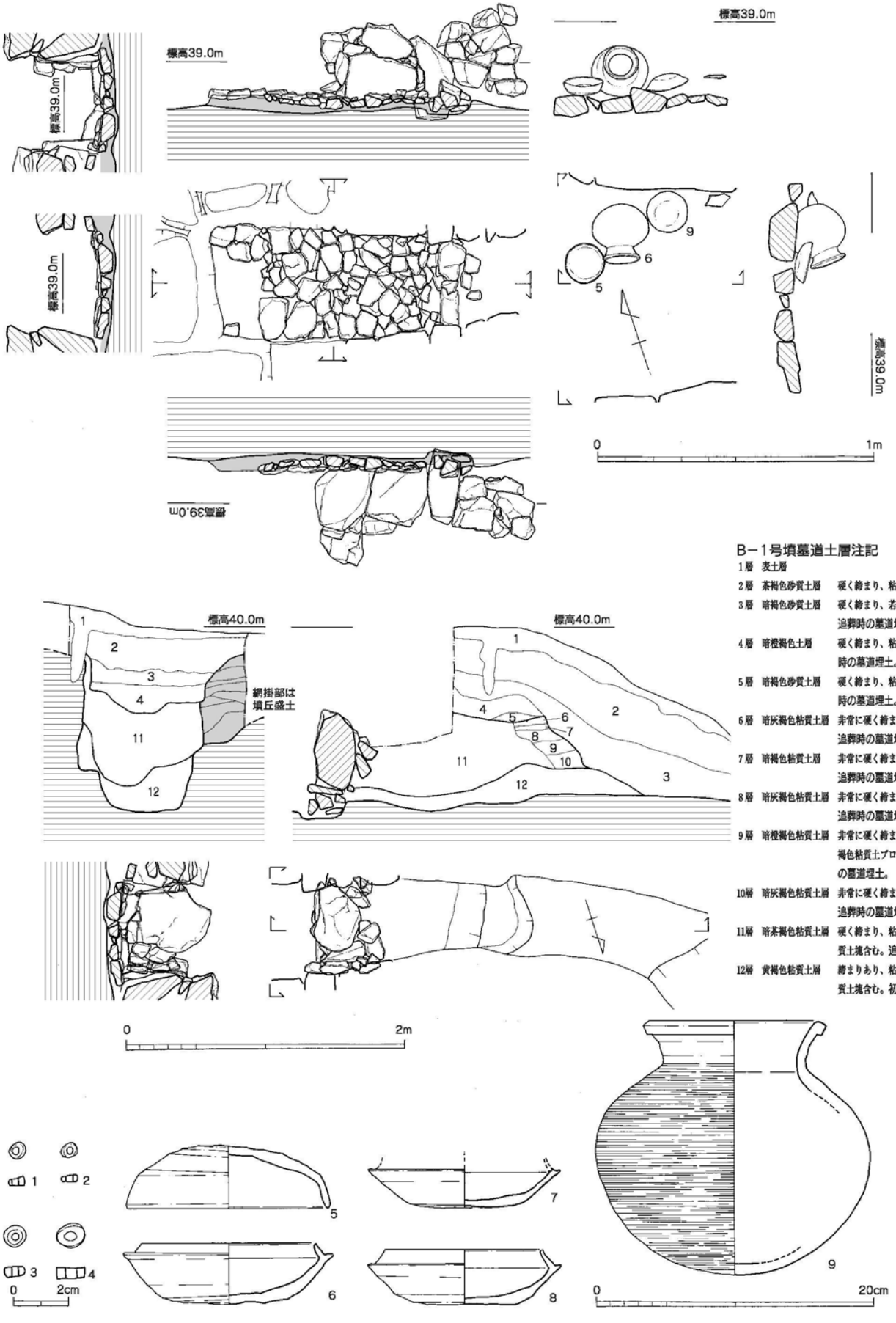
１号墳の内部主体は、玄室主軸をN－73°－Wにとり、西側に開口する横穴式（竪穴系横口式）石室である。奥壁側を中心に大きく破壊されている。使用される石材は全て花崗岩である。

玄　室

前幅69cmを測り、石材抜き取り痕から奥幅78cm、右側壁長155cm、左側壁長149cmに復元される。玄室比は2.08で、狭長な長方形平面を呈す。前幅が奥幅より狭いと推定されるが、奥壁付近の石材が遺存しないため羽子板形の平面と断定することはできない。腰石は右３石、左４石使用したと推定される。石材は長さ40～50cmと小振りで、横位もしくは縦位に立石している。２段目以上は殆ど遺存しな



第20図　B－1号墳墳丘断面図（縮尺 1/100）



B－1号墳墓道土層注記

1層	表土層	
2層	茶褐色砂質土層	硬く締まり、粘質なし、流土層
3層	暗褐色砂質土層	硬く締まり、若干粘質あり、最終追葬時の墓道埋土。
4層	暗橙褐色土層	硬く締まり、粘質なし、最終追葬時の墓道埋土。
5層	暗褐色砂質土層	硬く締まり、粘質なし、最終追葬時の墓道埋土。
6層	暗灰褐色粘質土層	非常に硬く締まり、若干粘質あり、追葬時の墓道埋土。
7層	暗褐色粘質土層	非常に硬く締まり、若干粘質あり、追葬時の墓道埋土。
8層	暗灰褐色粘質土層	非常に硬く締まり、若干粘質あり、追葬時の墓道埋土。
9層	暗橙褐色粘質土層	非常に硬く締まり、粘質あり、橙褐色粘質土ブロック含む。追葬時の墓道埋土。
10層	暗灰褐色粘質土層	非常に硬く締まり、若干粘質あり、追葬時の墓道埋土。
11層	暗茶褐色粘質土層	硬く締まり、粘質なし。橙褐色粘質土塊含む。追葬時の墓道埋土
12層	黄褐色粘質土層	締まりあり、粘質あり、橙褐色粘質土塊含む。初葬時の墓道埋土

第21図　B－1号墳石室・閉塞施設・遺物出土状況・遺物実測図（縮尺 1/40、1/20、1/4、1/1）

いが、石材は小振りになるように看取される。袖部には、幅20cm×高さ60cm程度の不整形な柱状転石を立てており、玄室腰石の天場付近と面が揃う。袖幅は右が７cm、左が5cmと非常に短く、壁面から内側に僅かに突出する程度である。

床面には、10～30cm程度の扁平な礫で敷石を敷設する。奥壁側石材が一部抜き取られるが、元来は全面敷設と考えられる。１面のみ確認した。石室基底面との間には暗黄褐色砂質土が盛られる。

羨　道

袖石に非常に短い羨道状の壁石が付設する。右壁長70cm、左壁長61cm、奥幅57cm、墓道側幅54cmを測る。腰石は袖石を除き左右２石ずつで、小振りな石材が使用される。右壁４段、左壁２段が遺存し、斜め方向の目地が観察される。袖石部分１ヶ所に仕切り石を配する。石材は玄室床面の敷石と大差がなく、２石とその間に小礫を挟む。これより墓道側は直接地山となっている。

石室掘方と墓道（図版11－５）

石室掘り方は、尾根の等高線に対して平行に掘削され、地山整形面の中央より約50cm南の丘陵側に位置する。右奥壁側が山桜の老樹で掘削できなかったが、平面形は隅丸長方形を呈し、掘削面で長さ310cm、幅225cmを測る。掘り込みの角度は急峻で、深さは丘陵側で155cmを測り深い。

墓道は西に延び、長さ1.5～2.5mを測る。床面には、仕切り石から1.4m付近で緩やかな段が付く。

閉塞施設（第21図上、図版12－７、８）

閉塞石は、袖部床面の仕切り石を根石とし、幅50cm×高さ60cm×厚さ25cm程度の板石を右袖側に立て、これと左袖石間を小礫で充填して構築する。またこれに続く墓道主軸縦横の土層断面観察から、１号墳では初葬を含め少なくとも３回の埋葬があったと推定される。初葬に伴う埋土は12層、追葬時の埋土は6～11層、最終の追葬に伴う埋土は３～５層である。

（４）出土遺物（第21図、図版12－５、６）

遺物出土状況（第21図－中右、図版12－５、６）

石室床面から副葬された土師器、須恵器、鉄器、ガラス製玉類等が出土した。いずれも床面直上から出土した。須恵器は短頸壺と蓋坏で、右側壁側に置かれていた。鉄器はいずれも破片である。

遺　物（第21図下）

須恵器（第21図－５～９）

坏　蓋（第21図－５）

５は口径14.5cm、器高4.6cmを測る完形品である。外器面天井部は約２/３に粗い回転篦削りを施す。口縁部には横ナデを施す。胎土は粗く白色砂粒を多く含み、焼成良好で色調は灰色を呈する。

坏　身（第21図－６～８）

６は口径12.6cm、受部径15.5cm、器高4.5cmの完形品。底部１/２未満に粗い回転篦削り。口縁部立ち上がり短い。胎土粗く白色砂粒を含み、色調灰色。７は受部径13.9cm。底部１/２未満に粗い回転篦削り。胎土粗く白色砂粒を含み、色調灰色。８は口径11.3cm、受部径13.9cm、器高4.0cmの完形品。底部約１/２に粗い回転篦削り。口縁部立ち上がり短い。胎土粗く白色砂粒を含み、色調灰黄色。

短頸壺（第21図－9）

９は口径12.0cm、胴部最大径19.8cm、器高18.4cmの完形品。外器面には粗いカキ目、内器面の全面と口縁部に横ナデ。胎土はやや粗く白色砂粒を含む。焼成はやや甘く、色調は淡灰色を呈する。

装身具（第21図－１～４）

ガラス製玉類（第21図－１～４）

１、２は粟玉、３、４は小玉で、２、３は引き伸ばし技法が確認できる。色調は紺青及び浅い青緑色。

3　B－2号墳

（1） 古墳の位置と現況（第17、18図、図版10）

B－2号墳は1号墳から南に約10m離れた尾根上に立地し、標高40～42m程度を測る。調査前の現況は山林であった。内部主体と南の周溝付近は浅く凹んでいた。東側は大きく削平されていた。

調査は先ず、主体部の陥没坑を掘り下げ石室を確認し、その主軸に沿って3本のトレンチを設定して、墳丘の規模と構造を確認した。その後地山整形面、石室基底面まで記録して破壊した。

（2） 墳　丘（第19、22図、図版13－1～6）

地山整形（第19図下、図版13－5、6）

2号墳築造に伴う地山整形は、南北の尾根上の周溝掘削と東西の墳裾削り出し、及び墳丘基底面の整地からなると推定される。削平により東端の基底面、墳裾及び西側の墳裾の状況が不明である。北側周溝は、1号墳墳丘及び馬蹄形溝を切って掘削される。長さ約5mが遺存し、周溝底の標高約40.0mを測る。南側周溝は長さ約7mが遺存し、周溝底の標高は約41.8mを測る。周溝幅は墳丘上面が削平され不明である。北側の墳丘基底面では築造以前の旧表土層が41.3～41.75mにかけて遺存し、このことから基底面は元来の丘陵地形に沿って緩やかに傾斜していたと考えられる。また、北側の標高41.25m付近で焼土面を僅かに検出した。築造時の祭祀、又は下草を払う山焼き等の痕跡か。

盛　土（第19図上、図版13－2、4）

盛土は、内部主体の破壊や墳丘の削平によって遺存状況が良好でない。このため構築状況を明確にできない。A・Cトレンチの土層観察から、地山由来の黄・赤褐色砂質土が使用され、厚さ約10cmの単位で版築状に硬く締まっている。遺存状況の良好な部分で、地山整形面からの高さ30cm弱を残す程度である。墳丘平面形は、南北の周溝底間の距離から、直径約11mの円墳と考えられる。

（3）内部主体（第23図上、図版14）

2号墳の内部主体は、玄室主軸をN－78°－Wにとり、西側に開口する横穴式（竪穴系横口式）石室である。腰石と床面を残すのみである。使用される石材は、全て花崗岩である。

玄　室（図版14－1～5）

前・奥幅共に80cm、左右側壁長共に200cmに復元される。玄室比2.5で、狭長な長方形平面を呈する。左右共に側壁腰石は3石使用される。石材は奥壁側が最も大きく高さ60～70cmで、奥壁腰石及び他の

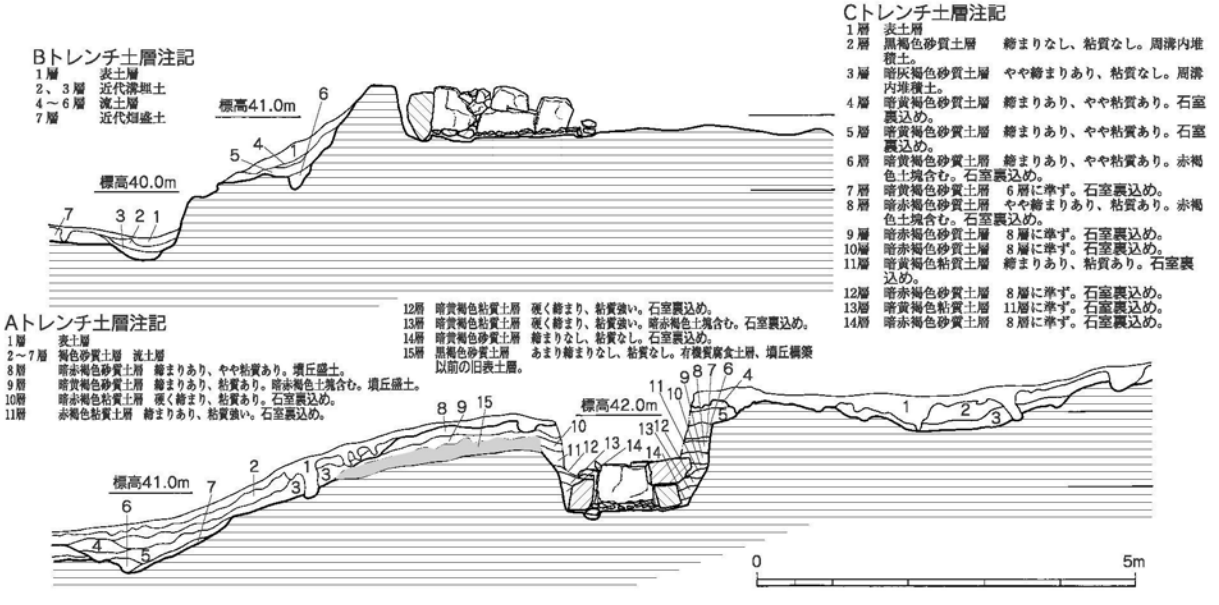


図22　B－2号墳墳丘断面図（縮尺 1/100）

壁石の２段目と目地が揃う。左側壁は階梯状に腰石天場が下がる。２段目以上は遺存しない。袖部は遺存しないが、右側袖部には袖石と考えられる高さ80㎝程度の転石が倒れていた。

床面は５～35㎝程度の扁平な礫を用いた敷石が全面に敷設され、２面確認した。検出順に第１、２面で、両面の比高差は僅か５㎝に満たない。第１面の石材は５～10㎝と非常に小振りで、奥壁側には殆ど敷かれていない。第２面の標高は40.85～40.9ｍを測り、奥壁側が僅かに高い。奥壁側の石材が大振りで、前面とに明確な差が認められる。石室基底面との間には暗黄褐色砂質土が盛られる。

袖部床面に約30㎝程度の扁平な礫を積んだ仕切り石が検出された。２段遺存し、これより墓道側は直接地山になる。羨道部石材は遺存しないが、地山が段状に削り出され、壁石が存した可能性がある。

石室掘方と墓道（図版13－６、14－７）

石室掘り方は、尾根筋の等高線に対してほぼ平行に掘削され、地山整形部の中央より50㎝程度南の丘陵側に位置する。平面形は、袖部から墓道側が次第に窄まる隅丸長方形を呈し、掘削面で長さは390㎝、幅は230㎝を測る。掘り込みの角度は急峻で、深さは丘陵側で110㎝を測り深い。

墓道は西側に延び、長さ1.5ｍを測る。床面はほぼ平坦で、端部より先は検出されなかった。

石室基底面の構造（第23図右上、図版14－６）

石室基底面の構造は、敷石と埋土を除去して観察した。玄室床面下には、腰石周壁に沿ってその安定を図るための掘り込みが巡る。また、側壁下の各石材間と右袖部には根固め石が据えられていた。

閉塞施設（第23図中、図版14－８）

閉塞石は、石材が抜き取られ遺存しておらず構造が不明である。閉塞部に連接する墓道主軸縦横の土層断面観察から、２号墳では初葬を含めて少なくとも５回の埋葬があったと推定される。

（４）出土遺物（第23図下）

遺物出土状況（第23図左下）

石室の副葬遺物は皆無であり、盗掘等によって失われたものと推定される。また、墓道の最終追葬に伴う埋土内から、土師器坏１点、及び須恵器蓋坏１対が正位で出土し、墓道に供献された遺物と考えられる。この他、周溝埋土から朝鮮陶器片１点、盛土内から磨製石斧片１点が出土した。

遺　物（第23図右下）

須恵器（第23図－11、12）

坏　蓋（第23図－11）

11は口径13.9㎝、器高4.6㎝の完形品。外器面天井部の回転篦削りは２／３強に及び、比較的丁寧である。口縁部には横ナデ、端部内側には内傾する段を有す。胎土に白色砂粒を含み色調は黄灰色。

坏　身（第23図－12）

12は口径12.0㎝、受部径14.3㎝、器高4.5㎝の完形品。外底部の回転篦削りは１／２強に及ぶ。立ち上がりは比較的短く内傾し、端部は丸く仕上げられる。胎土に白色砂粒を含み色調は黄灰色。

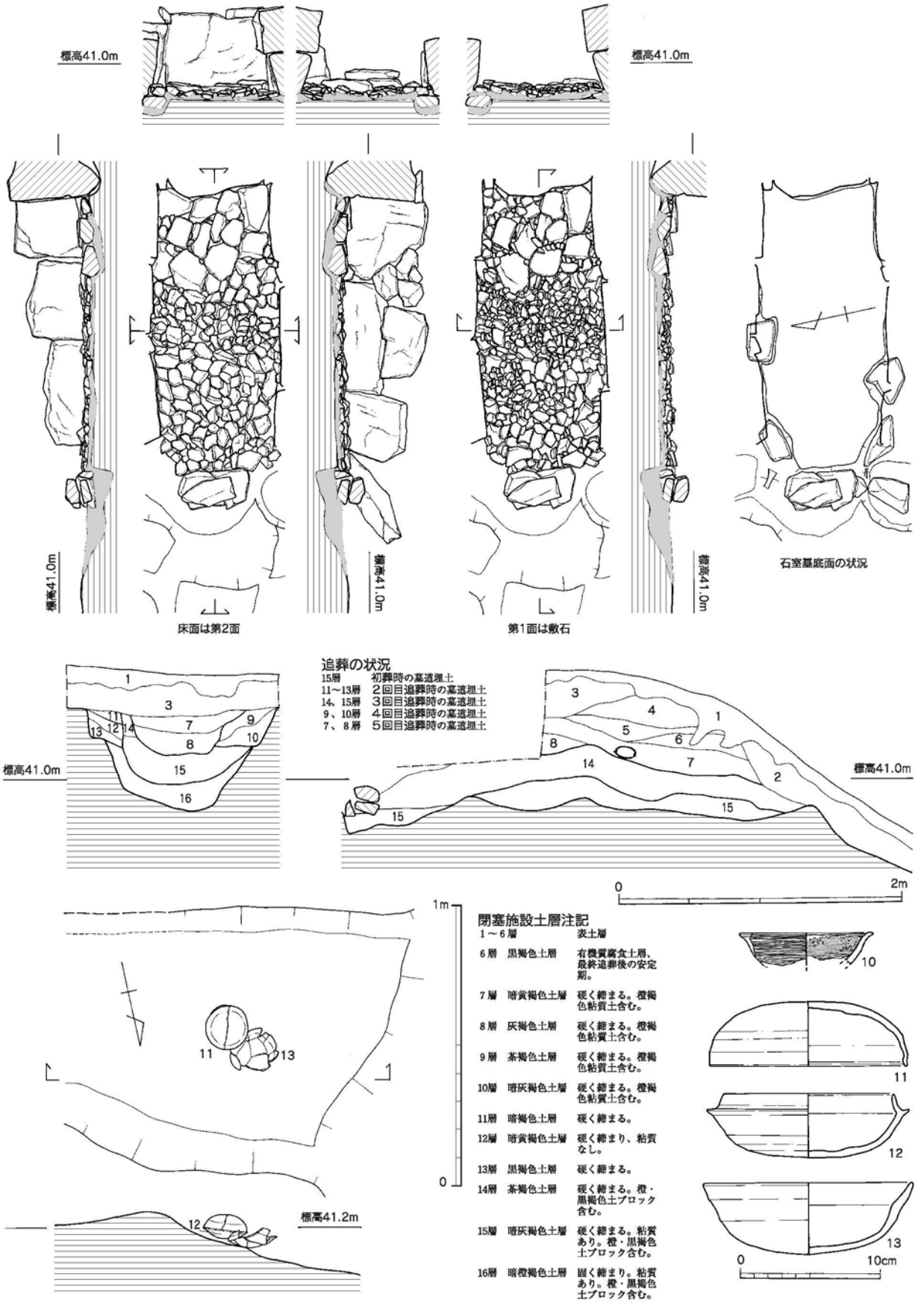
土師器（第23図－13）

坩（第23図－13）

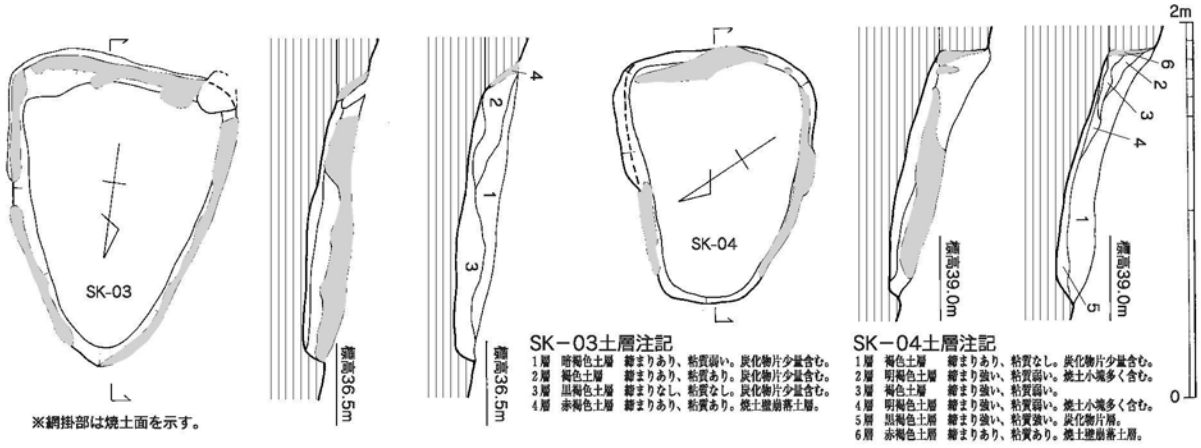
13は鉢形の坩で口径14.6㎝、器高5.1㎝を測る。体部浅く、口縁部は短く外反する。器面磨滅するが、外器面には篦削り、内器面にはナデが確認できる。胎土に白色砂粒・金雲母含み色調は橙。

朝鮮陶器（第23図－10）

10は復元口径9.4㎝の粉青沙器皿片。口縁部外反する。外器面に白泥で化粧後、横方向の線彫りを繰り返し白泥を掻き落とす。内器面に象嵌で口縁端部に二重圏線文、その下に連珠文を配す。胎土は白色細砂を僅かに含み、黄味を帯びた明灰色を呈す。器面の色調は亜麻色で、細かい嵌入が入る。



第23図　B－2号墳石室・閉塞施設・遺物出土状況・遺物実測図（縮尺 1/40、1/20、1/4）



第24図　焼土坑実測図（縮尺 1/40）

4　その他の遺構（第24図、図版14－7、8）

焼土坑2基を検出した。いずれも壁面が焼けて赤変し、覆土に多量の炭化物を含む。SK－03は1号墳の北西側、標高36.5m付近で検出した。長さ160cm、幅120cmの平面二等辺三角形を呈す。SK－04は2号墳の西側、標高40.0m付近で検出した。長さ135cm、最大幅100cmの平面台形を呈す。

5　小　結

今回の調査では、円墳2基を発掘した。墳丘規模や出土遺物に特筆すべき事項が見当たらないが、その石室構造がについて特筆すべき点がみられる。

1号墳の石室床面からは須恵器が出土しており、最終の埋葬に伴う副葬品と考えられる。墓道の土層観察から、本墳では初葬を含めて少なくとも3回の埋葬があったと考えられ、須恵器坏の年代観から本墳の利用は6世紀後半には終了したものと推定される。

一方、2号墳では石室床面に伴う遺物が出土しなかったが、最終の埋葬に伴う墓道の床面から、供献された須恵器蓋坏が1対と土師器坩が1点出土した。6世紀中葉の所産と考えられ、この時期に本墳の利用が終了したと考えられる。築造年代は概ね6世紀の中葉頃と推定される。

2基の古墳は、1号墳→2号墳の順に築造されており、1号墳は少なくとも2号墳の築造年代である6世紀中葉より遡るものであるが、石室の構造が非常に類似しており、概ね2号墳と同様の年代に築造されたと考えられる。両古墳の経営期間は、1号墳が6世紀中葉から後葉、2号墳が6世紀の中葉の限定された期間であると推定される。

6世紀中葉段階にあって狭長な石室平面形を有し、袖石が僅かに内側に張り出し、その掘り方が深いという特徴をもつ横穴式石室は、宗像市朝町所在の浦谷古墳群・朝町妙見古墳群や、同市名残所在の名残長浦古墳群などの例のように、筑前地方北東部の宗像地域で多く見られるものである。

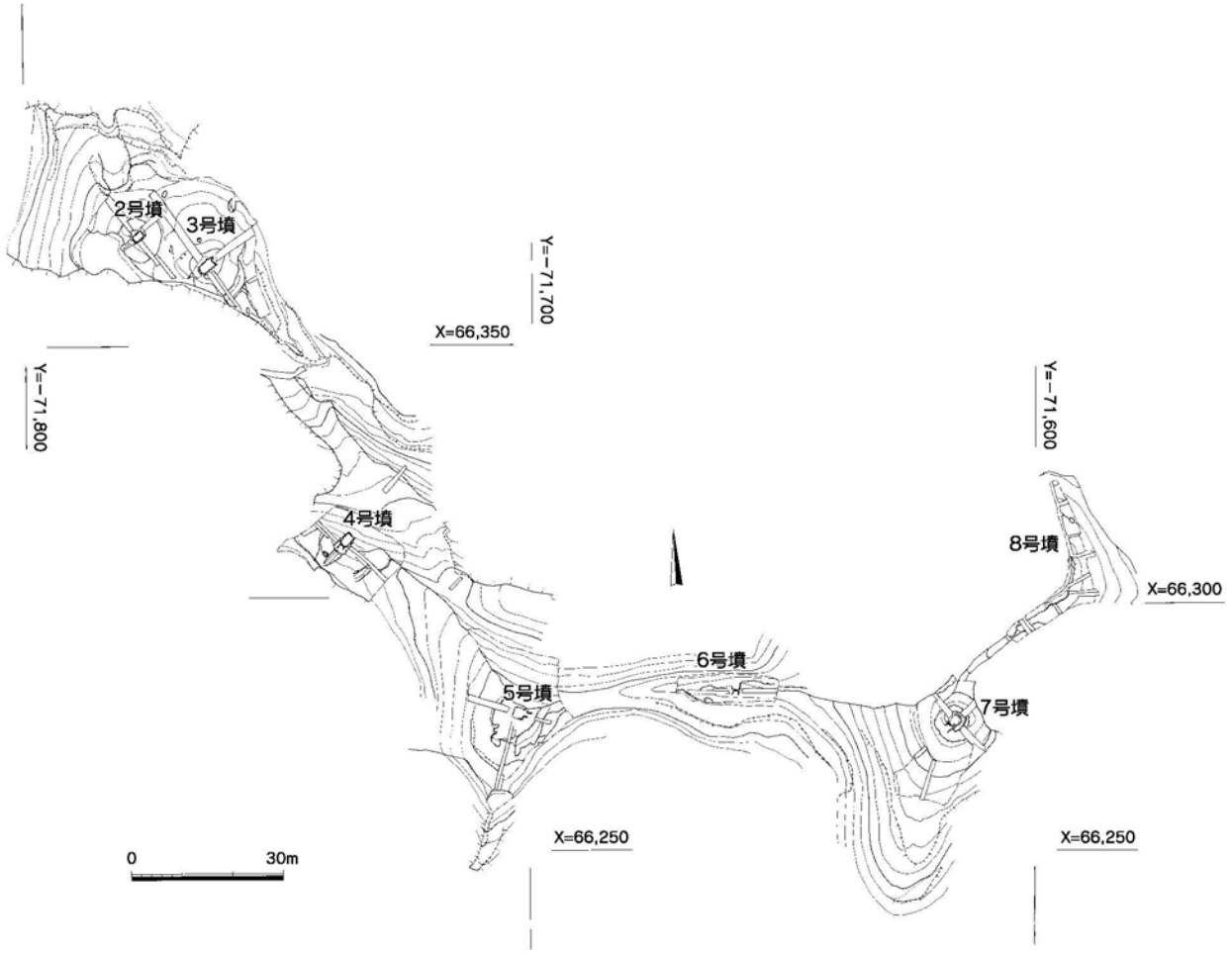
本調査地点より北東へ約700m離れた20次調査地点では、「鞍手」と墨書された8世紀後半代の所産と考えられる須恵器蓋が1点出土している。また、『筑前國嶋郡川邊里大寶二年籍』には、葛野部久漏麻呂の妻、宗形部宿奈賣と卜部忍男の妻、宗形部阿比太賣の2名の宗形部出身者を記載している。このように奈良時代以降の考古資料と文献史料等に、志麻郡と宗像地方との関連が窺える。本調査で検出した石室に見られるような構造的特長が、宗像地方とのどのような関係を示しているのか、また先述した古代以降に確認される両地方の関係に、どのような系譜的連続があるのか究明することが今後の課題であろう。

第25次調査の記録

― 桑原古墳群A群 ―

1　調査の概要

第25次調査では桑原古墳群A群の２号墳から８号墳の計７基の調査をおこなった。８号墳は遺物のみの出土であるが、まとまって遺物が出土した点や立地的に古墳があった可能性が高いことから敢えて８号墳とした。古墳群は水崎山から北西に向かって派生する尾根上に立地する。最も標高の高い70m付近には前方後円墳である元岡石ヶ原古墳が位置する。尾根はこの前方後円墳で西方向と南東方向に分岐し、桑原古墳群A群は西に分岐した尾根上に造営される。古墳の立地する標高は36～72mを測り、現況は竹林と雑木林である。最も標高の低い尾根の先端部、標高38m付近に２号墳、東側に隣接して３号墳が位置する。尾根は南西方向に延び、標高48m付近に４号墳、標高57m付近に５号墳が位置し、この地点で尾根は東側へと曲がる。30m程東側に6号墳（標高58m）そこから急激に斜面は上り、標高68m付近に７号墳が立地する。その後尾根は北東に折れ、標高72m付近に８号墳が位置したと思われる。8号墳から50m程東側にいくと元岡石ヶ原古墳に至る。このように尾根は小さな谷が幾重にも入り込み、複雑な形状を展開する。また、後世の削平のために尾根は非常に痩せている。古墳の遺存状況は悪く、完存している石室はなく、墳丘も大半が流失する。桑原古墳群A群の１号墳は第18次調査で発掘調査を行った。そのため別報告となる。概略であるが、１号墳は２号墳の北西側、尾根の端部に立地する。県道桜井太郎丸線敷設の際、大きく削平され、墳丘規模は不明である。内部主体は横穴式石室で、右側壁のみが遺存し、長さは約230cmを測る。築造時期は７世紀代と考えられる。第25次調査は2000年12月11日に開始し、2002年11月30日に終了した。遺構は他に焼土坑４基を検出した。



第25図　桑原古墳群A群古墳分布図（1/1,500）

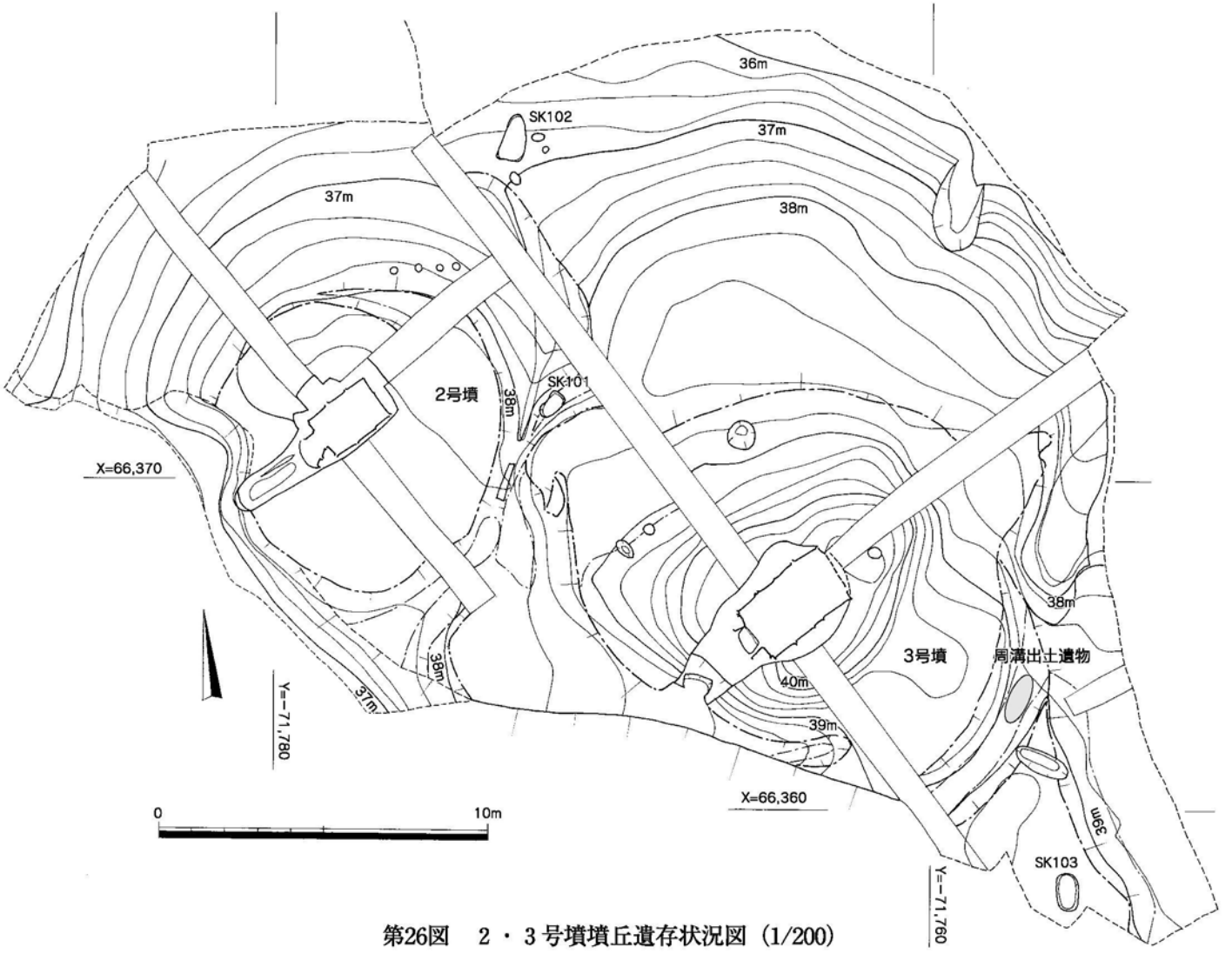
2　A－2号墳

（1）古墳の位置と現況（付図1、図版16）

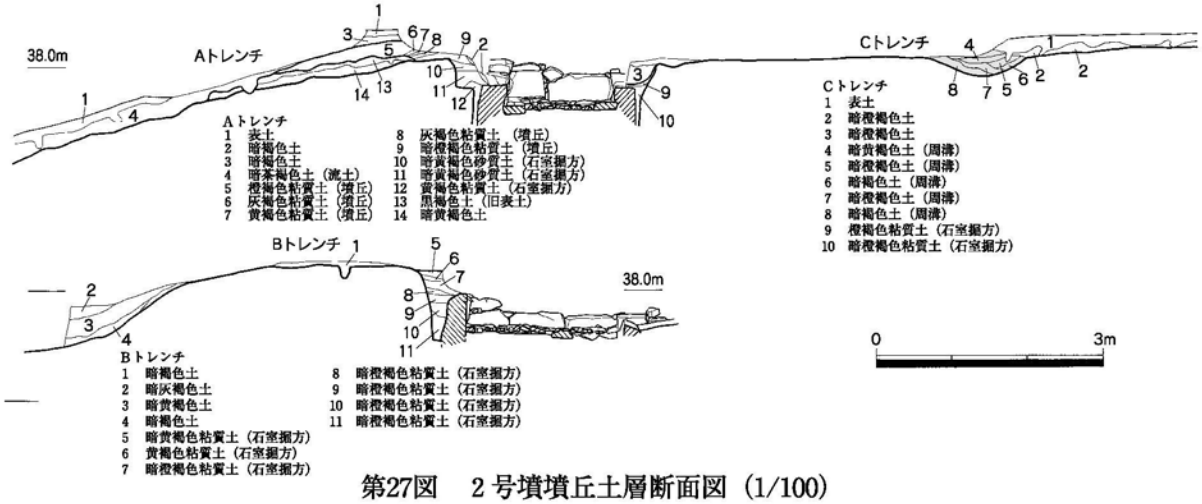
A群の北西側に位置し、最も標高の低い尾根の先端部、標高38m付近に立地する。東側に隣接して3号墳が位置する。古墳の南西側は大きく削平され、崖となる。当初2号墳は、調査地点より約15m北側の陥没坑付近に想定していたが、トレンチ調査の結果、この地点は古墳でないことが判明した。その後、3号墳西側の平坦面に試掘溝を設定し掘削したところ、主体部を確認した。調査前の現況では墳頂平坦面及び周溝などは確認されなかった。石室は天井石を失っており、石室部分が僅かに陥没した状況を呈する。3号墳との間の東側では焼土坑SK101を、北側では焼土坑SK102を検出した。

（2）墳丘（第26・第27図、図版15）

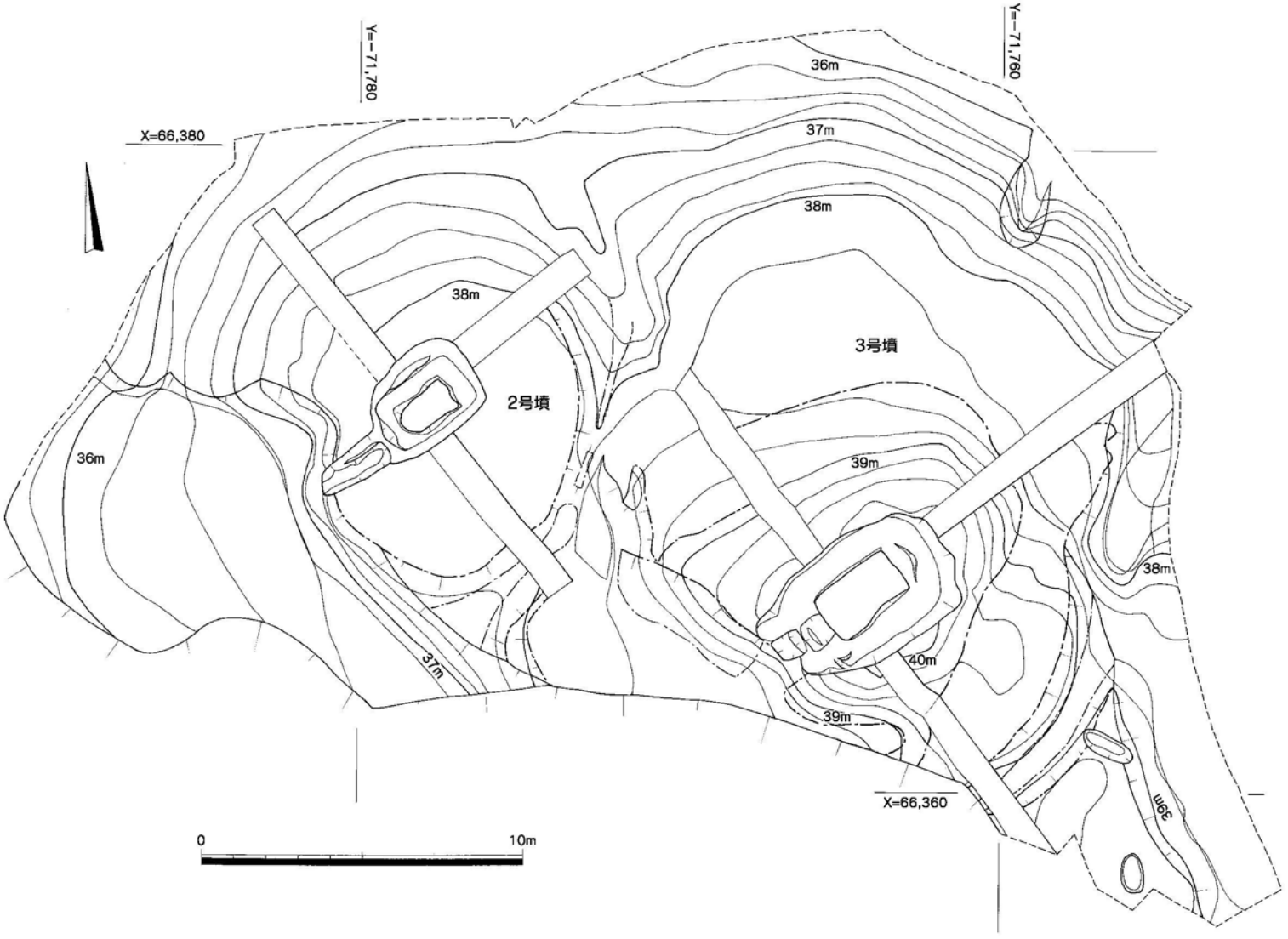
天井石を失っており、墳丘頂部は流失している。2号墳と3号墳との間には周溝を検出した。後世の削平が著しいが、2号墳の周溝であると考えられる。周溝は南東から北東の丘陵側で検出され、北側では馬蹄形溝を掘削せず墳裾を削り出すのみであった。Aトレンチでは明確な裾部を確認できなかったが、石室中心から約5m部分で、地山がわずかに傾斜を変え、4.7m付近まで旧表土が残っていることからも墳端はこの付近に位置していたと考えられる。Bトレンチでは石室中心から約5.8mで地山整形が行われており墳端と考えられる。Cトレンチでは馬蹄形溝の底部を僅かではあるが確認し、



第26図　2・3号墳墳丘遺存状況図（1/200）



第27図　2号墳墳丘土層断面図（1/100）



第28図　2・3号墳地山整形状況図（1/200）

石室の中心から5.7mで墳裾をおさえた。2号墳は直径約11mの円墳であると考えられる。現存の墳頂部は標高38.37m、墳丘裾部の標高は墓道部分で37.75mを測る。

地山整形（第28図、図版15・17）　周溝は東側で長さ約10mを確認できる。幅は南側では200cm、北側で120cmを測る。Cトレンチからは幅約125cm、深さ35cmの周溝を確認した。地山整形では直径約９mを測るやや南東側が張り出す歪な円形の略平坦面を造り出す。この平坦面に石室掘方を掘削するが、やや北西側に寄る。墳丘基底の地山標高は奥壁側が若干高く、標高38.37mを測る。墓道は南西方向にまっすぐに延びる。

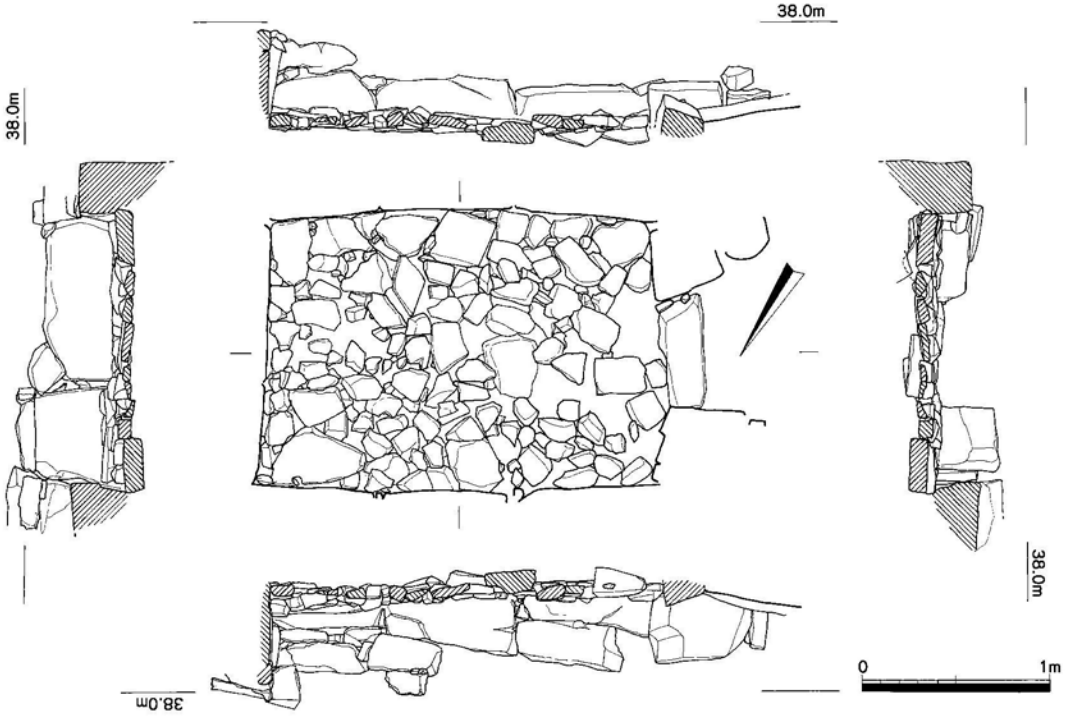
盛土（第27図、図版15）　盛土はほとんど遺存していない。若干Aトレンチ付近にわずか20cm程残る。Aトレンチでは黒褐色土の旧表土（13層）がある。これは粘質を帯びて、締りがあり、有機質腐食土層である。この上に橙褐色粘質土層（５層）があり、盛土と考えられる。また、盛土の過程であるが、まず石室掘方をほぼ水平に埋め（10～12層）、次に石室側が高くなるような傾斜で、粘質土（６～９層）で盛土を行う。その後、大きな単位で５層のような盛土を行ったと考えられる。B・Cトレンチでは石室掘方を地山の高さまでは水平に埋めた状況のみが窺える。墳端はAトレンチで石室中心より4.9m、Bトレンチで約5.8m、Cトレンチで石室中心より約4.9mを測る。

墳丘遺物出土状況　墳丘流土中ではⅠ区から最も多く出土した。完形品はなく、すべて破片ばかりである。また、丘陵側のⅢ・Ⅳ区からも出土しているが、これは３号墳に帰属するものと考えられる。

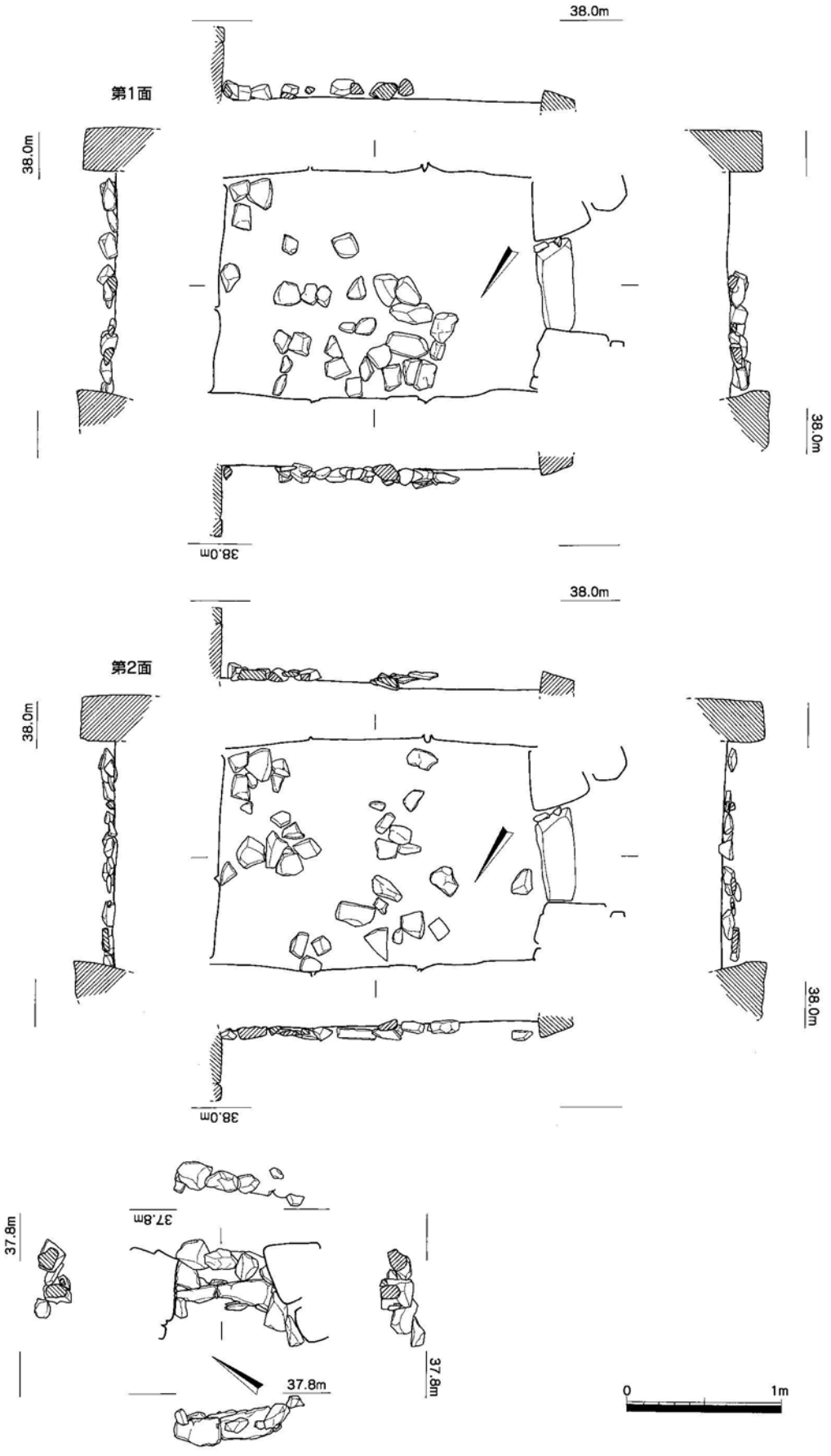
（３）埋葬施設

主軸方位をN－56°－Eにとり南西側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。

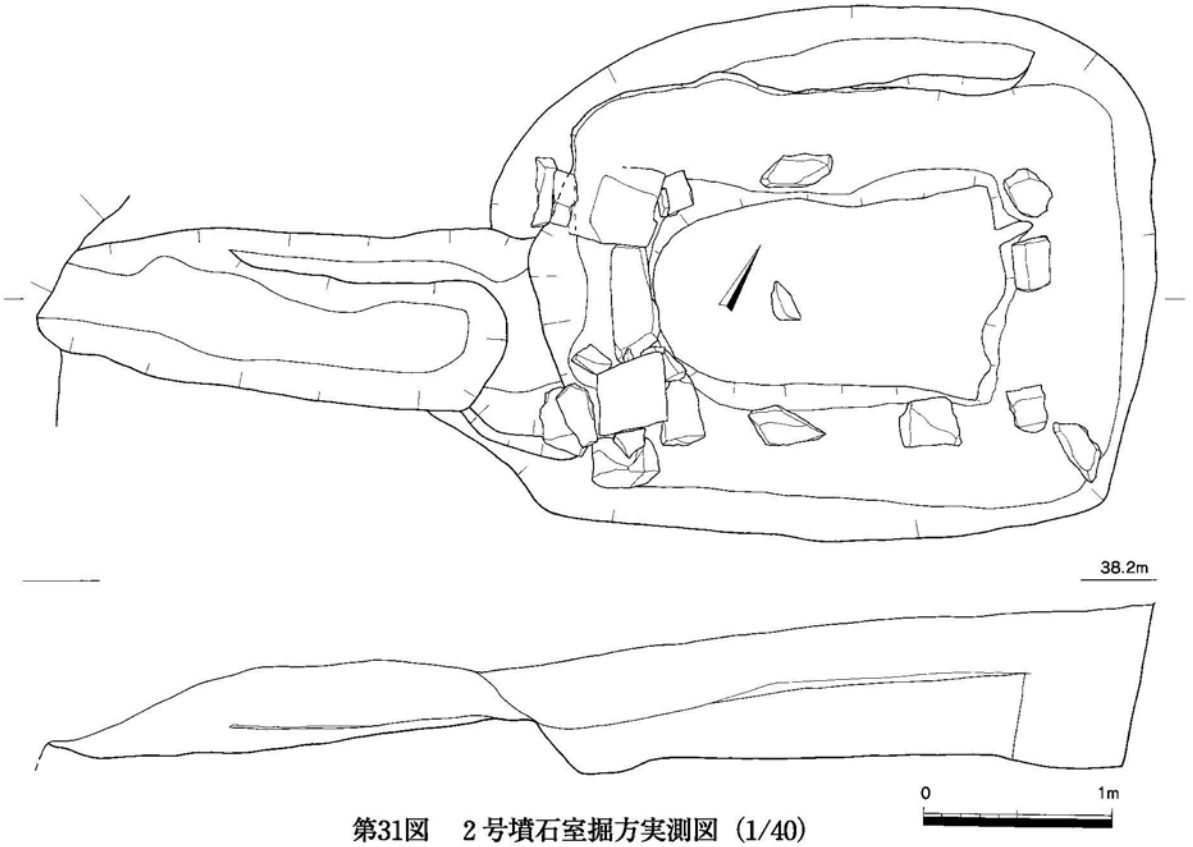
石室掘方（第31図、図版16）　墳丘基底の地山から大きく掘削して石室の掘方を造る。墳丘基底面の標高は奥壁側で38.37m、墓道側で37.5mを測り、わずかな傾斜をもつ。玄室掘方はほぼ平坦で標高約37.3m、奥壁側での比高差は90cmを測る。墓道は玄室より30cm程高くなっており、そこから開口部へは緩やかに傾斜する。玄室掘方は長さ3.5m、幅2.8mの隅丸方形を呈し、墓道掘方は現況で長さ2.4m、幅0.55～１mを測る。玄室の基底面では腰石固定のための浅い溝を検出する。



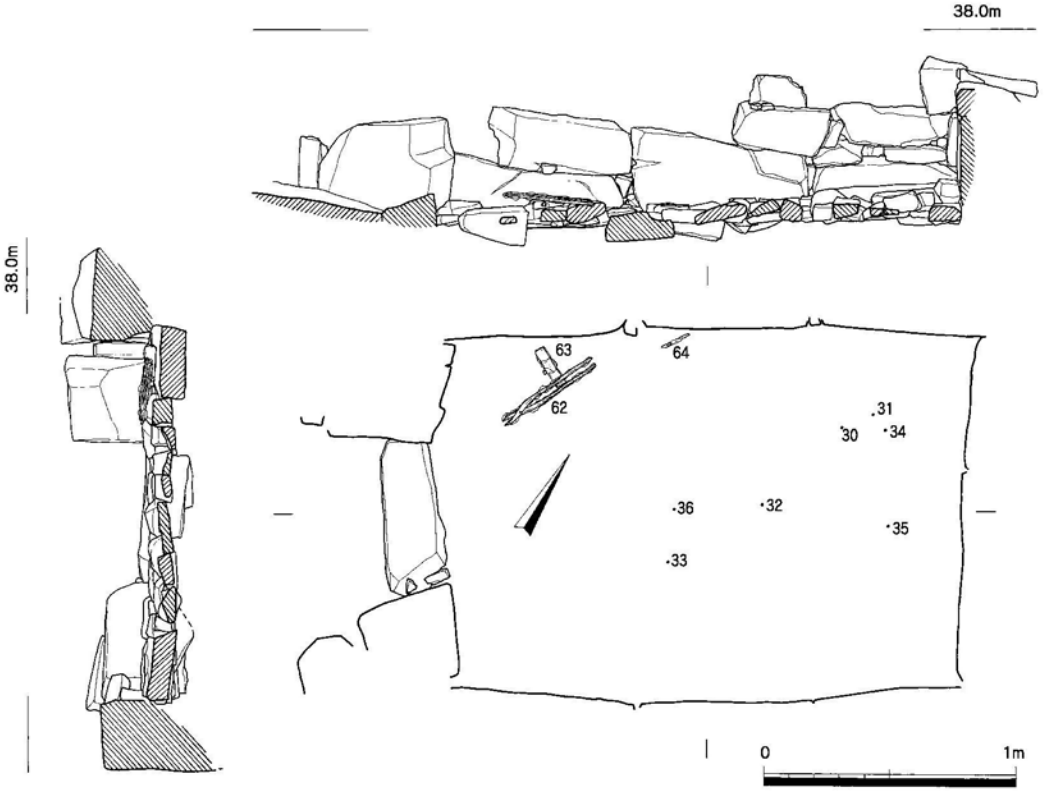
第29図　２号墳石室実測図（1/40）



第30図　2号墳玄室第1・2面状況図・閉塞状況図（1/40）



第31図　2号墳石室掘方実測図（1/40）

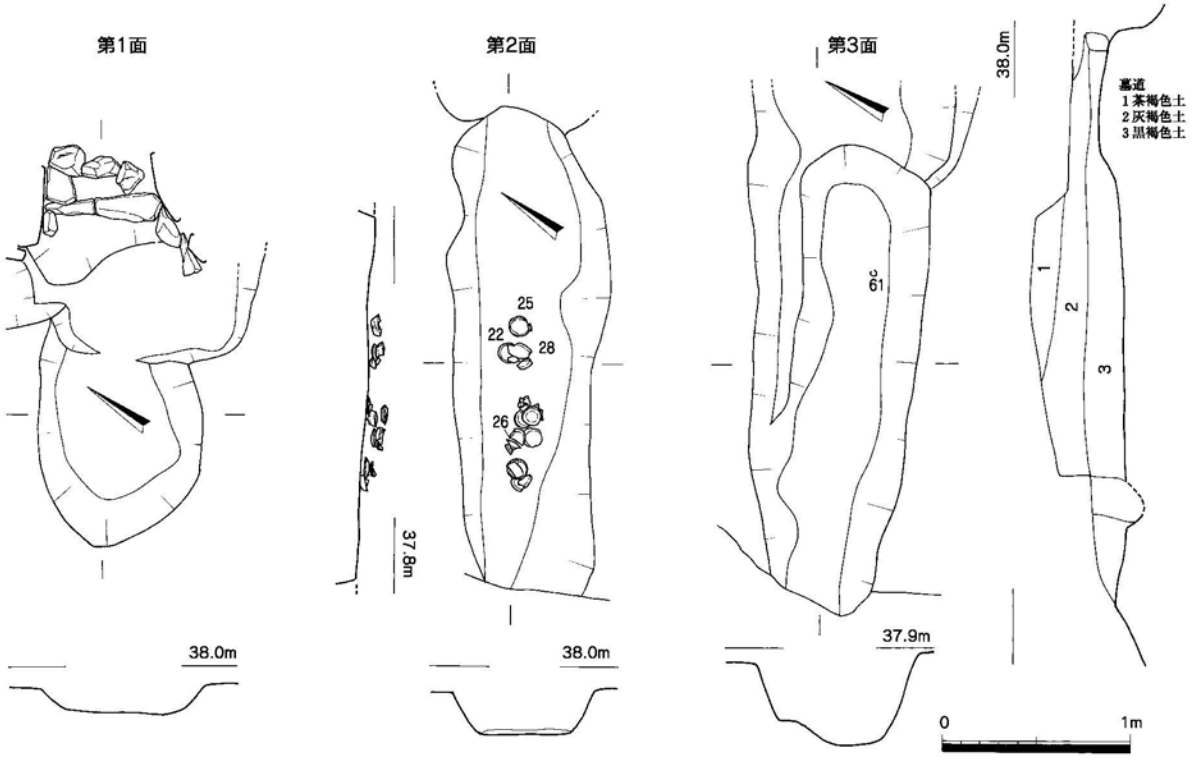


第32図　2号墳玄室第3面遺物出土状況実測図（1/30）

玄室（第29・30図、図版15・16）　奥壁幅140cm、前壁幅140cm、右側壁長200cm、左側壁長210cmを測り、長方形プランを呈する。遺存状況は悪く、腰石は完存するが、２段目以上はほとんど残っていない。天井石は失われる。奥壁には２石、両側壁には３石を据える。腰石には比較的大きな石を立てて据え、袖石は横位にして腰石とする。２～３段目の石は小振りの石材を横位にして積んでいる。腰石には根石を多用する。石と石の間を充填するために多くの小振りな石を用いるため、乱雑な様相を呈する。床面は３面検出した。検出順に第１、２、３面でそれぞれの標高は37.6m、37.55m、37.5～37.55mである。第１面敷石は左側壁に沿って、長さ約1.2m×幅約0.8mの平面長方形の屍床状に敷設される。検出時には、第２面との比高差が明確に認識できた。石材は全て10～30cm程度の花崗岩転石を使用している。第２面敷石は上下の面との比高差が僅かであり、追葬に伴う敷石面でない可能性も考えられるが、第１面との差が５cm程度あり、面として認定している。第２面は玄室のほぼ全体に疎らに敷石され、使用される石材は扁平な花崗岩転石を横位に敷いている。また僅かながら結晶片岩も確認された。第３面敷石は玄室全面に敷設される。10～50cmの石材を用い、敷設状況はあまり緊密な感を受けない。玄室の前後左右で石材の大きさに差が認められない。

羨道部（第29図、図版15・16）　短い羨道がやや「ハ」の字状に開く。小振りの花崗岩を２段積むが、この上には天井石が載るとは考えがたい。右側壁は横位２段、左側壁は縦位１段据える。袖石付近に１石天井石が載るにとどまる。羨道は長さ60cm、玄室側の幅55cm、墓道側の幅95cmを測る。

墓道（第33図、図版15・16・17）　墓道先端は後世の削平により失われる。現況で長さ240cm、幅55cm～100cmを測り、玄室側がやや幅広となる。墓道は３面検出し、検出順に第１、２、３面である。第１面墓道は、最終の追葬に伴うものと考えられる。削平により羨道端部から長さ約1.5mを検出したに過ぎない。最大幅0.9mを測り、断面は浅い逆台形状を呈する。羨道に向かって非常に緩やかに傾斜している。追葬終了後は橙褐色粘質土ブロックを含む茶褐色砂質土で埋められていた。第２面墓道は、羨道端部から長さ約2.5mを検出した。最大幅約0.8mを測り、断面は逆台形状を呈する。



第33図　２号墳墓道実測図（1/40）

床面はほぼ平坦である。追葬後は黄褐色砂質土と黒褐色土の混成土で埋められている。第３面墓道は、羨道端部から長さ約2.7mを検出した。最大幅約0.9mを測り、断面はやや緩やかなU字形を呈する。この層に伴う閉塞施設では、閉塞石の根石と考えられる仕切り石を敷設し直していることから、２回目以降の追葬に伴う墓道と考えられる。また、この面で出土した耳環は追葬時に掻き出された副葬品であると考えられ、このことを支持している。追葬後は黒褐色・橙褐色粘質土を含む黄褐色砂質土で埋められる。墓道の観察から、２号墳は初葬を含めて少なくとも４回の埋葬が行われたものと推定される。

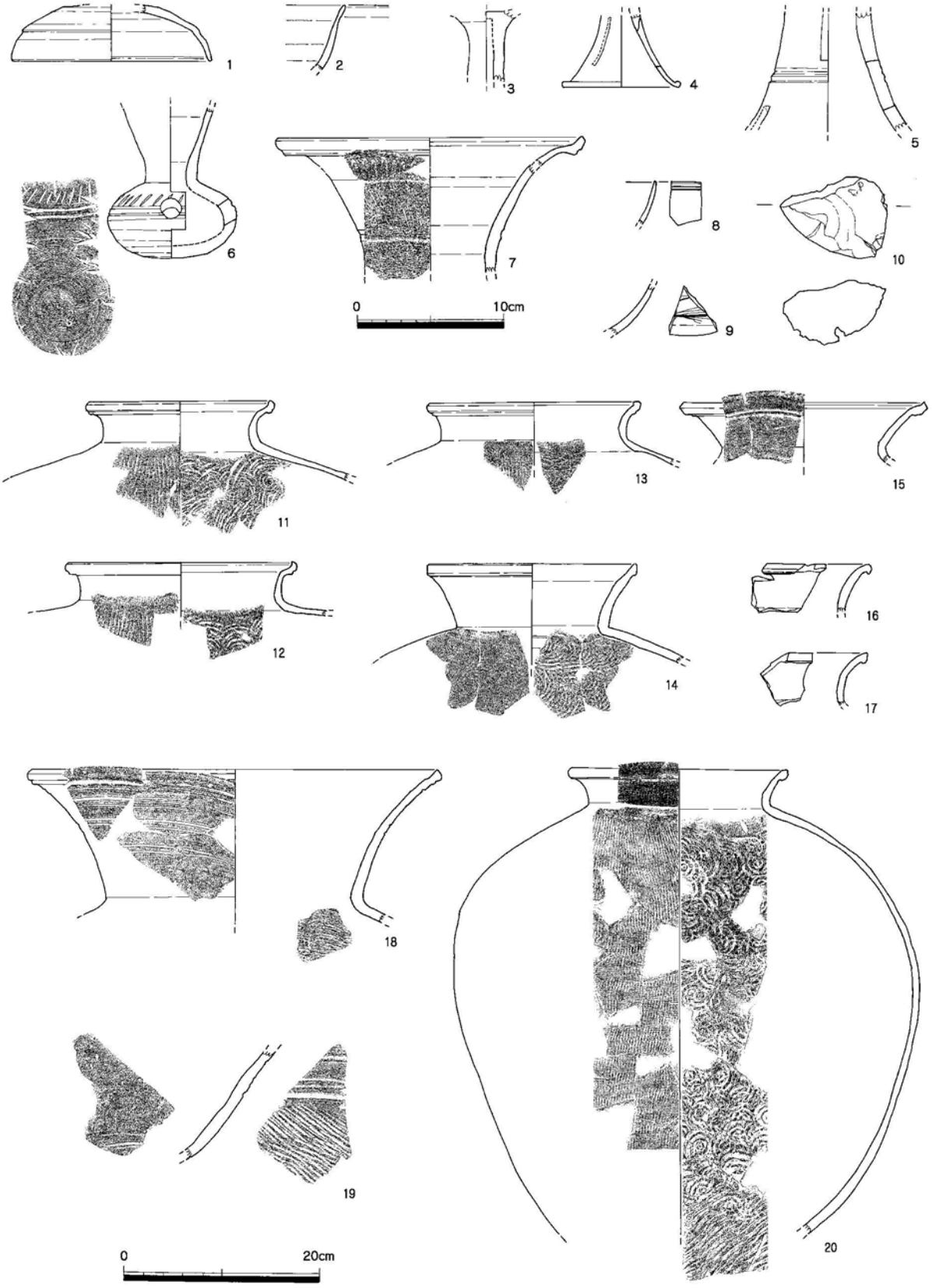
閉塞施設（第30図、図版17）　羨道部分に閉塞石を確認したが、遺存状況は良好でない。墓道第３面に伴う閉塞石は、長さ35cm程度の板状の花崗岩を２枚仕切石状に並べ、閉塞施設の根石にしたものと推測されるが、上部が遺存せず不明確である。

石室遺物出土状況（第32図、図版17）　石室第１・２面では遺物の出土を確認していない。第３面では左側壁側で鉄鉗１点、金槌１点が重ねて副葬されていた。鉄鉗は鋏部を羨道側に向けており、ほぼ原位置を保っていると考えられる。また、刀子１点が左側壁際で出土した他、ガラス製玉類が散乱した状態で少量出土した。墓道第２面床面付近では、追葬時に玄室から掻き出されたと考えられる須恵器坏類が複数出土した。また第３面床面付近では、金製耳環が１点出土している。

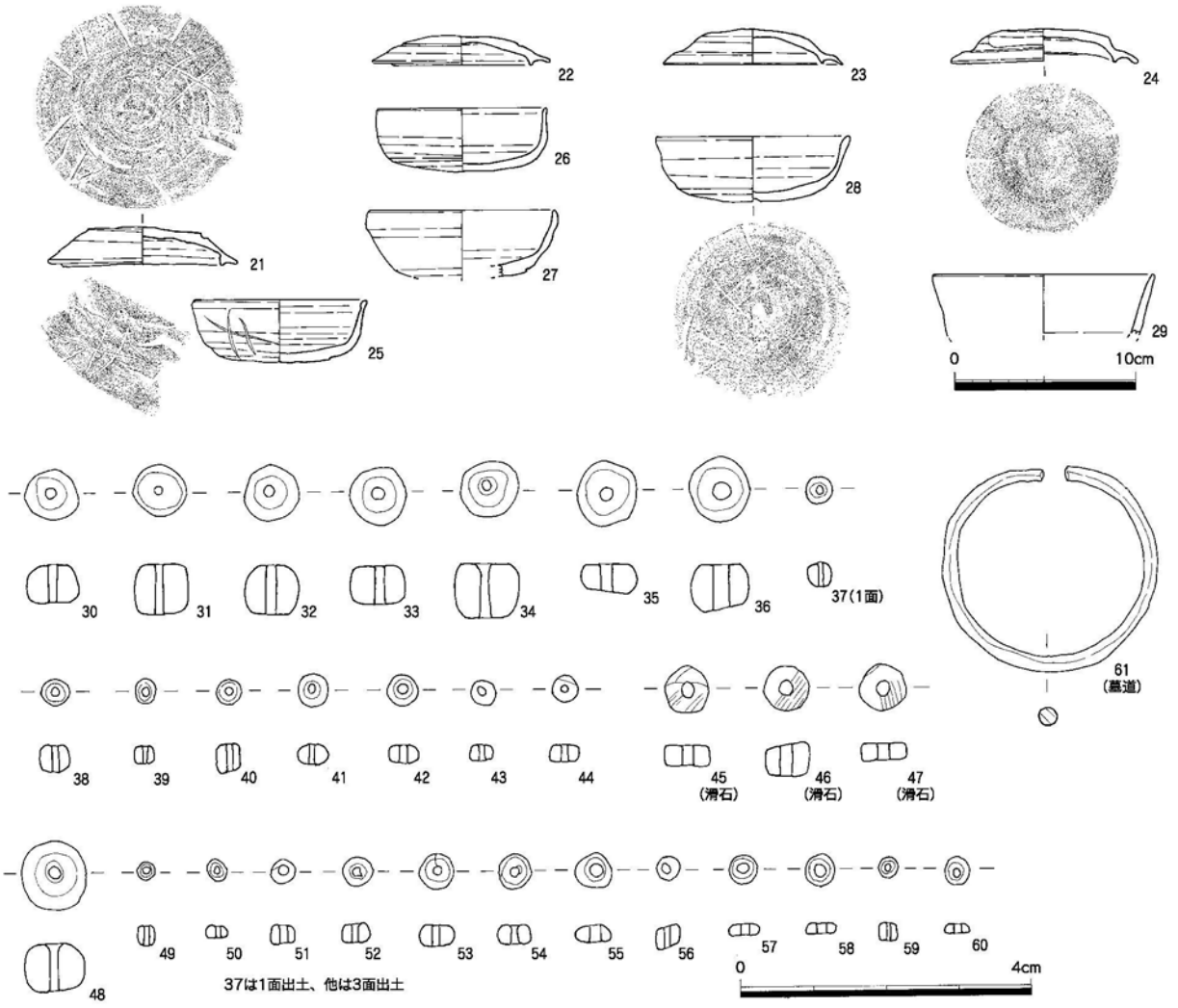
（４）出土遺物

土器（第34・35図、図版33）　１～20は墳丘出土の須恵器である。１は坏蓋で、口縁端部内面に沈線状の段を有する。天井端部に不明瞭な沈線を１条巡らす。天井部には回転ヘラ削り調整がなされ、丸みをおびる。胎土には白色砂粒、金雲母を含み、灰色を呈する。器壁は滑らかである。２は坏の口縁部片である。端部はわずかに外反する。白色砂粒を多く含む。３～５は高坏の脚部である。４の脚はラッパ状に開き、端部は摘み上げて仕上げる。器壁が薄く、透かし窓が三方向に付く。ともに自然釉がかかる。５は大型のもので、器壁も厚く、ラッパ状に開く。中位に沈線を２条巡らせ、透かし窓が付く。透かし窓の形状は破片のため不明だが、三方向に、３段刻まれる。胎土は精良で、灰色を呈する。内面上位にしぼり痕が残る。器壁は滑らかである。６は甕で、口縁部を欠損する。体部は長円形を呈し、最大胴部径はほぼ中位に入る。最大胴部径の上位に２条の沈線が巡り、その上には刺突文が施される。円孔が中位に上外方から下内方に穿孔される。胎土に白色砂粒、金雲母を含み、灰色を呈する。頸部上位には欠損するが、浅い沈線が巡るようである。８・９は肥前系の染付である。10は粘土塊で色調は橙色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。器面には溝状の窪みが見られる。重さは139.56ｇを量る。他にＡトレンチ、Ⅱ区から小形のものが６点出土する。７・11～20は甕である。７は口縁部片で、文様帯には波状文が施され、その上下には浅い沈線が巡る。胎土には多くの白色砂粒を含む。15は丁寧なつくりで、胎土は精良である。焼成も良好で、自然釉がかかり、４～６と非常に類似する。19は外面を斜方向の平行叩き、内面は叩きののち、ナデ消している。21～29は墓道第２床面出土の須恵器である。21～28は石室から掻き出されたと考えられる一括遺物である。21～24は同大の坏蓋で、白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。25～28は坏身で、25・26は27・28と較べ小振りである。白色砂粒を多く含み、25・26は灰色、27は黒灰色、28はにぶい褐色を呈する。21は天井部から口縁部にかけて、25は体部外面に同じヘラ記号を持ち、セットになると考えられる。24は天井部内面に、28は天井部外面全体にヘラ記号をもつ。29は同じ第２床面出土で、高台をもつ坏身の口縁部片である。他に土師器の高坏片や甕の細片が少量ながら出土する。また、墳丘Ⅱ区からは接合できない甕の個体が多く出土する。

装身具（第35図、巻頭図版５）　30～36は第３面出土遺物（第32図）で、原位置を抑えられた遺物である。他に38～44が第３面出土、37は第１面出土、45～60は土ふるいの段階で出土した。45～47は滑



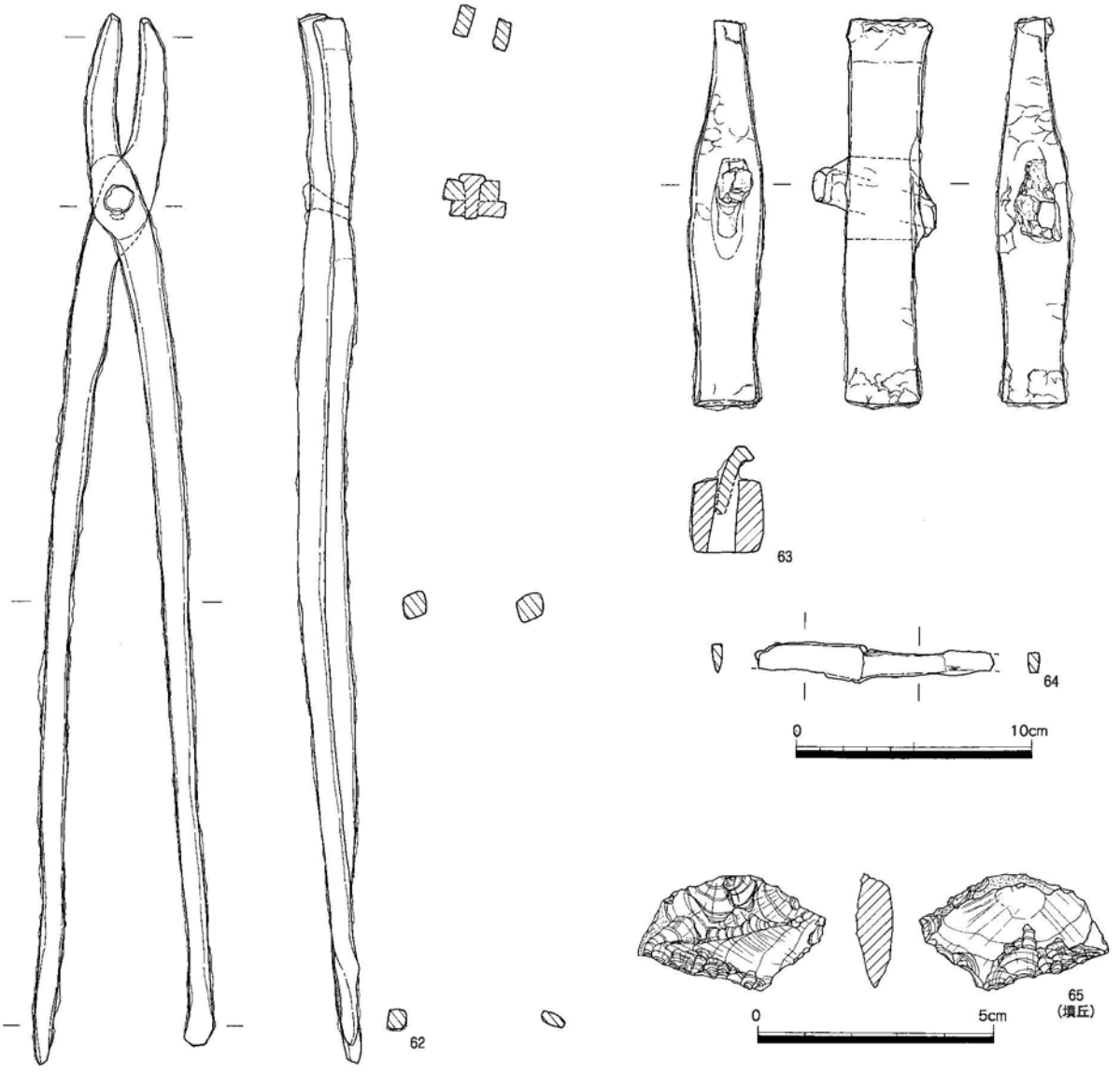
第34図　2号墳墳丘出土遺物実測図（1/4・1/6）



第35図　2号墳墓道出土遺物・装身具実測図（1/4・1/1）

石製の臼玉、他はガラス玉である。ガラス玉は多様で、紺青色（30～36、38、48）、淡青緑色（37）、緑を帯びた青色（40～42、49～55）、明青色（39）、鈍い青色（43・44・56～58）、淡緑色（59）、濃緑色（60）とある。他に紺青色の破砕したものがある。出土した玉を見る限りでは、形状と色調には関連性は見られない。61は墓道出土の耳環である。開口部端面に薄板の積層らしき痕跡が有り、開口部近くの環体内側に工具痕が残る。環体に小孔があり、内部は黒色を呈する。また、分析から表層は金を主体として他に銀、銅が検出される。環体の小孔部分では鉄が強いピークとして現れる。金芯細環と思われるが、銀或いは鉄芯金薄板細環の可能性もある。外径30.05×28.10mm、内径25.80×24.30mm、断面2.10×2.05mm、連接部の隙間は3.00mmを測り、重さは4.63gである。

鉄製品（第36図、巻頭図版4・図版33）　62～64は玄室第3面の出土遺物（第32図）である。62は鉄製鉄鉗である。長さ44.6cmの鉄棒の上に、長さ43.8の鉄棒を載せて鋲で留めた簡易なもので、全長44.6cmを測る。各鉄棒の断面は方形と考えられる。刃端部から支点までの距離が短く、支点部分には敲打痕が認められる。刃部はやや反っており、握部は片方のみ敲かれて平坦である。63は鉄製金槌で、長さ16.6cm、幅3.1cm、厚3.0cmを測る大型品である。方柱状の鉄塊を使用し、上端は両側が敲かれ先細りする。下端は平らでやや膨らみを帯び、使用痕と考えられる。ほぼ中央に木柄を通す挿入孔が穿たれる。楔は斜めに通され、先端は打たれた時に曲がっている。64は刀子で、刃部先端を欠損する。茎には木質がわ



第36図　2号墳出土鉄器・石器実測図（2/3・1/3）

ずかに付着する。

その他の出土遺物（第36図、図版33）　65は墳丘出土のスクレーパーである。素材は黒曜石の横長剥片を使用し、薄片の打面には表皮を残し、部分的に調整剥離を行っている。刃部は剥片の末端辺に両面からの細かい剥離によって作出する。長さ3.95cm、幅2.45cm、厚さ0.8cmを測り、重さは5.99ｇである。黒曜石は腰岳産で、やや風化する。

3　A－3号墳

（1）古墳の位置と現況（付図1、図版18）

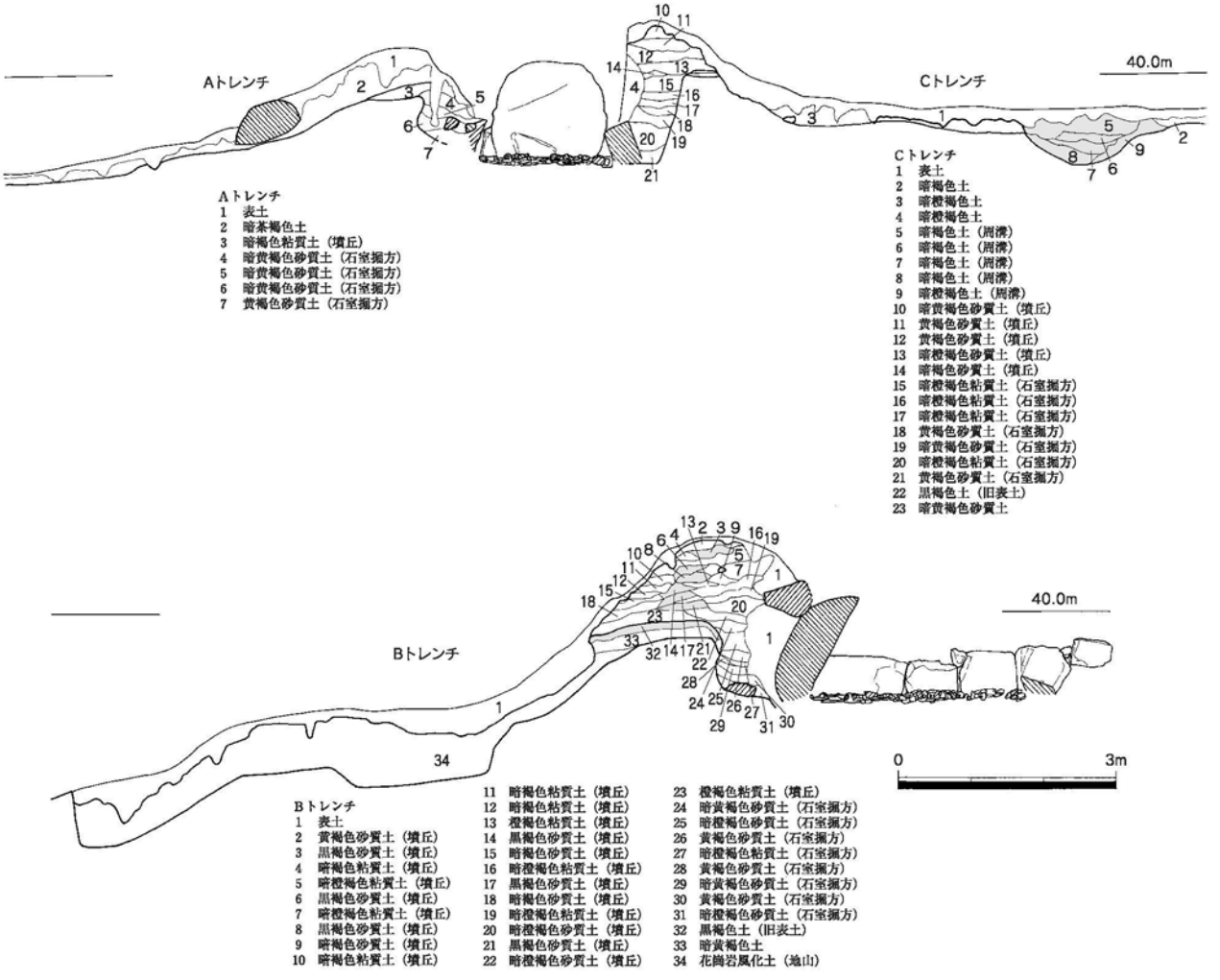
2号墳の東側に位置し、標高は38mを測る。古墳の南西側と北東側は大きく削平され、崖となる。現況では、古墳の南東側と南西側で墳裾状の傾斜変換線が看守されたが、本来の裾部を反映するものではない。天井石は失われて、陥没しているものの盛土は遺存しているようで土山状を呈していた。南東側では焼土坑SK103を検出した。

（2）墳丘（第26・37図、図版18）

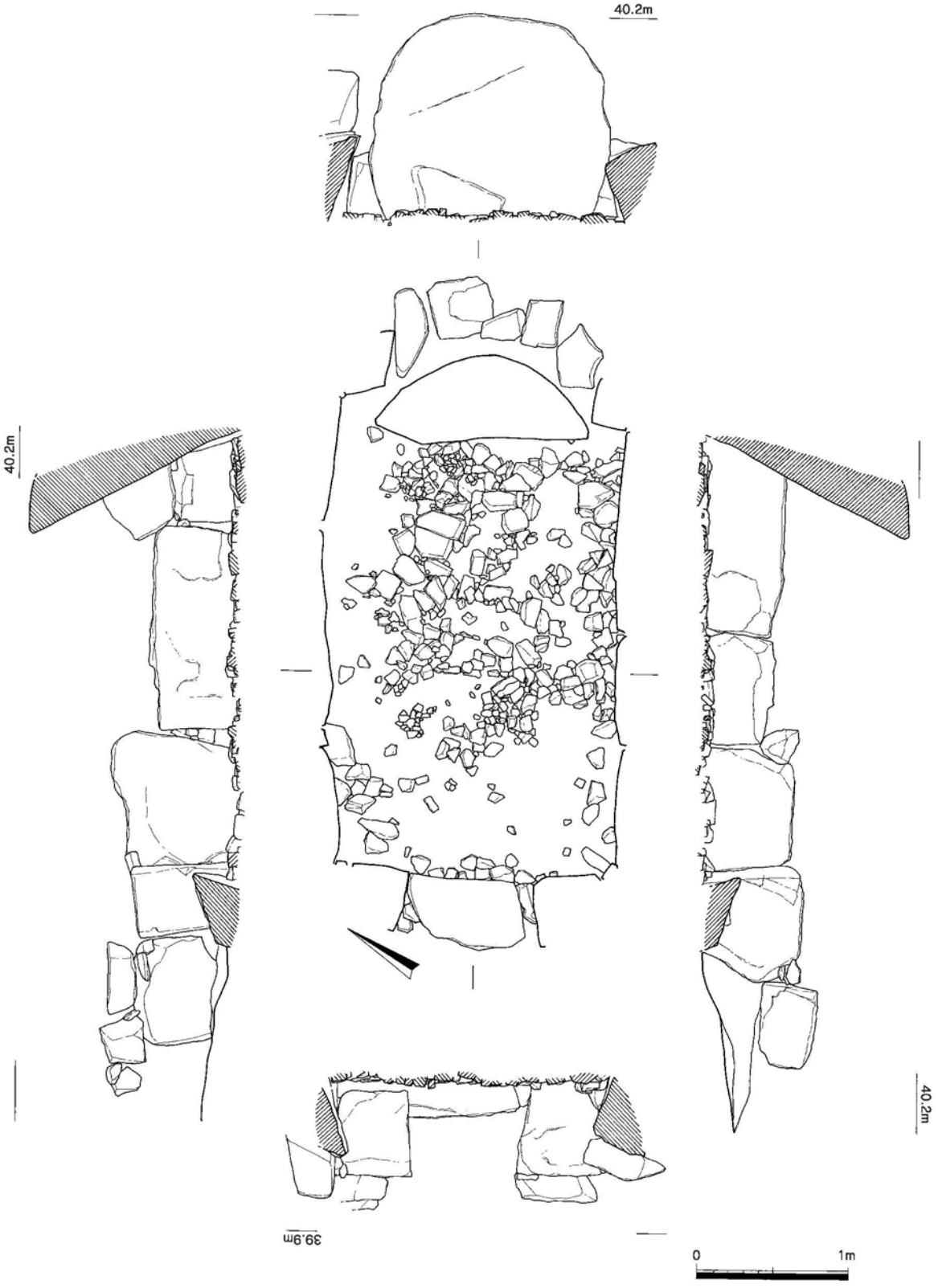
天井石を失っており、墳丘頂部の盛土は流失している。他の古墳と較べ、盛土の遺存状況は極めて良好である。すべてのトレンチで盛土が確認でき、Ｃトレンチでは周溝が見られる。Ｃトレンチでは石室中心から墳端までは約6.6mを測る。Ａトレンチでも石室中心から６ｍ付近で、地山が平坦に整形されていることからこの付近に墳端がくると考えられる。Ｂトレンチでは石室中心から4.6m付近で削平を受けており、明確な墳端は確認できない。しかし、６ｍ～７ｍの間に墳端がくるのではないかと思われる。直径12m級の円墳であると考えられる。墓道付近は削平されている。現存の墳頂部は標高41m、墳丘裾部の標高は墓道部分で38.5mを測る。

地山整形（第28図、図版18）　周溝は南東側で長さ約７ｍを確認した。標高38.75mより北側は後世の削平を受けている。幅は1.9m、深さ45cmを測る。石室掘方部分には明確な平坦面を造り出していない。地山整形の段階でも石室掘方に向かって傾斜を持ち、土山状を呈する。地山整形時の標高は最も高い頂部で39.88m、削平を受けていないと思われる北側墳端で38.45mを測る。

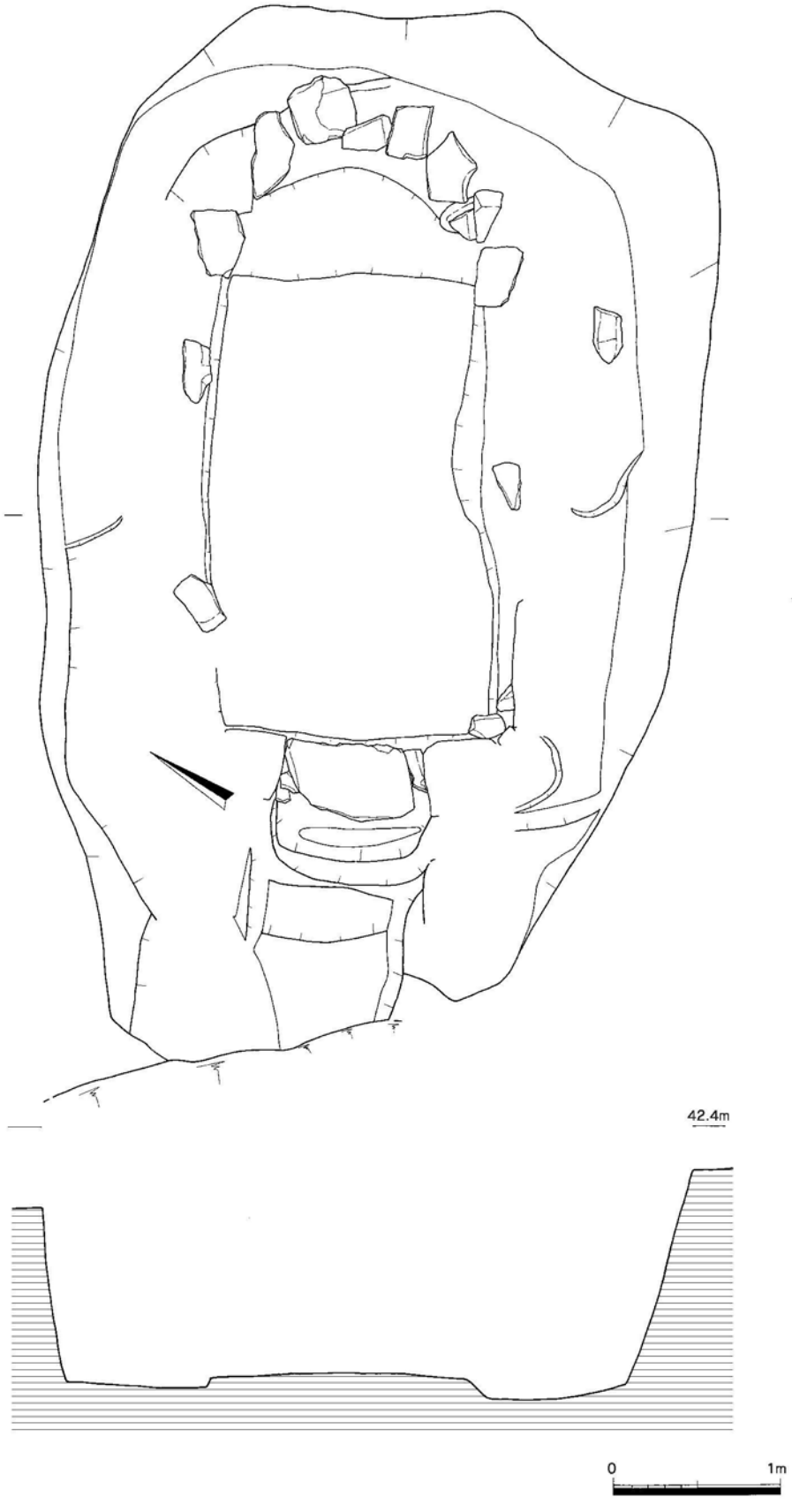
盛土（第37図、図版20）　Ｂトレンチから非常に丁寧に盛土を行った様子が見られる。まず石室掘方の高さまでほぼ水平に埋める（22層・23層上面）。次に掘方ラインより外側に黒褐色砂質土（21層）を盛り、内側の石室側に暗橙褐色粘質土と砂質土（19層・20層）を盛る。再度、外側に黒褐色砂質土（17層）を盛り、内側に暗橙褐色粘質土（16層）を盛る。それより上方もこれを繰り返して１層1層盛土を行っている。掘方ラインの外側には黒褐色砂質土、内側には暗橙褐色粘質土、砂質土を盛る。



第37図　３号墳墳丘土層断面図（1/100）



第38図　3号墳石室実測図（1/40）



第39図　3号墳石室掘方実測図（1/40）

非常に硬く締まった丁寧な版築となっている。他のトレンチでは石室堀方ラインから外側は削平されているため黒褐色砂質土は残っていない。また、基底面全体に旧表土が遺存していた。Ａトレンチでは標高39.72m～39.92mで確認し、Ｃトレンチでは40.1mで確認した。本来、地山は北西側から南東側へと緩やかに高くなっていたことが窺える。墳端はＣトレンチでは石室中心から約6.6m、Ａトレンチでは石室中心から６m付近である。

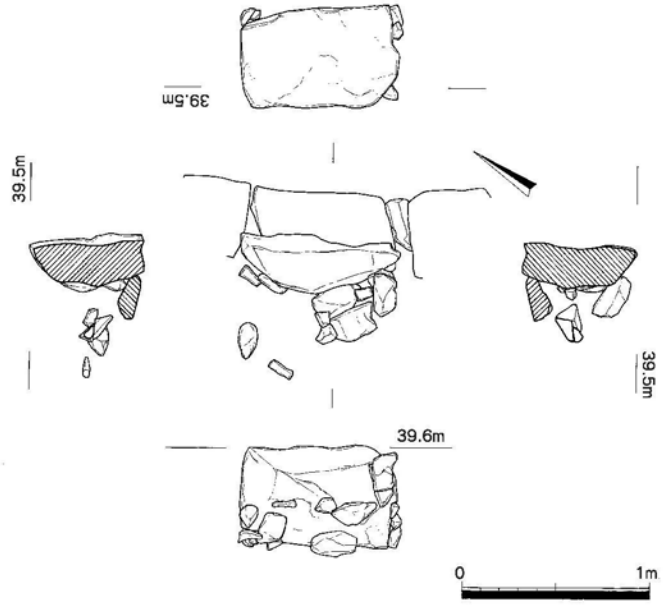
墳丘遺物出土状況（第26図、図版20）　流土中から須恵器、土師器、中世の陶磁器が出土する。大半は２号墳と接したⅠ・Ⅱ区からの出土である。また、東側の周溝からはまとまって須恵器の坏蓋と甕、土師器の高坏（第41図66～70）が出土する。周溝基底面からは浮いた状況であり、全て破砕した状況であった。

（３）埋葬施設（第38図、図版18・19）

主軸方位をＮ－58°－Ｅにとり南西側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。石室は天井石を失い、腰石は完存する。

石室掘方（第28・39図、図版18・19）　墳丘頂部付近標高39.75mから掘削を行う。石室掘方の標高は最も低い部分で約38.7m、比高差は1.3mを測る。玄室から羨道部は長さ約6.2m、幅3.8mを測り、平面プランは長方形を呈する。墓道部分は削平され、長さ50cm程遺存する。幅は2.3mと狭くなっており、玄室より20cm程基底面は高い。玄室の基底面では腰石固定のための溝を検出した。羨道の腰石は平坦部を削りだして、そこに据える。特に右側壁は袖石の基底面と較べ40cmも高くなっており、かなり簡略化している。石材にはわずかに片岩を使用し、大半は花崗岩である。

玄室（第38図、図版19）　奥壁幅190cm、前壁幅180cm、右側壁長290cm、左側壁長300cmを測り、長方形プランを呈する。遺存状況は悪く、腰石は完存するが、１石のみ左側壁に２段目が遺存する。奥壁は幅156cm、高さ140cm以上の大きな花崗岩を立てて鏡石とし、鏡石の両脇には高さ40cm程の小振りの石を据える。両側壁には腰石を３石据えている。両壁とも奥壁側の２石は標高39.4mの高さで揃え、墓道側の１石は袖石と同じ標高39.55mの高さで揃える。袖石は花崗岩を立てて使用する。他の古墳と同様、石と石の間は小石を充填している。床面には不揃いな割石が使用され、石室の石材と同様、花崗岩に少数の片岩が混ざる。敷石は攪乱を受けており、腰石に近い敷石は原位置を保っていると考えられるが、中央部分は動いている可能性も高い。仕切り石は水平ではなく、約20°の角度で墓道側に傾いている。仕切り石には幅72cmの花崗岩を横位で使用する。



第40図　３号墳閉塞状況図（1/40）

羨道部（第38図、図版19）　短い羨道が敷設する。長さは約1.3mを測り、玄室側は幅80cm、墓道側は110cmとやや開いている。羨道部の石は横位に据えられ、天井には１石載っていたと考えられる。右側壁には１石遺存する。左側壁には腰石を１石据え、その上に小振りの石を３石ほど積む。両壁とも標

高は約39.70m前後に揃える。壁面は地山の削り出しをそのまま使用し、天井石がのる部分に花崗岩を据えている。特に右側壁は基底面から40cmは土壁である。

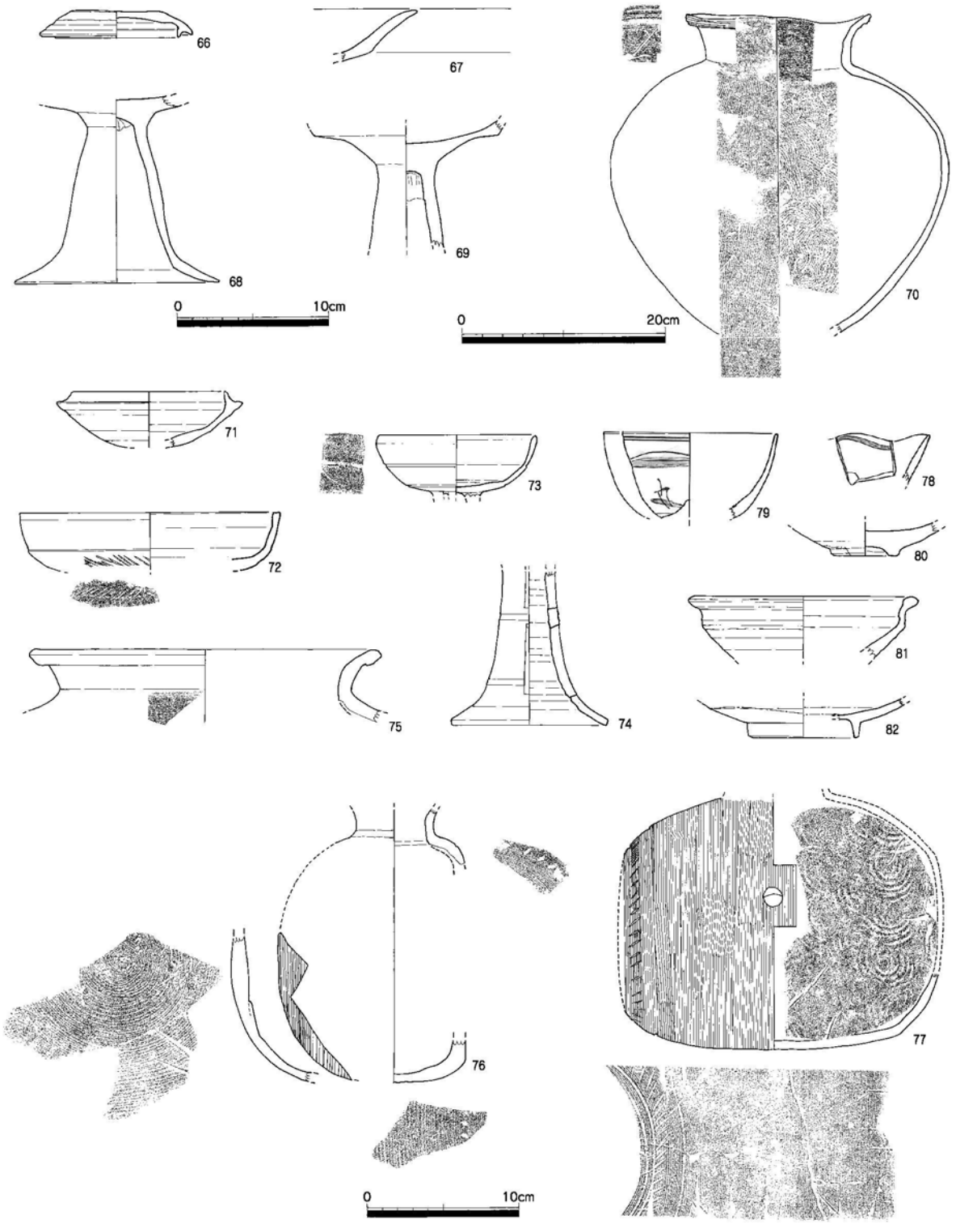
墓道（第26・39図、図版19）　墓道部分は大きく削平され、長さ50cm程遺存する。幅は上面で2.3m、基底面で80cmとなる。床面はほとんど遺存しておらず、地山面でしか確認することができなかった。床面は削平されている部分が最も高く標高39.1mを測り、玄室付近で標高38.75mと低くなっている。玄室側にそのまま続いていくと考えられる。

閉塞施設（第40図、図版20）　羨道部分で閉塞石を検出した。閉塞石は高さ50cm×幅80cm×厚20cmの板状の花崗岩を、玄室の仕切り石を根石にして袖石に挟み、隙間に小礫を充填して閉塞施設としている。これより上部は遺存せず不明である。

石室遺物出土状況（図版20）　玄室床面付近からは装身具や鉄製品が出土するが、攪乱されており、原位置は保っていない。ガラス小玉は石室中心より奥壁側に散在し、右側壁部分に集中が見られる。耳環（109）は石室中心から墓道側へ85cm、右側壁側へ25cm付近で出土した。琥珀製棗玉（108）は墓道側へ47cm、左側壁側へ10cm付近で出土する。鉄製品は右半分に散在した状況であった。須恵器はほとんど出土しておらず、龍泉窯系青磁小碗（90）が出土することからも中世段階に古墳が開かれていたことが窺える。羨道、墓道からは粘土塊が１点出土する。

（４）出土遺物

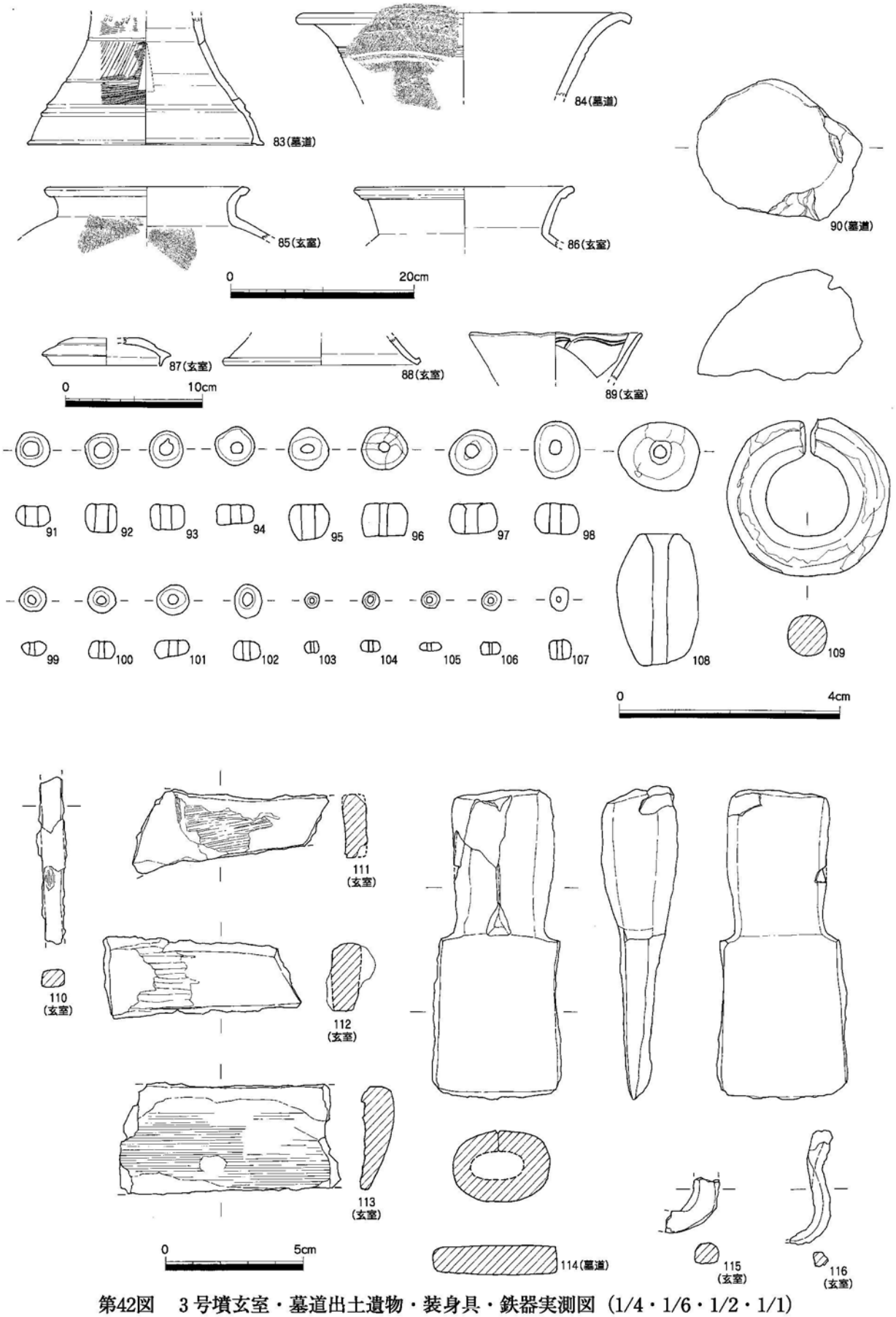
土器（第41・42図、図版34）　66～70は周溝出土遺物である。66は須恵器の坏蓋で、天井部は不定方向の削りが行われる。胎土に白色砂粒を多く含み、内面は明橙色、外面は灰色を呈する。67～69は土師器の高坏である。遺存状況は悪く、いずれも器壁は摩滅する。脚部は太めで、裾部は強く外反する。70は須恵器の甕で、底部を欠損する。外面は平行叩き、内面は円弧叩きで調整する。71～82は墳丘流土中の遺物である。71～77は須恵器である。71は坏身で、底部は丸みをもつ。白色砂粒を多く含み、自然釉がかかる。72～74は高坏である。72は坏部片で、口縁端部はわずかに窪み、体部中位に段を有し、その下には刺突文が施される。胎土は精良で灰色を呈する。73は坏部片で、文様帯には波状文が施され、上下には沈線が巡る。74は脚部片で、４方向に２段の長方形の透かし窓が刻まれる。中位には１条の沈線が巡る。73・74は胎土は精良で金雲母を多く含み、色調も類似しているため、同一個体の可能性がある。75は甕の口縁部片で、体部外面にはわずかに叩きが残る。76は提瓶で、図面右側は平坦で、扁平に近く、円周上に刻み目を施す。また、全面にカキ目調整を行う。77は甑で、外面は全面カキ目で調整され、内面は円弧叩きが残る。直径1.4cmの円孔が上外方から下内方に穿孔される。図面左側は扁平で、２条の沈線が巡り、その間には刺突文が施される。右側は左側に較べ、丸みを有し、刺突文が巡る。78は龍泉窯系青磁小碗Ⅰ－２類である。79～82は肥前系の陶磁器である。79は染付の小碗で淡い藍色で、外面に描く。貫入が多く入る。80は陶器の底部片で、橙色の胎土にやや緑がかった釉薬がかかる。81は鉢の口縁部片で、鈍い褐色を呈する。82は高台付皿で、見込み部分の釉は掻き取っている。釉薬と露体の接する部分が赤く発色する。白濁色の釉がかかり、貫入が多く入る。83・84・90は墓道３面の出土遺物である。83は器台の脚部片で、内面は回転ナデで調整する。外面は沈線によって文様帯を作り、カキ目調整を行った後、刻みを施す。高さの違う三角形の透かし窓が対峙して２方向ずつ、計４方向につく。欠損部付近には太い刻みが残る。84は甕の口縁部片で、外面には波状文が描かれる。90は粘土塊である。白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。重さは774.73ｇを量る。他にもＡトレンチ、Ⅱ区、Ⅲ区から大小、５点出土する。85～89は石室出土の遺物である。85・86は須恵器の甕の口縁部片である。87は須恵器の坏蓋で、天井は低く体部付近まで回転ヘラ削りを行う。白色砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。88は脚部片で、端部は摘み上げる。自然釉がかかる。



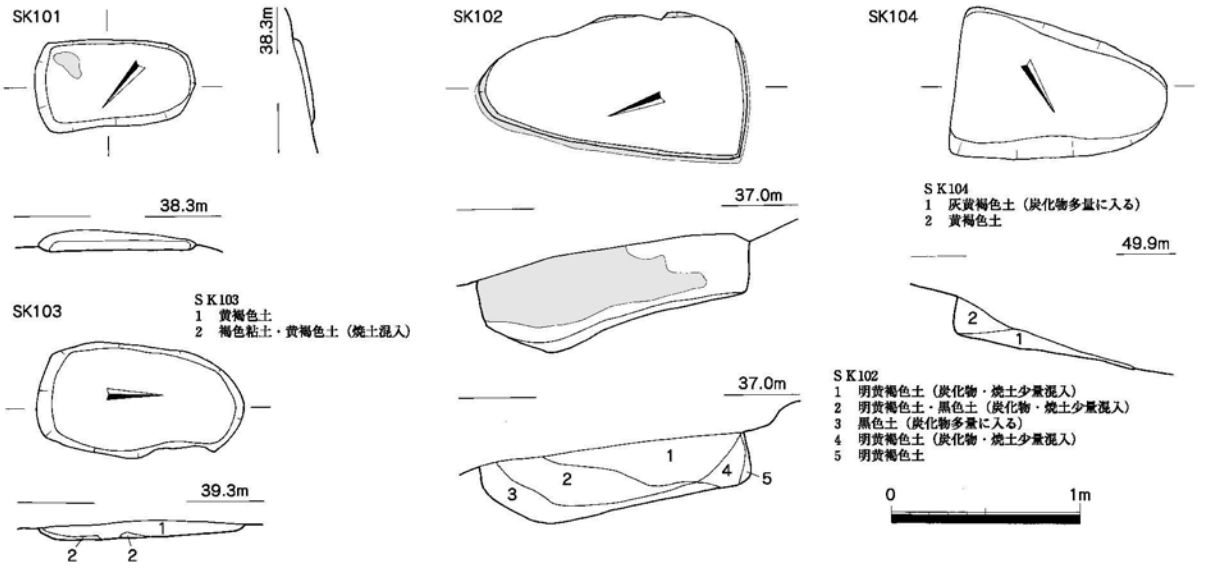
第41図　3号墳周溝・墳丘出土遺物実測図（1/4・1/6）

89は龍泉窯系青磁小碗Ⅰ－2類である。口縁部に輪花を有し、ヘラ状施文具で体部内面に片彫りの線を入れ、体部を区分けする。

装身具（第42図、巻頭図版5）　91～109は玄室出土である。91～107はガラス小玉で、紺青色（91～98）、緑をおびた青色（99～102）、青色（103～107）があり、紺青色が最も大きく、次に緑をおびた青色、青色と小さくなる。他にも図化できなかった破砕品が出土している。108は琥珀玉で長さ23.5mm、最



第42図　3号墳玄室・墓道出土遺物・装身具・鉄器実測図（1/4・1/6・1/2・1/1）



第43図　焼土坑SK101・102・103・104実測図（1/40）

大径は14.8mmを測る。穿孔は両面から行う。109は耳環である。緑青を吹いた芯材に白金色の薄板状のものが覆う。表面の腐食は著しく、表層の大半は失われる。分析からは心材は銅を主体とし、表層に近い部分ではヒ素も見られる。銅芯に銀薄板を被せた耳環である。外径29.5×28.05mm、内径15.45×14.9mm、断面7.55×7.0mm、連接部の隙間は0.75mmを測り、重さは18.73gである。

鉄製品（第42図、図版34）　114は墓道出土、他は玄室出土である。110は長頸鏃の頸部片である。木質がわずかに付着する。111～113は鉄刀片である。111・112は茎、113は刃部片である。すべて木質が付着する。114は袋状鉄斧である。袋穂部は断面楕円形を呈し、有肩式で、刃部断面は方形を呈する。115・116は不明鉄器である。断面は楕円形を呈し、緩やかに湾曲する。他に墳丘から小型の椀形鍛冶滓が出土する。メタルはない。鉄製品を保管していたプレハブが台風のため半倒壊となり、遺物が一部、混乱してしまった。他の資料から出土位置の確認作業を行ったが、一部不明のままとなった。3号墳と4号墳の遺物である。この遺物で実測可能なものは第54図に掲載した。

（5）土坑（第43図）

SK101（第43図）2号墳の南東側、3号墳の北西側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、深さ10cmが残る。2号墳の周溝を掘削後、確認した。基底面には一部焼土があり、硬化している面が残る。また、わずかに北西側が低くなっている。

SK102（第43図）2号墳の北側に位置する。平面プランは略二等辺三角形を呈し、長さ140cm、深さ35cmを測る。基底面は北側に傾斜する。壁面の遺存状況は良好で、下半は還元して黒色化し、上半は赤変する。覆土には炭化物、焼土が多量に含まれる。

SK103（第43図）3号墳の南東側に位置し、平面プランは隅丸方形を呈し、長さは110cm、深さ10cmを測る。覆土には焼土が含まれ、炭化物は僅かに混入する。壁面等は焼けていない。

SK104（第43図）4号墳の東側、周溝の外側に位置する。平面プランは略二等辺三角形を呈し、長さ115cm、深さ30cmを測る。基底面は北西側に向かって傾斜しており、北西端は削られる。覆土には炭化物が多量に入るが、焼土はほとんど見られない。

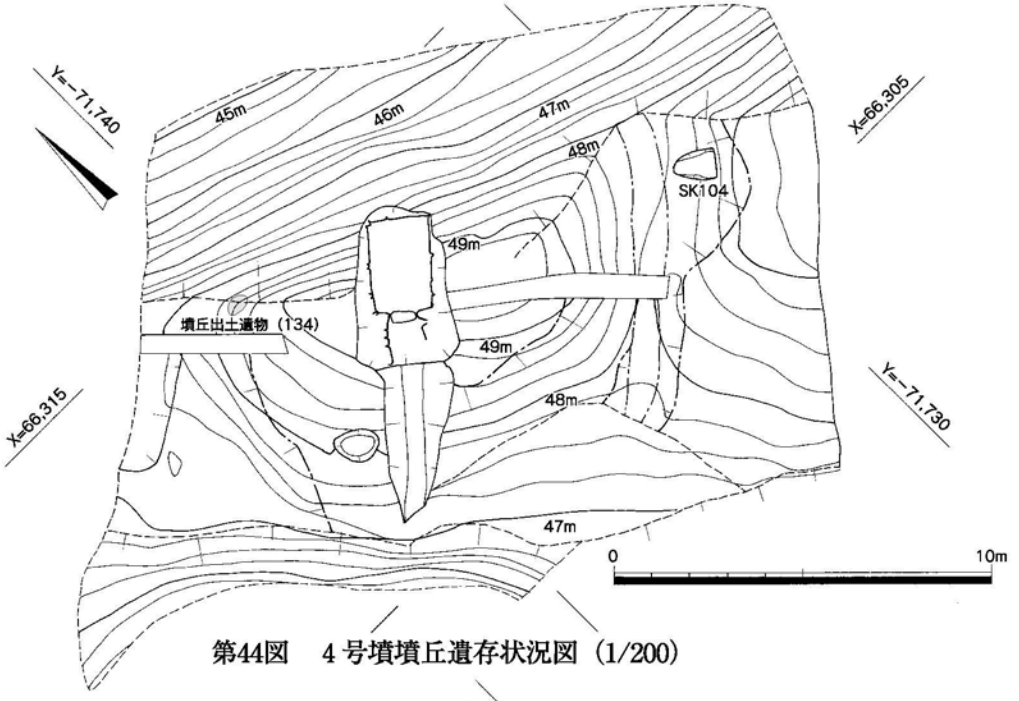
4　A－4号墳

（1）古墳の位置と現況（付図1、図版25）

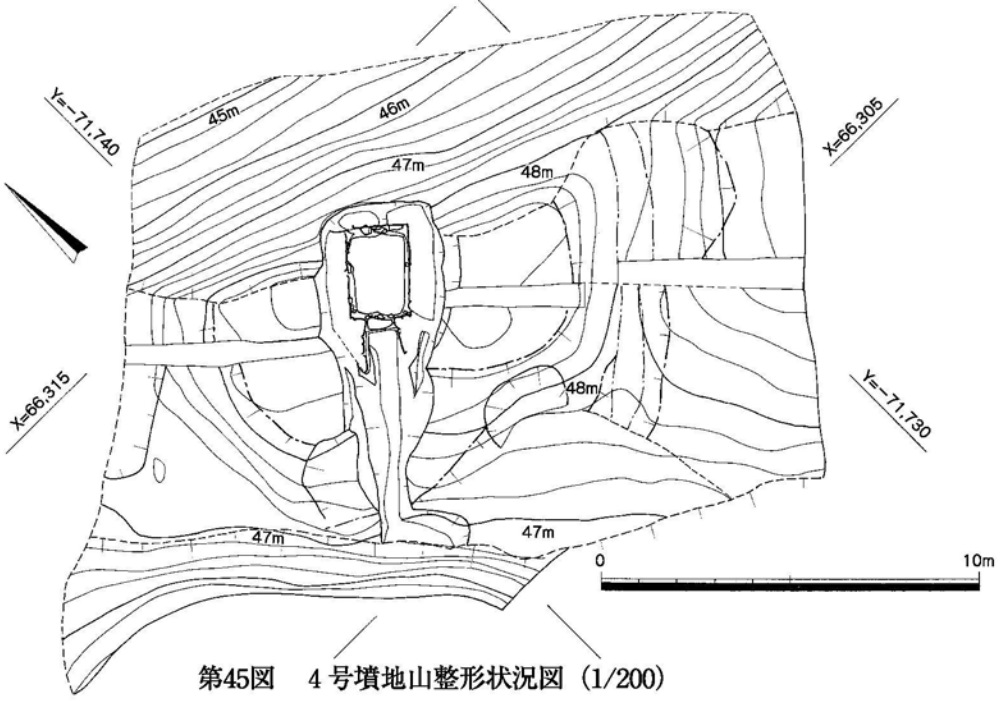
3号墳の南側に位置し、標高は48mを測る。北側に延びる尾根と西側に延びる尾根の頂部に占地し、墳丘の大半は大きく削平される。特に北側は頂部付近から急斜面となる。南東側部分のみ周溝が認められ、墓道部分は現況で南西方向に向かっていることが確認できるが、大部分は流失した土砂で埋まっていた。石室は天井石を失い陥没した状況を呈する。4号墳の東側には焼土坑SK104を検出した。

（2）墳丘（第44・第46図、図版21）

天井石を失っており、墳丘頂部は流失している。墳径をうかがえるのは東側に遺存している周溝部分のみで、石室中心から墳端までは約5.2mを測る。西側は削平されているため、明確ではないが、標高47.2m付近で墳端は巡るのではないかと考えられる。直径12m級の円墳である。北側は石室中心部分から大きく削平され、墓道部分も段造成されているため不明である。現存の墳頂部は標高49.55m、



第44図　4号墳墳丘遺存状況図（1/200）



第45図　4号墳地山整形状況図（1/200）

墳丘裾部の標高は墓道部分で標高47.25mを測る。

地山整形（第45図、図版21・22）　周溝は東側で長さ約８ｍを確認した。幅は南側で1.4m～1.7m、北側では3.1mを測る。北側で幅広なのは、焼土坑SK104が位置するためである。Ｃトレンチからは幅約2.2m、深さ65cmの幅広な周溝を確認した。周溝の内側は斜面を削って略平坦面を造り出す。この平坦面に石室掘方を掘削する。墳丘基底の地山標高は東側が西側よりも若干高く、標高48.75mを測る。南西方向に延びた墓道は石室中心から7.3m付近で南東側へと直角に曲がる。削平されているため不明であるが、周溝へと続く可能性も考えられる。

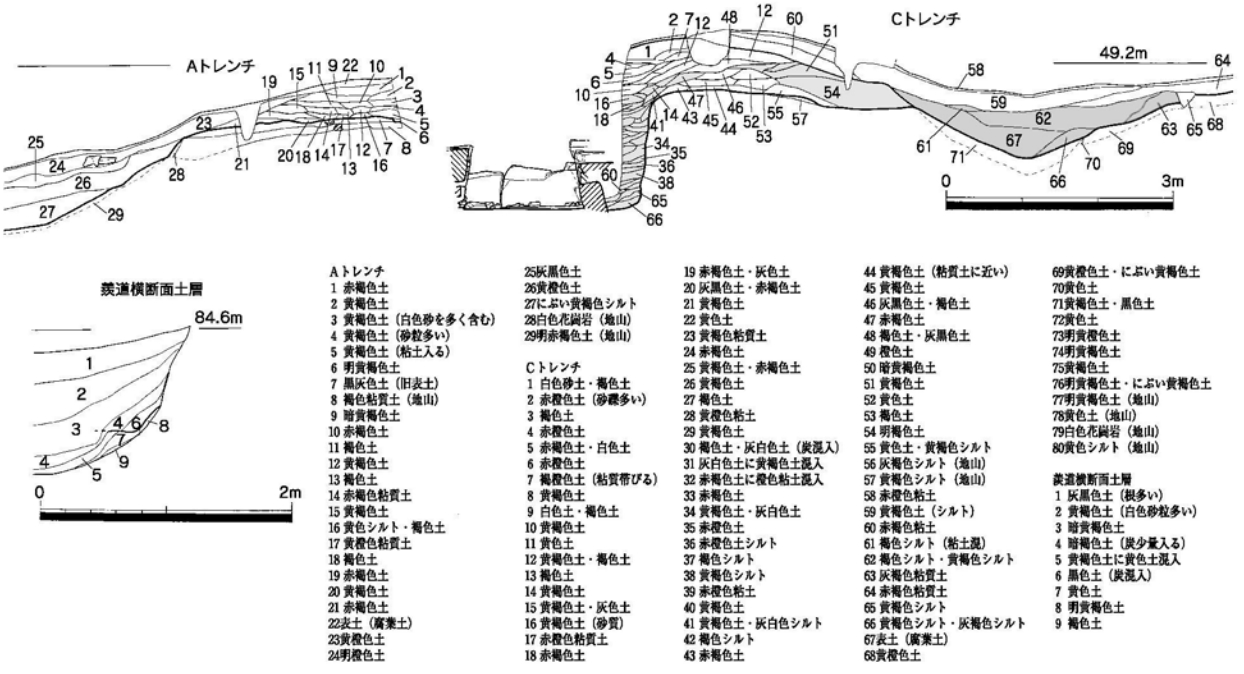
盛土（第46図、図版23）　最も明確に盛土の状況が確認できるのは、Ｃトレンチである。石室掘方の（47層）が墳丘盛土の（46層）を切り込んでいることから、墳頂基底面を整えるために、一度盛土を行い、石室掘方を掘削したと考えられる。掘方は主に赤橙色粘土と黄褐色土の互層で細かく版築され、非常に堅く締まっている。その後、先行して盛土を行った外側を標高49.2m付近まで黄褐色土と橙色土で先に積み上げる。最後にやや砂礫を含んだ白色土や赤橙色土で石室全体を覆うような盛土を行う。墳端はＣトレンチで石室中心より約5.2mを測る。Ａトレンチでは撹乱が石室中心から4.6m部分で入っている。

墳丘遺物出土状況（第44図、図版21）　墳丘上からは多くの土器が出土した。Ａトレンチの頂部付近、標高48.7m付近からは甕（134）が割れた状態で出土する。底部は出土しておらず、破片は散乱した状況であった。古墳時代の須恵器以外に龍泉窯系青磁碗、近世の鉢が出土する。

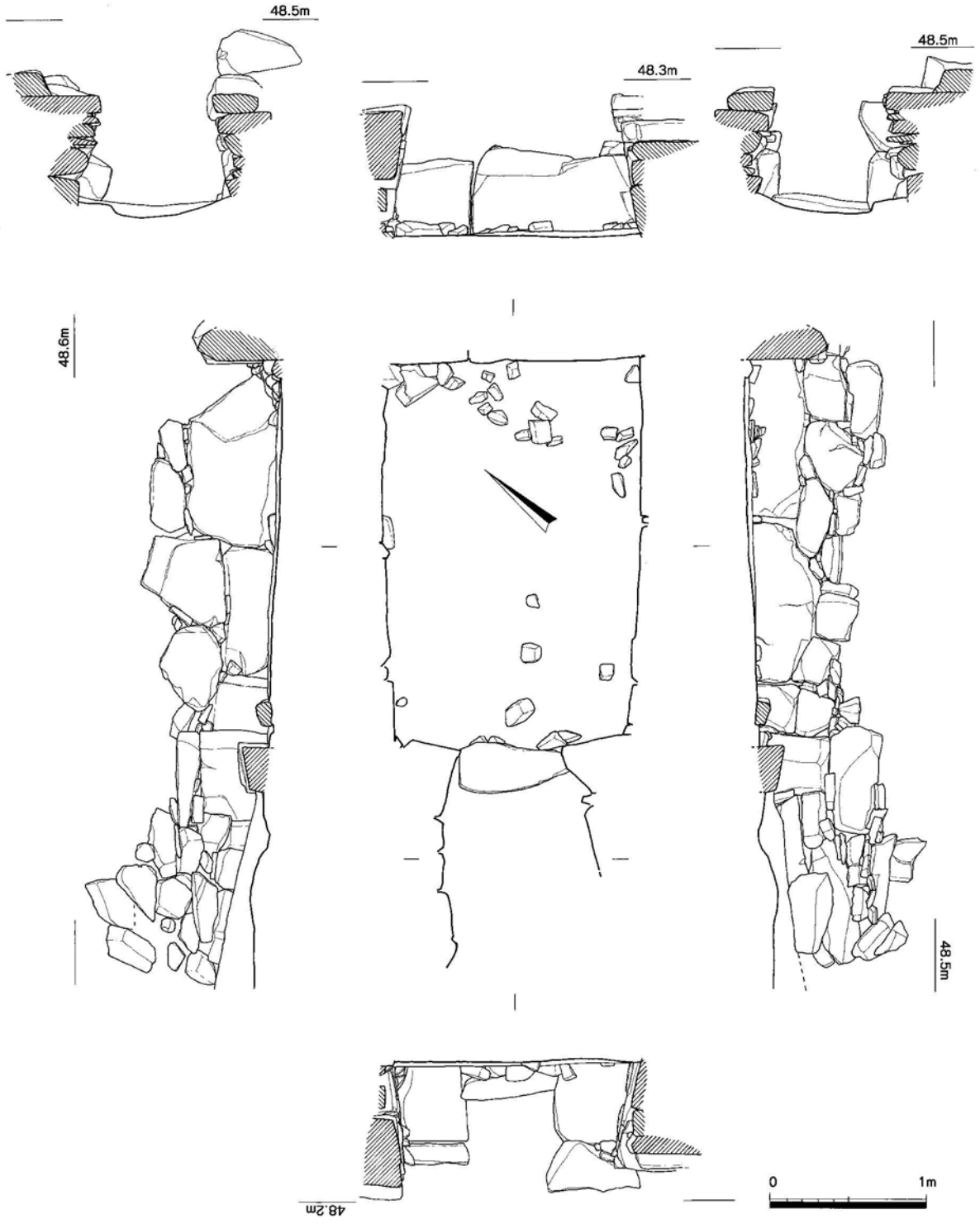
（３）埋葬施設（第47図、図版21～23）

主軸方位をＮ－50°－Ｅにとり南西側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。石室は天井石を失い、腰石は完存する。

石室掘方（第45・48図、図版21・23）　墳丘基底の地山から大きく掘削して石室の掘方を造っている。墳丘基底面の標高は48.75m、石室掘方の標高は47.2m、比高差は1.5mを測る。掘方は現況で縦約９ｍ、横は玄室部分で３ｍ、羨道部分で2.5m、墓道部分で1.3mを測る。墓道は削平された部分で、南西方向から南東方向へと直角に方向を変えている。後世の削平によるものとも考えられる。玄室の基底面



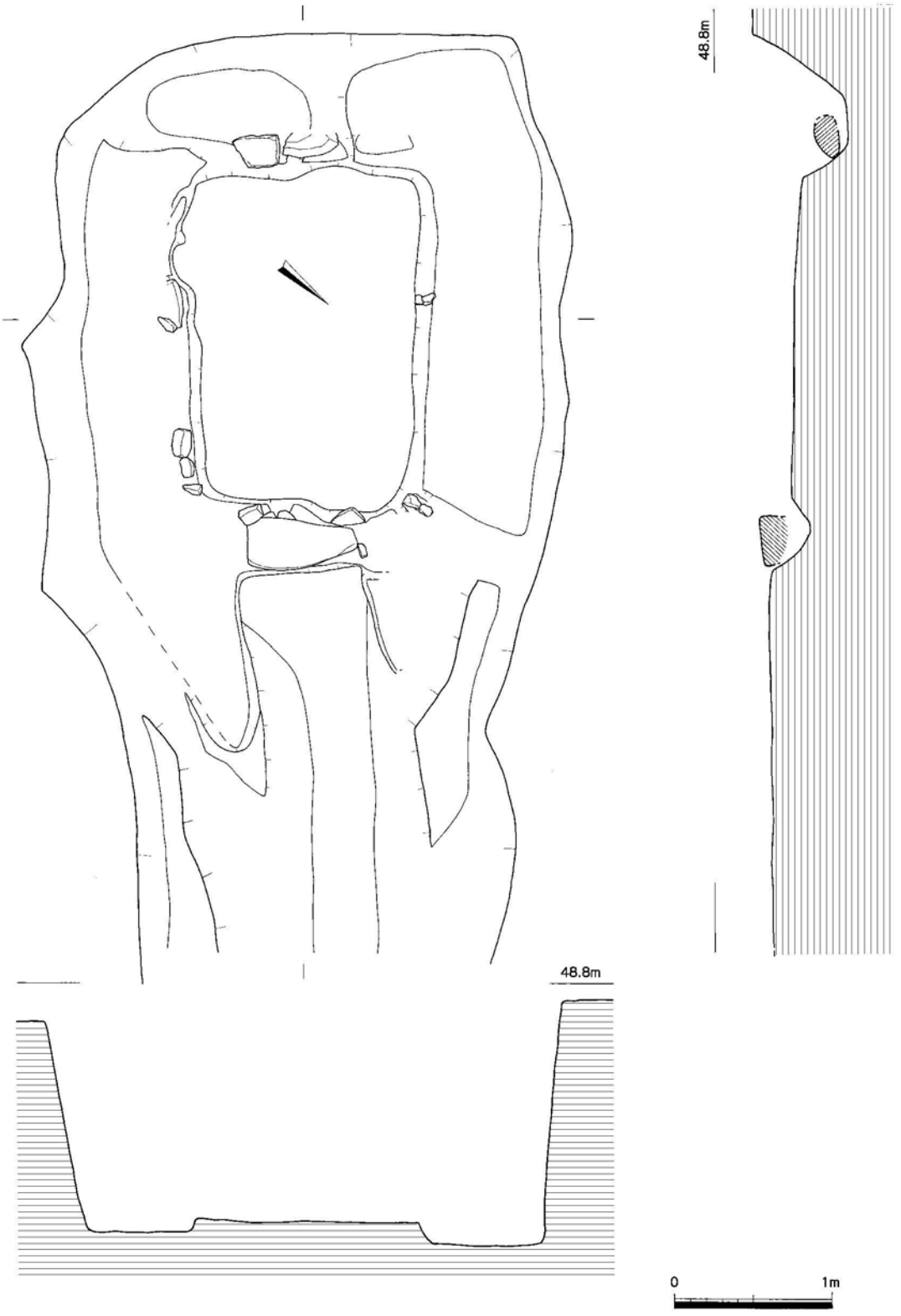
第46図　４号墳墳丘土層断面図（1/100・1/60）



第47図　4号墳石室実測図（1/40）

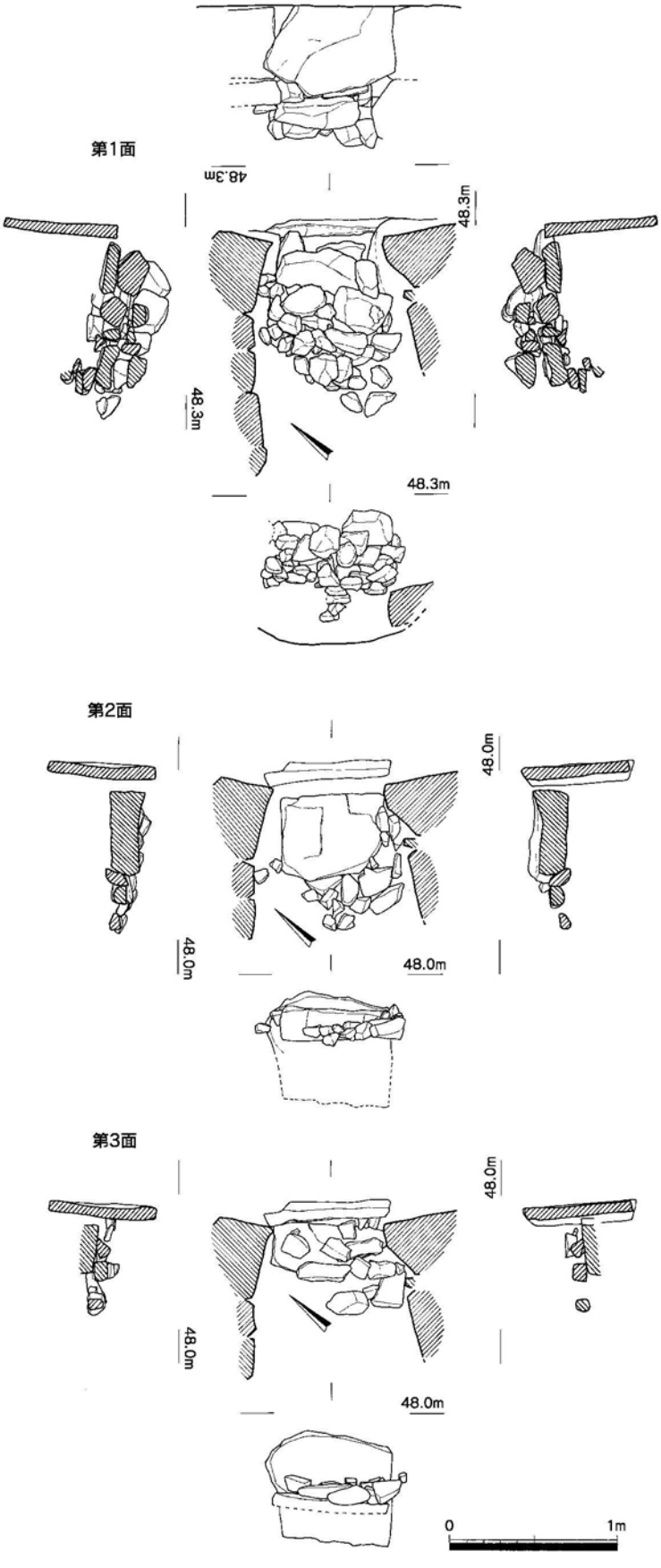
では腰石固定のための溝が検出され、羨道部分では平坦面に直接腰石を据えている。掘削は奥壁部分が最も深くなっている。

玄室（第47図、図版22）　奥壁幅180cm、前壁幅150cm、右側壁長240cm、左側壁長250cmを測り、長方形プランを呈する。遺存状況は悪く、奥壁では腰石のみ、側壁では3段目までが残り、天井石は失われる。腰石は奥壁に2石、両側壁に3石据える。腰石には比較的大きな石が用いられ、2～3段目の石は小振りである。腰石の段階で左側壁の1石を除けば、ほぼ目路は通る。左側壁では標高



第48図　4号墳石室掘方実測図（1/40）

48.0m付近で再度、目路を通しているが、やや乱雑な様相を呈する。両袖にはほぼ同じ高さの腰石を使用する。根石や石と石の間を充填するために小振りな石を多く用いているため、乱雑な様相を呈する。床面には拳大の石が転がっており、遺存状況は極めて悪い。敷石が敷かれていたと考えられるが、

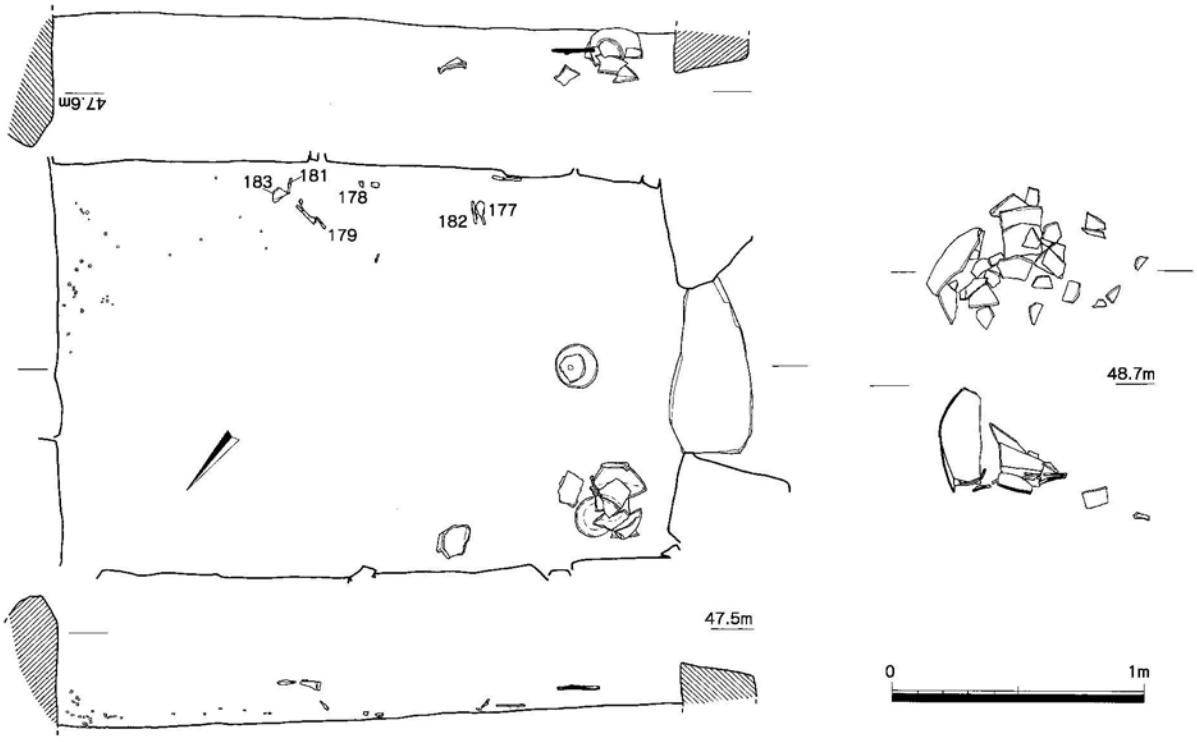


第49図　4号墳閉塞状況図（1/40）

原位置を保っているのは左隅の数石である。玄門には仕切り石が設置され、その玄室側には幅75cmの立石が据えられる。この立石は石室に伴うものか、閉塞施設に伴うものか不明なため、図面は閉塞石（第49図）と同時に掲載している。ただし、石室に付設する可能性も考えられる。まず袖石の上面の高さと立石の上面の高さが揃い（図版24）、きれいな面を形成していることがあげられる。次に天井石が遺存していないため判断しがたいが、幅75cm、高さ65cmの石を石室が完成した後に持ち込むのは困難と考えられる。さらに立石は床面から深さ30cmは埋まった状態であり、その掘方は第48図から立石に接して掘削されていることも挙げられる。石材は大半が花崗岩であるが、わずかに片岩がみられる。

羨道部（第47図、図版22・23）　短い羨道が敷設する。両側壁は約1.4mを測り、開口部に向かって、やや膨らみを持つ。右側壁はやや南側に向かって開いている。右側壁には2石、左側壁には3石腰石を据える。その上に石を積んでいるが、石は大きさも一様でなく、目地も通っていない。乱雑な石積みとなっている。これらの側壁の上に天井石が架溝されたとは考えがたい。また、袖石の2段目と左側壁の標高48.2mの目路がほぼ揃うことからも天井石は奥壁から袖石の上まで構築されていたと考えられる。右側壁は全て花崗岩を使用するが、左側壁には袖石の上2段目に片岩を使用する。

墓道（第45図、図版21・23）　先端は後世に大きく削平されているが、現状で長さ4.5m、幅は底面で約50cmを測る。端部で南西から南東へと直角に方向を変える。土層を残さなかったため、こ

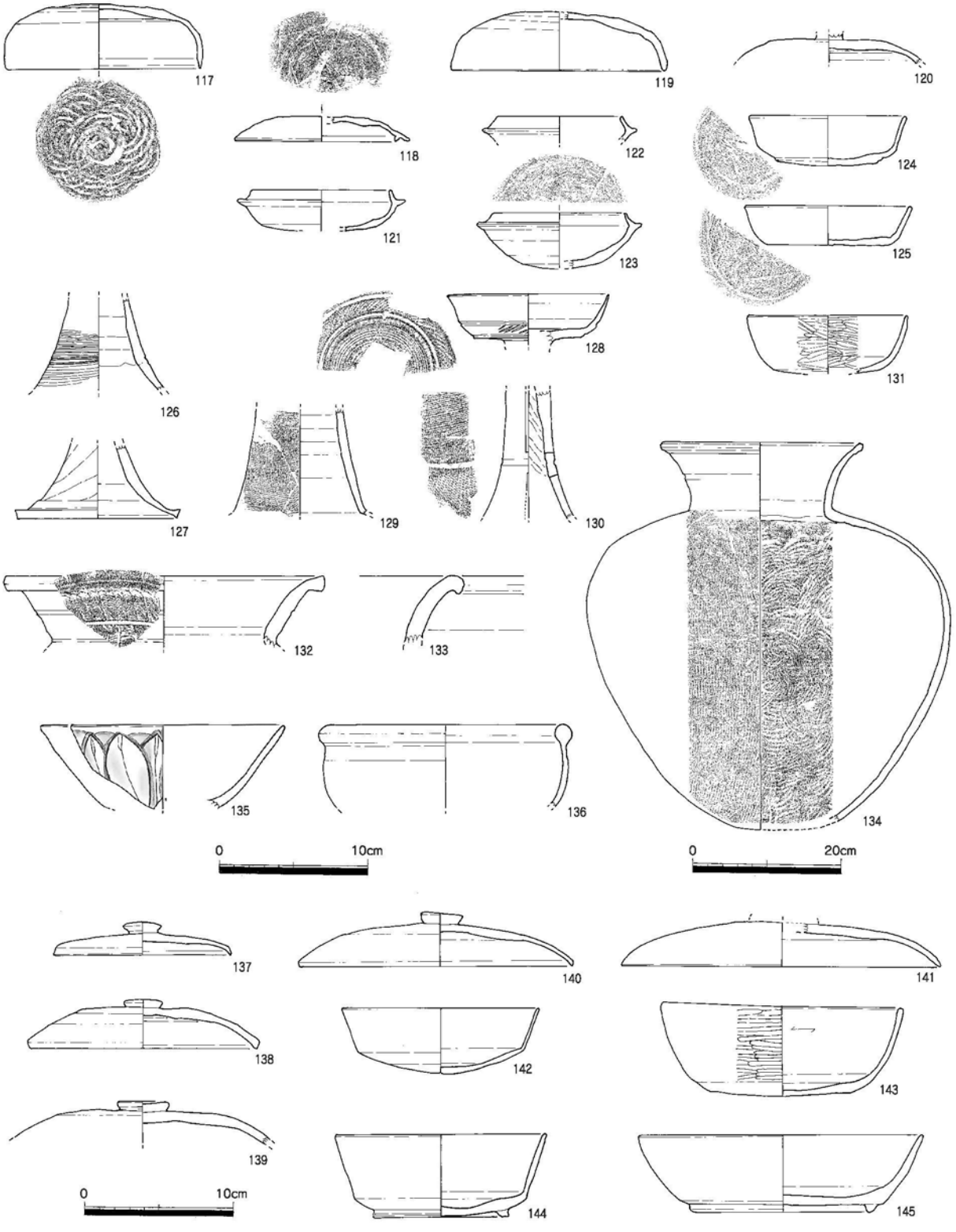


第50図　4号墳玄室床面遺物出土状況実測図（1/30）

れが古墳に直接伴って周溝へと延びていくのか、それとも後世の削平によるものなのか確認できなかった。墓道底面は約50cmの比高差で開口部へ下っている。

閉塞施設（第49図、図版24）　3面の閉塞を確認した。検出順に第1面、第2面、一番下の閉塞を第3面と呼称する。1面目の閉塞は玄門部の立石に接して前面に約1m、幅80cm、厚さ45cmの閉塞を行っている。閉塞石は石室主軸と平行にわずかに傾斜している。1石のみ片岩を使い、他は花崗岩である。大きさも一様ではなく、頭大から拳大の石を使う。この閉塞石中に1点の椀型鍛冶鉄滓が出土する。銹化しており、重さは315.5gを量る。7cm×8cm程の塊であったが、メタルが良好に遺存していたため、破裂してしまった。玄門部立石付近では標高47.8m～48.2m部分に構築する。第2面目の閉塞は標高48.2m～47.6m部分で、玄門部の立石から約8cm離れて、前面に幅60cm、長さ45cm、厚さ15cm～20cmの扁平な花崗岩を水平に倒して使用している。その周囲には拳大の石を充填する。玄門部の立石とは比高差10cm程となり、玄室へのステップ状となる感を受けた。2面目の閉塞石の上面は標高47.75cmを測る。その下には暗灰褐色土をはさんで、第3面目の閉塞を確認した。仕切り石の上とその前面に頭大、拳大の石を13石検出した。上面は標高47.6mを測り、2面目の閉塞によって大きく破壊された状況であると考える。さて、問題は玄門部の立石であるが、発掘当時は2回目の閉塞がある段階では玄室まで立石を持ち込むことは不可能である点から初葬段階の閉塞に伴うものであろうと考えていた。しかし、予想以上に深く床面に石が埋め込まれていることや埋め込むことによって、袖石の高さとほぼ同じ高さになり目路が通っていることなどから石室構築段階に玄室の一部として構築されたとも考えられる。天井石や敷石が遺存していないため推測の域をでない。

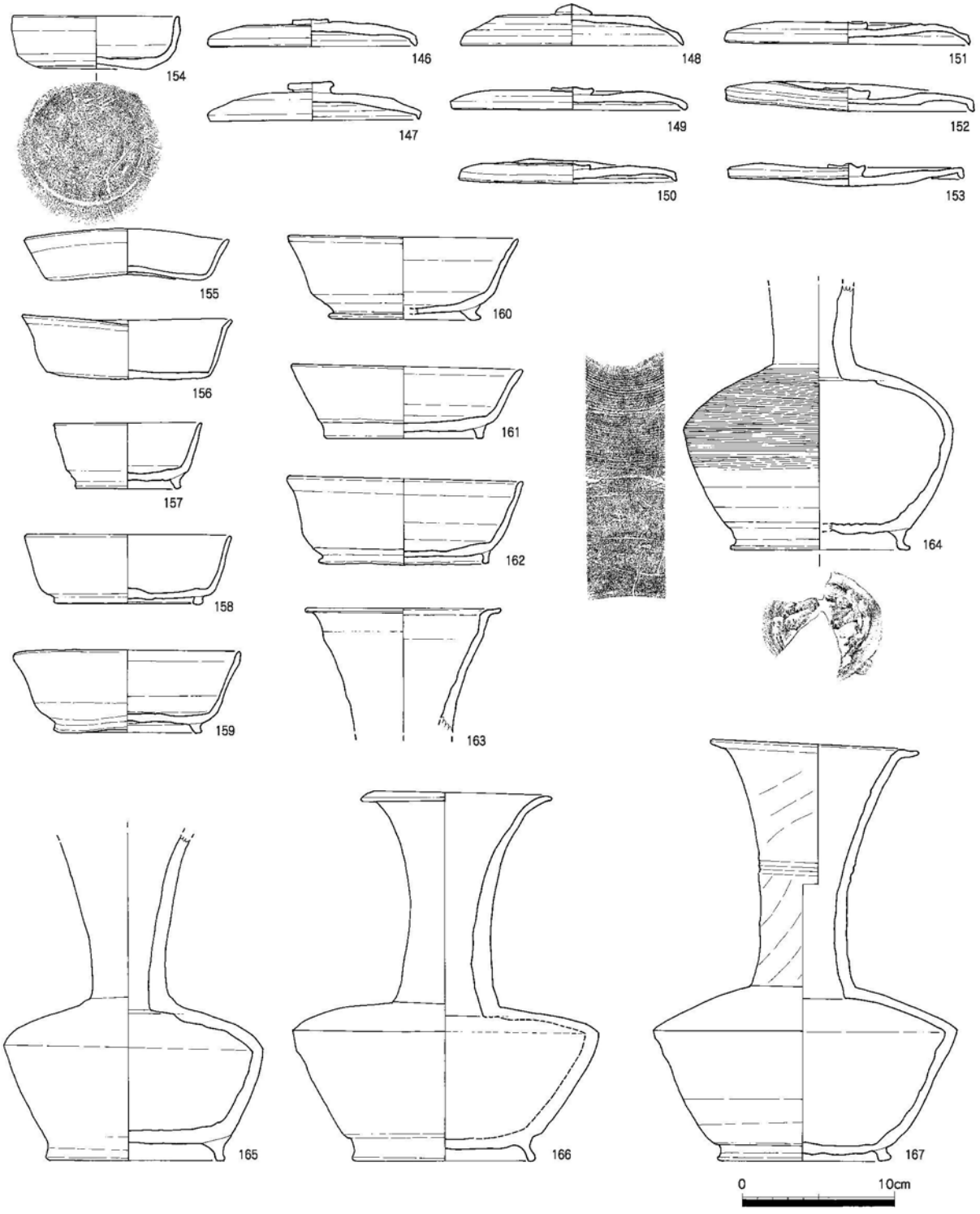
石室遺物出土状況（第50図、図版22・23）　床面には敷石があったと考えられるが、ほとんど地山まで攪乱された状況であった。須恵器・土師器は左側壁の羨道側から出土した。100を超える滑石製の臼玉は右側壁の奥壁側に集中して出土した。また、鉄器は右側壁側に沿って出土する。遺物は全て浮いた状況で出土しているが、大きく原位置を変えていないと考えられる。



第51図　4号墳墳丘・玄室出土遺物実測図（1/4・1/8）

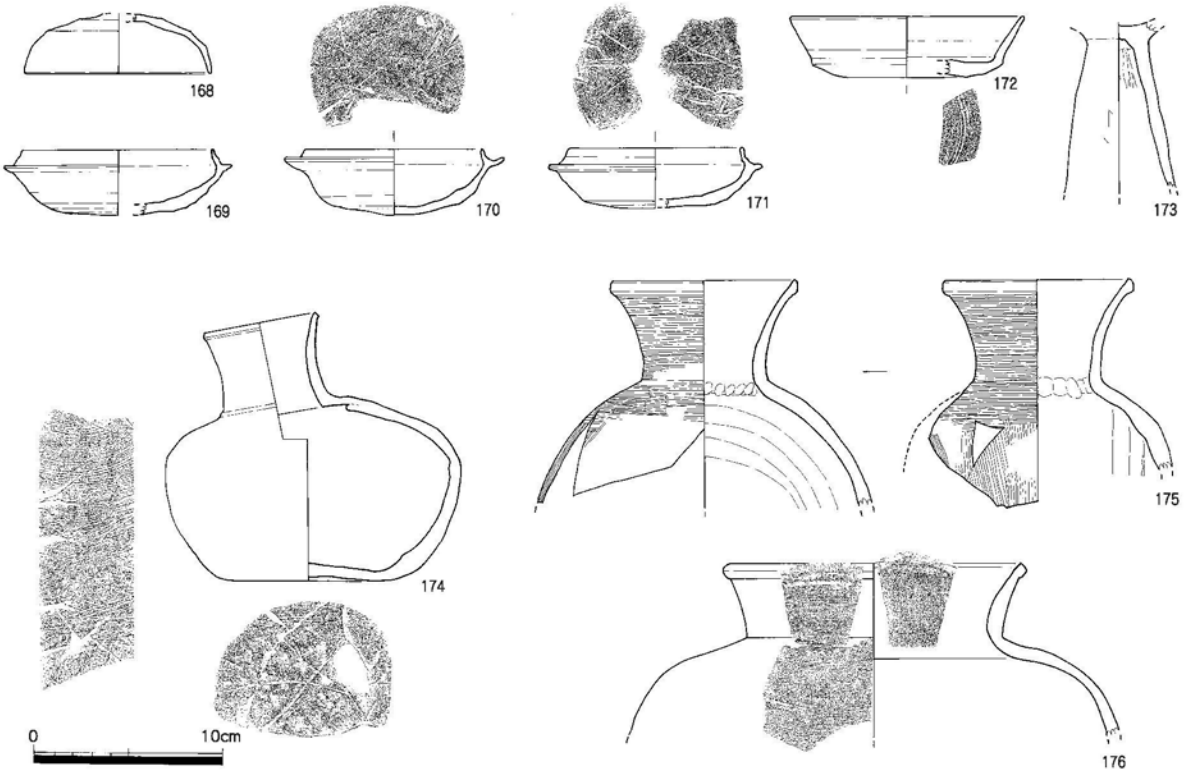
（4）出土遺物

土器（第51～53図、図版34～36）　117～134は墳丘出土の土器で、117～130・132～134は須恵器、131は土師器、135・136は陶磁器である。117～120は坏蓋で、117・119は天井部を回転ヘラ削りで調



第52図　4号墳玄室出土遺物実測図（1/4）

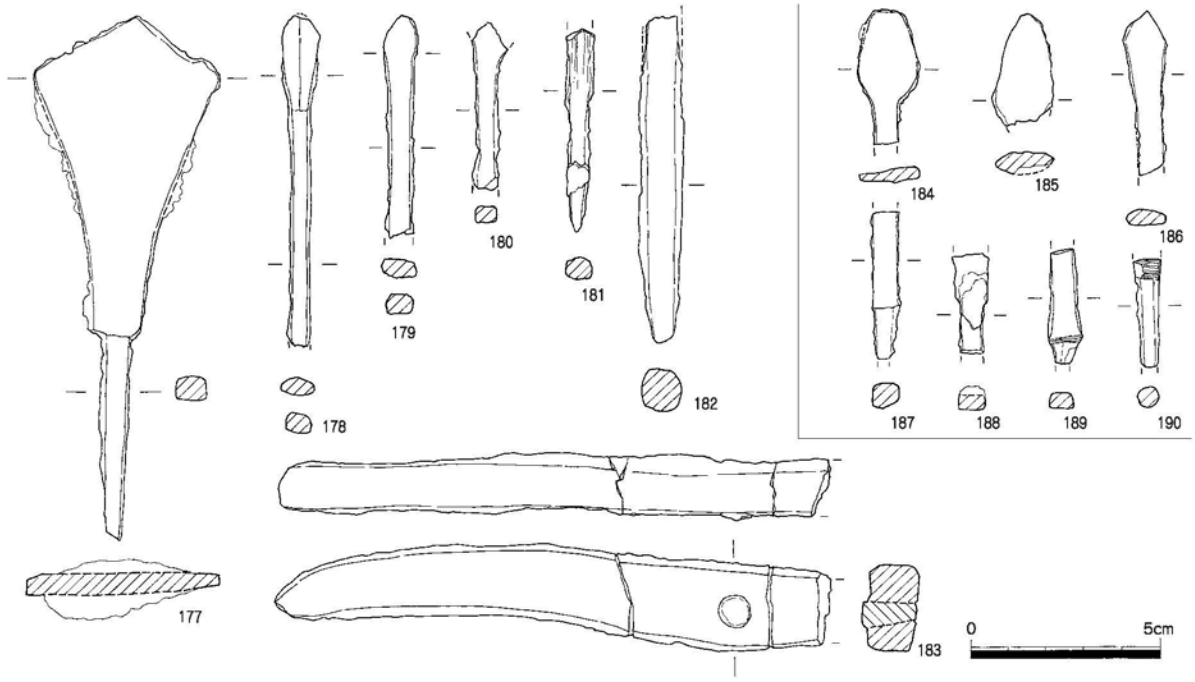
整する。天井部から口縁部にかけては丸みをおびる。117の天井部内面には当て具痕が残る。118は短い返りをもち、天井部にはヘラ記号を刻む。120は扁平な天井部につまみを付ける。121～125は坏で、121は浅く、底部は平である。123は丸みを帯びた体部で深く、内面にはヘラ記号が記される。124・125の底部は回転ナデ調整が行われ、同じヘラ記号が記される。126～130は高坏である。130は128と類似した胎土、焼成のため同一個体の可能性が高い。130は3方向に2段の透かし窓をもち、間に沈



第53図　4号墳墓道出土遺物実測図（1/4）

線が巡る。沈線より上はカキ目、下は波状文が描かれる。131は土師器の椀で、内外面磨きが施される。内面は灰黒色、外面は明橙色を呈する。132～134は甕である。135は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類の口縁部片である。136は陶器の鉢で、橙色の胎土に白濁色の釉をかける。137～167は玄室出土遺物である。137～145は土師器、146～167は須恵器である。137～141は蓋で、138は橙色、他は明橙色を呈する。146～153は須恵器の蓋で、水平に近い天井部に擬宝珠様のつまみを付す。154～162は須恵器の坏である。154の体部はやや丸みをおび、底部にヘラ記号を記す。157～162は高台付坏である。158、160は白灰色、他は灰色を呈する。163～167は台付長頸壺である。163は頸部外面に沈線状の段を有し、口縁部は外反する。白色砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。164は口縁部を欠損する。体部は丸みをおび、体部上半はカキ目、下半はヘラ削り、その中間は横ナデで調整される。内底は棒状の工具で押さえた痕跡がある。外底部は粗いナデで調整する。白色砂粒を多く含み、赤灰色を呈する。165～167は肩の張った体部で、体部最大径は上位にある。165・166は丁寧な回転ナデで仕上げられる。多量の白色砂粒を含み、165は灰黒色、166は灰色を呈する。167は体部下半には回転ヘラ削りを残すが、他は回転ナデで仕上げる。多量の白色砂粒を含み、灰色を呈する。168～176は墓道出土である。173は土師器、他は須恵器である。168は坏蓋、169～171は立ち上がりの付く坏である。口径は10cm前後で、やや深みのある丸い底部をもつ。170・171は内底面にヘラ記号が記される。172は高坏の坏部片である。173は太めの脚部片で、器面の摩滅は著しく調整は不明である。174は平瓶で、扁平な体部をもち、体部最大径は上位にあり、肩部は丸みをもつ。底部はやや上げ底で、上半はカキ目、下半は粗いナデで調整される。175は提瓶で、やや丸みをもつ扁平な体部に短く外反する口が付く。体部はカキ目調整される。頸部内面には指押さえの痕跡が残る。176は甕で、肩が大きく張る。

鉄製品（第54図、図版36）　全て玄室出土である。177は圭頭鏃で、全長13.9cmを測る。178～181は



第54図　4号墳鉄器実測図（1/2）

長頸鏃である。181の茎には木質が良好に残る。182は不明鉄器である。断面は一辺が1.1cmを測る方形を呈する。183は鉄鉗である。刃部片で、鋲で留めた部分が遺存する。鉄棒の断面は方形を呈する。支点部分には敲打痕が認められる。184～190は出土不明の鉄器である。前述の通り、3号墳と4号墳の確認できなかったものである。184・185は長頸三角形鏃、186は長頸鏃である。187～190は鏃の茎片で、190の断面は円形、他は方形を呈する。190には木質が付着する。

装身具（第55図）　230は明青色を呈したガラス小玉である。それ以外の191～295は滑石製の臼玉である。図化しえたものは105点あり、直径は55mm～73mm、長さは5mm～50mmと幅がある。遺物は直径の小から大へ、その中でも厚みの薄いものから厚いものへと掲載した。周縁はすべて丁寧に研磨され、上端・下端には一部擦痕を残すものもある。色調は白灰色から灰色を呈し、光沢をもつ。中には210・228・264のように赤みをもつもの、197・217・218・282のようにやや緑を帯びたものがある。また、232は風化し、白色を呈する。

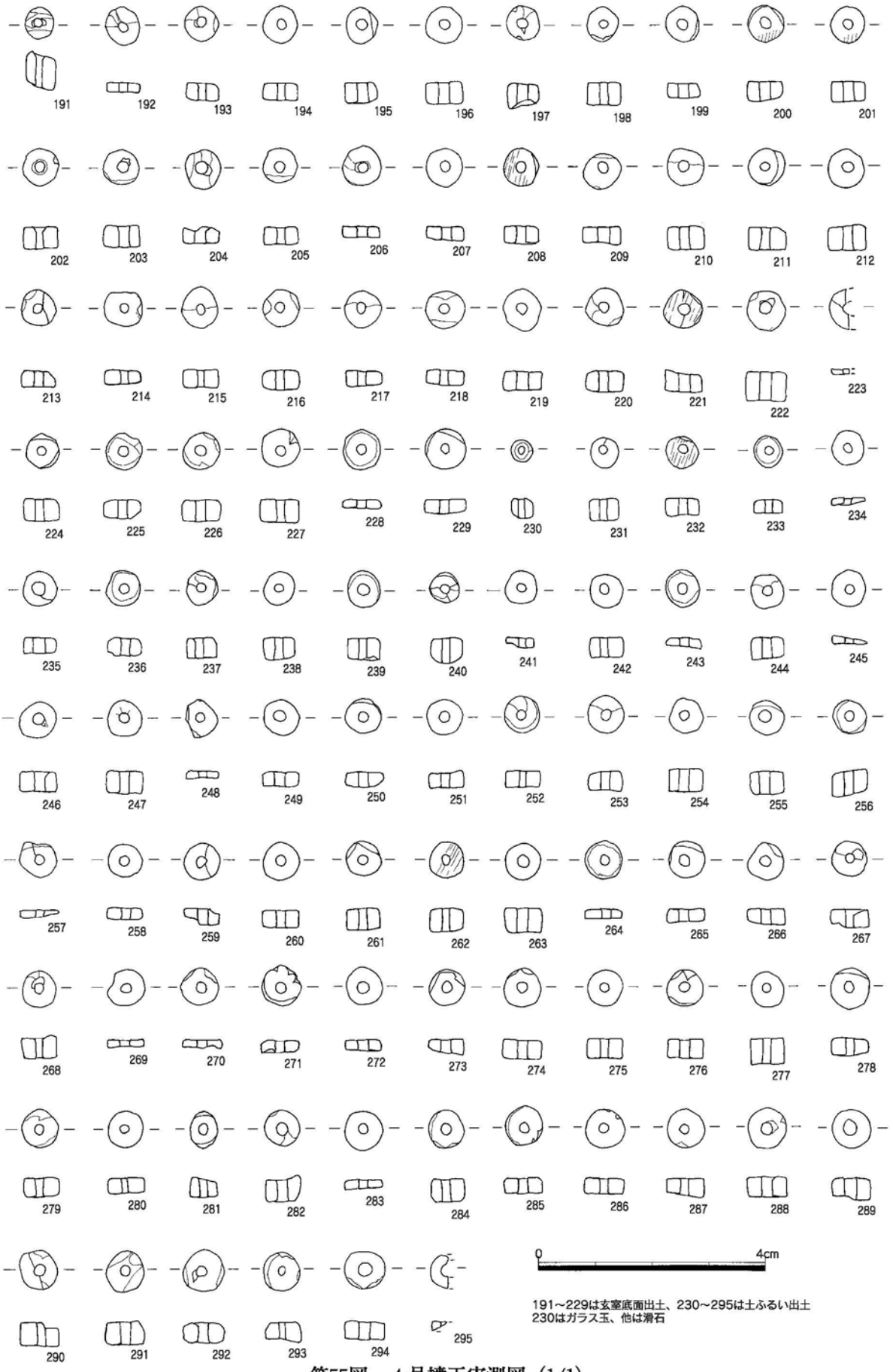
5　A－5号墳

（1）古墳の位置と現況（付図1、図版25）

4号墳から南西方向に延びた尾根は、標高57.0m付近で東側へ曲がる。この変換部分に5号墳が位置する。周辺は後世の造成で大きく削平され、頂部はやや平坦な様相を呈する。表土からは花崗岩の転石がのぞいており、古墳が存在する可能性を微かにうかがうことができた。

（2）墳丘（第56・57図、図版25）

墳丘は全く遺存していない。表土を剥ぐと、黄褐色土が堆積する。これは地山が根などにより汚れた層であると考えられる。この黄褐色土の下は花崗岩風化土の地山である。墳径をうかがえるのは、かすかに残っている地山整形からである。しかし、この地山整形も確実に古墳に伴うものであるかは遺存状況が悪いため不明である。少なくとも直径8mを超える円墳であると思われる。現存の墳頂部は標高57.0m、墳丘裾部の標高は墓道部分で56.25mを測る。



第55図　4号墳玉実測図（1/1）

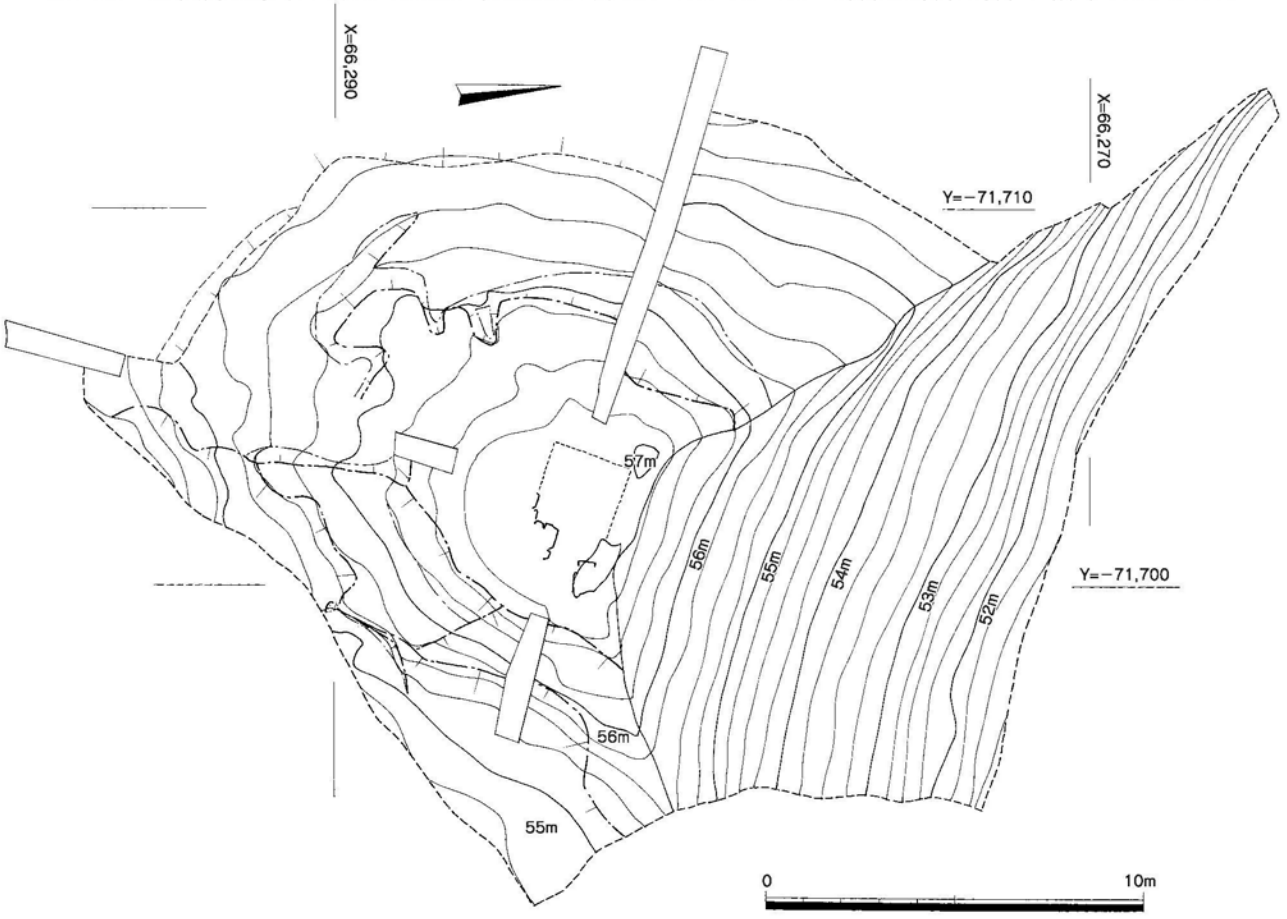
地山整形（第56図、図版25）　古墳の周囲には石室中心から約４ｍ付近で地山の変換ラインが窺えるが、土層からは全く墳端を探すことはできなかった。また、尾根の頂部付近に造成されたためか他の古墳と較べ、石室掘方も浅かったのではないかと考えられる。周溝等も全く残っていない。墳丘は大半が盛土によって構築されたのではないかと考えられる。Ａトレンチでは15°の角度で緩やかに下っていき、石室中心から12mの間では明確な墳端は見られない。ＢトレンチでもＡトレンチ同様、20°の傾斜で落ちていく。しかし、17m付近まで変化は見られない。東側は石室中心から４ｍ付近までは墓道が延び、締りのない黒色土が堆積するが、その先は後世の削平で大きく削られる。墓道は長さ50cm、幅は確認できなかった。標高56.75mを巡るラインに長さ５ｍを測る略方形の平坦面を造り、その平坦面に石室掘方を深さ20cm程掘削している。本来の掘込み面は不明である。基底面はわずかに北側よりも南側が低くなっている。

墳丘遺物出土状況　墳丘上からは須恵器の坏蓋、坏身、小壷の胴部片が出土する。大半が墓道付近のⅠ区とⅣ区からである。

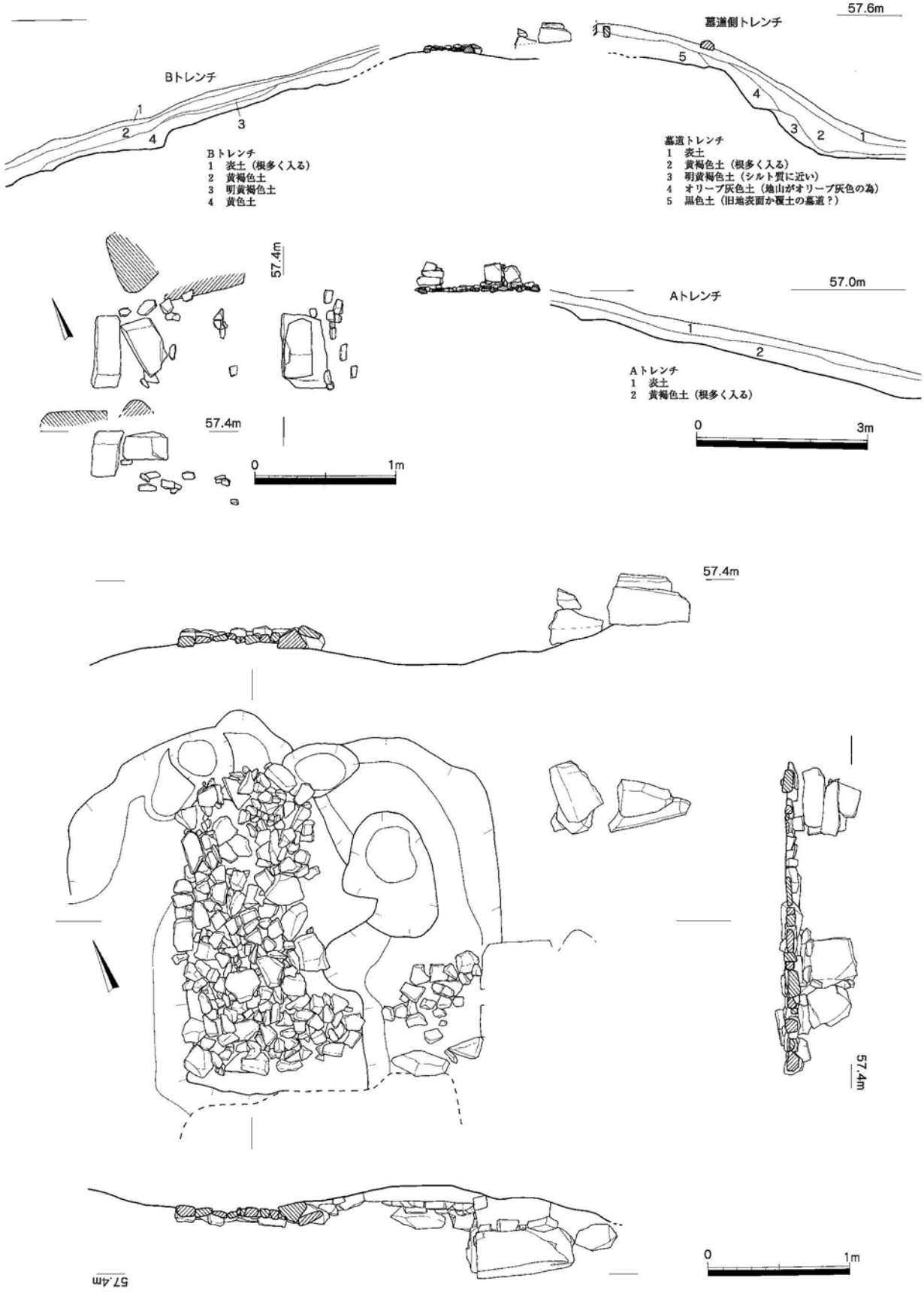
（３）埋葬施設（第57図、図版26）

主軸方位をＮ－68°－ｗにとり南東側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。石室は破壊されており、床面の敷石、袖石や羨道部の腰石がわずかに残るだけである。

石室掘方（第57図、図版26）　標高56.75m付近に長さ５ｍを測る略方形の平坦面を造り、その平坦面に石室掘方を掘削している。右側壁部分には深さ20cm程のわずかな掘り込みが残るが、左側壁部分は木の根などで攪乱され全く遺存していない。奥壁部分は腰石を据える溝状のものがかすかに窺える。玄室の掘方は現況で長さ3.0m、幅2.5mを測る。しかし左側壁部分は腰石部分も削平されてしま



第56図　５号墳地山整形状況図（1/200）



第57図　5号墳墳丘土層断面図（1/100）・閉塞状況図・石室実測図（1/40）

第58図　5号墳玄室遺物出土状況実測図（1/30）

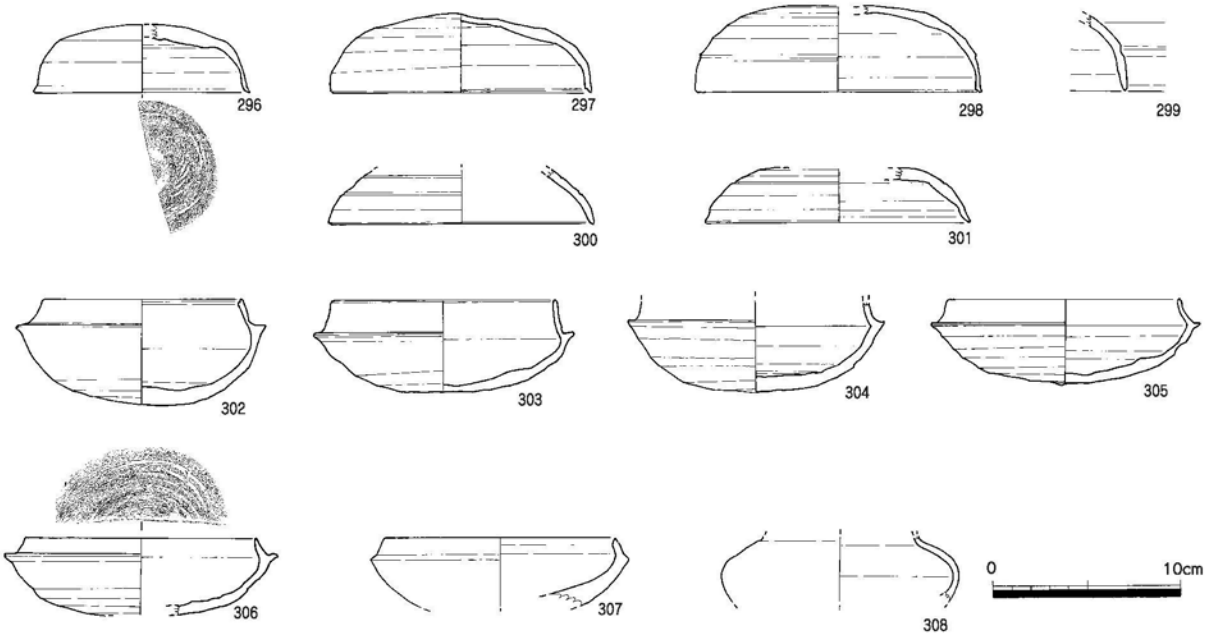
っているため、その部分も考慮すると幅は2.5m以上となり、平面プランは正方形を呈すると考えられる。本来の掘込み面は削平のため不明である。腰石は大半が抜かれるが、基底面では腰石固定のための溝が巡っている。羨道部・墓道部は表土除去後、直下が地山であり、ほとんど掘削が見られなかったため、掘り込みプランを確認できなかった。

玄室（第57図、図版26）　遺存する床面の敷石から、一辺が220cmの正方形プランを呈すると考えられる。腰石は右側壁中央部に１石遺存していたが、玄室側に倒れた状況であった。左袖石は横位にして据えられ、その上に１段残る。袖石と左側壁との間には幅30cmほどの石を据え、石の間には多くの小振りの石が充填される。仕切り石の掘り込みは確認できず、地山に直接置かれた可能性が高い。床面の敷石は想像以上に良好な状態であった。奥壁側半分はほとんど乱されていないと考えられる。敷石上には鉄鎌と装身具が出土する。左側壁部分も敷石と片付けられた須恵器が一括で出土する。敷石は大振りの石の間に小振りの石で充填しており、丁寧に敷き詰められる。

羨道部（第57図、図版26）　短い羨道が敷設する。左側壁部は約１ｍを測り、丸みを帯びた花崗岩を１石据え、その上に土を固めながら１石積んでいる。右側壁は推定1.5mを測り、墓道側に１石遺存する。この石の底面は標高57.1mを測り、袖石の基底面と較べるとかなり高くなっている。羨道部には天井石は載っても１石と考えられる。羨道は玄室の中央に接続せず、やや右側壁側によっている。

墓道（第56図、図版26）　先端部は大きく削平される。現状では長さ50cm程を確認できるが、幅等は検出できなかった。土層からは厚さ30cm程の黒色土が見られ、その直下は暗茶褐色の地山層である。この黒色土は緩やかに地山とともに落ちていく。

閉塞施設（第57図、図版26）　閉塞石は羨道部の玄室側から60cmの部分に遺存した。幅50cm、高さ



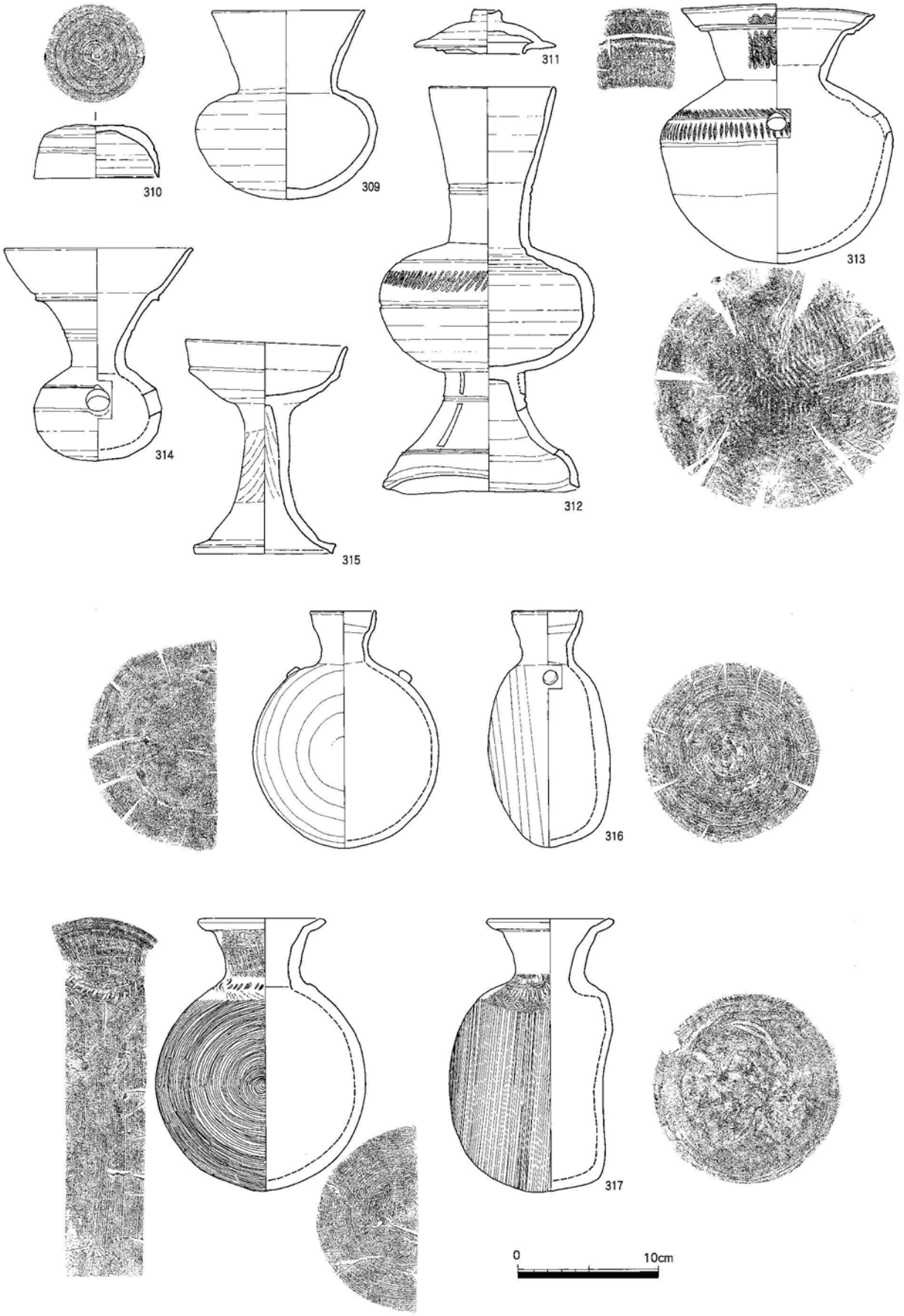
第59図　5号墳墳丘出土遺物実測図（1/4）

30cm、厚さ15cmの扁平な花崗岩を立てて使用する。閉塞石の上面は標高57.4mを測り、袖石2段目の高さとほぼ目路を通している。長さ40cm、高さ18cm、厚さ20cmの花崗岩が前面に横位に置かれる。上面のレベルは揃えるが、接さず、ちぐはぐな感を受ける。その前面には割石が転がる状況である。また、立石状の閉塞石は壁面と接さず、その間に他の石等も出土しなかった。覆土は黒色土である。

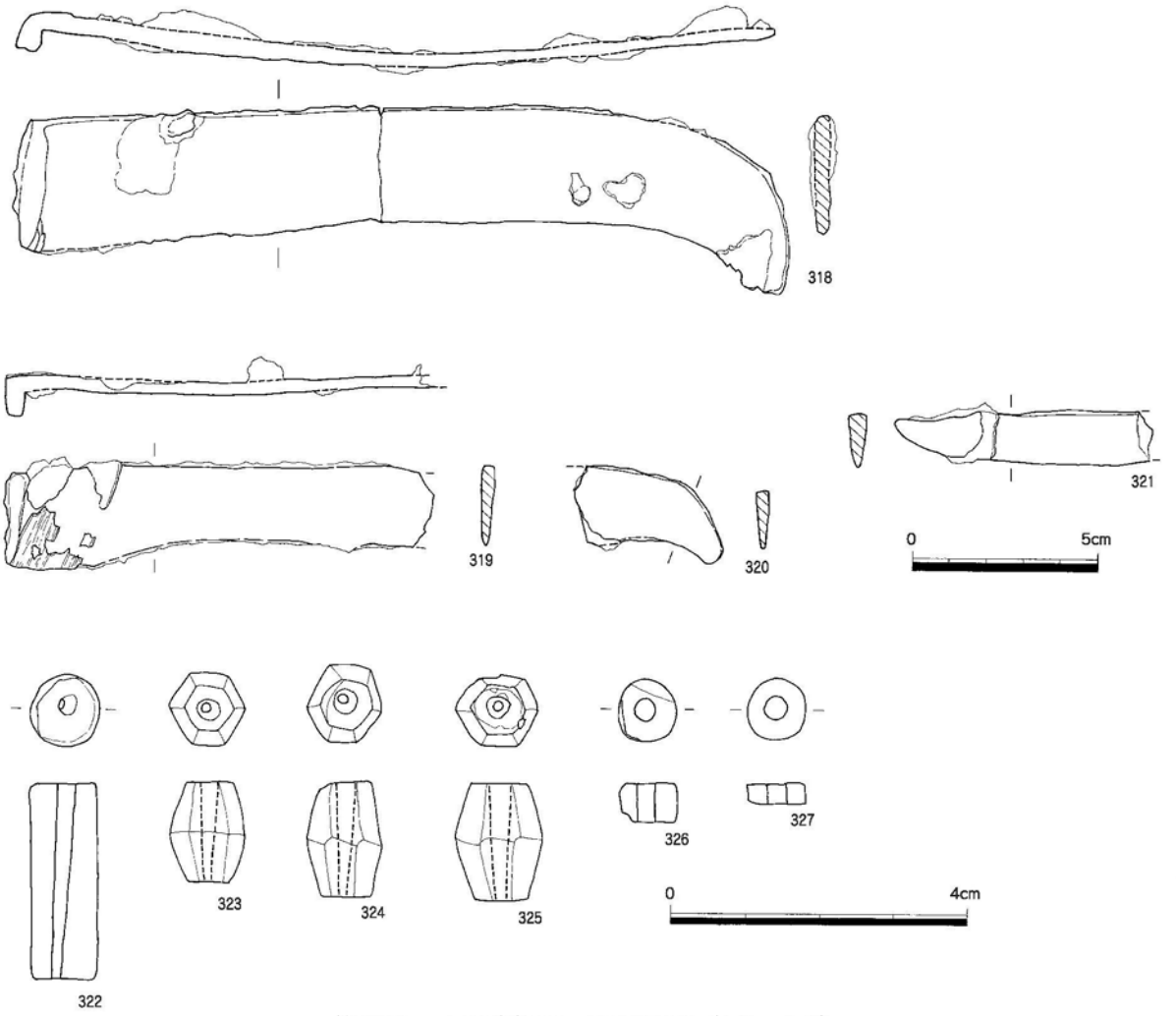
石室遺物出土状況（第58図、図版26）　奥壁側半分はほとんど撹乱を受けておらず、敷石は良好な状況であった。奥壁側の敷石直上には鉄鎌（318）が置かれ、その前面には碧玉製の管玉1点（322）、棗玉3点（323～325）、滑石製臼玉2点（326・327）が出土した。また、左側壁部分には須恵器が集中していた。しかし、ほとんど全て敷石直上の出土ではなく、敷石との間に土を挟んだ状況であった。坏蓋、高坏、台付長頸壺、壷、提瓶が出土するが、時期差があり、追葬の段階で片付けられたものと考えられる。玄室からは他に鉄鎌が2点と刀子が1点出土する。

（4）出土遺物

土器（第59・60図、図版36・37）　296～308は墳丘出土の須恵器である。296～301は坏蓋で、296は天井部を回転削り、口縁部はわずかに外方に引き出し、内面には叩きの痕跡が残る。叩きは部分的にナデ消している。298は沈線を天井端部に巡らすことで、稜をつくり、口縁端部はわずかに窪みを入れ、段をなす。胎土は精良で、灰色を呈し、焼成は良好である。299は298とほぼ同形だが、口縁端部はそのまま引き出している。白色砂粒を多く含み、外面は灰色、内面は橙色を呈する。300は体部が丸みをおび、沈線状の浅い窪みが2条巡る。301の口縁端部は外方に引き出す。金雲母、白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は明橙色を呈する。302～307は坏である。302の身は深く、口縁内面には沈線が1条巡る。底部は広く回転ヘラ削りされる。303～305の口縁部は長く上方に延びる。306は内面に当て具痕が残る。307は土師器で、いわゆる模倣坏である。立ち上がりを作るが、受部はわずかに外方へ摘み出すだけである。受部から底部にかけてはかなり厚くなる。胎土には赤褐色粒と金雲母を含み、明橙色を呈する。308は須恵器の短頸壺で、胴部は大きく膨らむ。309～317は玄室出土遺物である。309は土師器、310～317は須恵器である。309は丸底壺で、口縁部を一部欠損する。胎土は精良で、明橙色を呈する。310は小型の蓋で、金雲母を多量に含み、にぶい褐色を呈する。311



第60図　5号墳玄室出土遺物実測図（1/4）



第61図　5号墳鉄器・玉実測図（1/2・1/1）

は蓋で、312とセットになると考えられる。受部付近には重ね焼きが残る。つまみの上部は凹状に窪んでいる。312は台付き長頸壺で、脚部には2条の沈線が入り、三方向に2段の透かし窓が入る。1段目は高さが3.1cmを測り、長方形を呈する。上方2段目の透かし窓は高さが1.5cmの長方形を呈するが、貫通していない。体部は中位と肩部に沈線が入り、その間には刺突文が刻まれる。頸部中位に2条の沈線が巡り、口縁部はそのまま延びる。311・312ともに5mm大の白色砂粒を多く含み、灰黒色を呈する。311の天井部には焼き膨れがあり、312の脚部はゆがむ。ともに自然釉がかかる。313は大型甕で、最大胴部径と肩部には沈線が巡り、円孔は肩部付近に中位やや上方に上外方から下内方に穿孔される。段の上下には波状文が描かれる。314は甕である。体部下半はカキ目、それ以外は回転ナデで調整される。胎土に白色砂粒、金雲母を含み、黄灰色を呈する。315は高坏である。白色砂粒を多く含み、明褐色を呈する。坏部は中位に段を有し、そのまま口縁部に至る。脚部内面にはしぼり痕があり、内外面ナデで調整される。316・317は提瓶である。316は小型品で、体部の膨らみはなく、口縁部は外反するが、中位程で、上方に延びる。体部側面肩部にはボタン状の把手がつく。回転ヘラ削りと回転ナデで調整する。焼成は良好である。317の体部前面は緩やかな丸みをもち、背面は直線的である。背面は指おさえで調整するが、雑である。他はカキ目で調整される。頸部の基部には刺突文が刻まれ、頸部外面には雑な波状文が描かれる。他に墳丘から須恵器の大甕の小片（内面は円弧叩

きの後、部分的にナデ、外面はナデ調整を行う。）が出土する。

鉄製品（第61図、図版36）　全て玄室出土遺物である。318～320は鎌である。318は完形品で、長さ21cm、基部には着柄のための折り曲げがある。着柄部は幅広く2.9cmを測る。刃部は両歯で、先端は尖る。319は刃部を欠損する。318同様、基部は折り曲げられる。両歯である。320は刃部片である。321は刀子である。

装身具（第61図、図版巻頭図版５）　322～325は碧玉製である。322は大型の管玉で、長さ25.6mm、径91mmを測り、片面から穿孔する。マーブル状の暗緑色を呈する。323～325は切子玉で、322と同じマーブル状の暗緑色を呈する。323は長さ13.6mm、最大径10.0mm、端部径9.2mmを測る。324は長さ15.1mm、最大径11.1mm、端部径10.4mmを測る。325は一部欠損し、長さ16.0mm、最大径11.1mm、端部径10.1mmを測る。全て片面からの穿孔で、325はほぼ中央に穿孔され、他は一方によっている。断面は正六角形を呈し、丁寧に研磨される。326・327は滑石製の臼玉である。326は長さ5.1mm、径8.6mm、327は長さ2.9mm、径2.9mmを測る。端部は両面とも丁寧に磨かれるが、側面には縦方向の研磨痕が残る。

6　Ａ－６号墳

（１）古墳の位置と現況（付図１、図版28）

５号墳から30m程東側に6号墳が位置し、標高は58mを測る。尾根の頂部に占地し、古墳の北側と南側は大きく削平される。段造成が行われており、非常に痩せた尾根となっている。現況では表土より花崗岩が１石見られ、頂部がわずかに陥没しており、石室の存在をうかがえた。また、頂部の東側、西側が低くなっており、墳丘状にみえた。明確な周溝等は確認できなかった。

（２）墳丘（第62・64図、図版27）

盛土は全く確認できなかった。現況で、北側と南側は削平を受けるが、表土を剥いだ段階で東側と西側も石室際まで削平を受けていた。Ａトレンチ、Ｃトレンチの土層からは周溝を確認でき、ほぼ墳径は９ｍを測ると考えられる。Ａトレンチでは石室中心から墳端までは約4.2m、Ｃトレンチでは約4.7mを測る。現存の墳頂部は石室の西側で標高58.25m、墳丘裾部の標高は周溝部分で57.75mである。

地山整形（第63図、図版27）　周溝は西側で長さ約2.5m確認でき、Ａトレンチでは幅1.5m、深さ30cmを測る。覆土は上層が汚れた暗黄褐色土と灰黒色土、下層には灰黄色土に灰白色砂がブロック状に混在する。上層と下層の境で、須恵器の坏蓋（328）が出土した。東側でも周溝を確認したが、西側程明確ではなかった。Ｃトレンチでは幅1.9m、深さ20cmを測り、やや崩れた感を受ける。覆土は黒色を呈し、須恵器の坏身（329）が出土した。周溝の内側は略平坦面を造り出し、この平坦面に石室掘方を掘削する。墳丘基底の地山標高は西側の方が若干高く、標高58.25mを測る。

盛土（第64図、図版28）　盛土は全く確認できなかった。現況で東側と西側には盛土が遺存していると思われたが、表土を掘削すると直下には黄褐色土を検出し、これは雑木の根等で汚されていた。石室の埋土には灰白色砂質土が使用され、細かくは判別できなかった。

墳丘遺物出土状況　墳丘上からも遺物はほとんど出土しなかった。墳丘の大半を削られていることに起因すると考えられる。わずかであるが、須恵器の大甕の破片が出土する。

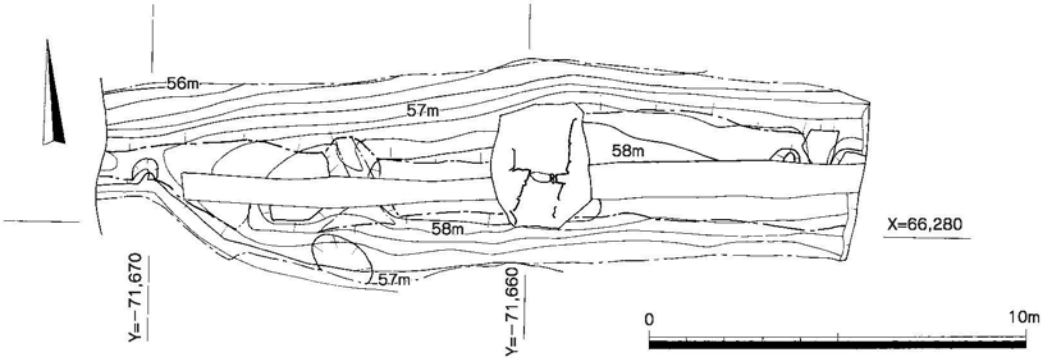
（３）埋葬施設（第65図、図版27・28）

主軸方位をＮ－13°－Ｅにとり南側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。石室は北側の奥壁側半分を削平され、南側は墓道部分を失っている。羨道部の遺存状況は比較的良好である。

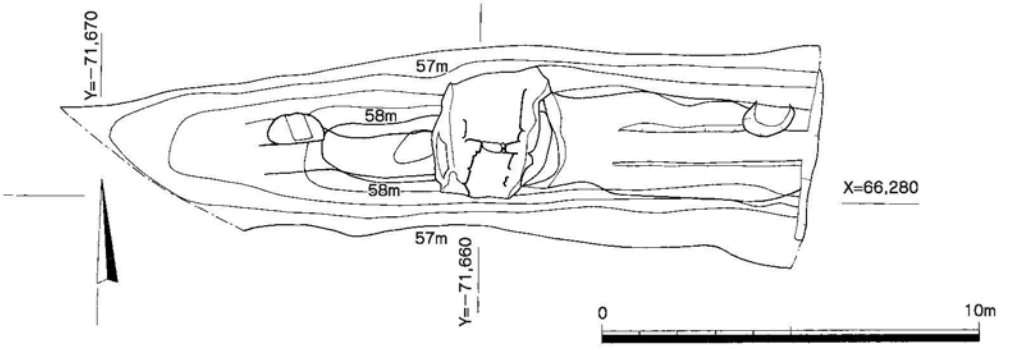
石室掘方（第63・66図、図版27・28）　墳丘基底の地山から大きく掘削して石室の掘方を造っている。

墳丘基底面の標高は高い西側で58.25m、石室掘方の標高は約57.5m、比高差は75cmを測る。掘方は現況で縦3.3m以上、幅は最も膨らんだ袖石部分で3.6mを測る。玄室から羨道部まで続く長方形プランと考えられる。左側壁側の基底面では腰石固定のための溝を検出した。右側壁側では平坦面に直接腰石を据えている。

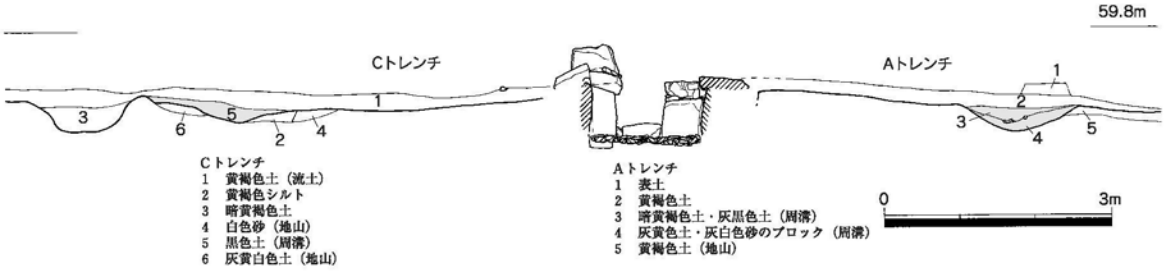
玄室（第65図、図版27・28）　玄室は奥壁側を大きく削平されている。前壁幅145cm、両側壁長180cm以上を測る。平面プランは長方形と考えられる。左側壁には腰石が１石据えられ、その上に小振りの石、２石を小口積みする。中央部分に１石やや大振りの石が面を石室側に向けて据えられるが、これは裏込めの石である。右側壁には腰石が２石残り、袖石側の腰石は立てて、その隣の腰石は横位にして据えている。横位にした腰石の上には、小振りの石で２段目を積む。袖石はともに立てて使用するが、高さは揃っていない。また、他の古墳と同様、腰石には多くの根石が使用されていた。玄門部の仕切り石には長さ60cmの花崗岩を横位に据えるが、長さが足りないため小振りの石２石で補填する。床面には比較的大きな割石を用いて敷石とする。腰石が遺存する部分は良好に残っている。標高57.80mで床面を構築する。すべて花崗岩で構築される。



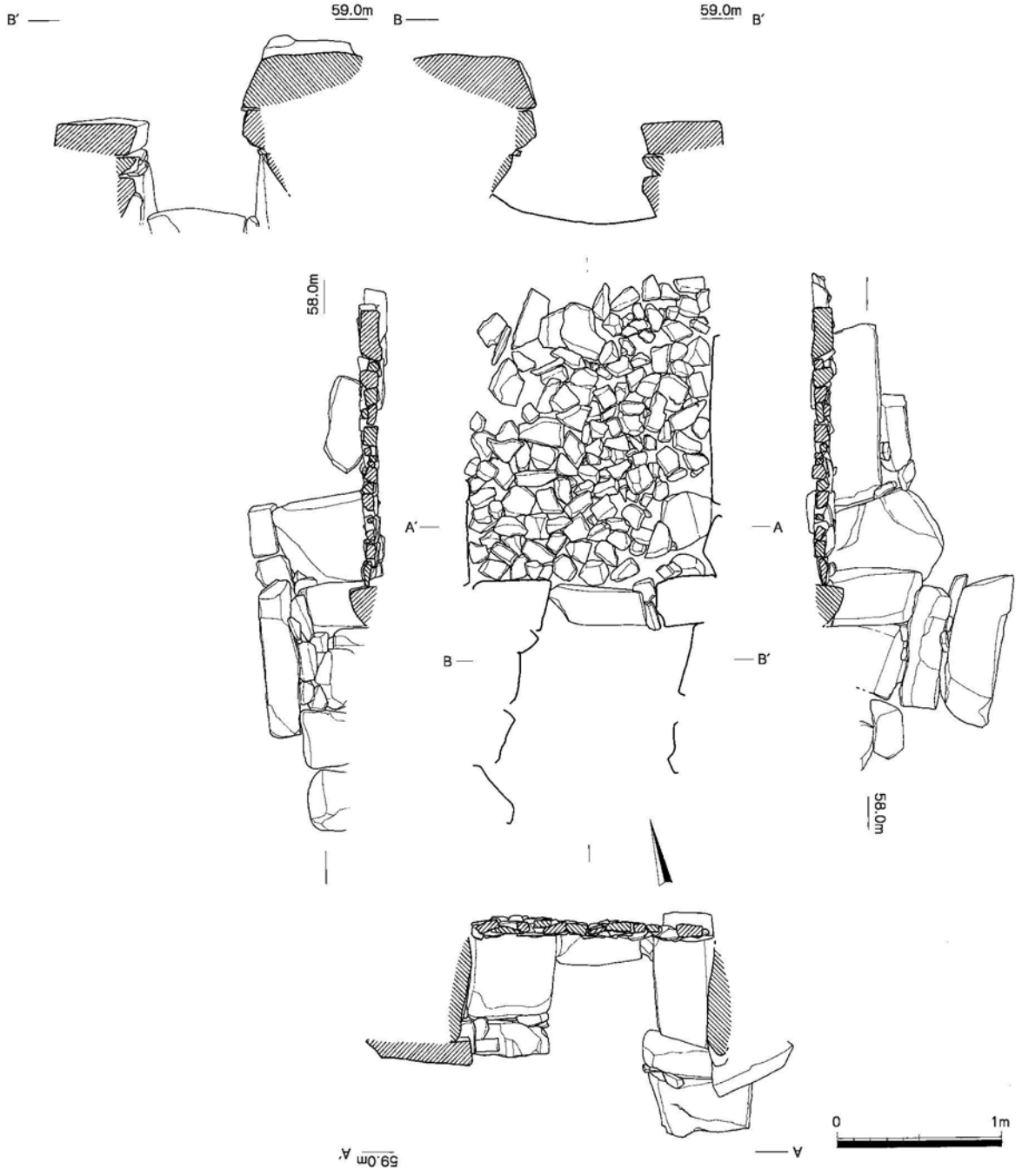
第62図　６号墳墳丘遺存状況図（1/200）



第63図　６号墳地山整形状況図（1/200）

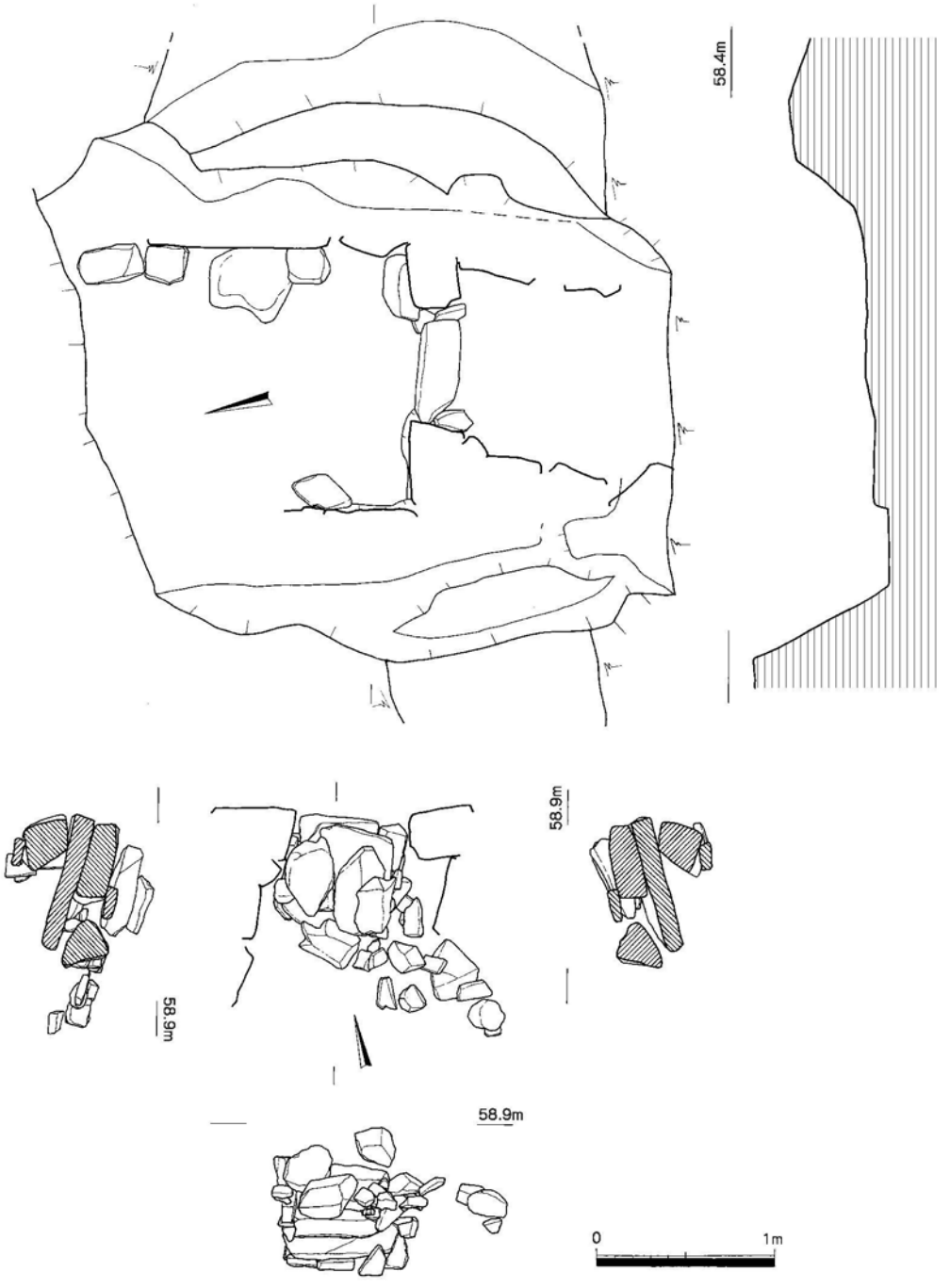


第64図　６号墳墳丘土層断面図（1/100）



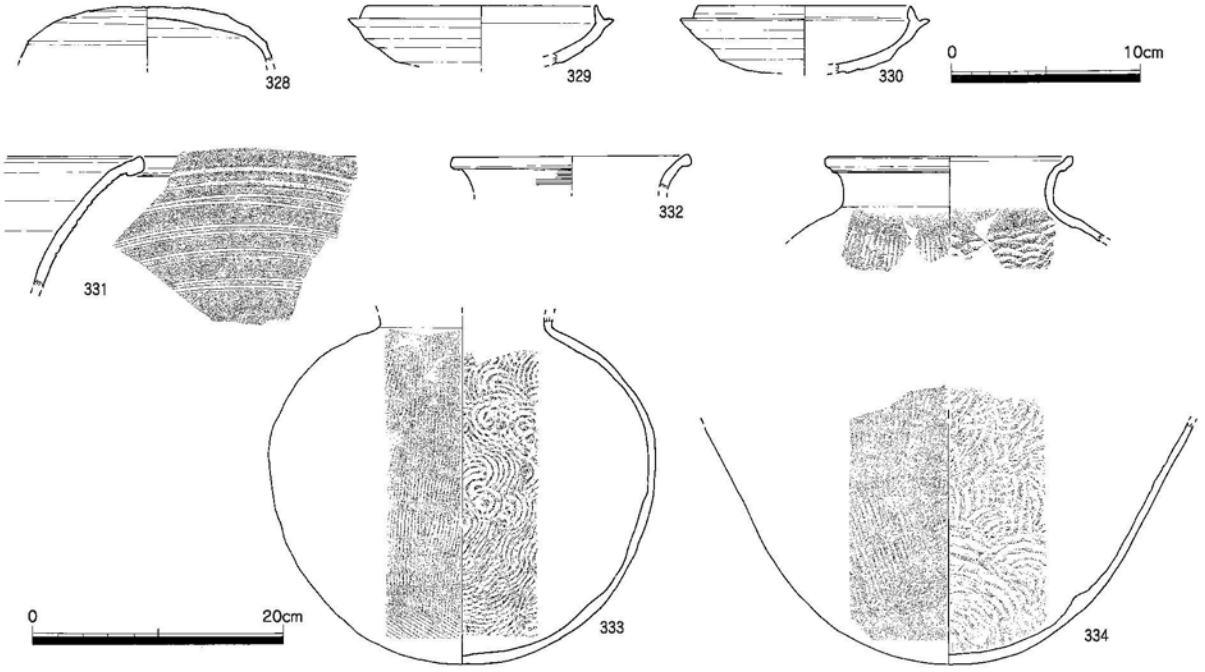
第65図　6号墳石室実測図（1/40）

羨道部（第65図、図版27・28）　短い羨道が敷設する。玄室主軸より羨道部の主軸は17°西側に振れる。現況で、両側壁は長さ約160cm、幅100cmを測り、ほぼ平行に開く。墓道側は削平を受けている。羨道の断面は「U」字状を呈しており、側壁部分は高くなる。右側壁には2石、左側壁には3石腰石は残る。いずれも玄室の腰石と比較すると小振りで、左側壁では袖石から羨道にかけて架構された石と腰石の間には小振りの石が充填される。そのため、きれいに面が揃っていない。3石目の石は削平時に動いている可能性がある。右側壁は左側壁以上に粗である。玄室側の石は地山から浮いた状態で、土壁が作られ、石は横位に据える。その上には袖石からの2段目の石が横位に積まれる。2段目、3段目の石はやや墓道側へ傾いている。



第66図　6号墳石室掘方・閉塞状況実測図（1/40）

閉塞施設（第66図、図版28）　閉塞は長さ80cm、幅75cmの広がりで確認し、墓道側に拳大の石が点在する。高さは70cmを測る。長さ75cm、幅55cm、厚さ10cmの扁平な石が閉塞石の中位で確認できるが、この石は墓道側にやや傾いて置かれている。側面からの断面図ではこの石の上と下では石の積み方の角度が違ってきていることから、時期差がある可能性もある。しかし、扁平な石はその直下との石とは土砂を挟むこともなく接していたことや玄室側からきれいに面が揃っていることなどは同時期のものと示唆しているように思える。また、特異な点として先にも触れたが、玄室側からきれいに面を揃えていることが挙げられる。比較的扁平な石を下から3段は小口積みし、幅の足りない部分に



第67図　6号墳出土遺物実測図（1/4・1/6）

は小振りの石を積む。4段目以上は横長の石を今度は縦方向に2石並べている。この辺りからは面をきれいに形成できなくなっている。

石室遺物出土状況　玄室、羨道からは1点も遺物は出土しなかった。

（4）出土遺物

土器（第67図、図版38）　328は坏蓋で、天井部と体部の境には段を有する。天井部は回転ヘラ削り、内面はナデ調整である。329・330は坏である。立ち上がりは短く、体部は丸みをもつ。ともに自然釉がかかり、330は砂粒が付着する。331～334は甕である。331は頸部に沈線を巡らせ、縦方向の刷毛目を部分的に入れて、文様風にする。332は内外面ともにナデで調整する。黒色粒、白色砂粒を多く含み、淡橙色を呈する。333は球状の体部をもつ甕で、口縁部は欠損する。外面は平行叩きの後、部分的にナデ、内面は丁寧な円弧叩きを行う。334は長胴の甕に短い口縁部が付く。口縁部は強く外反し、端部は内湾させておさめる。外面は平行叩きののち、部分的にナデ消し、内面は円弧叩きが残る。他に甕の体部片で、内面の円弧叩きをナデ消しているものが出土する。他に土師器の小片が出土する。

7　A－7号墳

（1）古墳の位置と現況（付図1、図版30）

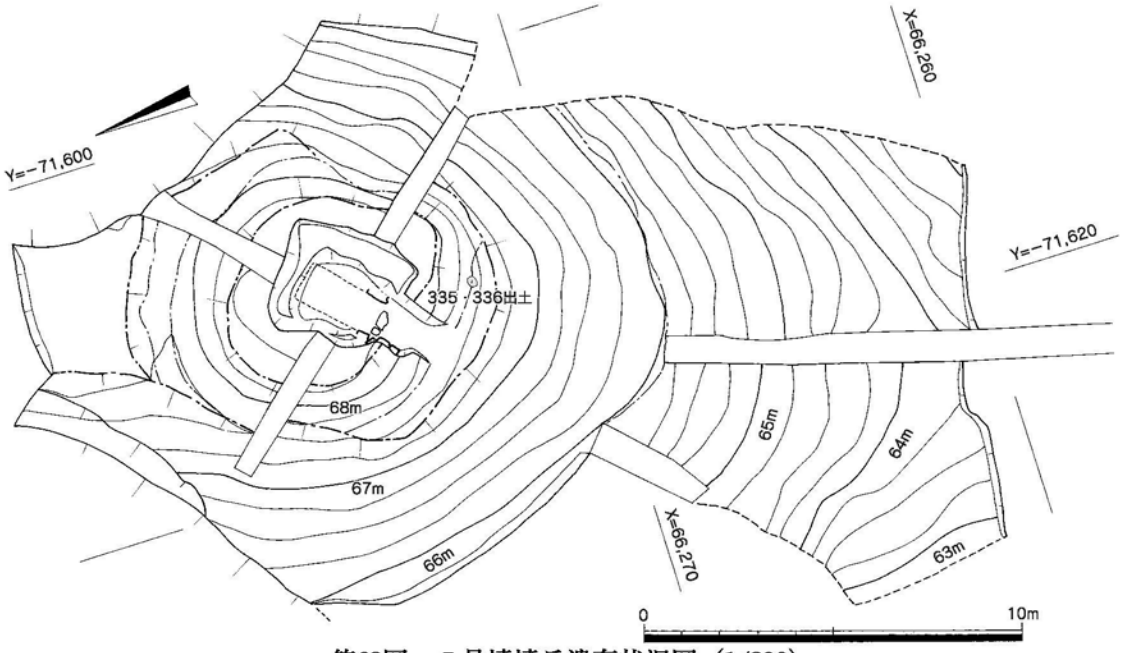
7号墳は北東から延びてきた尾根が、西側と南側へ分岐する地点に立地し、標高68mを測る。現況では頂部全体が小高い山となっており、石室部分がやや陥没する。古墳の北側と東側は大きく削平され、崖となっている。

（2）墳丘（第68・70図、図版29）

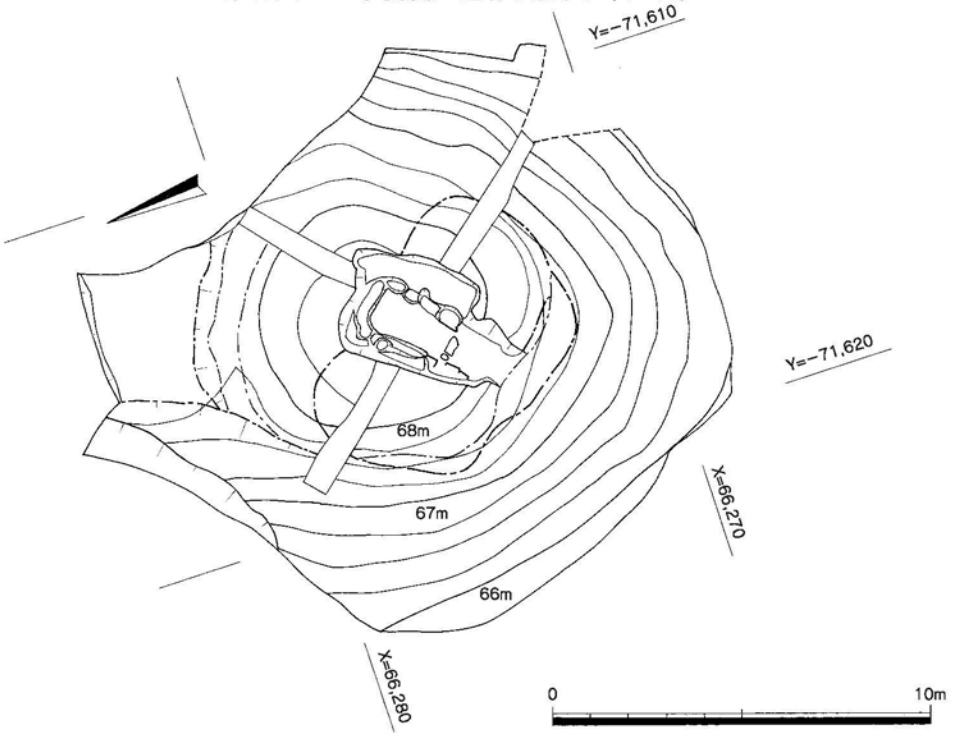
石室は玄門付近と羨道部がわずかに遺存するだけで、大半の石は抜かれていた。盛土も流失しており、各トレンチの土層からも墳端は窺えない。等高線はほぼ間隔を変えずに墳頂部から巡っている。唯一奥壁側は石室中心から4.2m付近で地形変換線が窺える。墳径を推測するものはこの部分だけであるが、概ね8m級の円墳であると考えられる。現存の墳頂部は標高68.50m、墳丘裾部の標高は北側

で67.75mを測る。

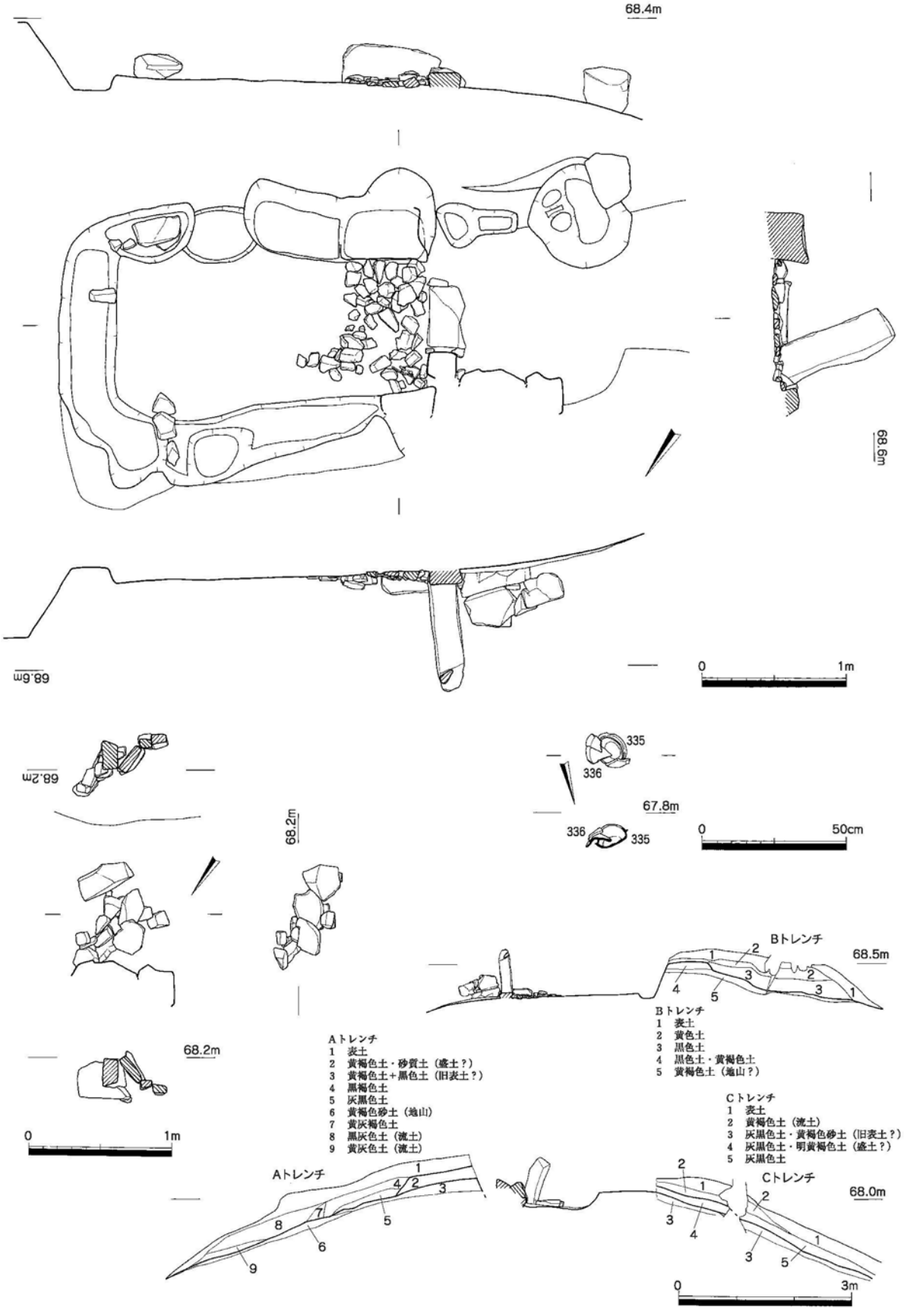
地山整形（第69図、図版29）　Ⅱ区で石室中心から4.2m部分に弧を描くように墳裾が確認でき、裾から外側60cmはほぼ平坦な面を呈しており、周溝状となる。Bトレンチではこれはわずかな傾斜の変化でしか見えなかった。全てのトレンチで黄褐色土と黒色土でやや砂質を帯びた旧表土を確認できたが、地山はいずれも緩やかに落ちていっており、明確な変換ラインは不明である。頂部には長さ4.5mを測る平坦面を造っている。この中央に石室掘方を掘削する。墳丘基底の地山標高は北側が南側よりも若干高く、標高68.25mを測る。羨道から墓道への掘方は玄室部分と較べ幅が狭くなっており、



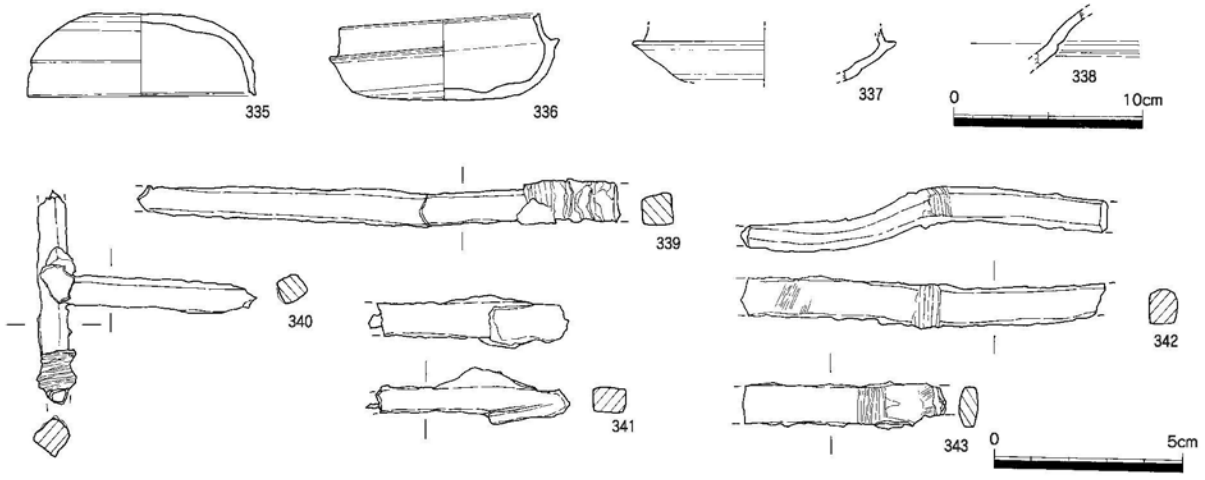
第68図　7号墳墳丘遺存状況図（1/200）



第69図　7号墳地山整形状況図（1/200）



第70図　7号墳石室・閉塞状況実測図（1/40）・墳丘遺物出土状況図（1/20）・墳丘土層断面図（1/100）



第71図　7号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）

玄室側で1.9m、墓道先端で1.7mを測り、台形を呈する。墓道は長さ40cm程遺存するが、その先は削平されている。

盛土（第70図、図版29）　明確な盛土は確認できなかった。表土と旧表土、及び地山面との間にはわずか20cm程の黄褐色土がいずれのトレンチでも確認できるが、これ以上細分できず、また雑木の根による攪乱も受けているため、盛土であるか判断しかねた。

墳丘遺物出土状況（第70図、図版31）　遺物の出土量は少ない。Ⅳ区墓道付近で坏身（336）と坏蓋（335）のセットが出土する。坏身はほぼ完形品であったが、蓋は破損している。

（3）埋葬施設（第70図、図版30）

主軸方位をN－55°－Eにとり南西側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。石室の遺存状況は悪く、大半の石材は抜き取られている。

石室掘方（第69・70図、図版30）　標高68.25m付近に長さ4.5mを測る平坦面を造り、南東側寄りに石室掘方を掘削する。墓道付近は削平されている。玄室掘方部分は長さ3.5m、幅3mを測る長方形プランを呈している。南東側には幅60cm程の段が付き、二段築成されている。この段があることで、墳丘基底面のほぼ中央に石室掘方は位置する。石室掘方の標高は67.80mを測り、比高差は45cmを測る。玄室奥壁から羨道までの長さは4.3m、奥壁側で幅2m、羨道側で幅1.7mを測る。墓道はわずか40cm程遺存するが、幅は1.1mと狭くなる。玄室の基底面では腰石固定のための溝が検出されている。溝は全て深さ10cm程の掘削である。

玄室（第70図、図版30）　石の抜き跡から奥壁幅推定100cm、前壁幅65cm、両側壁推定長210cmを測り、平面プランはやや奥壁側が開いた長方形を呈すると考えられる。遺存状況は悪く、玄室側壁の腰石は羨道側に1石残る。左側壁は幅60cmの転石を横位にして据え、右側壁は非常に小振りな石を使用する。袖石は右側のみ残っており、断面が20cm×25cmの方形で、長さ80cm以上の細長い花崗岩を立てる。既に玄室側に大きく倒れていた。床面には敷石があり、腰石が遺存する部分にだけ良好に残っている。敷石直上からは鉄製品が出土した。玄門には仕切り石が設置される。

羨道部（第70図、図版30）　短い羨道が敷設する。羨道部は長さ1.4mを測り、右側壁の石は全て抜き取られている。1石墓道付近にあるが、原位置は保っていないと思われる。左側壁には腰石が1石残り、2段目に2石積んでいる。墓道側の石は半分が腰石にのるが、半分は地山に直に接する。遺存状況が非常に悪いため、推測の範囲をでないが、側壁の上に天井石が架溝されたとは考えがたい。

墓道（第70図、図版30）　大部分は削平されており、わずか40cm程遺存する。幅は羨道部と較べると1.1mと狭くなる。

閉塞施設（第70図、図版31）　仕切り石の前面に幅70cm、長さ60cm程の広がりで積まれていた。仕切り石とは接さず、墓道側に向かって傾斜する。15石程の遺存で、すべて花崗岩を使用する。

石室遺物出土状況（第70図、図版30）　石室中心から墓道側に１m、左側壁側に35cm付近で鉄製品（339～343）がまとまって敷石直上から出土した。断面方形を呈し、部分的に木質が残り、同一製品と考えられる。他には全く遺物は出土しなかった。

（４）出土遺物

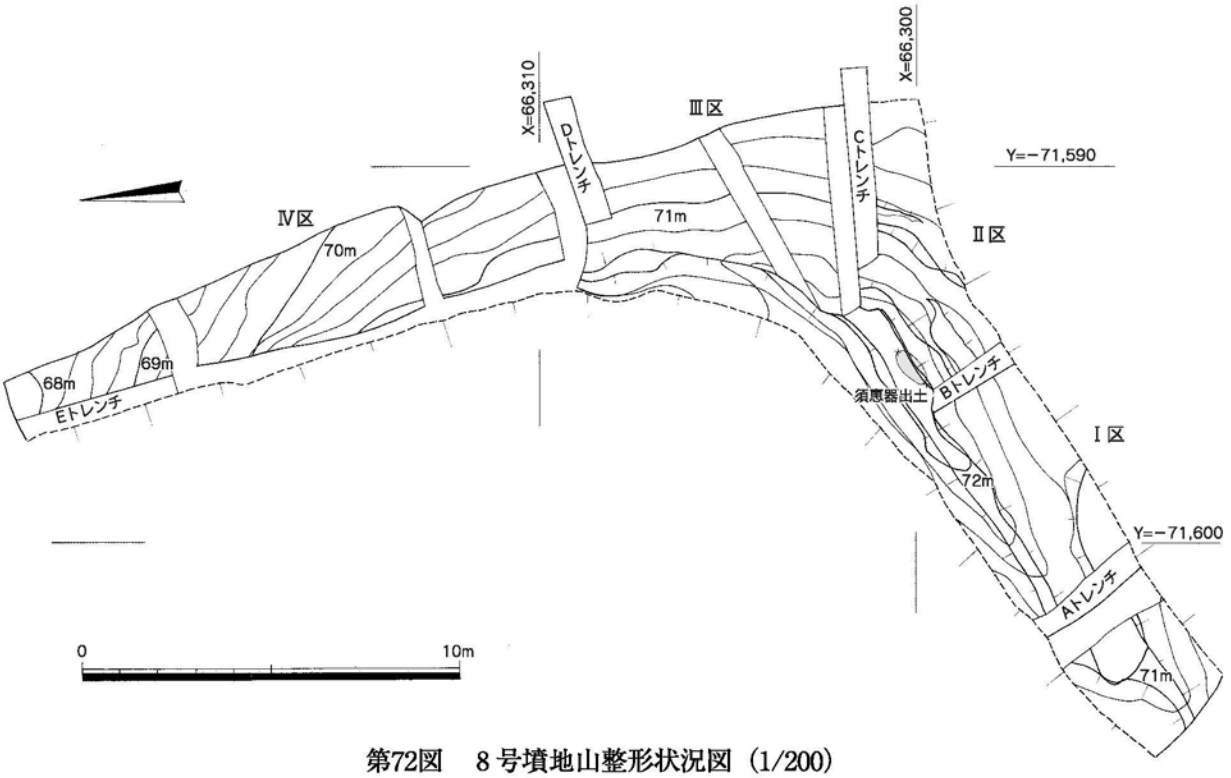
土器（第71図、図版38）　335・336は須恵器の坏蓋のセットである。墳丘上で合わせた状況で出土した。335の蓋は口縁端部に内傾する凹面をもち、段をなす。天井部は丸みを帯び、口縁部との稜はわずかに突出する。天井部には回転ヘラ削り、内面はナデで調整する。336は坏で、335同様、口縁端部は内傾する段を有し、口縁部は上方に長く延びる。底部は回転ヘラ削り、回転ナデ、内面はナデで調整する。白色砂粒を含み、灰色を呈する。337は須恵器の坏で、短い立ち上がりをもち、体部は直線的である。金雲母を多く含み、淡橙色を呈する。338は土師器で、高坏の坏部片と思われる。段をもって口縁は外反する。金雲母、石化色粒を多く含み、明橙色を呈する。土器は他に出土していない。

鉄製品（第71図、図版38）　339～343は不明鉄器である。断面は長方形を呈し、部分的に多くの木質が残る。

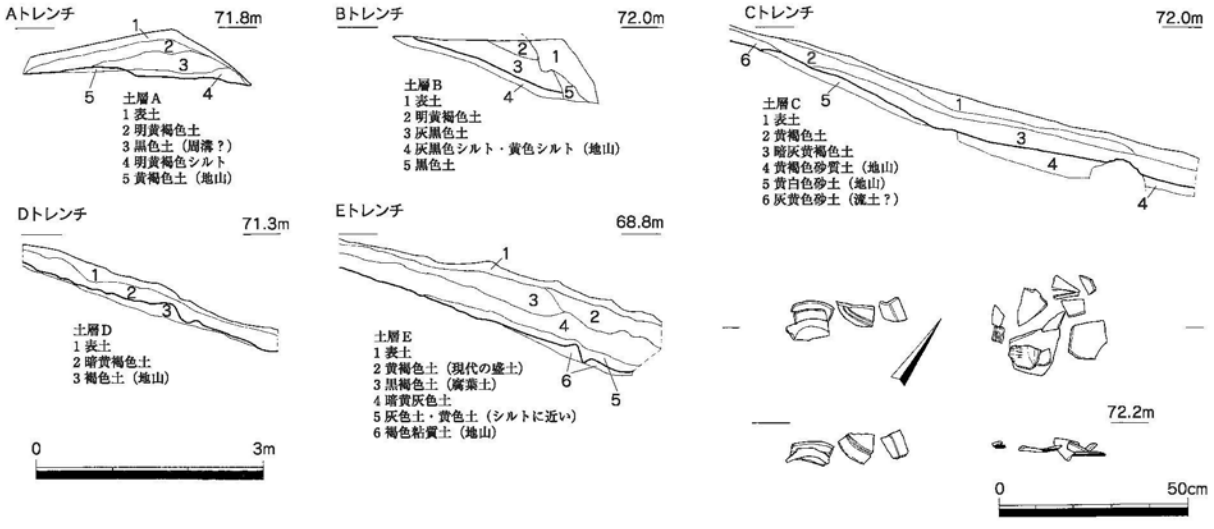
８　Ａ－８号墳

（１）位置と現況（付図１、図版31・32）

８号墳が位置する地点は尾根が北西方向と東側へ延びる分岐点にあたる。頂部は幅50cmと非常に狭く痩せた尾根となる。尾根の北西側は大きく削平され、南東側は緩やかに傾斜する。桑原古墳群Ａ



第72図　８号墳地山整形状況図（1/200）



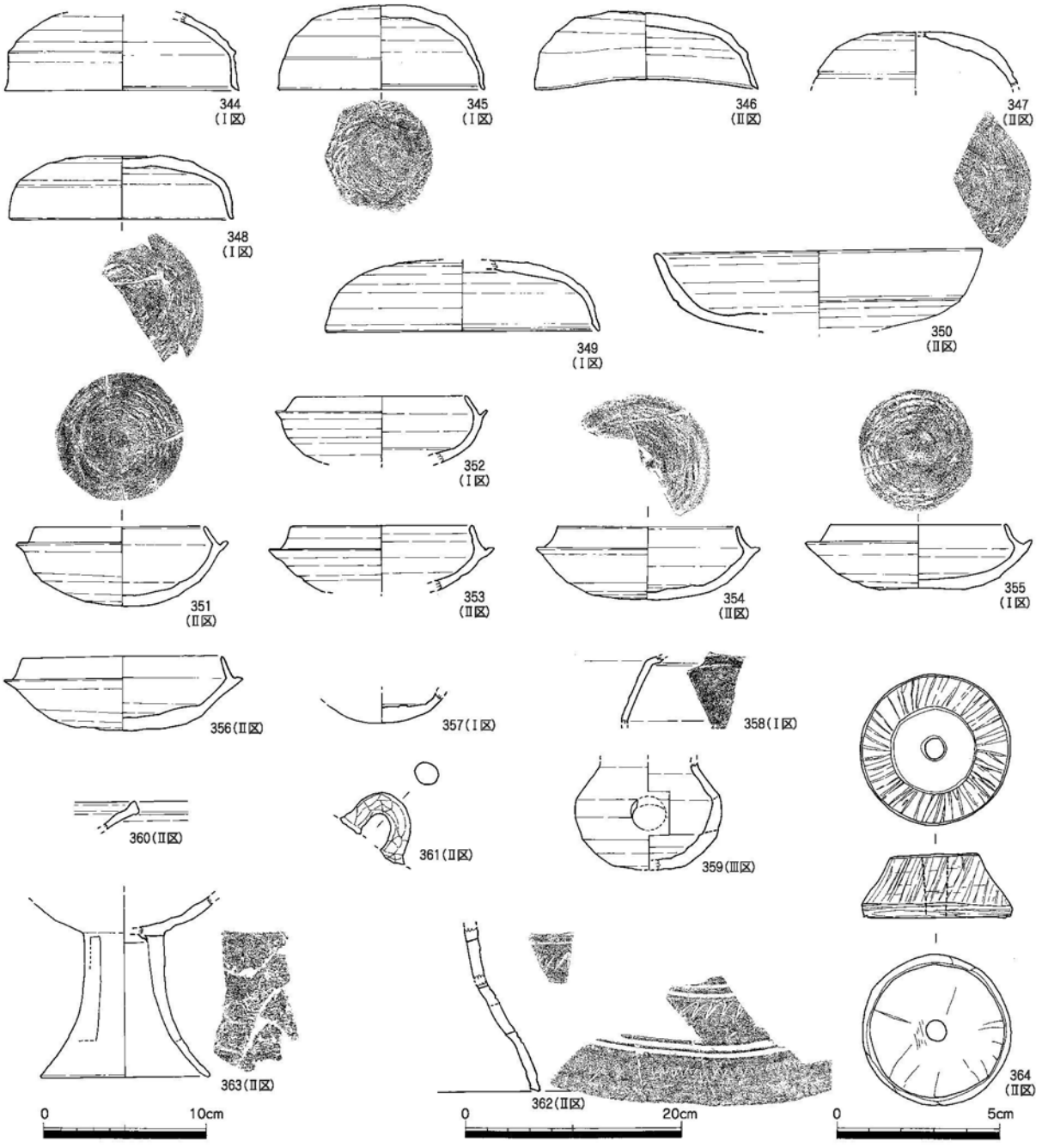
第73図　8号墳墳丘土層断面図（1/100）・遺物出土状況図（1/20）

群は尾根の分岐点を選地しているため、この地点には古墳が存在する可能性があった。そこでトレンチを設定し土層観察を行った。しかし、明確な盛土や地山整形は確認できなかった。しかし、トレンチ掘削時に須恵器片が出土したため表土剥ぎを行った。結果、Ⅱ区で須恵器が標高72m付近で集中して出土した。この部分は段造成を行っているようにも見えるが、削平の痕跡とも考えられる。但し、遺物だけが単独で出土することはないため、古墳は付近にあったと考えられる。最も考えられるのは大きく削平を受けているAトレンチの北側からCトレンチの西側にかけての急斜面である。Aトレンチでは黒色土（3層）を検出した。締まりはなく、やや砂質を帯びた土であった。周溝の可能性も考えられるが、Aトレンチより南西側では確認できず、Bトレンチにかけては幅広となっていく。

墳丘遺物出土状況（第73図、図版31）　遺物はⅠ区、Ⅱ区から出土した。特にⅡ区では須恵器の坏身、坏蓋、器台の破片、滑石製紡錘車がまとまって出土する。

（2）出土遺物

土器（第74図、図版38）　344～362は須恵器である。344～349は坏蓋で、344は口縁端部が内傾し、凹状の窪みをもち、天井部との境には明瞭な稜をなす。345は丸みを帯び深い。口縁部は体部からそのまま引き出し、口縁上には沈線状の窪みが1条巡る。天井部は回転ヘラ削り、口縁部にかけては回転ナデ、内面には叩きの痕跡がある。白色砂粒を多く含み、灰黒色を呈する。346は口縁端部が内傾し、凹状の窪みをもち、天井部との境はほとんど突起をもたず、稜を残すのみである。天井部は粗い回転ヘラ削りで調整され、他はナデ調整である。347は破片で、内面には叩き痕がある。天井部は広くヘラ削りが施される。器面は滑らかである。348・349の口縁部はそのまま丸くおさめる。天井には回転ヘラ削り、回転ナデ調整される。348の内面は叩き痕を雑にナデ消している。350は高坏である。口縁部は丸くおさめ、坏部との境には2条の沈線が巡る。351～356は坏である。長めの立ち上がりを有し、口縁部はそのまま丸く仕上げるものとわずかに外反するものがある。体部はやや深めで、丸みをおびる。351・354・355の内面には当て具痕が残り355・356は白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。他は胎土は精良で、352・354はにぶい橙色を呈し、他は灰色である。357～359は甕である。357は底部片で、丸みを帯びる。358は口縁部片で、端部は強く外反する。359は球状の体部で最大径は中位にある。下半は回転ヘラ削り、上半は回ナデで調整される。360は口縁部片である。361は把手である。指押さえ



第74図　8号墳出土遺物実測図（1/4・1/6・1/2）

で調整する。362は器台で、大きく歪む。２条の沈線の間には波状文が描かれ、三角形の透かし窓が刻まれる。白色砂粒を多く含み、灰黒色を呈する。363は土師器の高坏である。太めの脚を有し、三方向に透かし窓をもつ。摩滅が著しい。

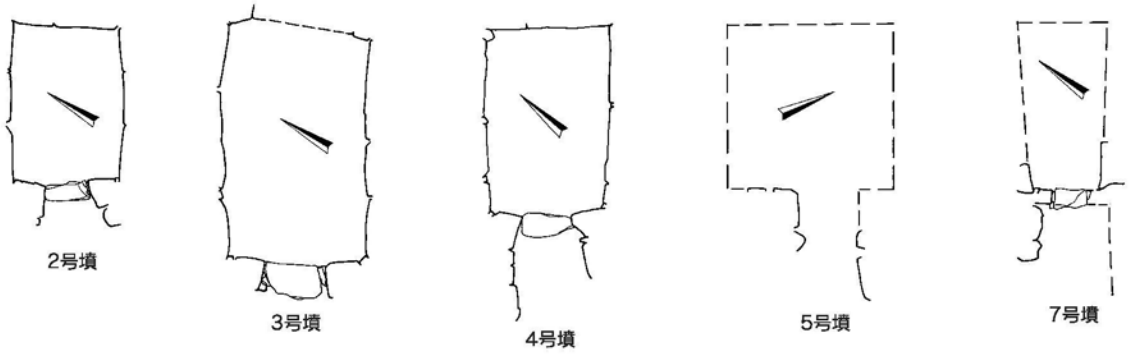
その他の出土遺物（第74図、図版38）364は滑石製の紡錘車である。断面は台形を呈し、下面には円周上に１条の沈線が巡る。側面には斜方向の研磨が残る。

9　小結

桑原古墳群Ａ群（第25次調査地点）では７基の古墳を確認した。そのうち盛土を検出できたものは４基、石室の一部が遺存しているものは６基である。１基は石室、墳丘も残っておらず、遺物の集中を確認しただけである。後世の削平がひどく、遺存状況は良好とはいえない。ここでは立地、主体部、時期についてまとめる。

立地であるが、すべて尾根上に位置する。尾根の分岐地点には必ず造営されており、その空間を埋めるように他の古墳が位置している。確認できた主体部は、全て横穴式石室である。２・３・４・６号墳は長さと幅の比率が、比較的類似した数値をもつ長方形プランの石室である。３号墳は奥壁に大きな花崗岩を立てて、鏡石としている。２・４号墳は奥壁に２石据える。５号墳は正方形プランの石室、７号墳は狭長な長方形プランの石室である。また、２・３・７号墳は短い羨道をもつと考えられ、４・５・６号墳は長さ1.5m以上の羨道をもつ。石材には片岩が一部用いられるが、主に花崗岩を使用している。石室の主軸方位に関しては、２・３・４・７号墳はほぼ揃っており、Ｎ－55°－Ｅ前後、６号墳がＮ－13°－Ｅ、５号墳は大きく振れ、Ｎ－68°－Ｗである。出土遺物は石室の削平、撹乱のため、ほとんど残っていないと考えられる。出土須恵器であるが、小田編年を使用した。２・３・４号墳はⅢＡ期からⅤ期まで、５号墳はⅡ期からⅣＢ期まで、６号墳はⅢＡ期からⅣＡ期まで、７号墳はＩＢ期とⅣＡ期、８号墳はⅡ期とⅢＢ期の須恵器が出土する。原位置を保っている遺物は少量で、墳丘の流土中や撹乱を受けている石室などから出土している須恵器が大半である。出土須恵器には時期幅があり、初葬時と追葬等の何らかの使用があった時期を示すと考えられる。各古墳の初葬時の時期は、７号墳が５世紀末、５・８号墳が６世紀前葉、２・３・４・６号墳が６世紀中葉である。この時期差は石室構造の違いと合致する。時期的にはまず、高所に７号墳が築かれ、続いて５号墳が築かれる。いずれも尾根の分岐点に位置し、８号墳も類似した地形である。６世紀中葉になると、尾根上に２・３・４・６号墳がほとんど時期差のない状況で構築される。石室規模の違いは、西の尾根に位置する石ヶ元古墳群の調査等から被葬者の集団の中での地位に由来すると考えられる。また、副葬遺物からこの時期に造営された古墳には鉄鉗、金槌、鉄滓などが見られる。これも石ヶ元古墳群と同じ状況であり、鍛冶、製鉄に関係した集団の墓であると思われる。近年、古墳の造営に関わったと考えられる集団の拠点的な集落が、元岡・桑原遺跡群の北東側の第20・27次調査で発見されている。

最後に特筆すべき事項として、４号墳の玄門部に位置する立石を挙げる。類例は現在のところ周辺の古墳群では、確認されていない。本文中でも説明したが、今回の調査では石室の一部であるか、３号墳のような板状の花崗岩を立てた閉塞石なのか判別することができなかった。また、６号墳の閉塞石も石室内からの意識が強く感じられ、特異である。類例の発見を待ち、今後の課題としたい。



第75図　各古墳石室平面図（1/100）

第29次調査の記録

－ 元岡古墳群N群 －

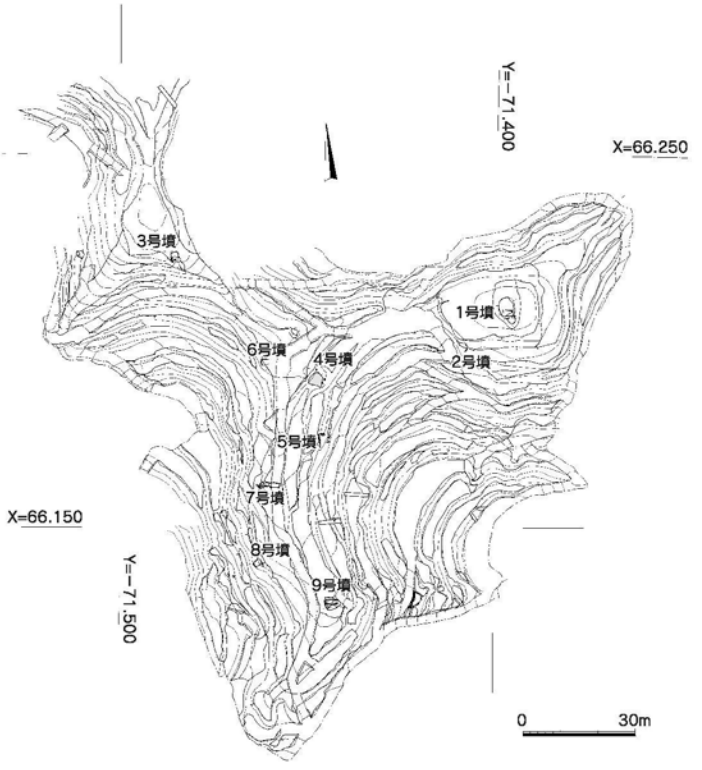
1　調査の概要

第29次調査では元岡古墳群Ｎ群の古墳９基の調査をおこなった。調査地点は九州大学統合移転用地の東側丘陵上に位置する。水崎山から北西に向かって派生する尾根上に立地し、最も標高の高い70m付近には前方後円墳である元岡石ヶ原古墳が立地する。元岡古墳群N群は水崎山と元岡石ヶ原古墳との間の尾根上に位置する古墳群である。古墳の立地する標高は52～66mを測る。現況は山林である。尾根はみかん畑の造成等により削られ、斜面には土が盛られている。また、段造成の斜面部分には古墳に使用されていたと思われる石材を用いて、土留めのための石垣を築いている。そのため、古墳の遺存状況は非常に悪く、石室は半壊か全壊に近い状況を呈し、盛土は流失している。現況の斜面では須恵器、土師器や鉄製品の破片が採集できる。周辺で石室は確認できないが、石材や遺物がまとまって出土する箇所も見られ、全壊している古墳も存在すると思われる。石垣の時期であるが、石垣の背面からは昭和30年の50円玉が出土しており、これ以降のものと考えられる。古墳は痩せ尾根上とその斜面に築造される。１号墳は古墳群の最も東側の尾根上に築かれ、２号墳は１号墳の南西側の斜面に位置する。１号墳が立地する尾根は60m程西側に延び、北西方向と南方向に分岐する。３号墳は北西方向に延びた尾根の南側斜面に立地する。４～９号墳は南側に延びる尾根に展開し、４号墳・５号墳は東側斜面、７号墳・９号墳は尾根上、６号墳・８号墳は西側斜面に位置する。３号墳の尾根を更に北側に上った所に元岡石ヶ原古墳が立地する。第29次調査は2002年４月４日に開始し、2003年９月30日に終了した。

2　Ｎ－１号墳

（１）古墳の位置と現況（付図２・第76図、図版40）

Ｎ群の最も東側の尾根上、標高58m付近に位置する。尾根の頂部に築かれ、現況では低墳丘状を呈していた。東側もしくは西側はやや平坦面を形成しており、前方後円墳の可能性も考えた。石室の石

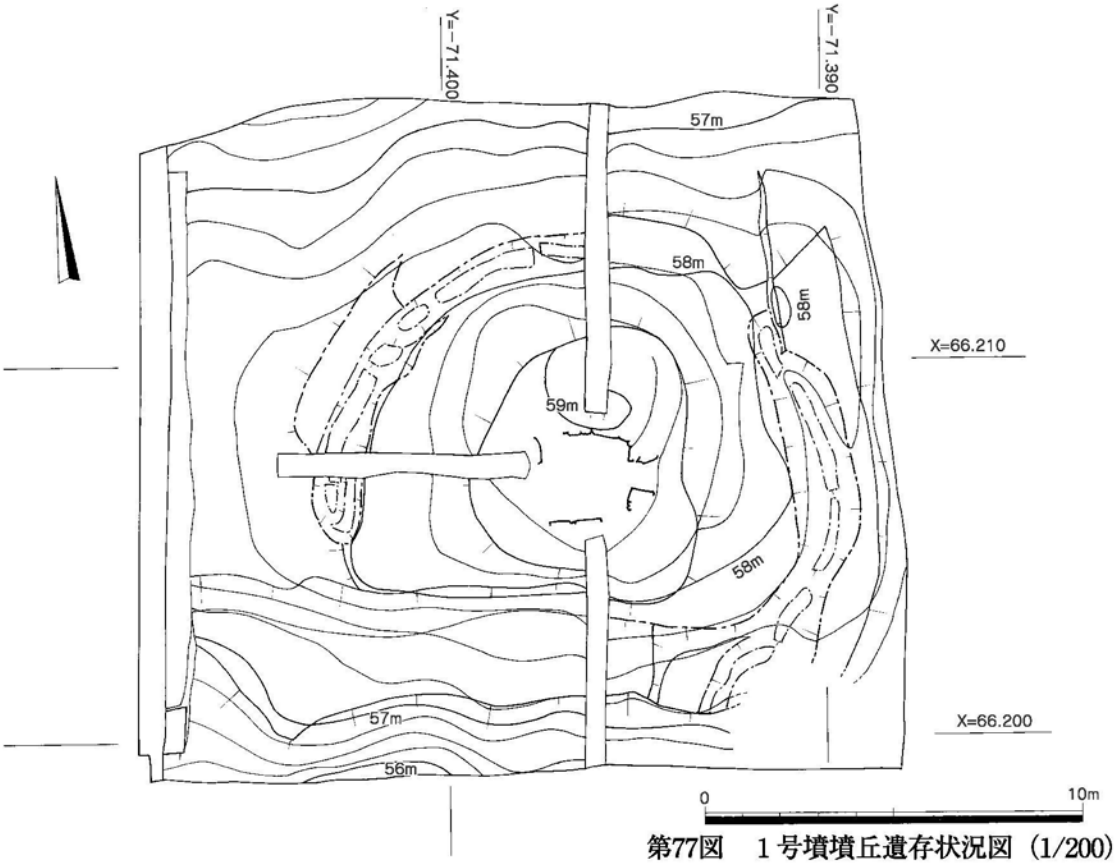


第76図　元岡古墳群Ｎ群古墳分布図（1/2,000）

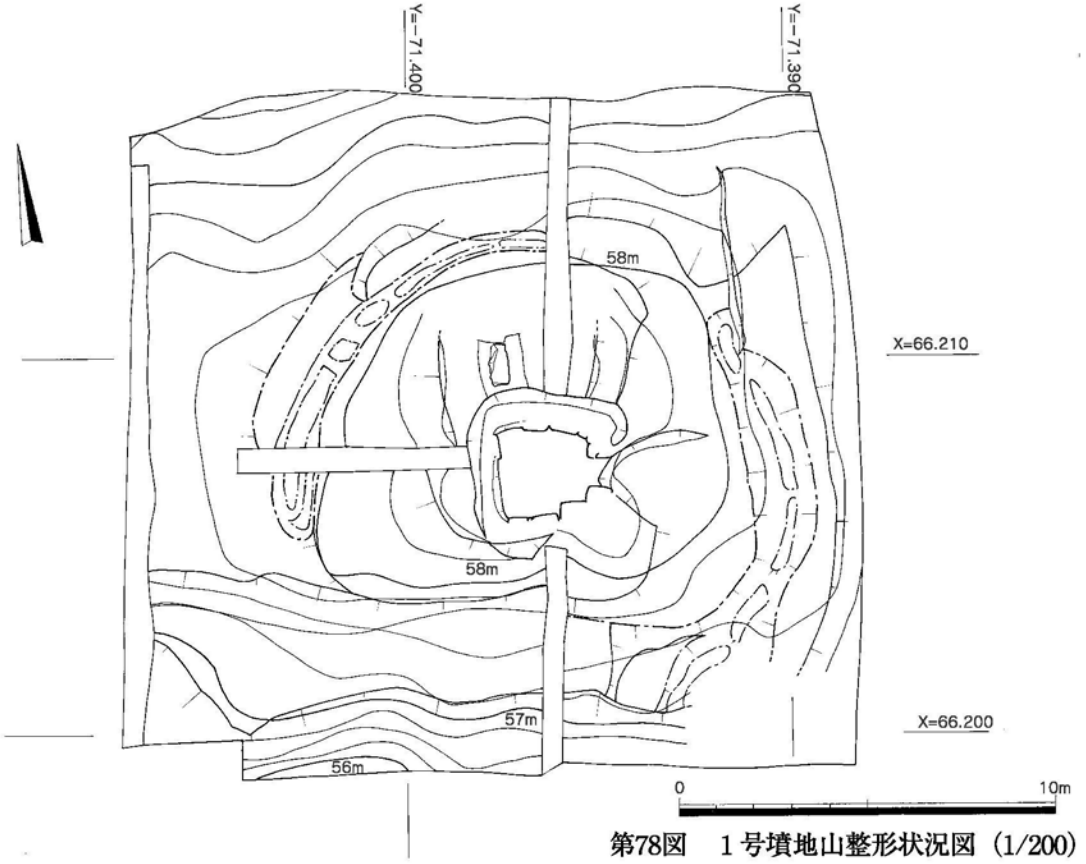
材と考えられる花崗岩が集中しており、石室部分はわずかに陥没する。周溝は確認できなかった。

（2）墳丘（第77・79図、図版40）

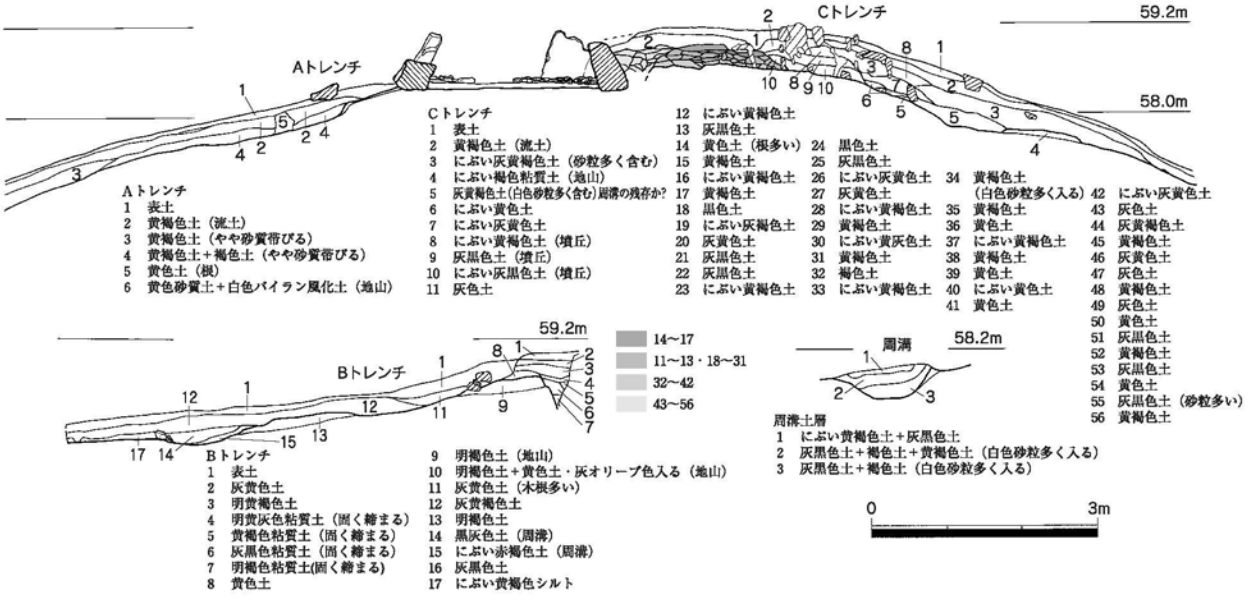
天井石を失っており、墳丘は流失している。Ⅰ区・Ⅲ区では周溝を確認した。古墳の南側は後世の



第77図　1号墳墳丘遺存状況図（1/200）



第78図　1号墳地山整形状況図（1/200）



第79図　1号墳墳丘土層断面図（1/100）

削平により削られているため、Aトレンチでは墳裾を確認できなかった。Bトレンチでは周溝を検出し、石室中心5.51mで墳裾を確認した。また、現況で前方後円墳の可能性も考えられたため、トレンチを入れて確認したところ周溝が巡り、墳丘は途切れた。直径約11mの円墳と考えられる。現存の墳頂部は標高59m、墳丘裾部の標高は墓道部分で58mを測る。

地山整形（第78図、図版40）　周溝はⅡ区からⅢ区にかけて長さ約10.5mを検出した。Ⅳ区からⅠ区では約13m検出した。Ⅳ区から始まった周溝は階段状を呈しており、Ⅰ区では南側に延びていく。この部分は丁度削平されていた。幅は東側で90cm～200cm、西側で120cmを測る。標高58.5m付近で平坦面が見られ、南側寄りに石室掘方を掘削する。墓道は東側に開く。

盛土（第79図、図版41）　盛土はB・Cトレンチで30cm程遺存していた。標高58.75m付近に平坦面を築くための盛土を行い、石室掘方を掘削している状況がうかがえる。石室を築いた後、墳丘を盛る。平坦面のための盛土は細かく行われており、黒色土と黄褐色土を用いて版築するが、粘質土や砂質土を用いていないため、固く締まっていない。灰色土や黄色土で石室掘方を埋めた後、基底面を覆うように墳丘の盛土を行う。墳丘盛土は基底面を築く盛土よりも単位は大きい。墳端はBトレンチで5.21m、Cトレンチで4.7mを測る。

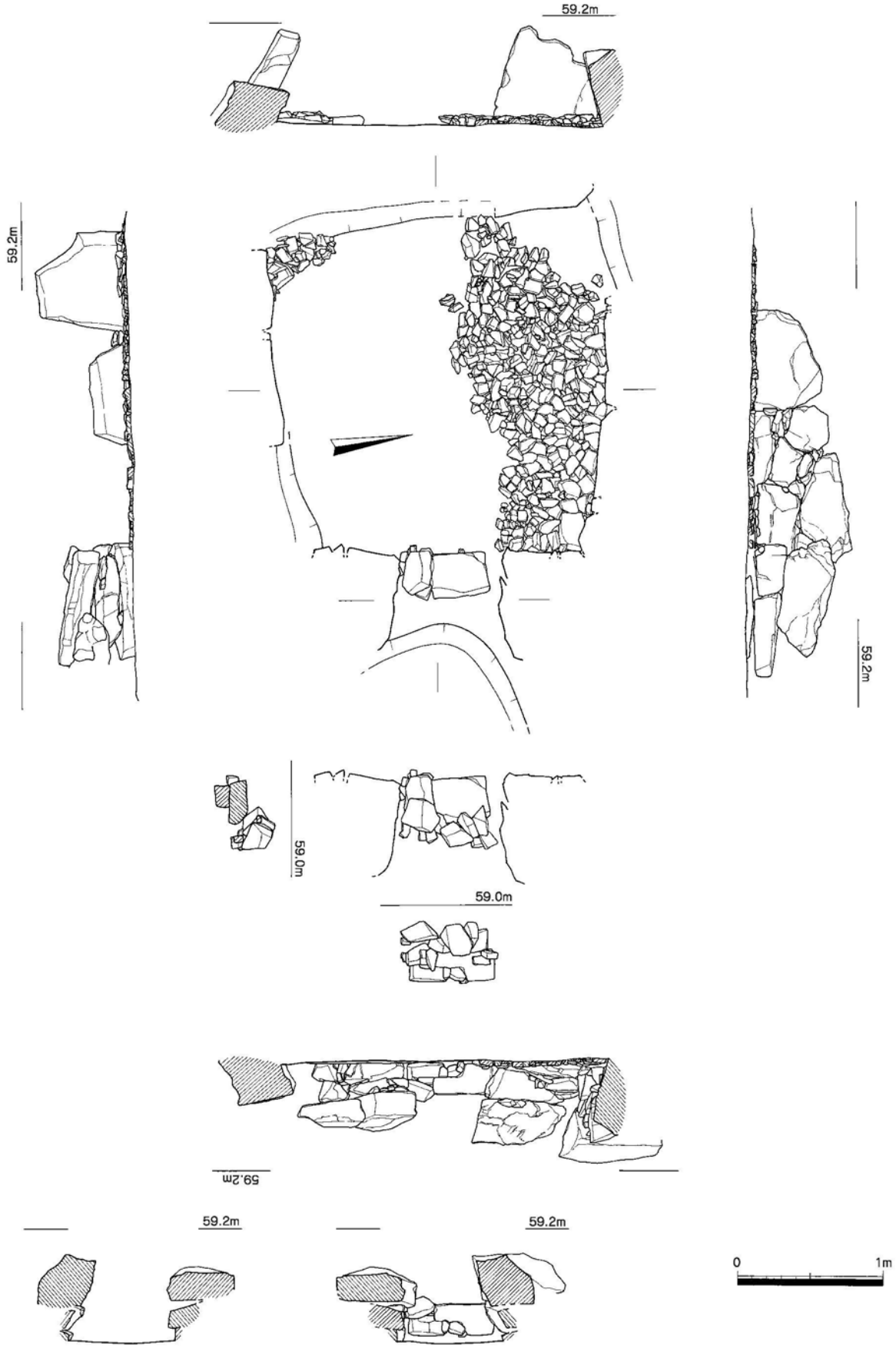
墳丘遺物出土状況　墳丘流土中ではⅠ区・Ⅳ区から須恵器の坏蓋や高坏の蓋が出土する。

（3）埋葬施設

主軸方位をN－81°－Wにとり東側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。石室は天井石を失い、腰石も部分的に抜かれている。

石室掘方（第78図、図版41）　墳丘基底面のやや南寄りに一辺約4mの石室掘方を造る。基底面の標高は南側で58.83m、南側は掘り込み面が遺存せず、標高58.40mを測る。玄室掘方はほぼ平坦で標高58.40mである。墓道は玄室より30cm程低くなる。玄室掘方は長さ4.0m、幅3.8mの隅丸方形を呈し、墓道掘方は南側を削平されるが、現況で長さ2.2m、幅1.1m以上を測る。玄室の基底面では腰石固定のための浅い溝を検出した。

玄室（第80図、図版40・41）　奥壁幅約230cm、前壁幅205cm、右側壁長235cm、左側壁長210cmを測り、正方形プランを呈する。遺存状況は悪く、特に南側の腰石は抜かれている。右側壁からは奥壁



第80図　1号墳石室・閉塞状況実測図（1/40）

側に大振りの石を据え、墓道側には小振りの石を横位にして積んでいる。そのため２段目、３段目は約20°の傾斜で目路が通る。石材の間には小振りの石を充填する。袖石は扁平な石を横位にして積む。仕切石は３石を組み合わせ小振りの石を隙間に充填し、20cm程の高さを作る。地山を掘削せずに墳丘基底面に直接置かれている。標高58.40mに床面を構築し、敷石を敷設する。拳大の石を用いており、南側は遺存しない。また、裏込めには土を充填する。石材は花崗岩と片岩である。

羨道部（第80図、図版40・41）　短い羨道がつく。左側壁には腰石のみ遺存し、扁平な石を横位にして積む。長さは80cm、幅は玄室側が75cm、墓道側が90cmを測る。天井石は袖石部分に１石だけ高架する可能性が高い。

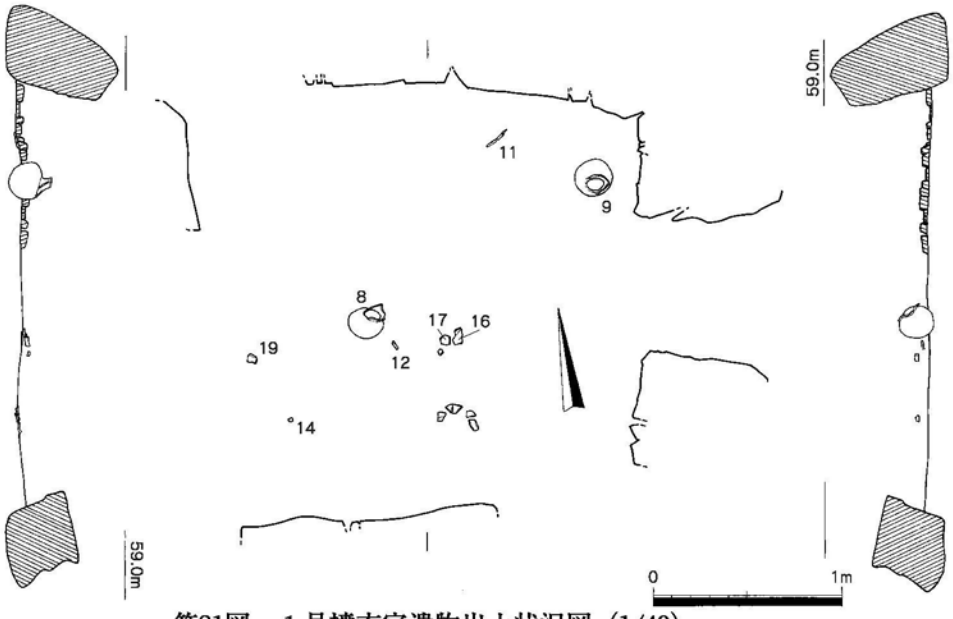
墓道（第77・80図、図版40・41）　墓道は大半を削平される。周溝との高低差が大きく、現状ではつながらない。そのため、２段築成であった可能性も考えられるが、削平が著しいため不明である。

閉塞施設（第80図、図版41）　墓道側の仕切石上に10石程閉塞石を確認したが、遺存状況は良好でない。散乱した状況である。

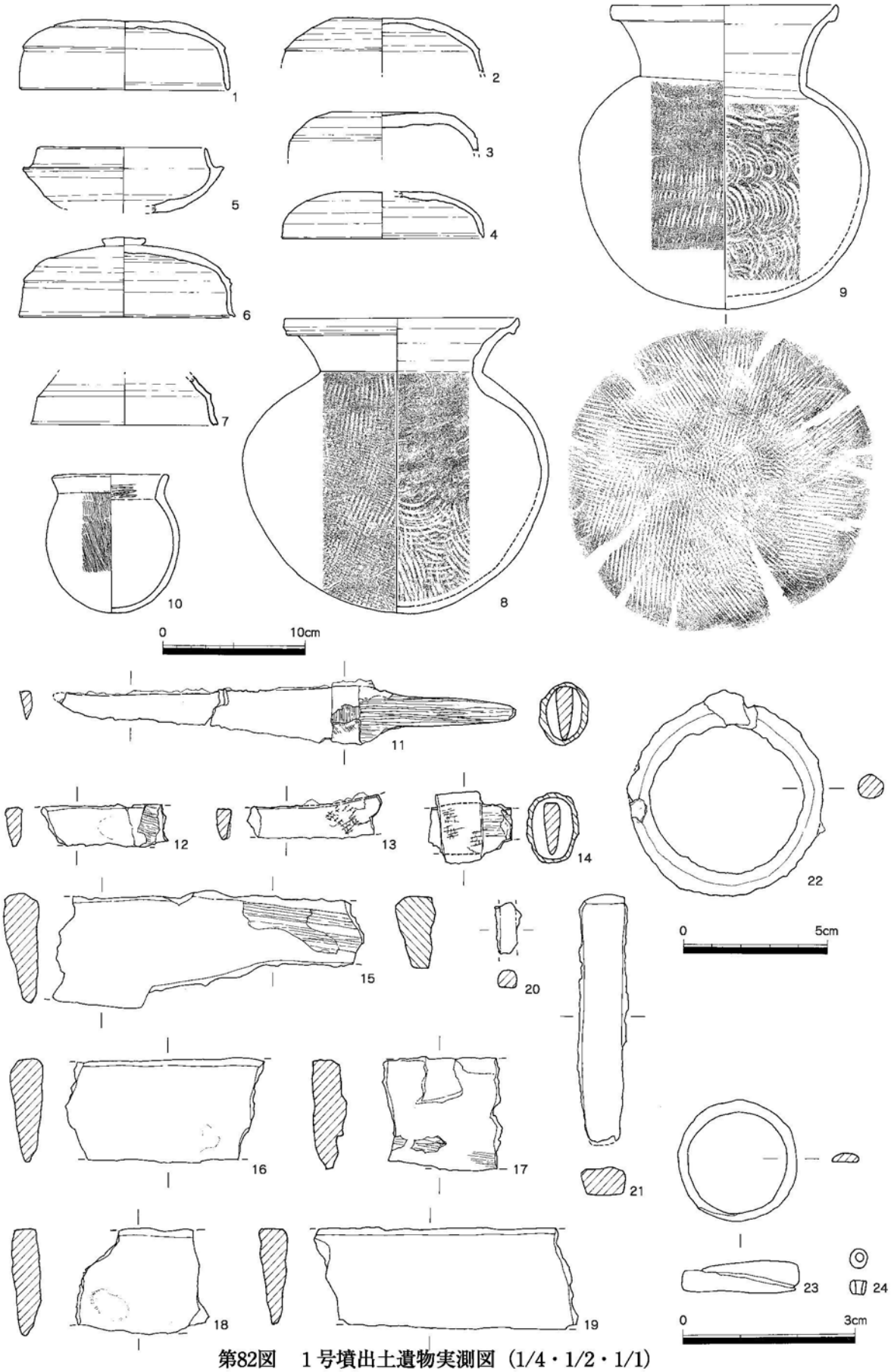
石室遺物出土状況（第81図、図版42）　床面敷石上からは須恵器の壺、鉄製刀子等が出土する。

（４）出土遺物（第82図、図版55）

１～９は須恵器である。１～４は坏蓋で、天井部との境が明瞭である。１は沈線により稜を作出し、２は突出させた稜線で境を作る。３の稜線はなくなる。１・４の口縁部内面には沈線状の段を有する。５は坏で、立ち上がりは高く上方に延び、底部は丸みを帯びる。１・５は灰橙色を呈し、他は灰色を呈する。６・７は高坏の蓋である。６は天井部に摘みを有し、天井部との境には１条の沈線が巡る。口縁部内面には沈線状の段を有する。７は焼き歪んでいる。６は灰橙色、７は灰色を呈する。８・９は小壺である。外面は平行叩きを行い、上方は部分的にナデ消している。内面には円弧叩きを施し、８は上方をナデ消す。10は土師器の甕である。外面は刷毛目、内面はヘラ削りで調整される。11～22は鉄製品である。11～14は刀子で、基部には木質が付着し、13・14はわずかに布目が見られる。15～19は刀、20は鏃、21は鏨である。21は風化が新しく、古墳に伴わない可能性も高い。22はメタルが遺存し、断面はやや楕円形を呈する。馬具の轡か。23は青銅製品で、最大幅4.5mmの断面が丸みを帯びた板状のものを径2.1cmの円形に曲げたものである。実見で風化の状態は古墳時代のものと大差なか

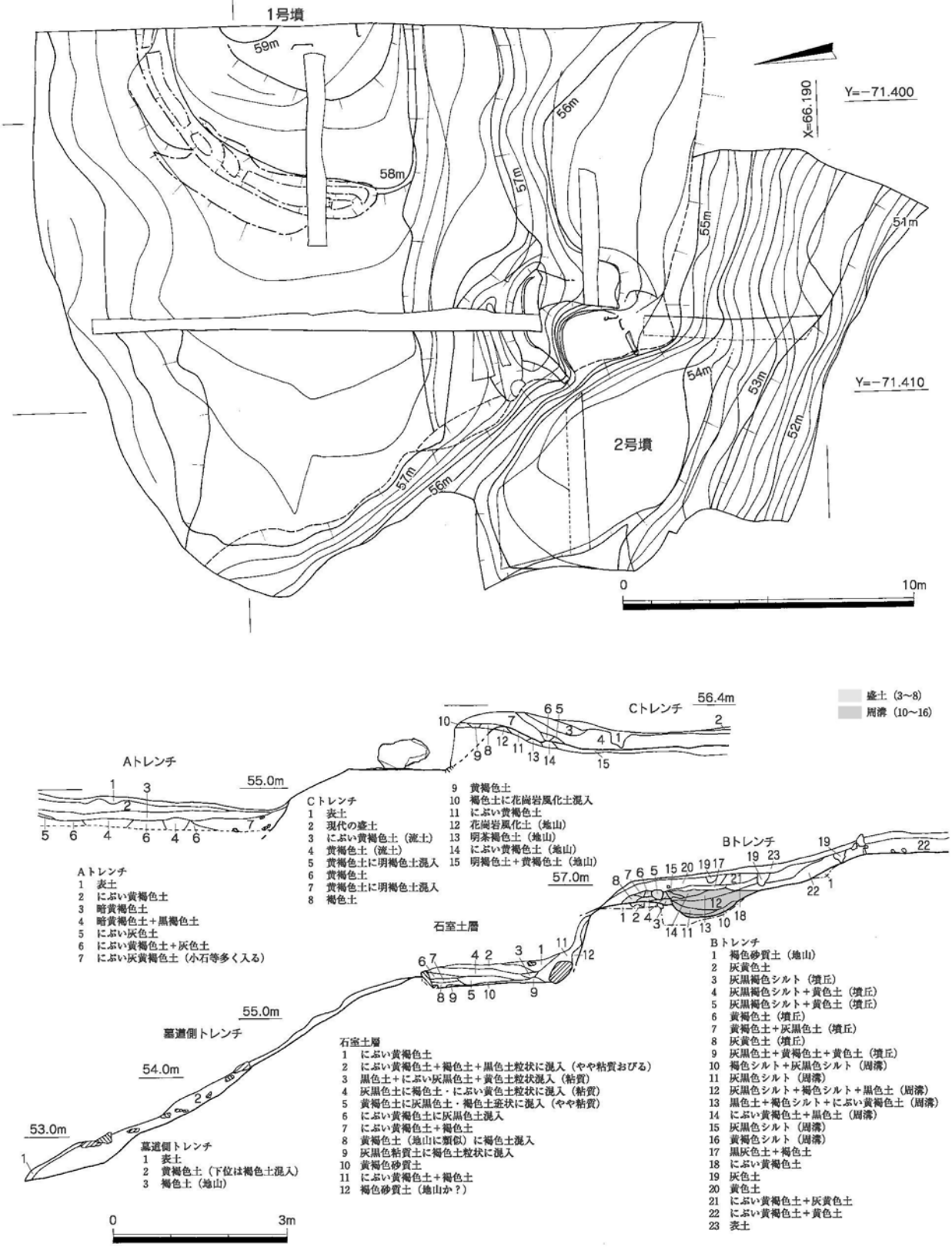


第81図　１号墳玄室遺物出土状況図（1/40）

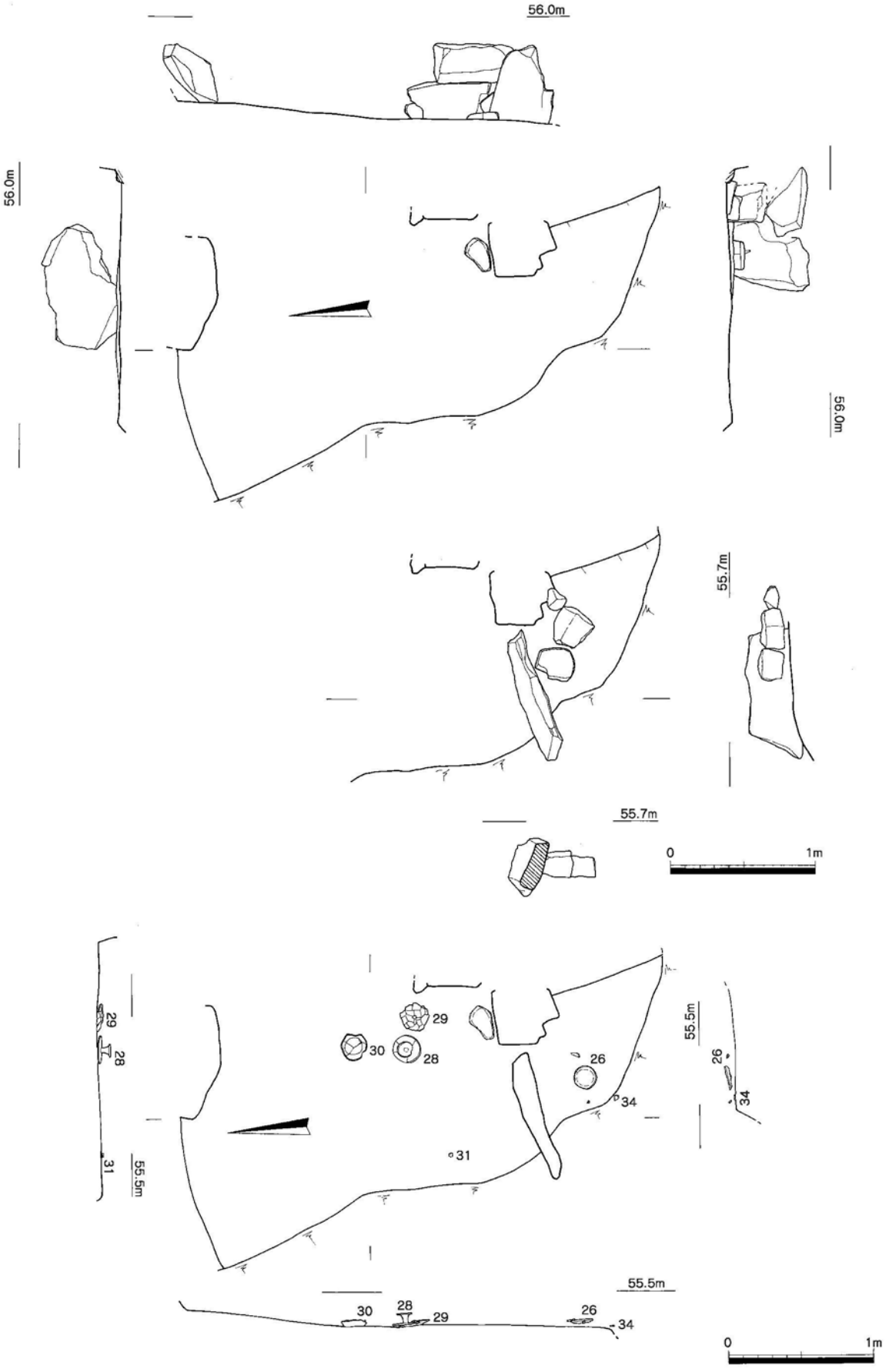


第82図　1号墳出土遺物実測図（1/4・1/2・1/1）

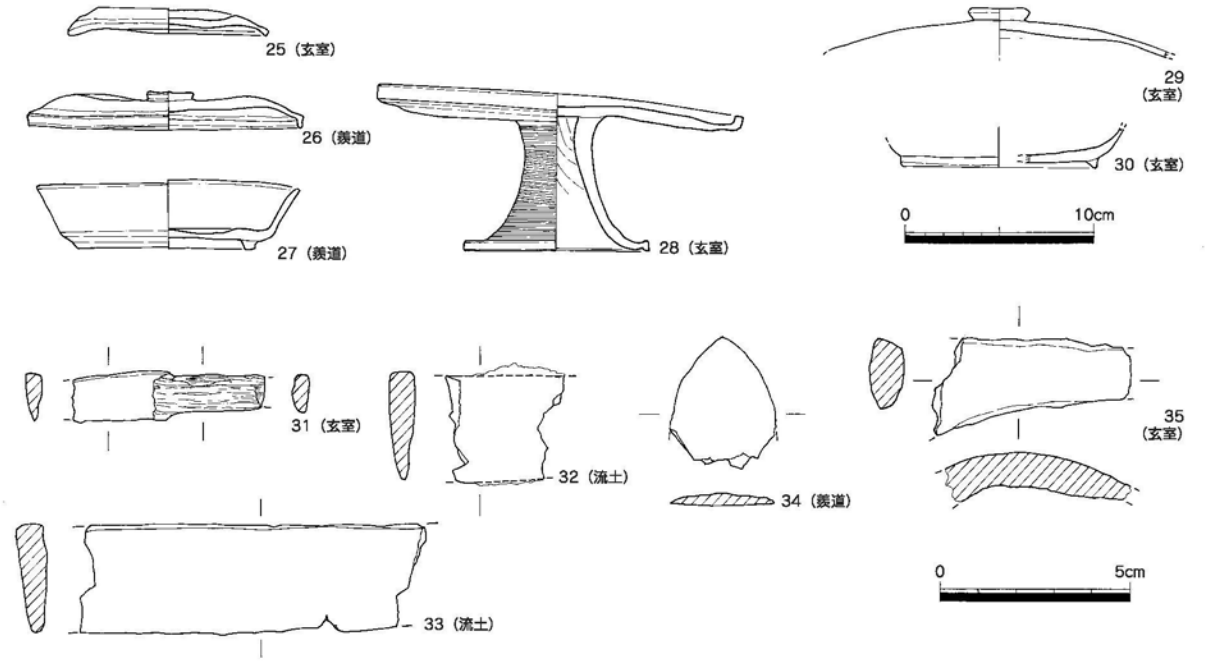
ったが、分析の結果、銅を中心に若干の亜鉛、鉛を含み、弥生時代、古墳時代の銅製品にはあまりみられない組成であった。24はガラス小玉で淡緑色を呈する。他に粘土塊が2点Ⅳ区墳丘流土中から出土する。



第83図　2号墳地山整形状況図（1/200）・2号墳墳丘土層断面図（1/100）



第84図　2号墳石室・閉塞状況実測図・遺物出土状況図（1/40）



第85図　2号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）

3　N－2号墳

（1）古墳の位置と現況（付図2・第76図、図版42）

1号墳の南西側に位置し、標高は55.3mを測る。現況では土山状を呈し、周辺には大量の花崗岩が転がっていた。古墳の西側と南側は大きく削平される。

（2）墳丘（第83図、図版42）

石室は右側壁と奥壁が一部残るだけで、ほとんど抜かれていた。左側壁側は完全に破壊されていた。Bトレンチと Ⅲ区では周溝を確認した。Bトレンチで墳裾は石室中心から3.2mを測る。Cトレンチからは玄室中央から南側はほとんど削平されている状況がうかがえた。墳丘規模は墓道側が全く遺存していないため不明であるが、小型のものであると考えられる。現存の墳頂部は標高56.8m、墳丘裾部の標高は墓道部分で55.35mを測る。

地山整形（第83図、図版42）　周溝は北側で、尾根を分断する形で検出した。Ⅲ区では削平のため周溝は途切れる。Bトレンチでは幅150cm、深さ45cmの周溝を確認し、覆土は灰黒色シルトであった。北側での地山整形面は56.7m、石室掘方は55.3mを測り、比高差は140cmである。

盛土（第83図、図版43）　明確な盛土を確認したのはBトレンチだけである。墳丘基底面を盛土で構築した後、周溝を掘削する。基底面の盛土は灰黒色シルトや黄褐色土で細かく行われる。

墳丘遺物出土状況　遺物はⅡ・Ⅲ区からは出土しない。墓道側から出土する。

（3）埋葬施設

主軸方位をN－5°－Eにとり南側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。

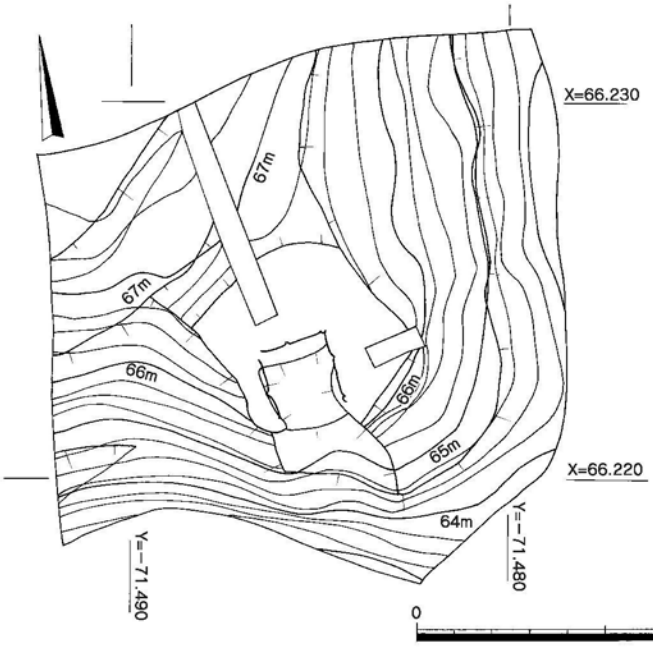
石室掘方（第83・84図、図版43）　削平のため形状は不明である。北側では石室の掘り込みが掘削面から140cmを測る。長さ300cm以上、幅200cm以上である。腰石固定のための溝等は見られない。奥壁側と右側壁側は石室掘方の壁に接して固定させている。腰石固定部分には花崗岩が見られ、根石が多用されたと考えられる。

玄室・閉塞施設・石室遺物出土状況（第84図、図版43）　奥壁の腰石は後ろに傾くが、原位置に近

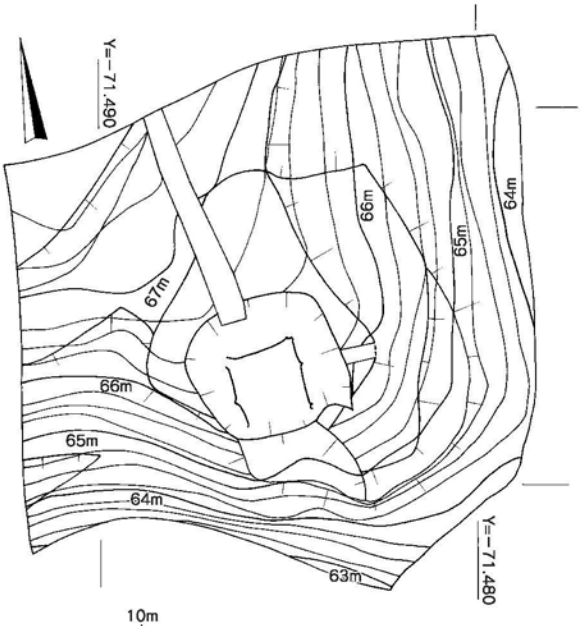
い状況であると考えられる。左側壁側は完全に削られているため、不明である。羨道が玄室の中心に付く形態であれば中心から右側壁を折り返して約180cmと推測される。長さは190cmである。正方形に近い平面プランである。腰石には全て緑泥片岩が、二段目と閉塞石は花崗岩が使用される。玄室の地山直上からは土師器の高坏や蓋が出土した。閉塞石には長さ90cm、高さ40cmの板石を立てる。板石の前面には頭大の石が3石程並ぶ。板石は掘り込んで固定されており、仕切石は検出しなかった。閉塞石の前面からは須恵器の坏蓋、土師器片、鉄剣が出土する。羨道・墓道は削平され、不明である。

（4）出土遺物（第85図、図版55）

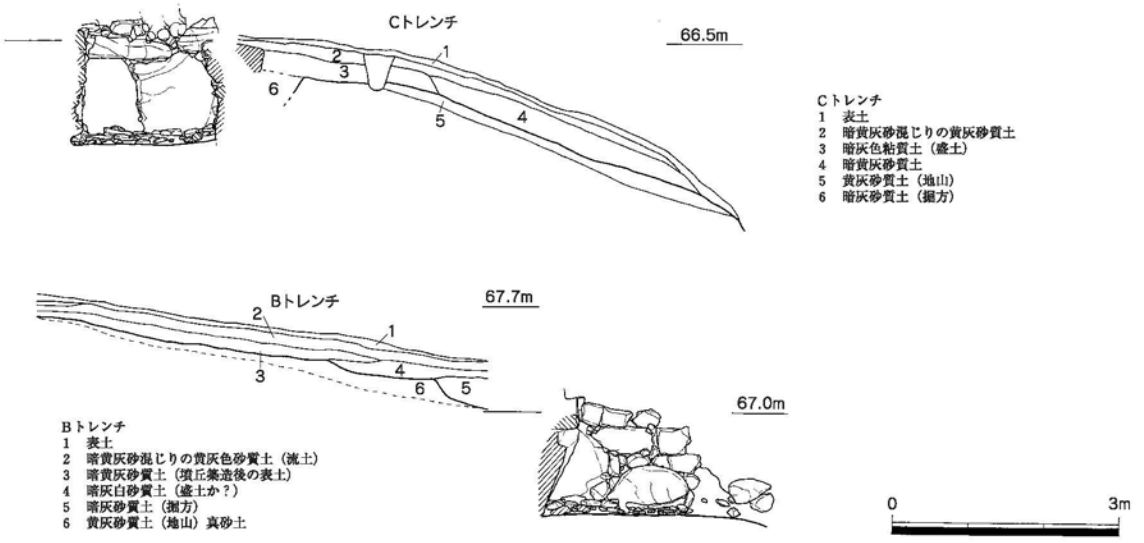
25～28は須恵器である。25・26は坏蓋、27は高台付坏である。28は高坏で、脚部上位には内外面にしぼり痕が見える。淡灰色を呈する。29・30は土師器である。29は蓋、30は高台付坏で、器面は著し



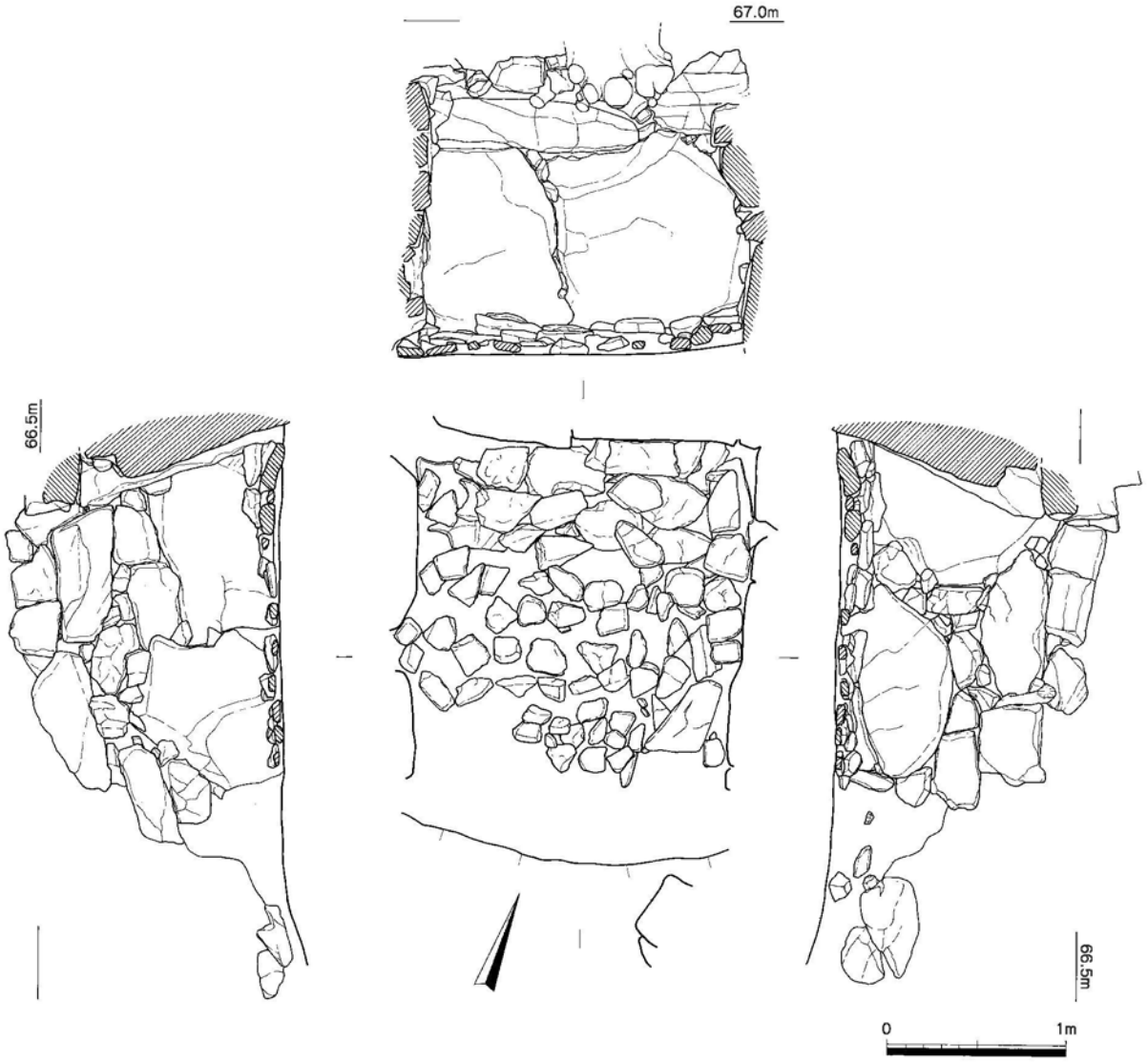
第86図　3号墳墳丘遺存状況図（1/200）



第87図　3号墳地山整形状況図（1/200）



第88図　3号墳墳丘土層断面図（1/100）



第89図　3号墳石室実測図（1/40）

く摩滅する。31～35は鉄製品である。31は刀子で、茎には木質が残る。32・33は刀の刃部である。34は箆被三角形鏃、35は不明鉄器である。断面は不定形で、緩やかに湾曲する。

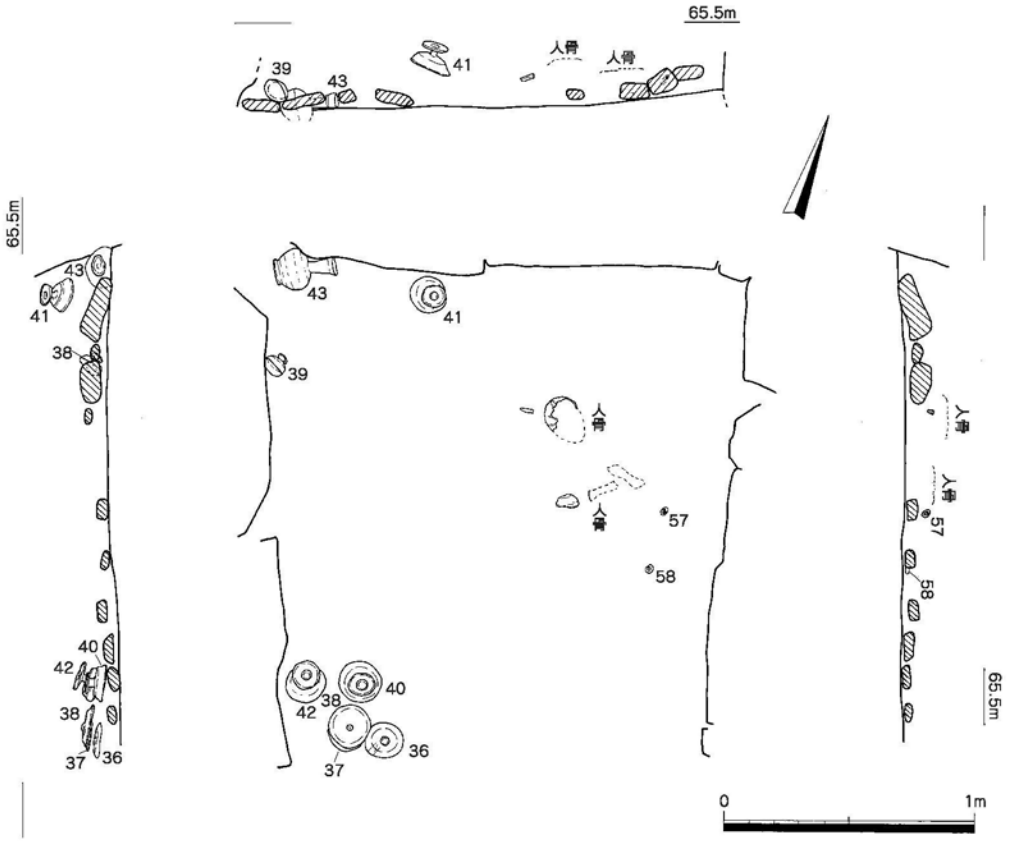
4　N－3号墳

（1）古墳の位置と現況（付図2・第76回、図版44）

元岡古墳群N群3号墳は調査区北側に位置し、石ヶ原古墳の後円部から南側に延びる尾根線の先端に立地する。ここの部分は開墾のため、削平されており、調査着手時には石室が露出した状況であった。古墳の標高約67mを測る。

（2）墳丘（第86・87・88、図版44）

古墳は南側に傾斜する斜面を造成して造られているが、遺存状況は極めて悪い。谷部に面した部分は大きく削平を受けて、大きく段差がついている。墳丘の盛土も削平でほとんど残っていない。墳丘径は南側が削平をうけているため、不明瞭だが、直径約9mを測る。

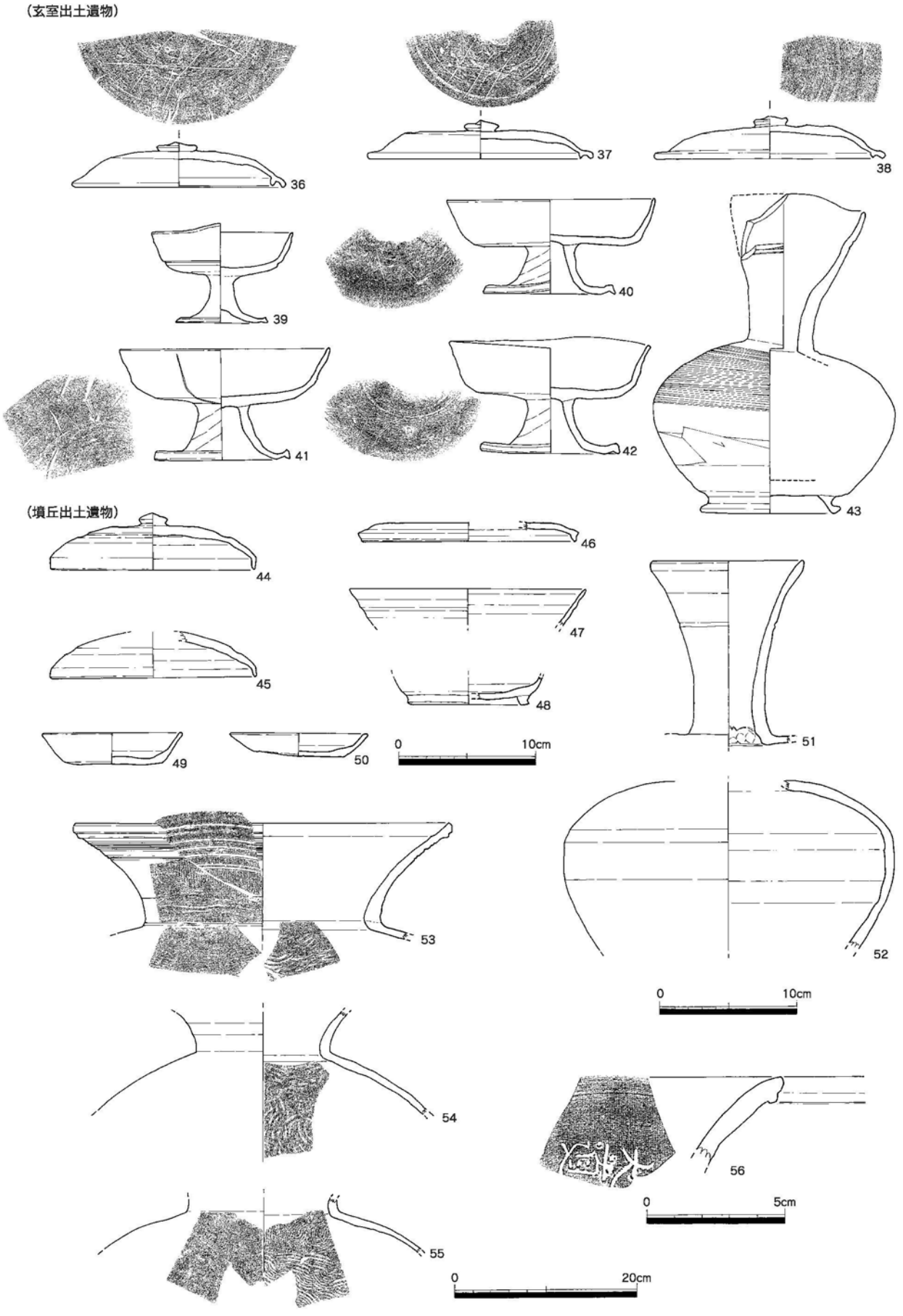


第90図　3号墳玄室遺物出土状況図（1/30）

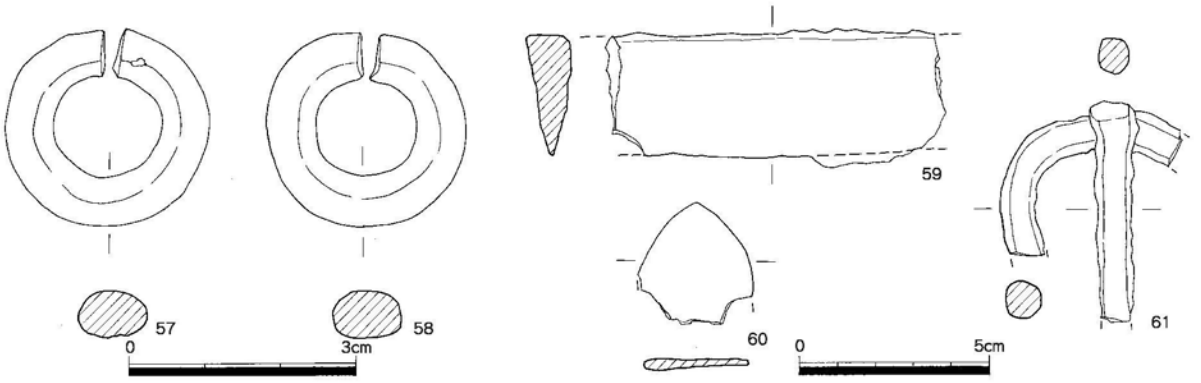
（3）埋葬施設（第89、図版44・45）

本墳の埋葬施設は南側に開口する横穴式石室である。石室は丘陵斜面に対して直交して構築される。石室の天井石は抜き取られ、羨道部及び墓道は削平されているが、奥壁と側壁は天井部付近まで遺存する。玄室は現存の奥壁幅1.9mを測り、玄室の現存長は約2mである。玄室長は2mを若干超える程度で、平面形は正方形を呈すると考えられる。奥壁は幅約100cm前後、高さ100cm程の転石を2石、側壁は幅100cm前後の転石を2石立てて配置し、腰石としている。玄室の現存高さは約150cmを測る。床面には手のひら大の敷石が遺存する。奥壁から約40cm程の幅で敷石の高まりが見られる。床面の標高約65.2mを測る。石材の同定は行っていないが、1号墳や7号墳等で見られる花崗岩とは異なるものである。

遺物の出土状況（第90図、図版45）　玄室内は流入した土砂によって天井部付近まで埋没していたが、奥壁側と羨道側で須恵器高坏、蓋、壺等が出土した。奥壁側の左隅から横に倒れた状態で、長頸壺（43）、小型の高坏（39）が出土した。また、やや浮いた状態で高坏（41）が出土した。高坏は坏部を下にして出土した。羨道側では左壁付近で高坏、蓋（36～38、40、41）が出土した。高坏は坏部を下にした状態で、蓋は天井部を上にした状態で出土した。蓋（38）と高坏（41）はヘラ記号の共通点と法量等からセットになると考えられる。玄室の中央右寄りには人骨が遺存しており、その付近で耳環が出土した。この他、石室前面の墳丘表土から口縁の内側に「大道」とヘラ描きされた甕が出土した。



第91図　3号墳出土遺物実測図（1/4・1/6・1/2）



第92図　3号墳出土耳環・鉄器実測図（1/2・1/1）

（4）出土遺物（第91・92図、巻頭図版5・図版56）

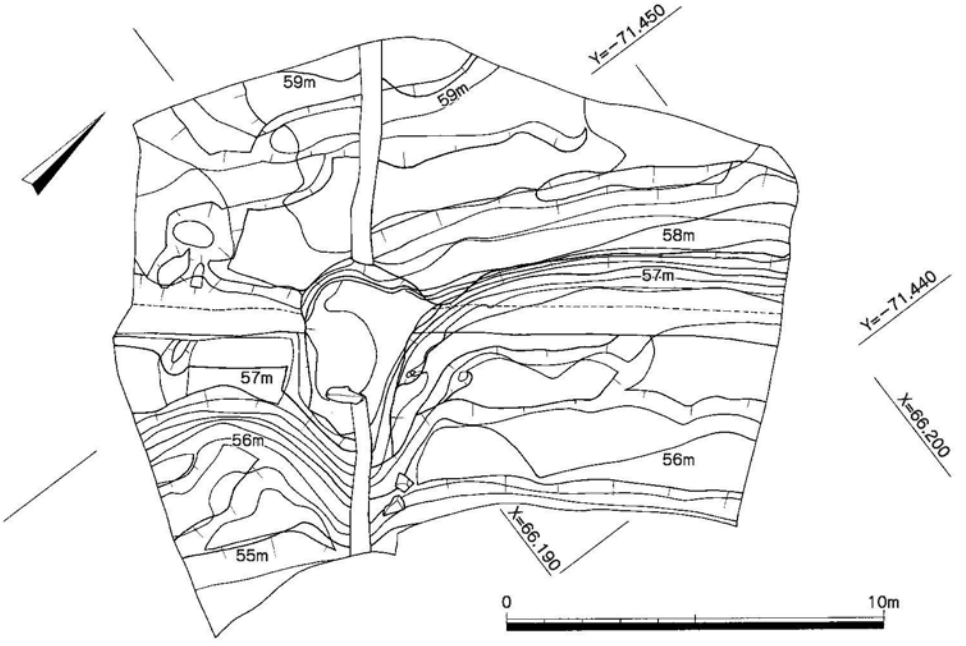
36～43、57～60は石室内、44～56は墳丘等から出土したものである。36～38は須恵器の高坏の蓋である。天井部には扁平の宝珠撮みがつき、口縁の内側には短いかえりがつく。36は器高3.3cm、口径15.6cm、37は器高2.9cm、口径14.5cm、38は器高3.4cm、口径15.0cmを測る。それぞれ天井部にはヘラ記号が見られる。39は須恵器の小型の高坏である。坏部の下半には一条の凹線が巡る。脚部は実の詰まったラッパ状を呈する。器高6.5cm、口径9.7cm、底径6.7cmを測る。40～42は須恵器の有蓋の高坏である。坏部の口縁は直線的に開き、脚部はラッパ状を呈する。外面にはしぼり痕が見られる。それぞれ坏部の外底面にはヘラ記号が見られる。40は器高6.9cm、口径15.2cm、底径9.6cm、41は器高8.2cm、口径15.4cm、底径9.8cm、42は器高7.8cm、口径14.7cm、底径10.2cmを測る。ヘラ記号の共通点と法量から36と42、37と40、38と41がセットになると考えられる。43は須恵器の長頸壺である。口縁の一部が欠損している。口頸部は焼け歪んでいる。口縁のやや下ったところに2条の沈線が巡る。口頸部の付け根は細い。体部の上半にはカキ目を施すが、明瞭ではない。体部の下半は回転ヘラ削りを施す。底部には高台がつく。器高23.3cm、底径10.2cmを測る。44～46は須恵器の蓋である。44は天井部に扁平の宝珠撮みがつく。口縁端部は垂下する。器高4.1cm、口径15.0cmを測る。45は天井部中央を欠いている。口縁端部は垂下する。口径15.0cmを測る。46は天井部中央を欠いている。口縁端部は下方に若干つまみ出される。口径16.0cmを測る。47、48は須恵器の杯身である。47は口縁は直線的に立ち上がる。口径17.0cmを測る。48は高台付の底部片で、底径8.8cmを測る。51、52は接合しないが、同一個体とも考えられる長頸壺である。51は口縁外面のやや下ったところに2条の沈線が巡る。口径11.2cmを施す。52は体部の上半にカキ目を施す。下半には回転ヘラ削りを施す。53～55は須恵器の大甕である。53は口縁端部外面は玉縁状を呈する。54、55は体部片である。外面にはカキ目を施す。56は須恵器の甕の口縁である。外面には1条の突帯が巡る。口縁の内側にはヘラ書きで「大道」の刻書が見られる。牛頸窯跡群では地名等を記した須恵器があり、この刻書も地名、人名の一部と考えられるが、上下の文字の有無を含めて、判断できない。49、50は土師器の小皿である。底部の切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が見られる。49は器高2.3cm、口径10.2cm、底径7.2cm、50は器高1.7cm、口径10.1cm、底径6.6cmを測る。

57、58は銅芯金薄板被せ中空の耳環である。幅25.2～26.5mm、25～26.3mm、径6.5～8.2mm、6.7～8.5mmを測る。59は鉄刀片である。61は鉄製の絞具である。

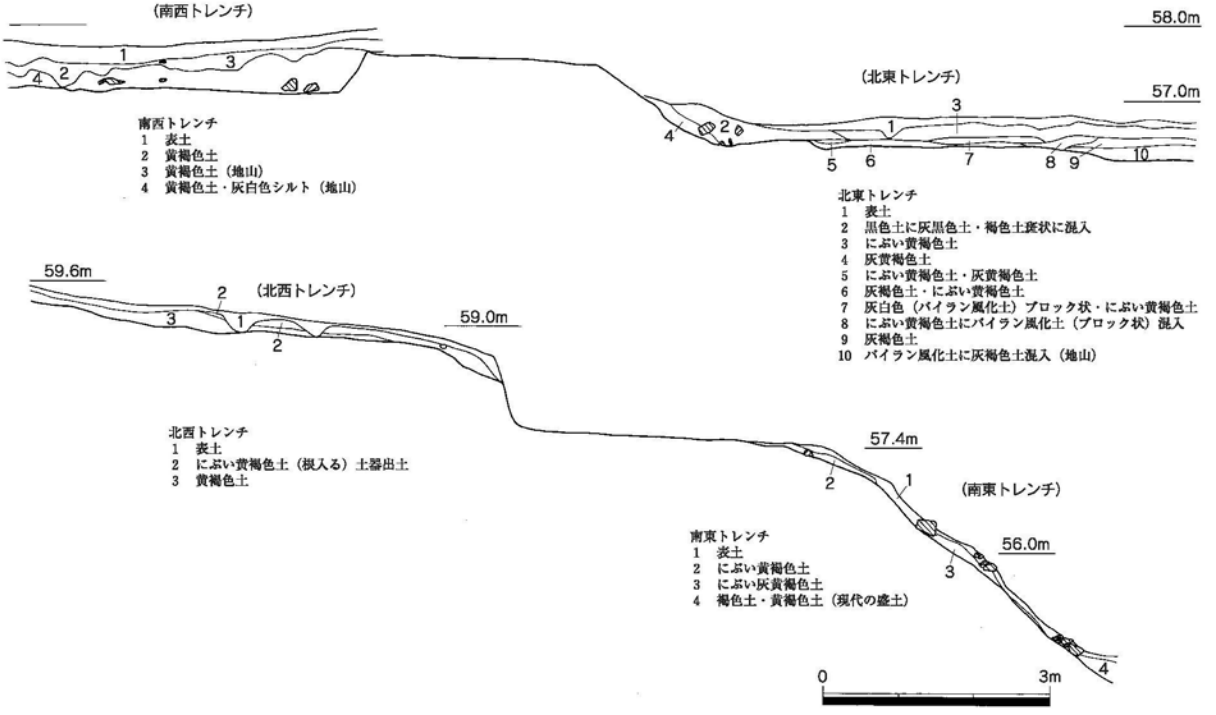
5　N－4号墳

（1）古墳の位置と現況（付図2・第76図、図版46）

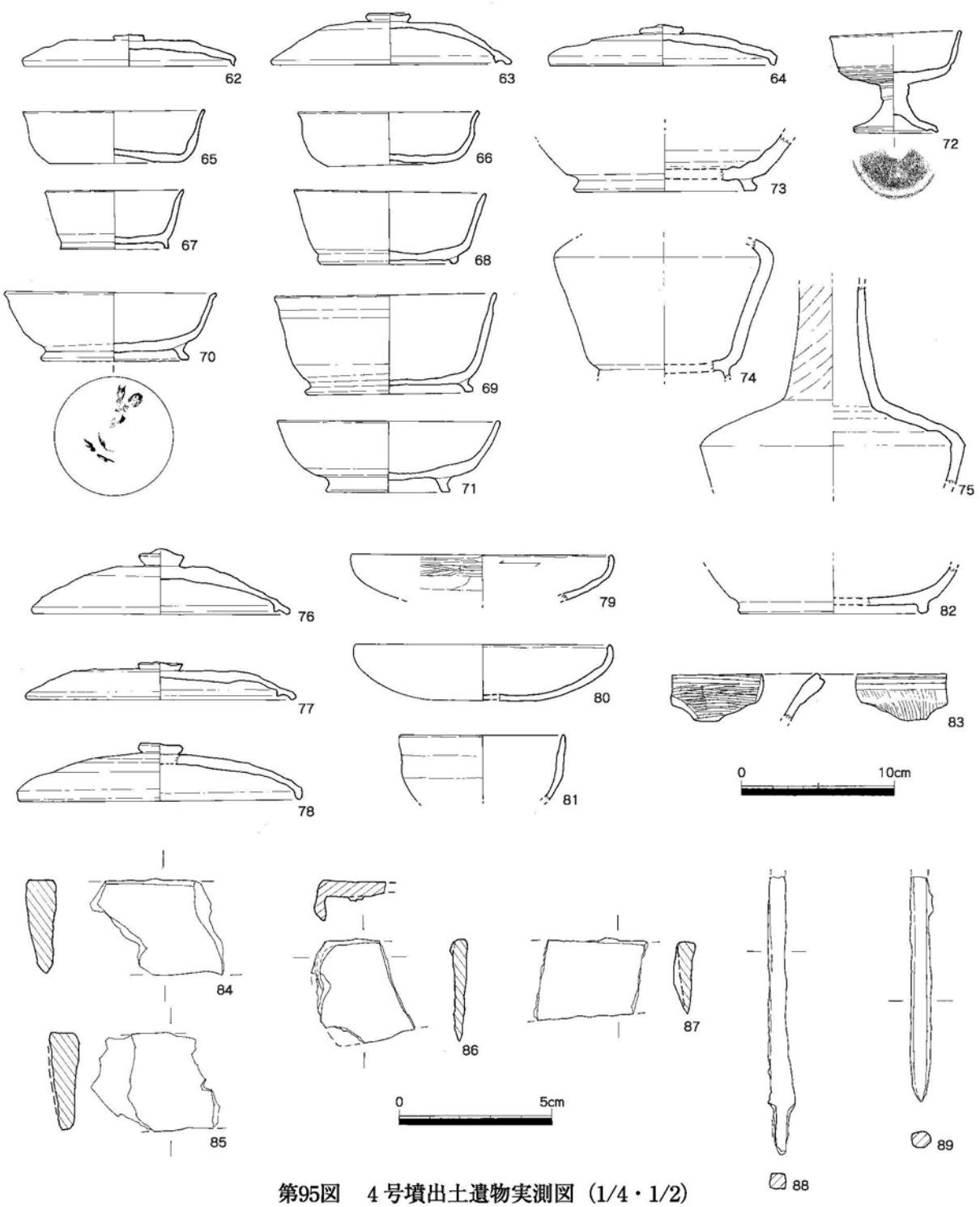
4号墳は1号墳から西側に下った東側斜面上に位置する。ミカン畑による地形の改変が著しく、段造成される。墳丘があったと思われる場所は段造成を避けて行ったようで、この部分だけ土山状を呈していた。付近には大量の花崗岩が散乱していた。標高は58.7mを測る。



第93図　4号墳地山整形状況図（1/200）



第94図　4号墳墳丘土層断面図（1/100）



第95図　4号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）

（2）墳丘（第93・94図、図版46）

墳丘は全く遺存していない。表土を剥ぐと、黄褐色土が堆積し、直下は地山である。Ⅰ区、Ⅳ区は石室の際まで削られており、急な崖となる。Ⅱ区、Ⅲ区で尾根を分断した周溝等の地山整形も確認できなかった。墳丘規模は全く不明である。現存の墳頂部は標高58.7m、墳丘裾部の標高は南東側で57.45mを測る。地山整形が確認できるのは奥壁側の石室掘り込みだけである。現在の地山面から石室床面までの比高差は125cmを測る。Ⅱ区・Ⅲ区からの遺物出土はわずかで、大半はⅠ区・Ⅳ区からの出土である。

（3）埋葬施設（第93図、図版46）

主体部は石材もなく、全く不明である。長さ105cm、幅40cmの扁平な花崗岩が南東側に1石横位にある。この東側には土師器などがまとまって出土する。西側の壁面からこの石までは300cmを測り、その間は平坦である。東西方向に約4m、南北方向に2.5mを測る。この平坦面からは腰石固定のための溝等は検出できなかった。平坦面が床面であるかどうかも明確ではない。土師器の小片2点が出土する。

（4）出土遺物（第95図、図版56・57）

大半が東側斜面の流土中からである。62～75は須恵器である。62～64は天井部につまみをもつ蓋で、63はかえりを持ち、高い。62・64の口縁部は天井部から直線的に引き出す。63はやや赤みを帯びた灰色、他は灰色を呈する。65・66は坏で、口縁部はわずかに外反する。白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。67～71は高台付坏である。67は小型品で、高台は底端部に付く。口縁部は直線的に引き延ばし、わずかに外反させる。68・69は坏部が深い。68は低い高台が底端部付近につく。焼成は悪く、白灰色を呈する。69は高台が底端部付近に付き、外側に踏ん張る。淡灰色を呈する。70・71は比較的浅い坏部で、やや丸みを帯びる。高台は端部付近に付き、外側に踏ん張る。70の口縁端部は外反し、71は内湾気味に丸くおさめる。70は灰色で、外底部には墨痕が残る。71は細かい白色砂粒を含み、褐色を呈する。72は小型の高坏である。坏部外底面はカキ目調整が行われ、体部との境には沈線を巡らす。脚の基部は膨らみをもち、一端細くなって脚部は開く。脚底部にはヘラ記号が記される。73～75は長頸壺で、75は肩がやや張り、細い頸が付く。頸部にはしぼり痕がある。73・74は体部片で、73は器壁が厚く、淡灰色を呈する。74は灰黒色、75は灰色を呈し、自然釉がかかる。76～78は坏蓋である。76・77は似非土師器で、色調は橙色を呈する。焼成は76は良好、77はやや悪い。天井部はヘラ削り調整をおこない、かえりをもつ。胎土には白色砂粒、金雲母、赤褐色粒を含む。78は土師器で、口縁部は体部からそのまま直線的に引き出す。胎土は精良で、細かい金雲母、赤褐色粒を含み、明橙色を呈する。79～83は土師器である。79・80は坏で、丸みをもった底部から口縁部は直線的に内湾気味に上方へ引き出す。内面は摩滅しているが、外面と同様、細かい研磨調整が行われる。赤褐色粒を多量に含み、橙色を呈する。81は小型壺の口縁部片である。体部から口縁部へは頸部がわずかに締まり、外反する。79と同様の胎土である。82は底部片である。体部は丸みをもって立ち上がり、低い台形の高台が付く。83は甕の口縁部片である。端部には1条の沈線が巡り、内面には横方向、体部外面には縦方向の刷毛目で調整する。84～89は鉄製品である。84、85は刀片、86・87は鎌である。86の基部には着柄のための折り曲げがある。着柄部は幅広く3.3cmを測る。刃部は両歯であるが、大半を欠損する。87は刃部片で、両刃である。88は鏃の頸部片である。断面は方形を呈する。89は不明鉄器である。断面は直径6mmの円形を呈する。

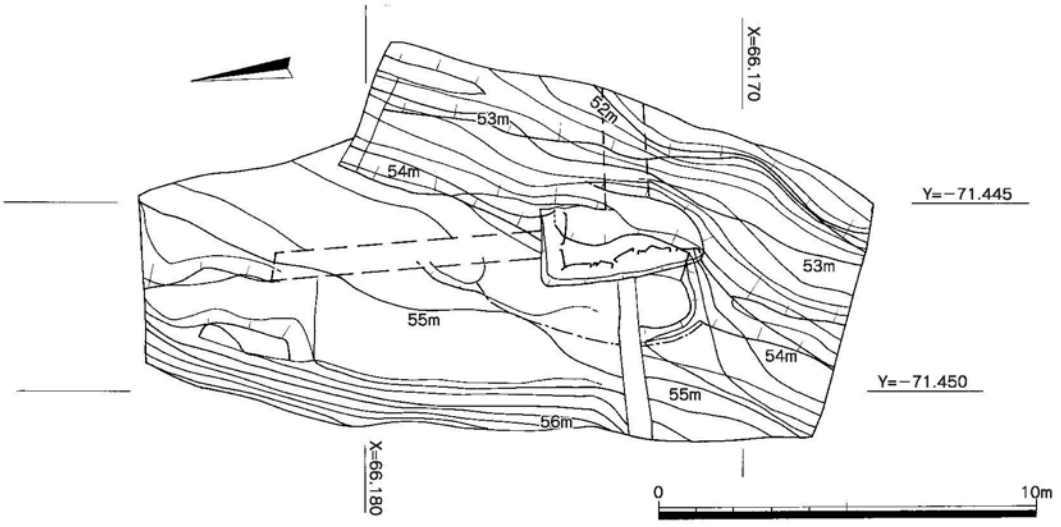
6　N－5号墳

（1）古墳の位置と現況（付図2・第76図、図版47）

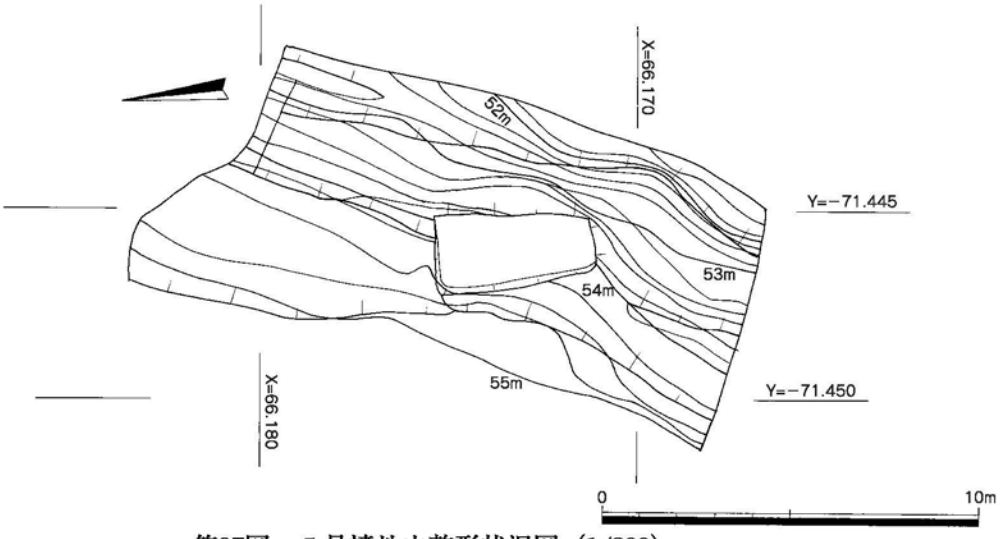
5号墳は4号墳の南側15mの斜面上に位置する。4号墳と同様、みかん畑の造成を受けているが、石室部分だけ避けている感を受ける。周辺には花崗岩が散乱する。周辺は段造成され、古墳部分だけが従来の尾根が残る。石室は奥壁と左側壁の一部が露出していた。標高は55mを測る。

（2）墳丘（第96・98図、図版47）

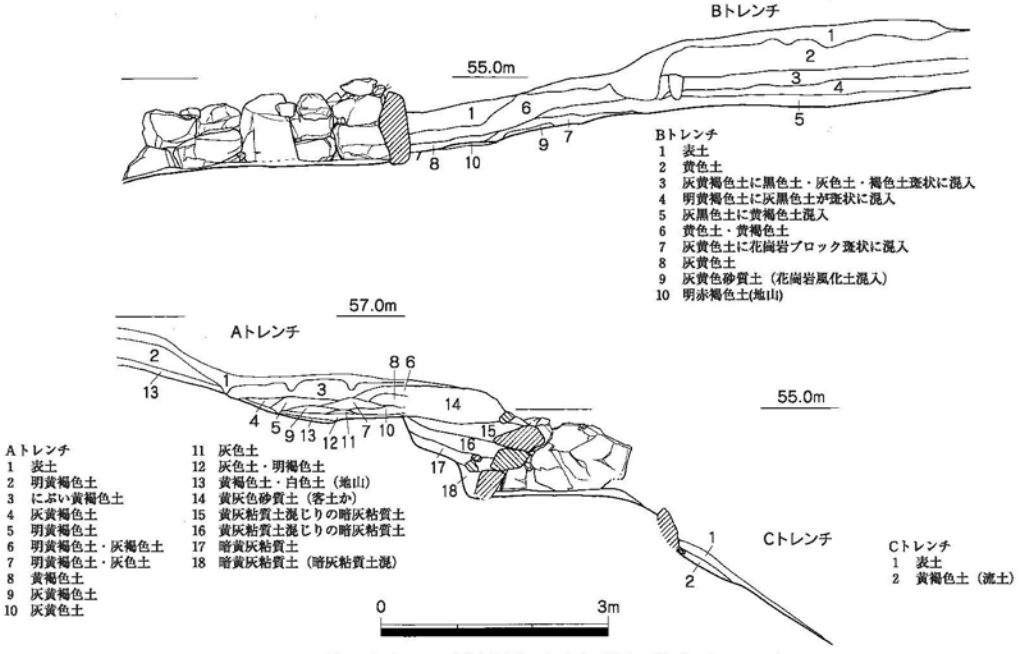
盛土はAトレンチで確認した。墳端は石室中心から3.2m付近で検出した。Ⅱ区のBトレンチ付近では墳端は石室中心から5m程のところにある。Aトレンチでは地山がわずかに10cm程窪んでおり、



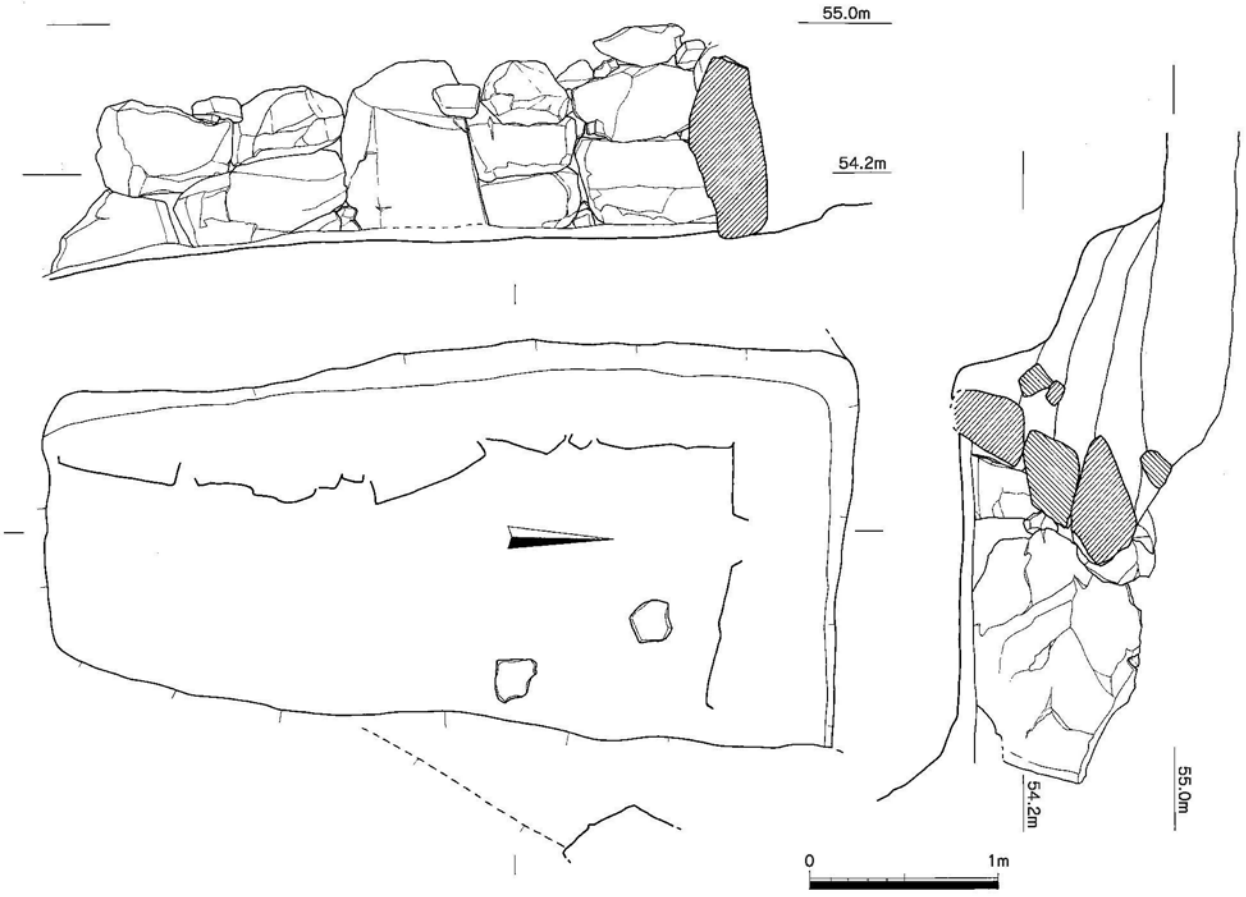
第96図　5号墳墳丘遺存状況図（1/200）



第97図　5号墳地山整形状況図（1/200）



第98図　5号墳墳丘土層断面図（1/100）



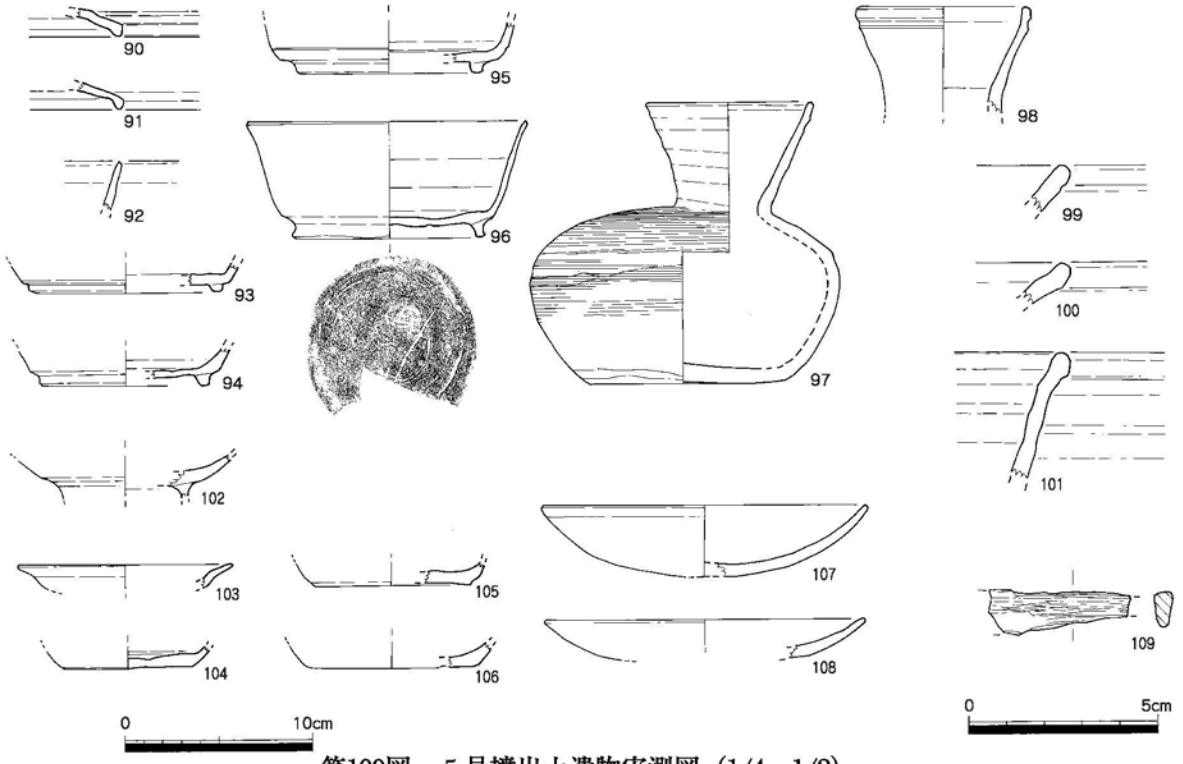
第99図　5号墳石室実測図（1/40）

この部分が周溝にあたる可能性があるが、6層から12層までの積み方は盛土と考えがたい。しかし、地山整形の墳端ラインがこの付近に位置すると思われる。Bトレンチでは緩やかに地山が北側に向かってのぼっていくことは確認できるが、変換ラインはみられなかった。この付近からは大きく東側に向かって削られる。周溝等は確認できない。墳丘規模は直径約7.5m以上である。現存の墳頂部はAトレンチ付近で標高55.0m、墳丘裾部の標高は54.75mである。

地山整形（第97図、図版47）　Aトレンチからは地山整形の状況がうかがえる。緩やかに西側から延びてきた尾根を周溝状に削り、平坦面を築く。その後、石室中心1.6m付近から石室掘方を掘削し、2段掘りを行う。Ⅰ、Ⅱ区で確認した墳端はやや歪な形を呈しており、削平され、墳端ラインが石室側に寄っている可能性もある。地山整形はやや不明瞭だが、南北方向に6.0m、東西方向に4.0m以上の平坦面を築く。北側は後世の削平によって平坦となる。周溝等は確認できず、この平坦面の南寄りに石室掘方を掘削する。墳丘基底の地山標高は西側が最も高く、標高55m測る。

盛土（第98図、図版47）　Aトレンチでは石室埋土を確認できた。石室埋土の上に黄灰色砂質土がのるが、客土か盛土か判別がつかなかった。Aトレンチを見る限りでは7層から10層の盛土は流れている状況を呈している。この黄灰色砂質土はⅠ区からⅡ区に拡がる。

墳丘遺物出土状況　須恵器の大甕の破片が出土するくらいで、墳丘上からは遺物はほとんど出土しなかった。墳丘の大半を削られていることに起因すると考えられる。



第100図　5号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）

（3）埋葬施設

主軸方位をほぼ真北にとり南側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。石室の右側壁は全て削られ、墓道側も削られる。

石室掘方（第97・99図、図版47）　墳丘基底の地山から大きく掘削して石室の掘方を造っている。墳丘基底面の標高は西側で高く55m、石室掘方の標高は約54m、比高差は100cmを測る。掘方は現況で縦4.2m以上、幅は2.1m以上を測る。玄室から羨道部まで続く長方形プランと考えられる。基底面では腰石固定のために浅い溝を掘削している。

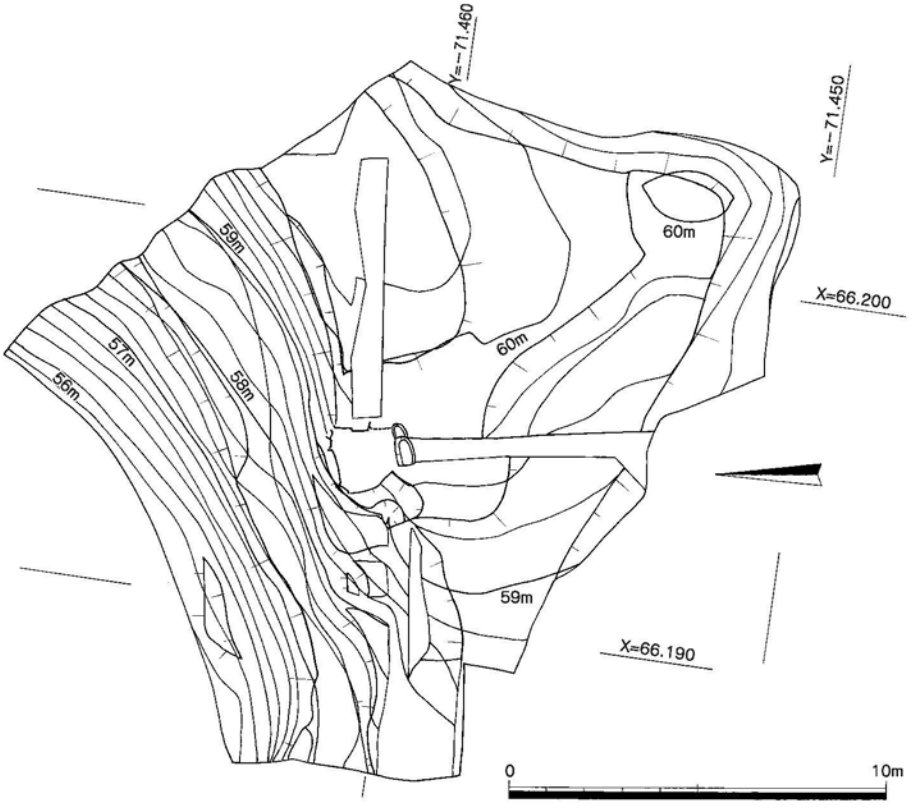
玄室（第99図、図版47）　右側壁は破壊され、左側壁は前倒れとなり不安定な状況を呈する。玄室は奥壁側を大きく削平されている。奥壁幅140cm以上、左側壁長130cmを測る。平面プランは方形と考えられる。腰石は奥壁に2石、比較的大きな石と左側壁側に1石据える。左側壁には2石横位に据え、目路が縦に通る。袖石は玄室と羨道を直線で結ぶように角を作らず、斜めに据えている。裏込めは拳大の大きな石を充填していた。床面は地山まで攪乱を受けており、状況は不明である。仕切石は確認できず、掘方も検出できなかった。閉塞等も残っていない。94・105・109が出土する。

羨道部（第99図、図版47）　玄室主軸よりやや西側に振れる。現況で、左側壁は長さ約225cm、幅100cm以上を測る。墓道側は削平を受けている。腰石には2石据え、2段目までが遺存する。

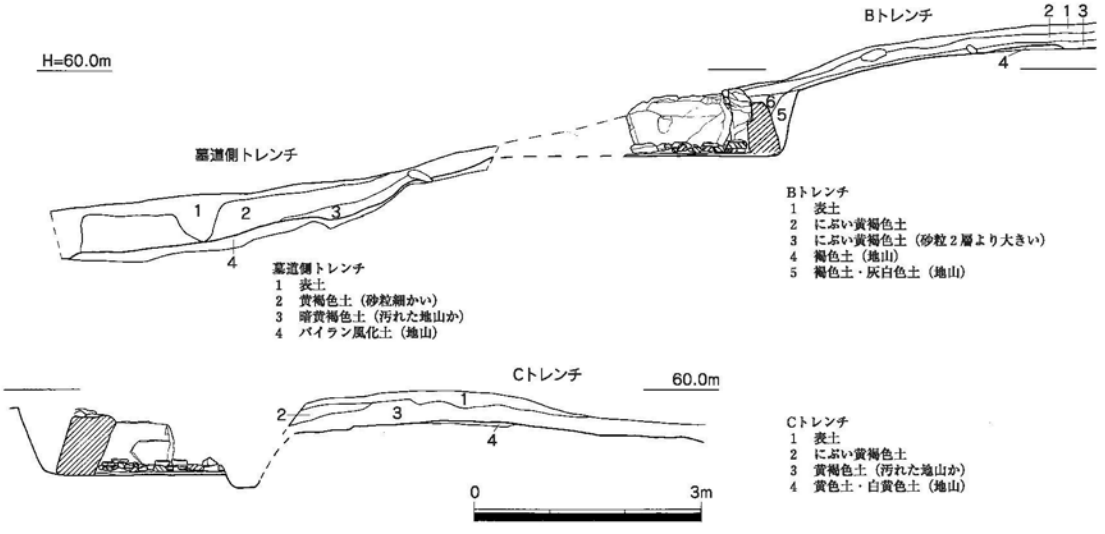
（4）出土遺物（第100図、図版57）

90～101は須恵器である。90・91は坏蓋で、天井部から口縁部をそのまま引き出す。白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。92～96は坏である。92は口縁部片で、端部は緩やかに外反する。93～96の高台は底端部付近に付く。93～95は方形の低い高台で、焼成も悪く、淡灰色を呈する。96は白色砂粒、黒色粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。口縁部はわずかに外反し、高台は接地面でやや踏ん張る。外底部にヘラ記号が記される。97は平瓶で、口頸部は中央部よりやや片寄って付ける。頸部は締まり、口縁部は開く。肩部は丸みをもって移行し、体部最大径はやや上にある。底部は平底をなす。口縁を一部欠くが、ほぼ完形品である。肩部はカキ目、体部下半から底部はヘラ削り、口頸部は回転

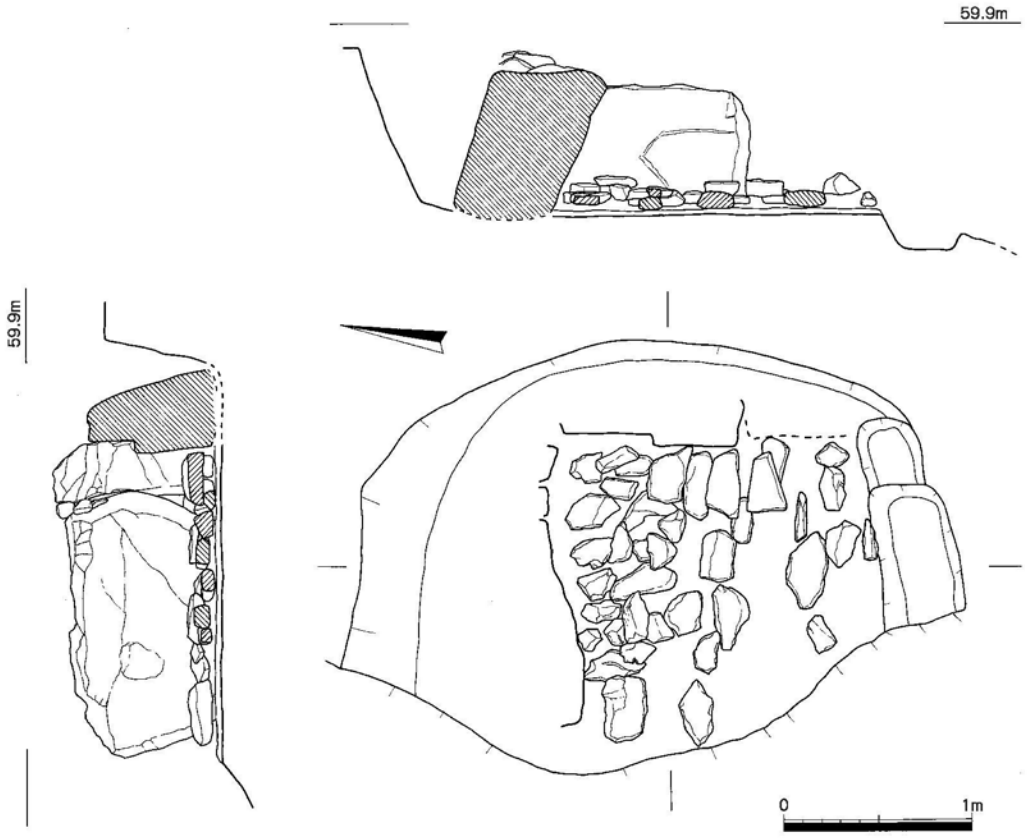
ナデで調整される。胎土は精良で、焼成も良く、自然釉がかかる。右側壁部にあたる倒れた大石の外側から出土した。98は瓶の口縁部片である。頸部は開き、口縁端部はやや内傾する。口縁直下に１条の沈線がめぐる。白色砂粒を多く含み、灰黒色を呈する。99～101は甕の口縁部片で、やや肥厚させて作る。胎土は褐色で、色調は灰褐色を呈する。102は黒色土器Ａ類の底部片である。赤褐色粒を含み、外面は明橙色を呈する。器面は荒れている。103～106は土師器の皿である。105は回転糸切り底



第101図　６号墳地山整形状況図（1/200）



第102図　６号墳墳丘土層断面図（1/100）



第103図　6号墳石室実測図（1/40）

で、他はヘラ切り底である。107・108は丸底坏である。ともに器面は荒れているが107の内面には方向は不明であるが磨きの痕跡がある。109は玄室床面から出土した鉄製品の刀子の茎である。木質が良好に遺存する。他に墳丘流土中から鉄滓が1点出土する。工具痕付きの炉壁で、内面に炉内滓が付く。炉内滓のメタル度低い（H）。重さは229.3gを量る。

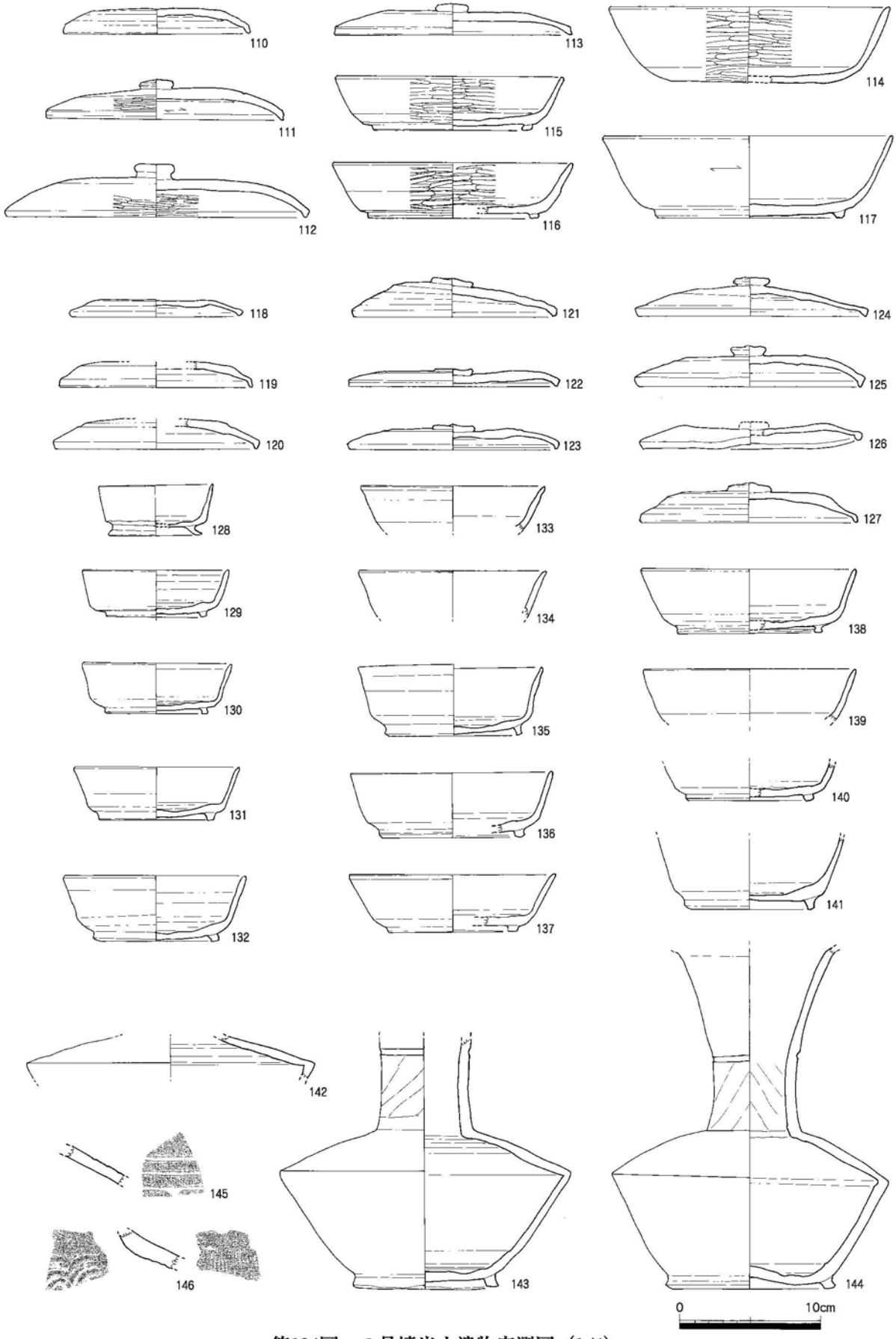
7　N－6号墳

（1）古墳の位置と現況（付図2・第76図、図版48）

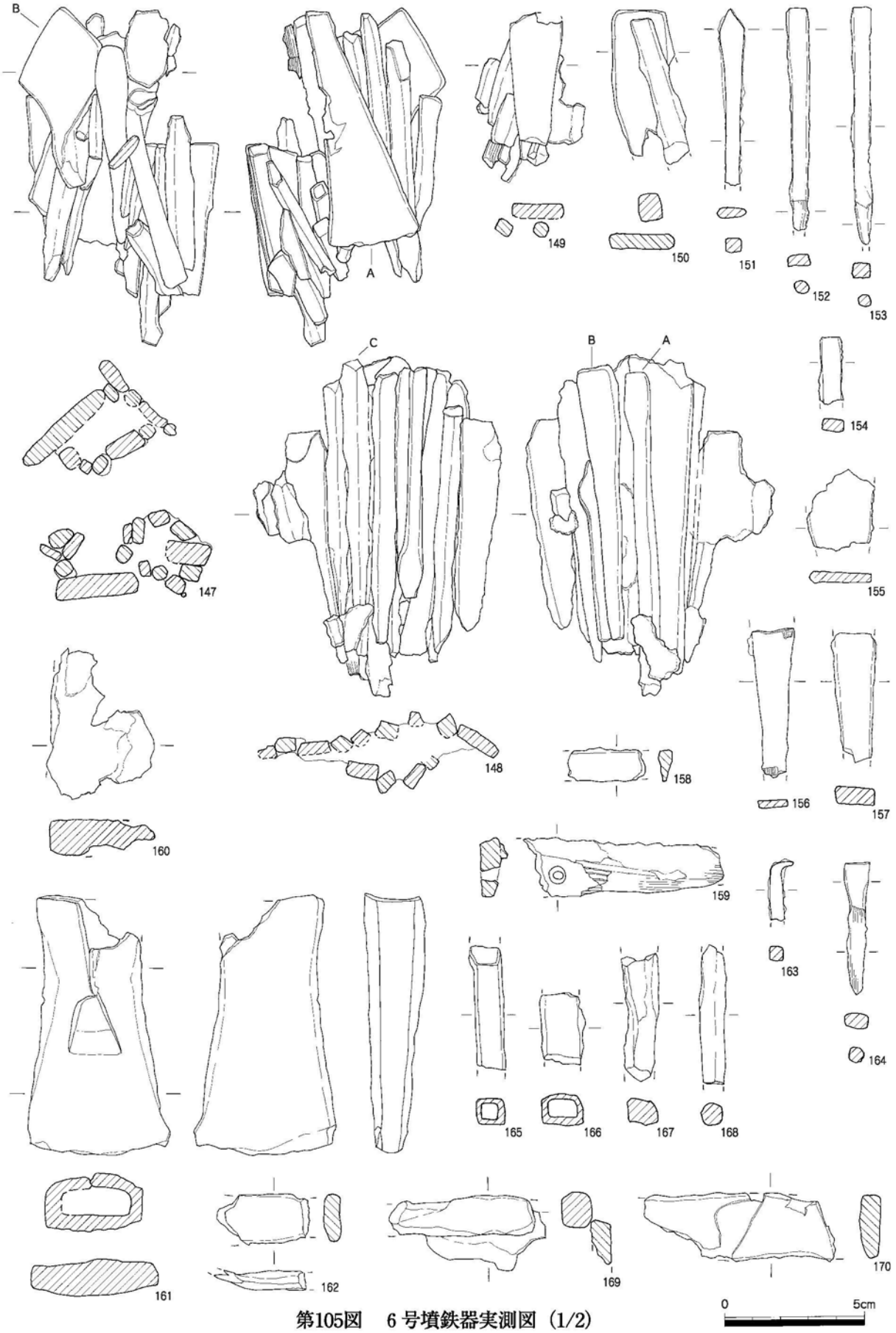
6号墳は4号墳と逆の斜面上にあたる西側斜面に位置する。現況では全く古墳の形跡はうかがえなかった。調査区全体の現況写真を撮影するため清掃を行っている時に、斜面で鉄製品や須恵器を表採した。そこで、花崗岩が3石ほどあった部分の表土を掘削し、花崗岩が集中して並んだ部分を検出した。墳丘に関する痕跡等は全くうかがえない。古墳は西側の崖となっている頂部付近に位置する。この崖は後世に造成されたものである。

（2）墳丘（第101・102図、図版48・49）

石室は西側と南側は大きく削平され、遺存しない。他も腰石が残るだけである。盛土は流失している。東側の尾根頂部でも地山整形を検出できなかった。尾根頂部もかなり削平を受けているものと思われる。Cトレンチと Ⅳ区では石室中心から4m程の部分に10cmにも満たないわずかな傾斜変換線がみられるが、墳端であるかは定かではない。墳丘の形状は全く不明である。現況で南北方向に3m、東西方向に2.2mの石室掘方を検出した。削平された西側斜面からは大量の須恵器、土師器、鉄製品が出土した。



第104図　6号墳出土遺物実測図（1/4）



第105図　6号墳鉄器実測図（1/2）

（3）埋葬施設

主軸方位をN－10°－Wにとり南側に開口していると考えられる。石室の遺存状況は悪い。

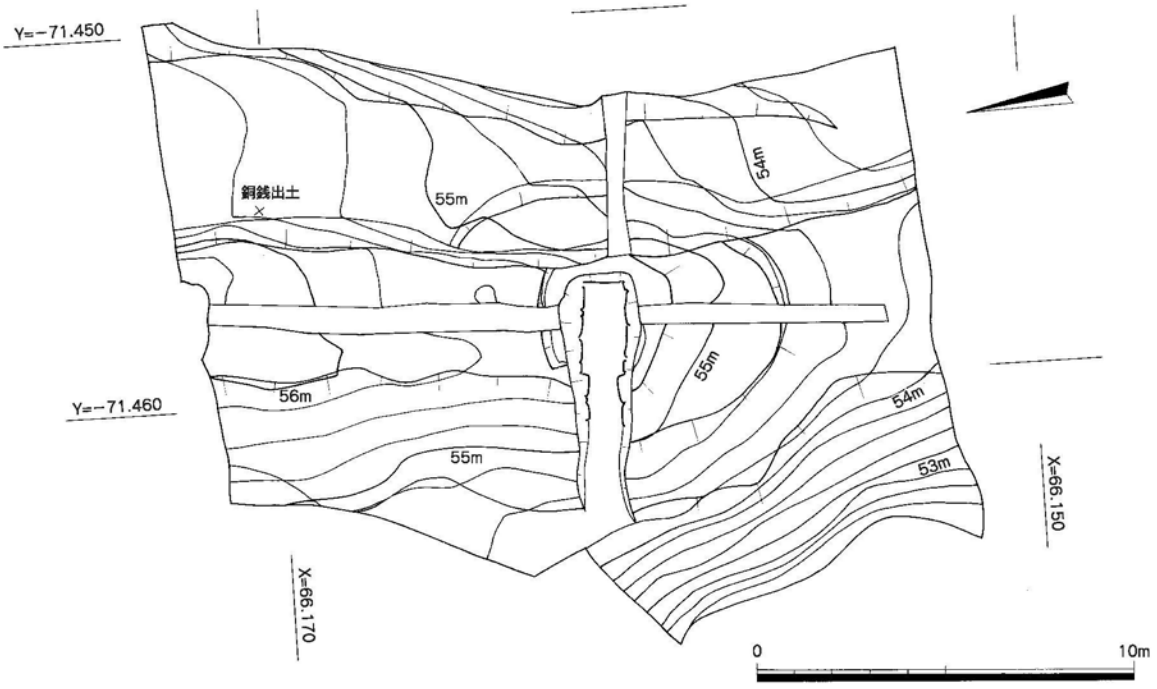
石室掘方（第101・103図、図版48）　墳丘基底面は北側で標高59.8m、南側は削平され標高58.8m、東側の墳丘基底面は標高59.5m、西側は削平され58.9mを測る。石室床面は58.9mを測り、比高差90cmを測る。床面はほぼ平坦面に構築され、腰石固定のための溝が周囲に掘削されている。南側には溝だけが残る。

玄室（第103図、図版48）　北側と東側に腰石が残り、南側には石の抜き跡が残る。石室の開口方向であるが、等高線に直交ではなく、平行にとりつくと考えられるため、南側に開口していたものと思われる。また、石の大きさから北側が奥壁になると考えられる。推定すると、奥壁幅160cm、右側壁長160cmを測り、平面プランは正方形に近いプランと思われる。奥壁には幅140cm、床面からの高さ80cmの花崗岩を据える。その右側に高さを同じくして、幅30cm程の花崗岩を立てて据えている。右側壁には奥壁側に1石幅80cmの花崗岩を据える。南側には袖石と仕切石の抜き穴が残る。床面には頭大から拳大の花崗岩が敷かれていた。地山直上、敷石の下には厚さ3cm程の暗灰色粘土混じりの黄灰色土が貼られていた。裏込めには石が使用される。玄室より南側は地山の上に黄褐色の流土が堆積し、羨道、墓道・閉塞施設は遺存していない。遺物も出土しなかった。

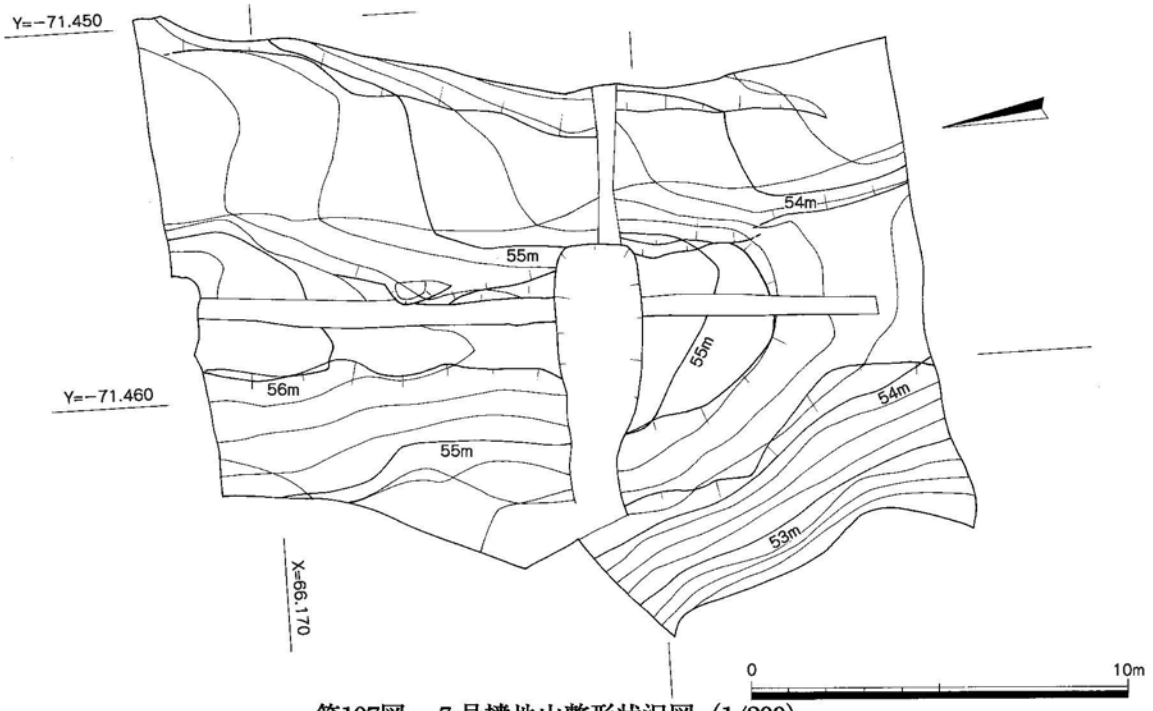
（4）出土遺物（第104・105図、図版57・58）

110～117は土師器である。110～113は坏蓋で、111～113は天井部に扁平なつまみを有する。天井部から口縁をそのまま引き出す。天井部は回転ヘラ削り、口縁部付近は回転ナデで調整される。細かい金雲母、白色砂粒を含み、110は灰橙色、他は明橙色を呈する。114は坏で、体部内外面に等間隔の丁寧な研磨調整を施す。胎土は精良で、明橙色を呈する。115～117は高台付坏である。内外面に研磨調整が施される。高台は底端部付近に貼付される。118～146は須恵器である。118～127は坏蓋で、118はつまみを持たず、口縁端部をわずかに摘んで三角形状にする。天井部は回転ヘラ削り、他はナデで調整する。白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。121～127は天井部に扁平なつまみを有し、天井部から口縁部をそのまま引き出す。119・127は焼成が悪く、淡灰色を呈する。他は焼成良好で色調は灰色であるが、124は淡灰色、121・125は赤みを帯びた灰色を呈する。128～141は高台付坏である。128は小型品で、高台は高く、底端部よりやや内側に貼られ、接地面は外に開く。胎土には金雲母、白色砂粒を含み、小豆色を呈する。色調は灰色で、焼成は良好、内面には小さな焼き膨れが多く見られる。130・135は口縁部が緩やかに外反し、129・136の口縁部は体部から直線的にのびる。低い高台が底端部付近に貼付する。129・130・135は灰色、132・140は淡灰色、他は焼成が悪く、淡橙色を呈する。142～144は長頸壺で、142は肩部片である。143は肩が張り、頸部から肩部へは直線的である。頸部外面にはしぼり痕が残るが、内面はナデ調整で仕上げる。頸部中位には沈線が1条巡る。144は143に較べ、肩部に丸みをもつ。頸部は基部から口縁部に緩やかに外反し、端部は稜線をもって開く。頸部中位付近には1条の沈線が巡る。頸部下位には内外面にしぼり痕が残る。灰黒色を呈する。145・146は甕の小片である。145は肩部で3条の沈線が巡る。146の外面は平行叩きの後、カキ目、内面は円弧叩きで調整される。147～170は鉄製品である。147・148は錆着した鉄鏃である。147は25本ほどが錆着する。形状のわかるものは3点で、他は不明である。Aは方頭鏃で、長さ8.7cm以上、刃部6.5cm基部付近は幅8mmを測る。Bは三角形鏃である。148は方頭鏃4本、長頸鏃11本、他に破損品が錆着する。同種の鏃でも、大きさは様々であるが、形状が判明できるものは数点である。方頭鏃（A）の鏃身は長さ7cm、刃部2cmを測り、斜関で、断面方形の茎部をもつ。方頭鏃（B）の鏃身は長さ7.5cm

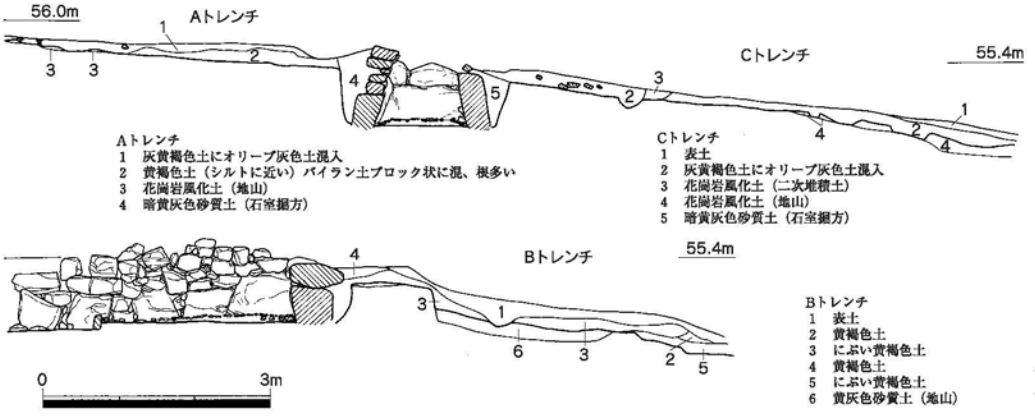
以上、刃部２.5cm以上を測り、斜関で、断面円形の茎部をもつ。長頸鏃（C）の鏃身は2.1cm、刃部8mmを測り、断面円形の茎部をもつ。全て刃部や茎部が破損しており、全長が確認できるものはない。149・150は方頭鏃、151～154は長頸鏃で、151の鏃身は柳葉形、他は方頭形を呈する。155～157は鏃である。158は刀子、159は刀茎部片で、目釘跡があり、木質が遺存する。160・161は斧である。161の袋穂部は断面方形を呈し、無肩式で、刃部断面は方形を呈する。162は鉈、163・164は釘である。165～170は不明鉄器である。165・166は空洞で、断面方形を呈する。167は断面方形、168は断面円形を呈する。169・170は板状を呈する。169は断面円形のものが銹着する。他に墳丘流土中から鉄滓が



第106図　７号墳墳丘遺存状況図（1/200）



第107図　７号墳地山整形状況図（1/200）



第108図　7号墳墳丘土層断面図（1/100）

3点出土する。1点は含鉄を含む椀形鍛冶滓で、メタル度は低い（H）。2点目は含鉄を含む椀形鍛冶滓で、メタル度は中程度である（M）。3点目は小型の椀形鍛冶滓で、メタルはない。

8　N－7号墳

（1）古墳の位置と現況（付図2・第76図、図版49）

元岡古墳群N群7号墳は調査区南側にし、4～9号墳が立地する丘陵尾根線に立地する。古墳は開墾のため、削平されており、調査着手時には石室が露出した状況であった。古墳の標高約55mを測る。

（2）墳丘（第106～108図、図版49・51）

古墳は南北に伸びる丘陵尾根線上に南側に造られているが、遺存状況は極めて悪い。古墳の東側は造成で大きく段差がついている。墳丘の盛土も削平でほとんど残っていない。墳丘径は不明瞭だが、直径約9m程度と推測される。

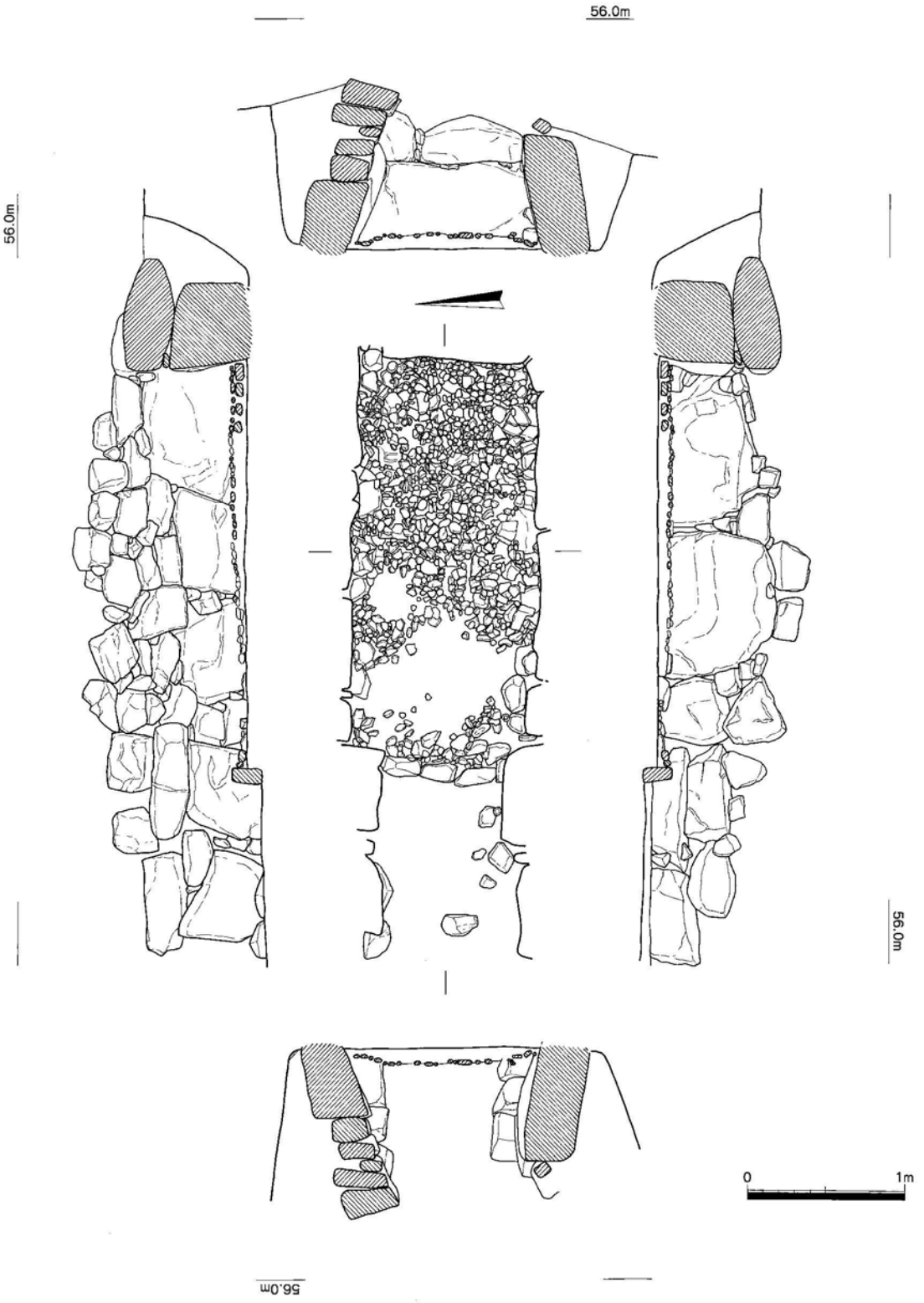
（3）埋葬施設（第109図、図版49～51）

本墳の埋葬施設は西側に開口する横穴式石室である。石室は丘陵斜面に対して直行して構築される。石室の天井石は抜き取られているが、奥壁と側壁とも天井部付近まで遺存する。平面形は長方形を呈し、玄室長は約2.4m、奥壁幅1.1m、玄門幅1.1mを測る。奥壁は幅約110cm前後、高さ50cm程の花崗岩の転石を1石、左側壁は幅50～100cm前後の花崗岩の転石を4石、右側壁は60～120cm前後の転石を立てて配置し、腰石としている。玄室の現存高は約90cmを測る。羨道付近の敷石は残っていないが、床面には拳大の角礫と更に細かい円礫が敷かれる。円礫は上面のみに使用されており、床の敷き直した時のものと考えられる。床面の標高54.6mを測る。

玄門は高さ約20～40cmの転石を腰石として、その上に石を積み上げて袖石とする。仕切り石は幅20cm前後の礫を3石配置する。玄門の幅約75cmを測る。閉塞石は遺存していない。

羨道は幅約50～80cm、高さ約30～50cmの転石を立てて配置し、腰石としている。羨道の長さ約1.3m、高さ約90cmが遺存する。

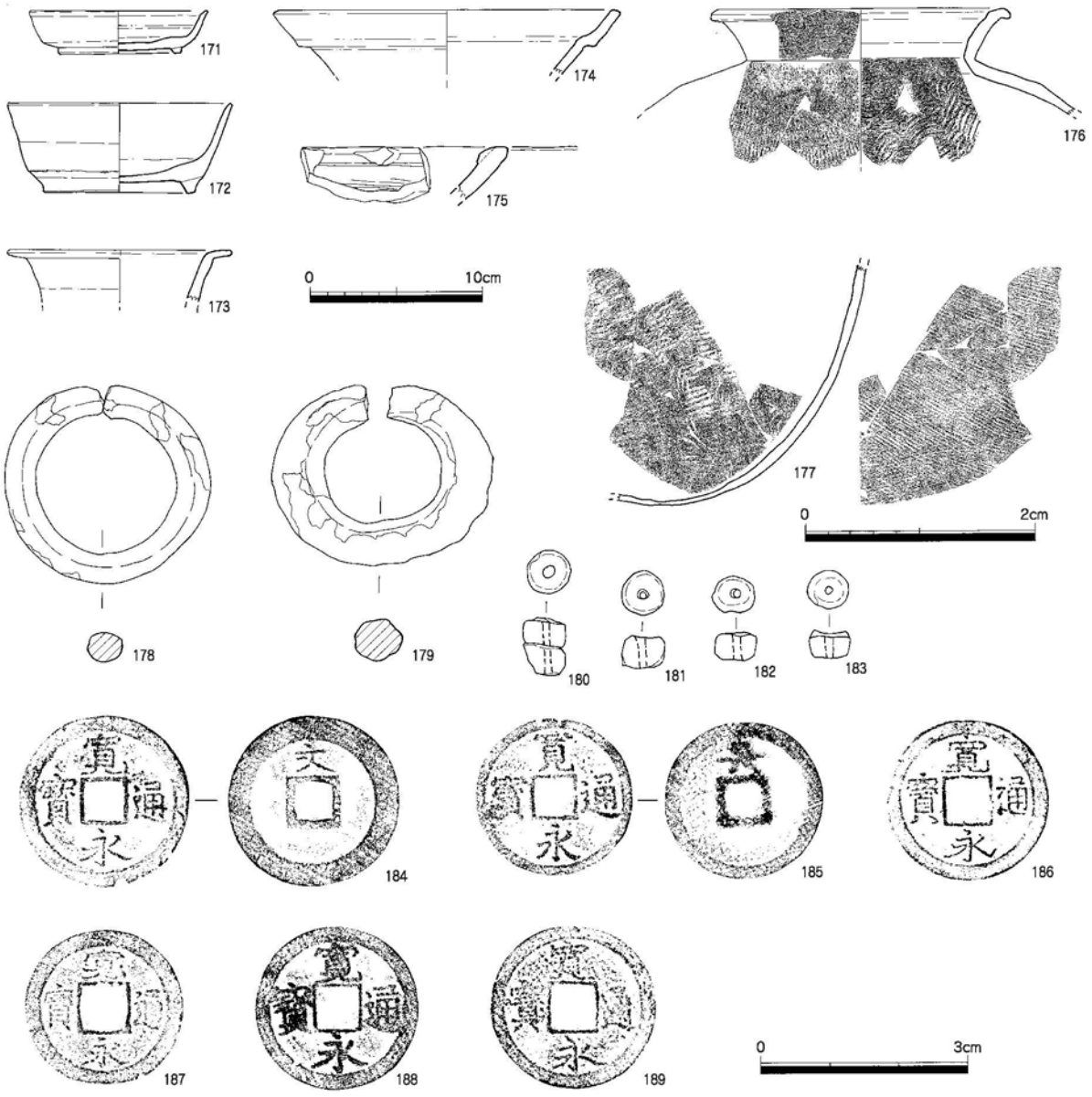
遺物の出土状況（第106図、図版51）　玄室内は流入した土砂によって天井部付近まで埋没していた。石室からの遺物は羨道付近で耳環、床面の埋土から土製の小玉が出土した。他は墳丘上で須恵器坏身、瑤、壺等が出土した。また、古墳の東側で銅銭が6枚まとまって出土した。中世の墓に関連するものと思われる。



第109図　7号墳石室実測図（1/40）

（4）出土遺物（第110図、巻頭図版5・図版58）

171～177、184～189は墳丘上で、178～183は石室から出土した。171、172は須恵器の高台付の坏であ



第110図　7号墳出土遺物実測図（1/4・1/6・1/1）

る。171は浅い高台付の坏身で、器高2.5cm、口径10.2cm、底径7.1cmを測る。172は体部は直線的に立ち上がる。器高5.2cm、口径12.9cm、底径8.7cmを測る。173は長頸壺の口縁である。口径・cmを測る。174は大型の甕の口縁である。口径20.0cmを測る。176、177は甕である。176は口縁は緩やかに外反する。口頸部外面にはカキ目を施す。177は外面に細かい平行叩きを施す。175は瓦質の鉢で、口縁内面は玉縁状を呈する。

178、179は耳環で、表面は剥離し、銅芯の部分のみ残っている。幅28.8～29.75cm、25.9～31.35cm、径4.6～4.9cm、5.1～6.2cmを測る。180～183は土製の小玉である。いずれも燻され、黒色を呈する。180は連玉で、長さ0.9cm、径0.6cmを測る。181～183は小玉で、長さ0.45cm、0.4cm、0.4cm、径0.6cm、0.55cm、0.55cmを測る。

184～189は銅銭で、寛永通寶である。

9　N－8号墳

（1）古墳の位置と現況（付図2・第76図、図版52）

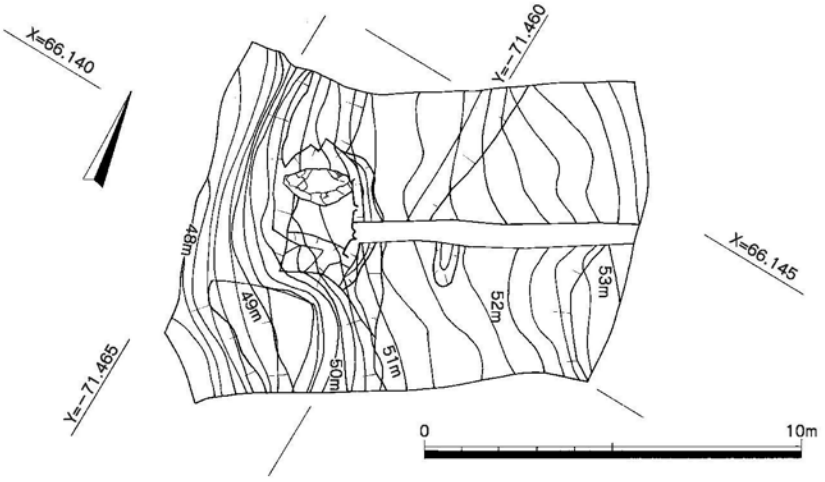
6号墳と同じ西斜面上に立地し、反対斜面には9号墳が位置する。標高は51mを測る。斜面には大きな花崗岩が点在していたが、現況では全く古墳の形跡はうかがえなかった。周辺の表土剥ぎを行った段階で、花崗岩が並んだため、石室を確認した。古墳の西側は大きく削平され、急斜面となる。

（2）墳丘（第111・112図、図版52）

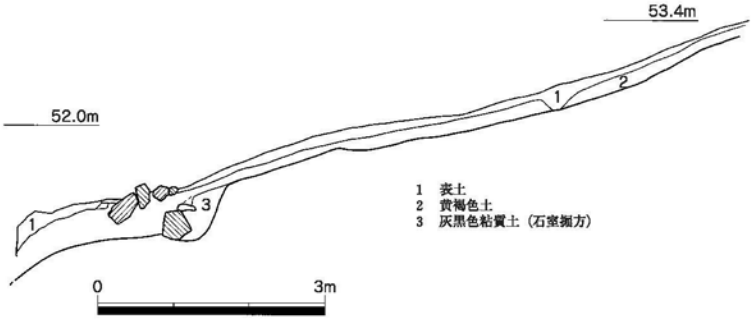
石室は半壊し、盛土は遺存しない。表土の下は黄褐色土が堆積し、その下はやや粘質を帯びた明赤褐色土の地山である。Cトレンチでは石室中心から3.4m東側で、幅55cm、深さ8cm程の周溝状の窪みを検出した。この窪みはⅣ区で長さ180cm程確認した。尾根を分断する地山整形の痕跡とも考えられる。削平のためか、石室掘方周辺でも平坦面は確認できず、緩やかな緩斜面となっている。北側、南側では石室付近まで削平されている。墳丘規模は全く不明である。Ⅰ区斜面から長頸壺が出土する。

（3）埋葬施設（第113図、図版52）

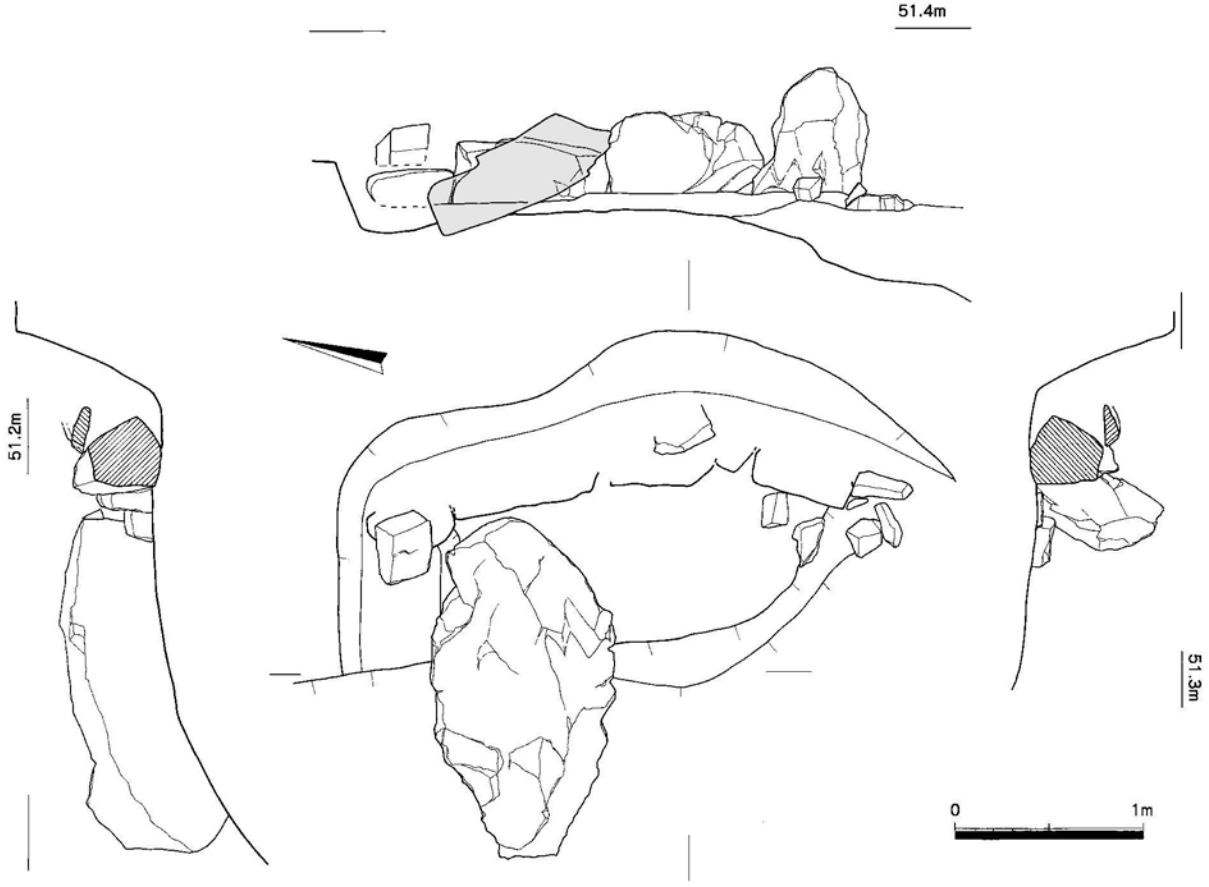
主軸方位をN－15°－Wにとり南側に開口する。石室は奥壁と右側壁の腰石が遺存する。石室掘方の西側は削平され、東側にわずかに残る。東側で、現存する墳丘基底面の標高は51.3mである。石室床面は標高50.5mを測り、比高差は80cmである。奥壁には長さ180cm、高さ105cmを測る片岩を横位に据えるが、削平のため、前倒れとなる。西側の削平は石室中心まで及んでいた。右側壁には2石片岩を横位に据える。右側壁の南端の花崗岩は縦に立てられ、玄室内の腰石とは異なるため袖石の可能性も考えられる。しかしこの花崗岩も前倒れとなっており、動いている可能性も十分考えられる。その隅には鉄製品が出土する。腰石固定の浅い溝は検出できた。玄室は奥壁幅180＋αcm、右側壁長155



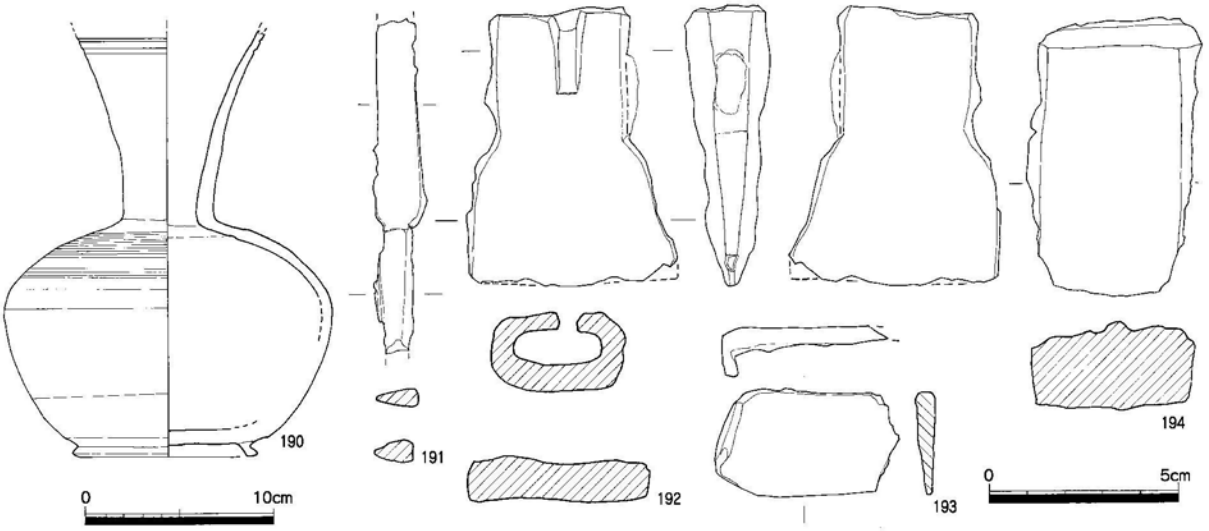
第111図　8号墳地山整形状況図（1/200）



第112図　8号墳墳丘土層断面図（1/100）



第113図　8号墳石室実測図（1/40）



第114図　8号墳出土遺物実測図（1/4・1/2）

＋αcm測る。裏込めの石は少量である。羨道、墓道、閉塞施設は削平されている。

（4）出土遺物（第114図、図版58）

190は須恵器の長頸壺である。肩は張らず、丸みをもつ。細く締まった頸部から口縁部は緩やかに外反する。頸部上位には2条の沈線が巡る。肩部はカキ目、体部下半は回転ヘラ削り、その他はナデ

で調整される。191～194は鉄製品である。191は刀子で、茎部には木質が遺存する。192は斧で、袋穂部は断面方形を呈し、有肩式である。刃部の断面は方形を呈し、短く、撥形に開く。193は鎌の基部片である。基部には着柄のための折り曲げがある。着柄部は幅狭く1.7cmを測る。194は不明鉄器である。上面は一辺4cmの方形を呈し、楔状を呈する。191・193・194は玄室出土である。

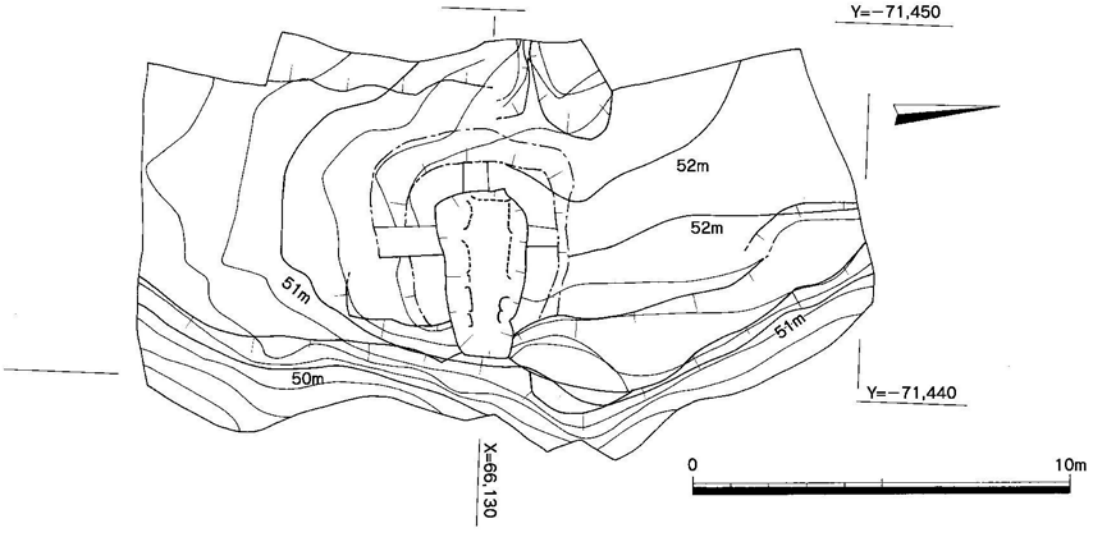
10　N－9号墳

（1）古墳の位置と現況（付図2、第76図、図版53）

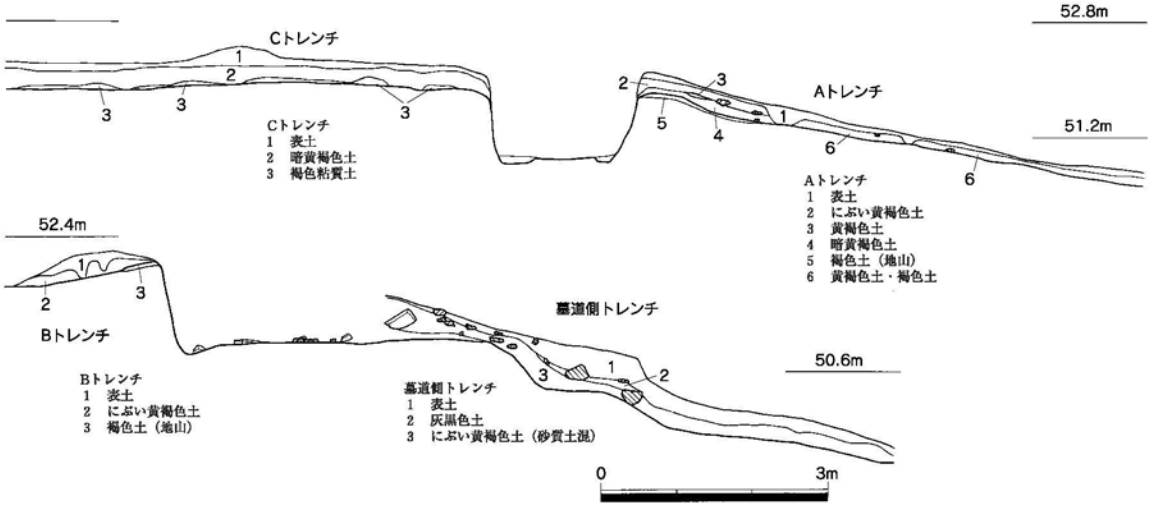
元岡古墳群N群9号墳は調査区南側に位置し、4～9号墳が立地する丘陵尾根線に立地する。墳丘は開墾のため、東側は大きく削平され、石室の石もほとんどが抜かれていた。古墳の標高約52mを測る。

（2）墳丘（第115・116図、53・54）

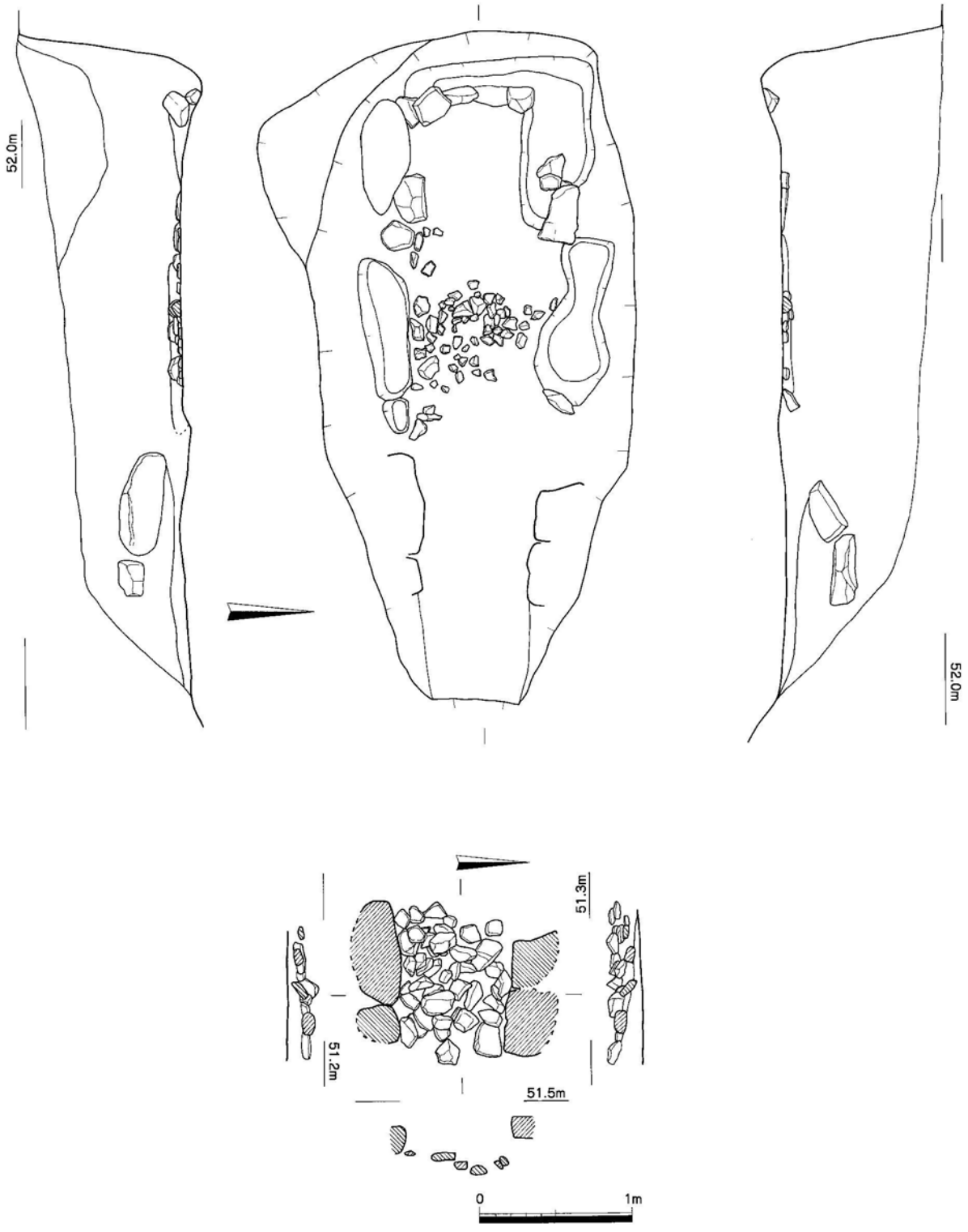
古墳は東側に傾斜する斜面を造成して造られているが、墳丘の盛土は残っていない。墳丘径は削平をうけているため、不明瞭だが、直径約6～7mと推測される。



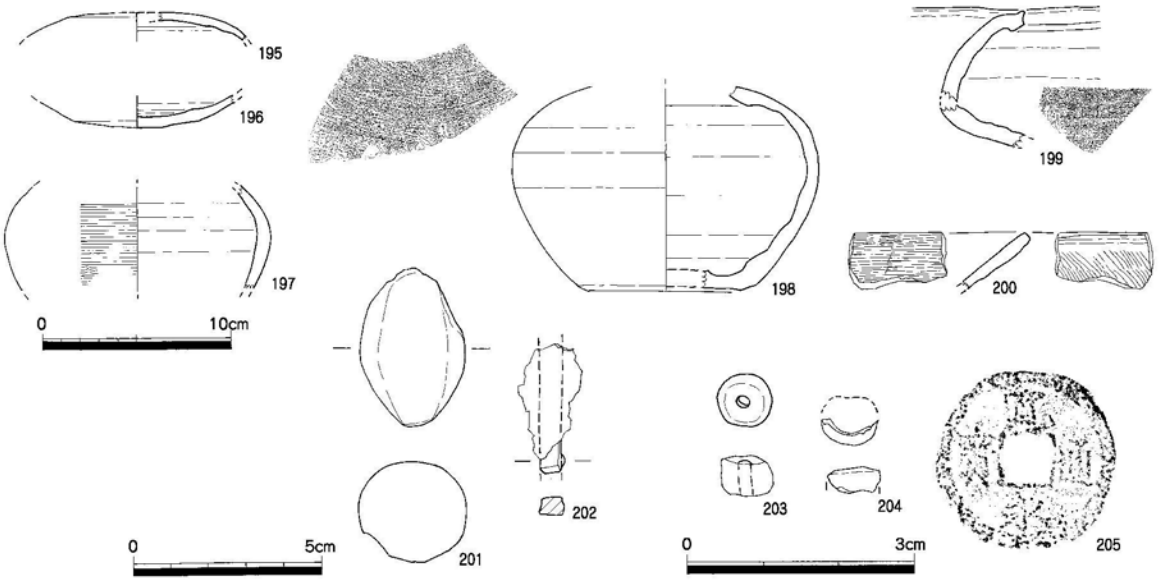
第115図　9号墳地山整形状況図（1/200）



第116図　9号墳墳丘土層断面図（1/100）



第117図　9号墳石室・閉塞状況実測図（1/40）



第118図　9号墳出土遺物実測図（1/4・1/2・1/1）

（3）埋葬施設（第117図、図版53・54）

本墳の埋葬施設は石がほとんど抜かれていたが、東側に開口する横穴式石室と判断される。石室は丘陵斜面に対して直行して構築される。石室は腰石の抜き穴と羨道の一部が遺存する。それらのことから石室の全長約3.2m、奥壁幅約1.0m、玄室長約1.8mと推測される。床面には拳大の角礫の敷石が遺存する。石室の掘り方は幅約2.1m、深さ約1.0mを測る。

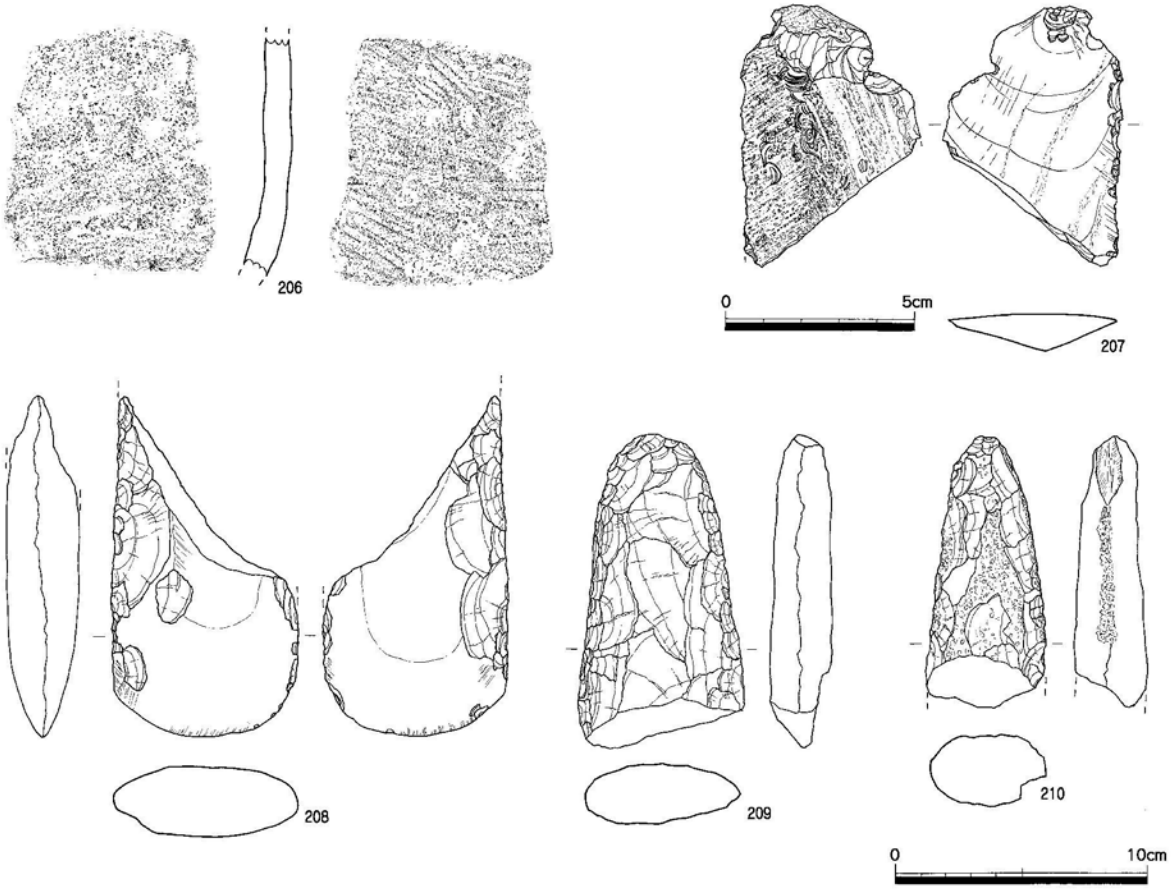
羨道の壁には幅30～60cmの花崗岩の転石を貼り付ける。幅約70cmを測る。羨道には拳大の角礫を使用した閉塞石が見られた。

遺物の出土状況

遺物は墳丘と羨道から須恵器、土製の小玉等が若干出土した。

（4）出土遺物（第118図）

195、196は須恵器坏蓋、杯身である。天井部、底部が残るのみで上下が逆転する可能性がある。いずれも回転ヘラ削りを施す。197は小壺の胴部片である。外面にはカキ目を施す。198は須恵器の長頸壺の体部である。底部は平底である。199は須恵器の甕である。口縁は玉縁状を呈する。200は瓦質の鉢である。201は土製の投弾である。長さ4.2cm、径2.6cmを測る。203、204は羨道から出土した。203は土製の小玉である。燻されて黒色を呈する。長さ0.5cm、径0.7cmを測る。204はガラス小玉である。欠損しているが、淡い青色を呈する。径0.7cmを測る。205は寛永通寶である。



第119図　その他の遺物実測図（1/3・1/2）

11　その他の出土遺物　（第119図）

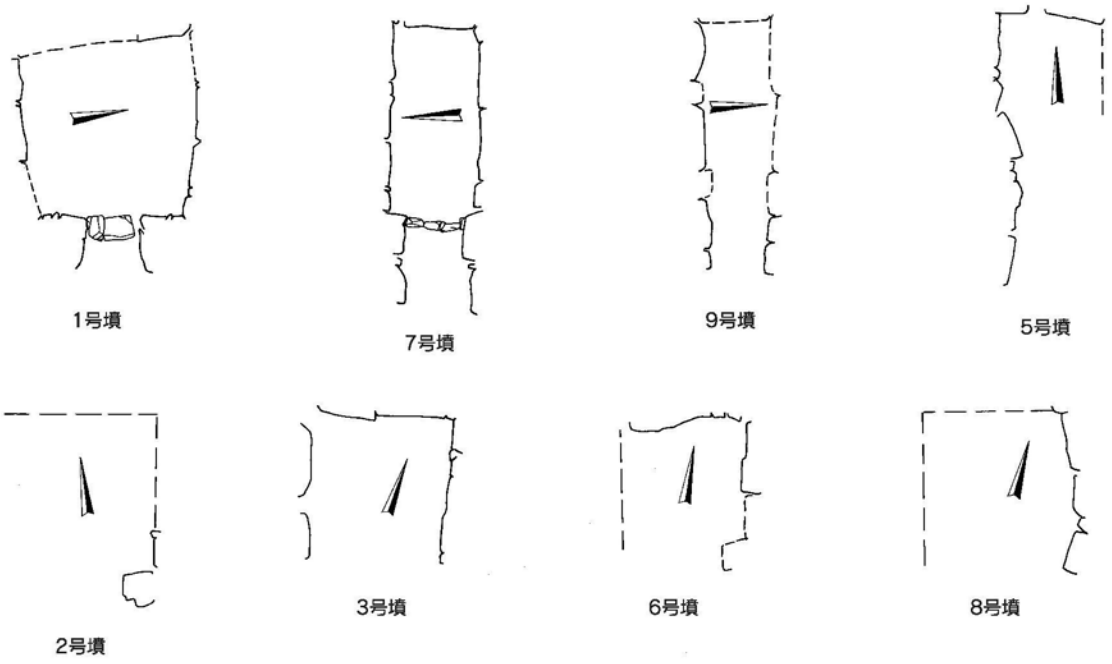
古墳に伴う遺物以外に、墳丘流土中から縄文時代の土器、石器が出土する。

206は条痕文土器で、３号墳の墳丘流土中から出土する。外面は右上から左下への斜方向の条痕と横方向の条痕が見られる。内面は指押さえと横方向の擦痕が見られるがやや不明瞭である。器壁は厚く、11mmを測る。胎土には白色砂粒、金雲母を含み、外面は褐色、内面は黄橙色を呈する。207はスクレーパーで、２号墳の流土中からの出土である。端部を欠損する。素材は黒曜石の縦長剥片を使用し、片面からの細かい剥離によって刃部を作出する。打点と腹面には自然面が残る。自然面は砂粒が層状となっており、腰岳産と思われる。長さ6.8＋αcm、幅4.7cm、厚さ1cm、重さは31.24ｇを量る。断口の色調は漆黒色である。打点近くには両端から抉りのように剥離を行って基部を作出しているようにもみえるが、精緻な加工ではない。208～210は石斧である。208は３号墳の墳丘流土中から出土する。基部を欠損し、刃部のみの出土である。側面は敲打よって整形され、刃部は研磨で仕上げられる。断面は楕円形を呈する。堆積岩が使用される。現存で長さ13.5cm、幅7.4cm、厚さ2.9cm、重さは278.03ｇを量る。209は基部片で、１号墳の流土中からの出土である。全て敲打によって整形される。現存で長さ12.5cm、幅6.6cm、厚さ2.5cm、重さは255.12ｇを量る。210は１号墳の流土中からの出土で、209に較べ、厚みをもち、細い。刃部を欠損し、現存で長さ10.7cm、幅4.7cm、厚さ2.9cmを測る。基部の右側上端は長さ2.1cm、幅1cmくらいの範囲で研磨されている。わずかに「凹」状を呈する。剥離と敲打によって整形され、上端面は平坦をなす。基部は細く尖り気味である。他に１号墳からは玄武岩の石斧の小片１点、黒曜石の砕片（腰岳産）３点、２号墳からは片岩の石斧片１点、黒曜石の砕片（腰岳産）２点、５号墳からは玄武岩の石斧片１点が流土中から出土する。

12　小結

元岡古墳群N群（第29次調査地点）では９基の古墳を確認した。遺存状況は悪く、墳丘や石室の全貌がうかがえるものはない。この古墳群の特徴としては、斜面に構築された古墳が多く分布することである。ここでは立地、主体部、時期について触れる。

１・７・９号墳は尾根上に、他の６基は斜面に位置する。石室の開口方向は１・９号墳が東側、７号墳が西側、他は全て南側である。確認できた主体部は全て横穴式石室で、１・５・６号墳は正方形プラン、７・９号墳は狭長な長方形プランである。１号墳には短い羨道が付き、６・７・９号墳は長い羨道をもつ。使用された石材にも特徴があり、１・７・９号墳は主に花崗岩を用いるが、２・３・５・６・８号墳の石材には片岩系の石材が多く使用される。これらの古墳は大きく３つに分類できる。尾根上の１号墳は花崗岩を用いた正方形プランの石室（A）、尾根上の７・９号墳は花崗岩を用いた狭長な長方形プランの石室（B）、斜面に位置し、石室が南側に開口した片岩系の石材を用いた正方形プランの石室（C）である。次に出土須恵器であるが、１号墳からはⅡA期からⅢB期（小田編年）の須恵器が出土する。３・４号墳からは７世紀末から８世紀にかけての須恵器と土師器、他の古墳からは８世紀の須恵器と土師器が主体である。これより１号墳の築造時期は６世紀前半と考えられる。しかし、他の古墳群からは初葬時の須恵器が出土しているとは考えがたい。いずれも飛鳥時代から奈良時代にかかる遺物ばかりである。石室形態からB・Cは７世紀代と考えられる。Cの石室は他の古墳群では見られないものであり、特異なものである。時期的には第７次調査や第20次調査で発見された木簡の時期や多数の製鉄炉が発見された第12次調査の時期と符号する。製鉄関連の出土遺物は５・６号墳から出土した鉄滓だけであるが、３号墳からは「大道」と刻書した須恵器の甕（56）が出土している。元岡・桑原遺跡群からは文字資料の他、帯金具や硯等も出土しており、役所に関連する施設があったと想定されている。Cの石室はこの律令期に人々が積極的に使用した古墳であると考えられる。しかし、１号墳からはこの時期の遺物は出土しておらず、B・Cの古墳を選んで使用している様相がうかがえる。



第120図　各古墳石室平面図（1/100）